

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (229)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書 (9)

# 高橋貝塚 2

(南さつま市金峰町高橋)

2025年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 序 文

この報告書は、令和6年度に文化庁の補助を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、「よみがえる『河口コレクション』の世界」と呼称する事業に伴い、昭和37・38年の2次にわたり発掘調査された高橋貝塚の調査成果をまとめたものです。

『河口コレクション』とは、昭和20年代から半世紀以上の長きにわたり、鹿児島県内の考古学的調査に携わってこられた故河口貞徳氏が収蔵・保管されていた考古関係資料のことで、平成24年12月に御遺族のご厚意により、当センターに「河口貞徳氏所蔵考古関連資料」として寄贈されました。この資料は、「考古資料」・「書籍類」・「地形図類」・「写真類」からなり、一括資料として『河口コレクション』と呼ばれています。

本事業では、この寄贈資料の中から学史的に重要で、全国的にも著名な遺跡に関する資料を選び、あらためて調査内容の整理を行い、その情報や評価について県内外へ発信し、有効活用するための基礎・土台作りを目的としています。

高橋貝塚は弥生時代の南九州を代表する遺跡として知られており、西北九州に貝輪等の原料となる南島産貝をめぐる交易の中継点として位置づけられ、「高橋式土器」の標式遺跡にもなっています。過去2回にわたって実施された発掘調査の資料が『河口コレクション』に収められており、このうち高橋貝塚の「写真類」については、令和5年度に『高橋貝塚1（発掘調査記録写真集）』として刊行しました。本年度は発掘調査記録・遺物等の整理作業を踏まえ、発掘調査の記録に現在の価値を付加して刊行することとなりました。

本書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心が深まり、文化財の普及・啓発の一助となることを願っております。

最後に、本書の刊行にあたりご協力、ご指導をいただきました関係機関並びに諸先生方に厚く御礼を申し上げます。

令和7年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 中村和美

# 報告書抄録

ふりがな	たかはしかいづか							
書名	高橋貝塚2							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(9)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第229集							
編集者名	堂込秀人・宮崎大和							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2025年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
たかはしかいづか 高橋貝塚	かごしまけん 鹿児島県 みなみ 南さつま市 きんぼうちようたかはし 金峰町高橋	46220	220-213	31° 27' 08"	130° 19' 23"	1962.8.2~ 8.12	26	学術 調査
						1963.8.15~ 8.28	約94 計約120	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高橋貝塚	貝塚	弥生時代前期		貝塚 住居跡1基 土坑4基 礫集中1基		<ul style="list-style-type: none"> <li>・土器類 縄文時代晩期土器(夜白式土器), 弥生時代前期土器(高橋I式・II式, 板付I式・II式を中心とする), 弥生時代中期前葉土器, 土製品(紡錘車など)</li> <li>・石器(石鏃, 石包丁, 磨製石斧, 柱状片刃石斧, 穿孔孔具, 石錐, 石匙, 打製石斧, 磨・敲石, 石皿, 砥石, 軽石製品など)</li> <li>・骨角器(釣針, 骨鏃, 尖頭器, 垂飾品など)</li> <li>・貝製品(貝輪, 貝輪未製品, 貝刃)</li> <li>・管玉・自然遺物・鉄器, 鉄滓</li> </ul>		弥生時代貝塚, 南九州弥生前期 編年の標式遺跡, 弥生貝交易の中継地
遺跡の概要	<p>高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在し、万之瀬川の支流堀川右岸の砂丘内縁の河岸段丘上にある貝塚である。南九州の弥生時代前期を代表する貝塚で、弥生前期の高橋式土器の標式遺跡であり、出土するゴホウラなどから南島と西北九州の弥生貝交易の中継地として注目されてきた。</p> <p>本遺跡は1949(昭和24)年に発見されていたが、1961(昭和36)年に田布施小学校の辻正徳の情報により、1962(昭和37)年8月に金峰町教育委員会が調査委員会をつくり、河口貞徳らにより発掘調査され、翌年は県教育委員会・金峰町教育委員会の援助を得て河口貞徳らが調査した。調査成果に関する資料や遺物は、河口コレクションとして一括県立埋蔵文化財センターへ寄贈されたが、今回の報告書は2次にわたる発掘調査の調査成果をあらためて整理するものであり、発掘調査の記録写真集である「高橋貝塚1」に引き続き、発掘調査記録・遺物の整理作業を行い、高橋貝塚の価値や今日の評価、出土遺物等の詳細について成果をまとめたものである。</p>							



高橋貝塚位置図

## 例言・凡例

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、「よみがえる『河口コレクション』の世界」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が事業主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、全章にわたって「埋文センター」）が担当し実施した。
- 4 本文中での人名敬称は、河口貞徳氏を含め省略する。
- 5 本書は、これまで2回にわたって実施された高橋貝塚の発掘調査の発掘調査報告書である。河口コレクションとして収蔵・保管されている遺物・現場での実測図・現場写真等を中心に取扱い、併せて遺跡の調査成果全体の総括も記した。
- 6 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版中の番号は一致する。
- 7 遺物の観察表の法量において、括弧内に記載してある数値は残存値である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。また、挿図の出典については、当該図のキャプション等で示す。
- 9 発掘調査での各種実測図は、河口の他、盛園尚孝・池水寛治・上村俊雄・出口浩等の調査担当者が作成したものである。
- 10 出土遺物の実測・トレースは、河口コレクション担当の埋文センター職員（会計年度任用職員を含む）を中心として行った。
- 11 本書掲載の遺物の縮尺は、以下のとおりである。ただし、縮尺が異なる場合もあるので、各図に示した縮尺を参照頂きたい。  
土器：1/2～1/4，石器（剥片石器等）：4/5，石器（刃器・石斧等）：1/2，石器（礫石器等）：1/3，貝製品，骨角製品：1/2
- 12 本報告書に実測図として掲載した遺物の外の遺物について、土器以外は一覧表で可能な限り示す。石器・骨角器，貝器の公表分は計測表で掲載する。第3章第4節の甕棺については、観察表を略す。
- 13 ゴホウラ貝については木下尚子論文に詳しく、これらについては論文に掲載したものと非掲載のものの中で選別したものを写真として掲載する。
- 14 本文中で用いた現場写真は、河口コレクションとして収蔵・保管されているものを使用した。
- 15 出土遺物の写真撮影は、（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター調査第一係長 西園勝彦，辻明啓文化財専門員の協力を得た。
- 16 董青石製石包丁や層灰岩製柱状片刃石斧については、新潟大学准教授森貴教氏の所見からご教示を得た。
- 17 土器圧痕跡の試料採取・同定にあたっては、（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの眞邊彩文化財専門員の協力を得た。また、甕棺については鹿児島国際大学 鐘ヶ江賢二氏の玉稿をいただいた。
- 18 本書の編集は堂込秀人・宮崎大和が行った。
- 19 本書の執筆分担は、下記を除き堂込が行った。  
第3章 第3節－4 宮崎大和  
第3章 第3節－5 眞邊 彩

## 本文目次

序文

抄録

例言・凡例

目次

### 第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と内容 ..... 1

第2節 整理・報告書作成業務 ..... 1

第3節 整理作業の方法と報告書の構成 ..... 1

### 第2章 高橋貝塚の位置と環境及び研究史

第1節 遺跡の位置と環境 ..... 2

第2節 発掘調査の履歴と成果 ..... 6

第3節 出土品の整理と研究 ..... 12

### 第3章 発掘調査の概要と成果

第1節 調査の概要 ..... 18

1 第1次調査の概要 ..... 18

2 第2次調査の概要 ..... 18

3 各トレンチの土層について ..... 20

4 遺構検出状況と遺物出土状況について ..... 20

第2節 高橋貝塚の遺構 ..... 25

1 貝層 ..... 25

2 住居跡 ..... 25

3 土坑 ..... 26

4 礫集積 ..... 29

第3節 高橋貝塚の遺物 ..... 30

1 土器・土製品 ..... 32

2 石器・石製品 ..... 55

3 貝製品・自然貝 ..... 72

4 骨角製品・獣骨 ..... 73

5 土器圧痕 ..... 76

第4節 甕棺その他の弥生土器について ..... 81

### 第4章 総括

第1節 整理作業でわかったこと ..... 95

第2節 考古学的成果と課題 ..... 97

## 挿図目次

図1	周辺遺跡分布図	3	図32	出土土器 (19) Eトレンチ	49
図2	遺跡周辺の地形図	17	図33	出土土器 (20) F・G・Hトレンチ	50
図3	トレンチ配置図	19	図34	出土土器 (21) 無文土器	51
図4	土層断面図 (1)	21	図35	出土土器 (22) 彩色土器	52
図5	土層断面図 (2)	22	図36	出土土器 (23) 他地域の土器	53
図6	土層断面図 (3)	23	図37	出土石器 (1)	56
図7	遺構配置図 (推定図)	24	図38	出土石器 (2)	57
図8	住居跡平面図・断面図	26	図39	出土石器 (3)	58
図9	1号土坑平面図・断面図	27	図40	出土石器 (4)	59
図10	2号土坑平面図・断面図	28	図41	出土石器 (5)	60
図11	3号土坑平面図・断面図	28	図42	出土石器 (6)	61
図12	4号土坑平面図・断面図	29	図43	出土石器 (7)	62
図13	礫集積平面図・断面図	29	図44	出土石器 (8)	63
図14	出土土器 (1) 1号土坑	30	図45	出土石器 (9)	64
図15	出土土器 (2) Aトレンチ	31	図46	出土石器 (10)	65
図16	出土土器 (3) Aトレンチ	32	図47	出土石器 (11)	66
図17	出土土器 (4) Aトレンチ	34	図48	出土石器 (12)	67
図18	出土土器 (5) Bトレンチ	35	図49	出土石器 (13)	68
図19	出土土器 (6) Bトレンチ	36	図50	出土石器 (14)	69
図20	出土土器 (7) Bトレンチ	37	図51	出土貝器	72
図21	出土土器 (8) Bトレンチ	38	図52	出土骨角器	73
図22	出土土器 (9) Bトレンチ	39	図53	動物種同定円グラフ	75
図23	出土土器 (10) Bトレンチ	40	図54	検出圧痕 デジタルマイクロスコープ 写真①	77
図24	出土土器 (11) Bトレンチ	41	図55	検出圧痕 デジタルマイクロスコープ 写真②	78
図25	出土土器 (12) Cトレンチ	42	図56	検出圧痕 デジタルマイクロスコープ 写真③・敷物圧痕レプリカ	79
図26	出土土器 (13) Cトレンチ	43	図57	甕棺他実測図	82
図27	出土土器 (14) Cトレンチ	44	図58	Bトレンチ 層別出土土器	96
図28	出土土器 (15) Dトレンチ	45			
図29	出土土器 (16) Dトレンチ	46			
図30	出土土器 (17) Dトレンチ	47			
図31	出土土器 (18) Dトレンチ	48			

## 表目次

表1	高橋貝塚の周辺遺跡地名表	4	表12	土器観察表 (2)	84
表2	高橋貝塚関連の文献一覧	13	表13	土器観察表 (3)	85
表3	Bトレンチ甕形土器口縁部形状に よる出土破片数	54	表14	土器観察表 (4)	86
表4	Dトレンチ甕形土器口縁部形状に よる出土破片数	54	表15	土器観察表 (5)	87
表5	甕棺破片層位別出土表	55	表16	土製円盤計測表 (1)	87
表6	丹塗り土器層位別出土表	55	表17	土製円盤計測表 (2)	88
表7	出土石器組成表	70	表18	出土石器計測表 (1)	88
表8	磨製石器層位別出土表	70	表19	出土石器計測表 (2)	89
表9	シカ・イノシシ出土部位数	75	表20	出土石器計測表 (3)	90
表10	検出圧痕一覧	80	表21	出土石器計測表 (4)	91
表11	土器観察表 (1)	83	表22	出土貝製品計測表	92
			表23	出土骨角器計測表 (1)	93
			表24	出土骨角器計測表 (2)	94

## 写真目次

写真1	Bトレンチ貝層	9	写真8	1号土坑床面遺物出土状況	27
写真2	Bトレンチ西壁	25	写真9	1号土坑完掘状況	27
写真3	Dトレンチ北壁	25	写真10	2号土坑完掘状況	28
写真4	Dトレンチ北壁	25	写真11	3号土坑完掘状況	28
写真5	住居跡完掘状況	26	写真12	4号土坑	29
写真6	1号土坑検出状況	26	写真13	礫集積平面状況	29
写真7	1号土坑遺物出土状況	26	写真14	礫集積断面状況	29

## 図版目次

図版1	出土弥生土器集合	99	図版7	出土石器(4)	
図版2	他地域の土器, 無文土器	100		磨製石器	105
図版3	甕棺・大甕破片, 丹塗り土器	101	図版8	ゴホウラ加工品と廃材	
図版4	出土石器(1)			(木下論文掲載分)	106
	石錐・磨製石鏃, 横刃形石器・		図版9	その他のゴホウラ貝輪加工廃材	
	大型楔形石器等	102			107
図版5	出土石器(2)		図版10	オオツタノハ貝輪, 土製円盤等	
	石核, 層灰岩製片刃石斧破片など				108
		103	図版11	出土骨角器(1)	109
図版6	出土石器(3)		図版12	出土骨角器(2)	110
	堇青石製石包丁, 石鎌	104			

# 第1章 事業の経緯と経過

## 第1節 事業の経緯と内容

本書は、鹿児島県の考古学界に多大な功績を残した河口貞徳の収蔵品、いわゆる「河口コレクション」の中にある高橋貝塚（鹿児島県南さつま市金峰町高橋所在）に関する考古学的情報について整理した報告である。

河口貞徳は平成23（2011）年1月に101歳で亡くなった。明治42（1909）年生まれで、小学校教員を経て、昭和17年33歳で立正大学を卒業し、昭和26年42歳の時には京都大学考古学教室に内地留学し、大学の縄文土器の整理を行うなどして、考古学の造詣を深めた。

昭和23（1948）年から昭和42（1967）年まで鹿児島市立玉龍高等学校教諭として勤務しながら、昭和24（1949）年に寺師見國や三友國五郎らと鹿児島県考古学会を創立した。そして、昭和46（1971）年から亡くなる平成23（2011）年まで、その考古学会の会長として、鹿児島県の考古学会を牽引した。調査した遺跡は、昭和24（1949）年9月の笹貫遺跡（鹿児島市）をスタートとして、最後の調査となった昭和59（1984）年10月の中甫洞穴（知名町）第3次調査まで、97遺跡、延べ139回を数える。こうした長年にわたる調査・研究の成果は、結果として多くの考古資料が考古学会の事務局を兼ねていた河口宅に蓄積されることとなり、研究や蔵書保管のためのスペースはもちろん、プレハブ二階建ての専用の収蔵庫を自宅に設け、資料の保管管理に尽力してきた。

これらの資料は、遺族の方々のご厚意により、平成24（2012）年12月に、埋文センターに寄贈され、その今日的評価を検討・提示すべく、緊急雇用創出事業や文化庁の国庫補助事業等を活用し、調査・整理を進めてきた。

これまで、県立埋文センターでは、『山ノ口遺跡』（2018）、『吐噶喇・奄美の遺跡』（2019）、『出水貝塚』（2020）と報告・刊行してきた。令和2（2020）年度からは、文化庁の国庫補助事業を活用した『よみがえる「河口コレクション」の世界』事業をスタートさせ、『上加世田遺跡1』（2021）・『上加世田遺跡2』（2022）・『市来貝塚』（2023）の報告書を刊行し、令和5年度は『黒川洞穴』の報告書と併せて『高橋貝塚1』を刊行した。『高橋貝塚1』は発掘調査の記録写真集であり、昭和37（1962）年の1次調査と翌年の2次調査の発掘調査の経過や遺物出土状況等の当時の写真と、その後その成果を公表した時の遺物写真等をまとめたもので、本年度の発掘調査成果の再整理に先立って刊行したものである。本年度は公表された資料以外の資料分析や、その後の多分野での研究成果を併せて、遺跡の再評価を行うも

のである。

## 第2節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成業務については、令和6（2024）年4月から令和7（2025）年3月にかけて、埋文センターで行った。ただし、基礎的な整理作業は、緊急雇用創出事業や文化庁の国庫補助事業等を活用し調査・整理を進め、個別の遺跡については令和元（2019）年度から着手し、寄贈された資料と既報告（発表）分の資料との照合作業等を行った。

また記録写真については『高橋貝塚1』作成時に整理を行い、掲載遺物の確認、収蔵遺物のパンケースの整理、一部遺物の選別と実測については令和5年中に着手した。

本整理・報告書作成に関する業務体制は、以下のとおりである。

### 〈令和6年度 業務体制（整理作業）〉

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	中村 和美
調査企画	次長兼総務課長 南 安洋
調査課長	黒川 忠広
第一調査係長	平 美典
調査担当	文化財研究員 堂込 秀人
	文化財研究員 宮崎 大和
事務担当	主幹兼総務係長 白坂 由香
主査	斜木 吉夫
調査指導	元鹿児島県考古学会 副会長 池畑 耕一
	文化庁文化財部文化財第二課 主任文化財調査官 近江 俊秀
	県文化財保護審議委員会 会長 本田 道輝

なお、本報告書の刊行にあたり、掲載内容の妥当性等について下記の委員会を開催し、検討を行った。

報告書作成指導委員会 令和6年11月6日他、4回。

黒川調査課長ほか6名

報告書作成検討委員会 令和6年11月11日

中村所長ほか6名

## 第3節 整理作業の方法と報告書の構成

対象となる高橋貝塚の資料は、河口宅の収蔵庫に保管してあった状態を基本として受け入れ、平成25年度にパンケース111箱と未整理（遺物等はビニール袋入り）のパンケース158箱、パンケースでないプラチックケースに入った未洗浄のもの47箱（つまり発掘調査後収蔵されたまま）を受け入れし、緊急

雇用事業や国庫補助事業での河口コレクションの基礎整理で少しずつ整理していった、令和4年度には未洗浄の土器などの水洗も行い、浅いパンケースで約960箱に整理・収納されていた。

今回の再整理作業にあたり、この960箱のパンケースをまず1次・2次調査のトレンチごと、A～Hトレンチごとに分別し、その後出土品の種類ごと、つまり土器類・石類・貝類・獣（魚）骨類等に分類した。さらに土器以外について、早期に石器・石製品・貝製品・骨角製加工品・魚骨製加工品（いわゆる遺物）の抽出・選別を行った。石器についてはほぼ全点で器種を分別し、組成表を作成した。貝製品や骨角器についても全点から選別した。

土器については、掲載遺物以外の掲載を中心として考え、最も層位的に安定していると思われるBトレンチについては接合作業を行うこととした。また貝層を含むBトレンチとDトレンチについて、報告でも層位関係の基準として扱われ、土器の型式設定の指標となっていることから、BトレンチとDトレ

ンチの甕形土器については、口縁形状により層位別に破片数を計数した。

他のトレンチは攪乱状況も窺われ、層位状況が安定的でない。全トレンチを通して、甕棺の破片や赤色土器なども目立ち、選別作業中に破片点数を層位別に数えた。

こうした作業を進めながら、遺物をそれぞれ分別して、全点から通常の報告書作成に耐えうる選別を行い（1次選別）、さらに実測する遺物を選別する（2次選別）。そのうちさらに精選して掲載することになった。

調査の整理の経過で、調査者の認識が変わり、調査の成果も変わる可能性があり、発掘調査の経過はそのときの日誌・記録を要約し、遺構等の説明は、それぞれの調査の報告のままとした。日誌や遺構の説明への補足や編者の解釈は、その後にそれぞれ注釈を加えた（※印）。個別の遺物の評価や全体の現時点の遺跡評価は総括としてまとめた。

## 第2章 高橋貝塚の位置と環境及び研究史

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 1 遺跡の位置と環境

高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在し、万之瀬川の支流である堀川右岸の砂丘内縁の河岸段丘上にある貝塚である。貝塚は海岸からは2.5kmの高橋集落内の玉手神社の境内にあり、南側に参道・社屋が建てられたために南側は削平されたものと考えられている。標高10～11mに貝塚があり、周辺の水田からは比高差約7mである（図1）。もともとは東側が高い楕円形状の丘で西方の微高地へと続いていたものが、畑地造成により南東・北西が地下げされていると考えられる。北西には、8mほどの微高地が続き宅地となっている。

発掘調査により高橋貝塚は南九州の弥生時代前期を代表する貝塚で、弥生前期の高橋式土器の標式遺跡であり、出土するゴホウラなどから南海産貝交易の中継地として注目されてきた。

#### 2 周辺の遺跡

薩摩半島西海岸の吹上砂丘は、砂丘裏側はシラス台地や山地に接するが、河川の河口周辺では、後背湿地を形成する場合も多く、特に弥生時代から古墳時代の遺跡が展開する。シラス台地には縄文時代の遺跡が展開することが多い。

万之瀬川流域は、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く存在し、網羅的かつ時代別に述べると一地方史・郷土誌として成立するほどである。本報告書は河口コレクションの再評価が目的であることか

ら、とりあえず弥生時代における周辺遺跡との関連を中心として述べたい。そのため遺跡地図には、弥生時代と古墳時代の一部の遺跡のみを落とし込んで説明していきたい。

道路事業や農政関係の開発に伴う分布調査や学術調査で、地図上にはドットから面への遺跡範囲の拡大がなされ、同一台地でも分布調査時期によって複数遺跡へ分割されている場合もある。県内でも遺跡が集中する地域であり、遺跡範囲内にもドットが落ちるが、これも経年的な記録でもある。一覧表の所在地は全て南さつま市である。早期・前期・中期・後期は前に時代が付く場合を除き、弥生時代の中の区分である。

高橋遺跡（3）の範囲は、高橋貝塚を南東端として北西方向に砂丘まで微高地をなし、集落全体が遺跡である。下小路遺跡（2）は高橋貝塚の北東端部にあたり、前期の壺棺と中期の須玖式甕棺が検出され、棺内の人骨にはゴホウラ製貝輪が装着されていた。高橋遺跡の北西側では平成18（2006）年に鹿児島国際大学が発掘調査を実施し、木棺墓3基を検出した。このように北側を墓域と捉えると、位置関係からは今の集落に弥生時代前期からの住居跡が所在する可能性が高い。堀川を挟んで、東南側の微高地には、天神原遺跡（5）、上焼田遺跡（6）、下堀遺跡（8）、阿多貝塚（7）が所在する。いずれも縄文時代晩期から弥生時代前期～中期の遺物が出土する。下堀遺跡（8）では、微高地を南北に貫く道路に伴い、9基の竪穴住居跡と溝状遺構7条が検出され、



図1 周辺遺跡分布図

表1 高橋貝塚の周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	地形	所在地	遺跡の主な時代	備考
1	高橋貝塚	台地	金峰町高橋	弥生	河口1963, 河口1965
2	下小路	台地	金峰町高橋	弥生, 弥生中期	河口1976
3	高橋	平地	金峰町高橋	弥生	中園ほか2008『鹿国大研究報』第5号
4	上ノ山	海岸	金峰町高橋	弥生後期～終末	
5	天神原	台地	金峰町宮崎	縄文, 弥生, 古墳	
6	上焼田 (堀川貝塚)	台地	金峰町宮崎	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	有元1974, 1977県報(5) 2003金峰町報(15)
7	阿多貝塚	台地	金峰町宮崎	縄文, 縄文前期, 弥生, 古墳	1978金峰町報(1)
8	下堀	台地	金峰町宮崎	縄文, 縄文晩期, 弥生, 弥生中期, 弥生後期～終末, 古墳, 中世, 近世	2005金峰町報(20)
9	尾下	丘陵	金峰町尾下	弥生, 弥生後期～終末	
10	松木菌	台地	金峰町尾下	弥生, 弥生後期～終末	本田1980
11	山野原	台地	金峰町尾下	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世, 近世	1995金峰町報(7)
12	鳥追菌	台地	金峰町尾下	縄文, 弥生, 弥生後期～終末, 古代	
13	高取	台地	金峰町高橋	弥生, 古墳	
14	上ノ山後	海岸	金峰町高橋	弥生, 古墳, 古代, 中世	
15	万之瀬川床	河川	加世田益山	弥生, 古墳, 古代, 中世	有元1974, 坪根1988, 本田1994・1996
16	川ノ畑	平地	加世田益山	弥生, 古墳	
17	上山野	平地	加世田益山	弥生, 古墳	
18	上川原	平地	金峰町宮崎	弥生, 古墳	
19	白糸原	平地	金峰町宮崎	縄文, 弥生, 古墳, 中世	2005県埋セ報(86)
20	東柳原	平地	加世田益山	弥生, 古墳	
21	中小路	平地	加世田益山	弥生, 古墳, 中世, 近世	1989加世田市報(6)
22	竹屋	台地	加世田宮原	弥生	
23	西ノ原	台地	加世田宮原	縄文, 弥生, 古墳, 古代	
24	小陣貝塚	平地	加世田唐仁原	縄文, 弥生	
25	松田南	台地	金峰町宮崎	縄文, 縄文早期, 古墳, 中世	
26	持鉢松	平地	金峰町宮崎	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	1998金峰町報(10), 2007県埋セ報(120)
27	渡畑	平地	金峰町宮崎	縄文, 古墳, 古代, 中世	2010県埋セ報(151), 2011県埋セ報(159)
28	芝原	平地	金峰町宮崎	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	2013県埋セ報(178)
29	花瀬今城原	台地	金峰町花瀬	縄文, 弥生, 古墳	
30	小中原	台地	金峰町新山	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	1991県埋セ(57)
31	西立石原	台地	金峰町宮崎	弥生, 古墳	
32	中津野	台地	金峰町中津野	弥生, 弥生後期～終末	河口1952, 2022県埋セ報(217)
33	下原	台地	金峰町中津野	縄文, 縄文前期, 縄文晩期, 弥生, 弥生初頭～前期	県教委1986
34	平畑	台地	金峰町中津野	縄文, 縄文後期, 弥生, 古墳, 中世	1996金峰町報(8), 2007町報(13)
35	南下	低湿地	金峰町中津野	弥生, 古墳, 古代, 中世	2011県埋セ報(157)
36	頭無迫田 その他古墳時代の遺跡	平地	金峰町大野	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	
<p>〈参考・引用文献〉</p> <p>有元影順1974「堀川貝塚について」『鹿児島考古』第10号 鹿児島県考古学会              河口貞徳1952「鹿児島県の弥生式遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会              河口貞徳1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18 九州考古学会              河口貞徳1965「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻第2号 東京考古学会              河口貞徳1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会              河口貞徳・旭慶男・最所大輔1976「下小路遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会              坪根伸也1988「万之瀬川河床遺跡採集の滑石製石鍋について」『鹿大考古学会会報』第8号 鹿児島大学考古学会              河口貞徳1983「白寿の甕棺」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会              本田道輝1980「松木菌遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会              本田道輝1994「南薩地方の二・三の遺跡について」『鹿児島史学』第41号 鹿大史学会              本田道輝1996「薩摩半島の考古学(5) 万之瀬川河床遺跡採集の特殊な土器について」『鹿児島考古』第30号 鹿児島県考古学会              鹿児島県教育委員会1986「下原遺跡」『埋蔵文化財の知識』              鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『農業開発センター1 尾ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)              鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『上水流遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(113)</p>					

東西に広がる範囲に中期集落が形成された可能性が高い。また出土した黒髪式土器から黒髪式土器の新段階と須玖Ⅱ式新段階と山ノ口式土器が併行し、この地域が黒髪式土器文化圏に含まれることが述べられている。九州東南部では、山ノ口式土器と中溝式土器、瀬戸内Ⅳ様式土器が併行する可能性があり、中期の土器動態が把握されるとする(本田2005)。また弥生時代早期の土器として、小型壺や突帯文土器が様式・技法的に北部九州・西北九州と同じで、この地域との関わりを暗示するとされ、中期の甕棺資料にも注目している(中園2005)。貝塚形成前の高橋貝塚にもこれらが見られる。上焼田遺跡(6)では、早期から後期の土器が出土し、後期の円形周溝状遺構が2基検出されている。円形周溝状遺構は中期から南九州に散見されるが、調査例の増加から集落周辺部へ存在し、土坑墓を伴うこともあり、墓ないし関連祭祀の場として認知されつつある(中園2006, 石田2021)。

なお、ほ場整備で壊滅したとされる堀川貝塚の位置は、上焼田遺跡(6)の周辺であり、阿多貝塚(7)と谷を挟んで所在し、貝塚からは、春日式土器や阿高式土器、市来式土器など縄文時代中期から後期のものがほとんどとされるので、この時期の貝塚の可能性が高いが、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡であった。弥生時代前期の土器は発見されなかったとある。

台地の先端部にあたる阿多貝塚(7)では、おそらく中期の竪穴住居跡2基と、中期後半の壺棺2基が検出されている。突帯文土器、中期の incoming I 式・須玖式土器・山ノ口式土器が掲載されている。

尾下遺跡(9)、松木藪遺跡(10)、山野原遺跡(11)、鳥追藪遺跡(12)は尾下台地の同一台地上に立地し、中期から古墳時代・古代・中世までの遺跡が形成される。松木藪遺跡(10)では後期の環濠の可能性のある大溝が松木藪式土器を伴って出土している。後期集落は台地に展開した。

高取遺跡(13)は、堀川右岸の台地で、現在は水田としてはほ場整備されたが、左岸の低湿地部より高く、古墳時代の散布地である。周辺ではさらに古墳時代の土器が再出されており、遺跡範囲は拡大して、東側に稲場下遺跡、島田遺跡、北側の塩屋堀の集落も古墳時代の散布地となっている。

万之瀬川床遺跡(15)は、採集された弥生時代中期の土器を中心に・成川式土器・須恵器・土師器・滑石製石鍋・陶磁器が報告されている。江戸時代に流路が変わった万之瀬川、それ以前も流路を変えたであろうし、流下物の堆積も考えられるが、何回も採集される弥生時代の遺物については、とくに川床に弥生時代の包含層が残っていると考えられる。

白糸原遺跡(19)古墳時代の住居跡19軒が検出さ

れている。

持鉢松遺跡(26)は中期の竪穴住居跡1基と終末から古墳時代の竪穴住居跡4基が検出された。中期の土器、鉄斧などが出土する。

芝原遺跡(28)では、前期～後期の土器とともに小型仿製鏡と破鏡、銅鏃が出土している。さらに弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡が8軒検出、竪穴状遺構が19基検出され、遺構は内陸部へ広がるものと考えられ、相当規模の集落が想定できる。北部九州や有明海沿岸地域で在地化し技術で製作された庄内式土器、布留式土器が出土し、弥生前期以来の北部九州との関係性が維持されて続いたものと考えられる。

堀川の対岸部で、低湿地帯東側の中津野台地の先端部には下原遺跡(33)が立地する。下原遺跡(33)では縄文時代晩期終末から弥生時代早期の突帯文土器に伴って、朝鮮半島系無文土器・靱痕土器・石包丁等が出土している。平畑遺跡(34)では中期から後期の土器が出土している。

中津野遺跡(32)は中津野式土器の標式遺跡である。台地部は後期から古墳時代の土器が多く出土する。台地部から標高を減じていく西方部分は、国道270号線のバイパス建設に伴って2007年～2018年まで断続的に発掘調査された。微高地から低地部・低湿地部へと構成される発掘区では、縄文時代後期と弥生時代を中心に遺物が出土した。弥生時代では前期から中期前葉の住居跡5軒や土坑17基が検出され、低湿地部では前期に該当する時期の船の舷側板が出土した。準構造船の船材が出土したことは、高橋貝塚で言われてきた南海産貝交易が準構造船で行われていた可能性が高く、中継地としての役割が具体的になる。出土土器も高橋貝塚と共通するところが多い。弥生時代から古墳時代にかけては、台地縁辺部から低湿地部に、木道が伸ばされて、水田が広げられたと考えられ、同じバイパス工事での中津野遺跡(32)の北側の南下遺跡(35)の調査では、木道から木製の農具等も出土している。

図面には入らないが、弥生時代を代表する遺跡として、吹上町 incoming 遺跡がある。 incoming 遺跡では中期のU字溝とV字溝、貯蔵穴、古墳時代の住居跡が検出された。中期前葉の土器群と抉入石斧・石包丁などの大陸系磨製石器が出土している。また獣骨や多量のイチイガシの堅果が見られ、高橋貝塚以来の採集経済の様相がみられるとされる。 incoming 遺跡の谷を挟んで北側に立地する白寿遺跡では、弥生時代前期の壺棺と中期の甕棺が出土している。 incoming 遺跡の集落と関係するものと考えられる。

日置市に近くなるが、南さつま市の北方の農業開発総合センターで調査された遺跡群のなかで、尾ヶ原遺跡で弥生時代中期の小児用合口甕棺が単独で出

土し、同じく諏訪前遺跡では、弥生終末の竪穴住居跡が検出され、龍の絵画土器が出土した。

地図東側金峰町花瀬の万之瀬川右岸の、上水流遺跡では、縄文時代晩期の奄美の喜念Ⅰ式土器に近い壺形土器が出土している。また突帯文土器に伴って打製石斧や横刃形石器も多く出土し、栽培活動が窺われるほか、高橋式土器・入来Ⅱ式土器・黒髪式土器とともに穿孔具が出土している。奄美の土器が万之瀬川を遡っている。上水流遺跡からは古墳時代の住居跡も11軒検出された。

弥生文化の導入は高橋貝塚（1）や河川沿いの芝原遺跡（28）などから、阿多貝塚（7）や中津野遺跡（32）などの低湿地部の近くの台地縁部へと進出、中期には内陸の下堀遺跡（8）、中津野台地などの台地部、尾下台地へと集落が形成されていく。南下遺跡（35）などからは弥生水田から古墳時代の水田の拡がり方をみることができる。万之瀬川は蛇行しながら沖積微高地を形成し、微高地周辺と台地縁部に初期水田が開拓された。それが定着しながら、拡大する一方で、集落は大規模化して台地上へと展開して古墳時代へ至る。

弥生時代は、万之瀬川が外来文化の窓口として、縄文時代晩期から中近世にかけて大きな役割を担った一時期を画す事になる。

#### 〈参考文献〉

石田智子2021「鹿児島県における弥生時代研究の課題と展望」『鹿児島考古』第50号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1983「白寿の壺棺」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会

本田道輝2005「第X章 下堀遺跡の検討」『下堀遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書20 金峰町教育委員会

中園聡2005「第X章 金峰町下堀遺跡出土の弥生土器について」『下堀遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書20 金峰町教育委員会

中園聡2006「第3章 弥生時代 第4節 祭りと葬送」『先史・古代の鹿児島 通史編』鹿児島県教育委員会

#### 第2節 発掘調査の履歴と成果

高橋貝塚の発掘調査は、昭和37（1962）年8月に金峰町教育委員会が調査委員会をつくり、河口貞徳らにより発掘調査され、調査期間は8月2日（木）～8月12日（日）とされるが、7月31日（火）には河口らが現地入りし、8月1日（水）から調査開始の予定であったが、豪雨のため2日からとなった。

昭和38（1963）年8月は県教育委員会・金峰町教育委員会の援助を得て河口貞徳らが調査した。調査期間は8月15日（木）～8月27日（火）である。

発掘調査の経緯については、現場の臨場感と経過や所感を当時の発掘調査日誌から振り返る。調査日誌は河口貞徳が総括する日誌を書いているが、1次調査では盛園尚孝がBトレンチを主に日誌を残している。2次調査では、トレンチを担当する各発掘班で日誌を記している。Cトレンチが盛園、Dトレンチが池水寛治、Eトレンチが河野治雄、Fトレンチが諏訪昭千代、Gトレンチが上村俊雄が主に記録している。

発掘区の規模については次章で詳しく述べる。

#### 日誌抄

二次にわたる発掘調査であるが、河口が総括の日誌を記録し、一次調査は盛園、二次調査は各トレンチの責任者による日誌が残っている。発掘の経過や出土遺物については、詳細な情報が河口以外の日誌に書かれている事もあり、このため一次調査は河口の記述を最初に記し、盛園の日誌を斜体字で記す。二次調査は、トレンチごとの日誌からのものは、トレンチごとに斜体字で記すこととする。また、日誌中やあるいは文献2の報文中には、トレンチの区については算用数字が使用されているが、1次調査・2次調査のいずれも設定時の図面・日誌にはローマ数字で記載されている。そのためトレンチの区についてはローマ数字を用い、トレンチの層位については算用数字を使うことで統一したい。

※印は編者の書き込みである。

#### 第1次調査

1962（昭和37）年7月31日（火）～8月12日（日）

AトレンチとBトレンチの発掘調査で、河口が総括を、Aトレンチを担当した盛園がAトレンチを中心に記録している。

#### 7月31日（火）

午後5時、田布施小学校着。地元関係者等あいさつ

#### 8月1日（水）

台風9号のため豪雨となり、発掘調査できず。現地予備調査、トレンチ設定場所を決める。

午前一台風のため強風雨、小学校にて竹へら並びに杭の製作。

午後一現場予備調査、トレンチ位置について話し合い。

#### 8月2日（木）

貝塚東側、東西方向にAトレンチ（2×7m）、社殿後ろの貝塚中央部を縦断するBトレンチ（2×6m）を設定。表面採集・発掘。Bトレンチの表土層遺物は多く大きい。

Aトレンチを東南側からIブロック(3×2m)、IIブロック(2×2m)、IIIブロック(2×2m)に杭を打つ。Bトレンチは社殿側から2×2mでI～IIIブロックで杭を打つ。除草、立木の処理、表土はぎ、木の根が縦横にはしり作業は困難をきわむ。黒色土層の下の黄褐色(1層)の作業にかかる。全体に土器の量が多い。

※盛園はAトレンチを主に担当

#### 8月3日(金)

Aトレンチ 1層を発掘、西半部に土器の出土量多く破片大。菅玉出土、A I区に貝層が現れ始める。

Bトレンチ 1層を発掘、I～III区で土器出土量多し。貝利器、貝輪未製品出土。B IIは貝層見える。

※貝層はA III区に存在、A I区はA III区と思われる。

II区～III区の西半分にかけて、割に大形の土器片で量が多い。全体に弥生中期の土器片が多いが、前期も混在している。中世～近世の遺物も入り、明らかに攪乱層であるが、I区において土器片が多い。扁平片刃石斧、石鏃出土。硬玉製菅玉出土。

#### 8月4日(土)

Aトレンチ 30cmほど全体を掘り下げ、III区に貝層が現れる。土器の出土量減少。I区から元祐通宝出土。

Bトレンチ 50cmほど掘り下げ、全面貝層に達し黒土混じりの貝層を2層とする。

※この2層は断面図には反映されず

I区の土器片はしばしば大形の土器片が出土。弥生土器片では圧倒的に中期が多い。貝製利器、磨製穿孔具、抉り2つある柱状石斧出土。

※貝製利器はゴホウラの廃材の可能性

#### 8月5日(日)

Aトレンチ III区において貝層全面に出て、II区の境あたりで落ち込み。

Bトレンチ 混土貝層を5～10cm削る  
中学生招集の依頼

午前中、III区全般にわたり黄褐色層を剥ぎ、混土貝層の上面に達する。II区側に急傾斜している。III区では土器量は少なくなるが、II区からI区にかけて土器量は豊富で中期が多い。片刃石斧、三角形石包丁、孔の開いたゴホウラ腹面、L字状骨製品出土。

※黄褐色層は中期前葉の包含層の可能性が高い。

#### 8月6日(月)

Aトレンチ III区に貝層が全面に現れる。I・II区では貝層該当層が不明。

Bトレンチ 貝層掘り下げ平板測量。

混土貝層直上に固い層、I区の東南側にも硬化面あり。午後から混土貝層も掘り下げ。貝輪片、磨製穿孔具、外耳土器出土

※硬化面は遺構床面の可能性、外耳土器は仲原式土器の可能性。

#### 8月7日(火)

Aトレンチ III区以外の区は80cm前後の深さまで下がる。

Bトレンチ 貝層があるも全体で60～90cm下げる。貝層から仲原式土器が出土。

1/500の遺跡周辺図作成を町役場に依頼する。

混土貝層の貝は細かく粉碎されて固い。層中にオキシジミのブロックあり。全体的にはカキが多いが粉碎されている。無頸壺の完形品出土。

#### 8月8日(水)

Aトレンチ 80～100cm掘り下げ。

Bトレンチ 90cm掘り下げ。

中間報告会実施

I区4層、II区3層の掘り下げに総力をあげる。I区4層には特に中期のものが目立つ。I区5層に入ると前期のものが非常に多くなる。II区4層では夜臼式がほとんど。

※I区は土坑が検出されており、その上層に乗っかっているため中期が多い。4層夜臼式の包含層に土坑が掘り込まれたか。

#### 8月9日(木)

Aトレンチ ほとんど生徒を入れずに作業、層位関係を把握するに困難。

Bトレンチ 貝層下の黒色土の4層の遺物取り上げ。板付I式土器出土。5層の褐色土、さらに6層に達する。

夜は遺物の一部水洗

I区4層の排土搬出、午後から平板測量・遺物取り上げ。5層の掘り下げ、遺物取り上げ。

#### 8月10日(金)

Aトレンチ 110～120cm掘り下げ、I区に出土する土器は前期の土器、5層として取り上げたが、6層にあたる。貝殻の細弧文、突帯文土器(夜臼式)が出土。

Bトレンチ 多量の土器が出土、II区・III区は黒色層であるが、遺物は古いものである。

III区5層掘り下げ、II区黒色粘土層の上に前期土器出土、この黒色層の下に黄褐色土塊混土層が現れる。I区は黄褐色土塊混土層に黒色土層のプラン。

※プランはメモ(図)あり、土層断面図からは黒色層はIV層、これから土坑の掘り込みか?

#### 8月11日(土)

前日からの豪雨であったが、朝10時頃に回復、昼から作業。

Aトレンチ 流入した土を除去し、清掃したところ、I・II区下部に土坑が検出、一同驚く。作業は本日までの予定であったが、明日まで延期。

Bトレンチ 全員で掘り下げ、遺物はほとんど出ず、紅褐色層に達する。断面の土器、写真と取り上げ。壁の上部崩れ、生徒負傷する→病院へ、化膿止めの注射。トラックを手配

午前中、遺物を層別に分けて、全体的な層位別分類を行い、午後から作業に入る。Bトレンチ全体の排土作業を全員で行う。その後Aトレンチの排土を行いながら、下層の黄褐色土層との切れ目に、長方形の土坑プランを検出。

### 8月12日(日)

Aトレンチ 土坑の掘り下げ。夜白式・板付I式等が床面から出土。

Bトレンチ 全体で150~160cm下がる。断面図作成、夜10時までかかる。

NHK取材。学生は7時に帰す。旅館へは9時頃帰り、10時に出発。途中車の不都合で鹿児島には午前1時過ぎに到着。このためトラックで玉龍高校に搬入した遺物は、高校長・職員などで校舎へ運び込み。

土坑掘り下げ、前期板付I式が出土。底部袋状をなす。1/10の実測図作成。

### 8月13日(月)

河口・盛園で新聞記者を喚び説明。南日本、西日本、朝日が来て、毎日はず。

## 第2次調査

1963(昭和38)年8月15日(木)~8月27日(火)

C・D・E・F・G・Eトレンチの発掘調査である。EトレンチはGトレンチ終了後に新に設けられたトレンチである。

### 8月15日(木)

C~Gトレンチの設定。

CトレンチはAトレンチ北側に2m幅で、10m強の長さで、Aトレンチの区画に合わせて、東側からI~V区を設定した。AトレンチⅢ区の延長上にCトレンチⅥ区を設定した。DトレンチはBトレンチに直角に、貝層のマウンドを縦断するかたちで、西側に2×8mで、東側からI~Ⅳ区とした。Eトレンチはマウンドの西側、神社境内に2×6mで東西方向に東からI~Ⅲ区とする。Fトレンチは社殿の西側に南北方向に2×6mで、北からI~Ⅲ区とする。Gトレンチはマウンドの北側、台地の下に東西方向に2×6mで、東からI~Ⅲ区とする。

各調査員の配置を行う。Cトレンチー盛園・出口、Dトレンチー池水、Eトレンチー河野、Fトレンチー諏訪、Gトレンチー上村の調査員を責任者とする。

※田布施小教諭、玉龍高校生およびOB、出水高校生、吹上高校生、加世田中生、田布施中生等が作業員として各トレンチに分けられる。

### 8月16日(金)

Cトレンチ 表土剥ぎ、Ⅲ~Ⅴ区は急傾斜をなす。

表土整理に取りかかる。昨年の排土中遺物は前・中期の瓦破片が多く、全て表面採集とする。

Dトレンチ 表土剥ぎ

I層褐色層の掘り下げ、遺物は前・中・後期、須恵器を包含した攪乱層。

Eトレンチ 休み

Fトレンチ I区の貝層の上のI層を剥ぐ。

昨年発掘したBトレンチの排土の除去をI・II区で行う。排土の土器は表面採集として処理。I区西側は貝層の傾斜によって深さ50cmまで掘り下げるが貝層には達していない。

Gトレンチ I区は2層、他に1層を剥ぐ。

### 8月17日(土)

Cトレンチ I層掘り下げ、遺物多く出土。

I区は10~15cm掘り下げ、出土遺物は小破片のみで、弥生前・中期のものらしくその比は中期のものが多い。II区は15~20cm掘り下げ、中期の遺物多し。IV区は15~20cmぐらい掘り下げ、石包丁、こしが出土。

Dトレンチ 木の根取り

各区I層の掘り下げ、中期の遺物多く、中期の一様式がつかめそうな気がする。

Eトレンチ 休み

Fトレンチ I区4層まで剥ぐ

I区は混土貝層(2層)、純貝層(3層)の掘り下げ、純貝層は北から舌状にII区の方に入る。

Gトレンチ 70cmぐらいまで攪乱、II区で赤褐色層に達して、楕円形の凹みと周りに小ピットあり。

※貝層掘り下げが目的となり、上層については攪乱層という先入観で掘り下げている。

### 8月18日(日)

Cトレンチ 各区I層掘り下げ、Ⅵ区とⅢ区に混土貝層露出。

I~Ⅳ区のI層の掘り下げ。午後になってⅢ区西北隅において混土貝層が露出、Ⅳ区北側においても混土貝層が露出。

Dトレンチ I層の大部分が終了

I層の掘り下げ、土層は褐色土。Ⅳ区についてはI層を終える。午後からI・II区に全員入る。約40cmでI区西側混土貝層に達する。I・II区について前期遺物が多くなってきた。貝加工品・貝利器出土。

※貝加工品・貝利器は貝輪未製品、穿孔具出土。穿孔具は貝輪製作具か

Eトレンチ 本日より作業開始、I層から多量の土器が出土

表面採集とI層まで、遺物取り上げ。

Fトレンチ I区は5層まで発掘。

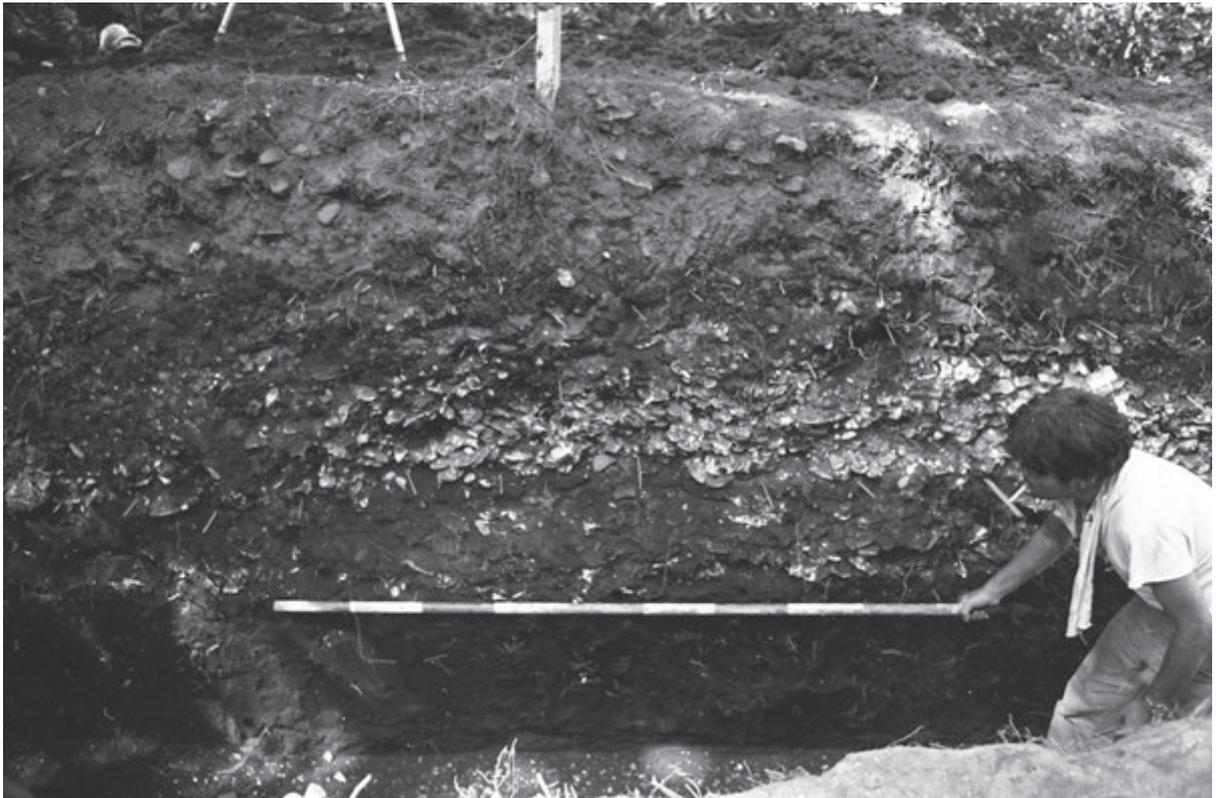


写真1 Bトレンチ貝層

4層・5層の掘り下げ。5層に夜白式と板付I式の土器。西壁近くに掘り込み検出。

Gトレンチ 5層まで終了。Bトレンチの南に1mのV区、北側斜面部にVI区を設定し、掘り下げる。

※FトレンチのI区は貝塚のマウンド部分の傾斜面であり、そのマウンド部分の掘り下げから行っている。

#### 8月19日(月)

Cトレンチ 貝層が全面に現れる。

引き続き各区1層の掘り下げ。I・II区において1層下は褐色層中に著しく固い塊状のものが混入して、ヘラ剥ぎが困難な層が現れたため、これより以下は2層とする。

Dトレンチ 全区貝層に達し、IV区は褐色層に達する。I区は貝層掘り下げ。

混土貝層上面までを第1層とする。IV区中頃は急傾斜、貝塚末端部と思われる。I区については混土貝層の掘り下げに入る。尚今後の発掘に関して、貝塚形成の方法、時期、方角による往事の地形等考察して観なければならぬ問題。

Eトレンチ 1層の掘り下げ

浅いところで30~35cm、深いところで50cmぐらい掘り下げる。II区の遺物量多し。石剣先端部、甕棺の大破片出土。

Fトレンチ 掘り下げ

I・II区でプラン検出のための調査。

Gトレンチ D区に応援

#### 8月20日(火)

Cトレンチ 貝層は2層に至り、その他は塊の層はなくなり、その下の黒色斑褐色層が現れた。

I~VI区の2層掘り下げ。I~III区の土塊入の黄褐色土層はなくなり、黒色のまだら入りのやや軟らかい褐色層となったので、これ以下を3層とする。2層は小破片で前期のみ。III区の混土貝層も前期。

Dトレンチ 全区2層の掘り下げ、I・II区がだいぶ進んだ。

各区ともに2層の発掘に入る。IV区は貝層末端部にて貝層のみ発掘に入る。土器はほとんどが前期で、I区北側壁面中央部近く、地表下36cmの地点に幅95cmにて75cmほど伸びている灰層を発見。I区混土貝層の種類としてはオキシジミ・カキ等と陸産のアズキ貝が少量見られた。II~IV区混土貝層上部にて貝は砕けたもの多く、土器の出土量少ない。

Eトレンチ 1層、50~65cm掘り下げ、土器が非常に多量に出土。

I区は55~65cm掘り下げる。土器は各時期のものが出土。一部に黒色土が出てくる。II区は60~65cmくらい掘り下げる。60cm位の深さから自然釉の陶器出土。遺物はぎっしりと詰まった感じで多量に出土。黒色土層が見えてきた。III区は50cm位の深さまで掘り下げる。

※Eトレンチは一部包含層に入っているものと考えられる。

Fトレンチ III区1層は中期の弥生単純層のようである。

プランとならず。III区の調査を行う。II区4層は中央部付近で消失、III区1層で石庖丁が出土。

平板1/100をもって各区の重要遺物の出土ポイント及び形式上重要と思われるもの高さを測定記録す。

※河口は一貫して「形式」を使用

### 8月21日(水)

Cトレンチ 貝層は2層、I～III区3層大体終わる。

I・II区の3層、IV区の混土貝層の掘り下げ。

I・II区では黄褐色層が現れる。以下を4層とする。3層出土土器は前期の遺物である。

Dトレンチ 2層を続けて掘る。IV区は掘らず。

2層掘り下げ、I～III区を中心に、I区は地表下70cm位、純貝層に近く、北側壁面に幅90cmほどの灰層がある。II区も純貝層に近く、III区においては未だ相当砕けた貝が混じった混土貝層である。土器の出土は少ないが、完形に近い土器が出土。III区混土貝層中の南側壁面に攪乱層の落ち込みがあり、中期の破片がみられる。

Eトレンチ 黒色土層下が褐色層となる。

I～III区で黒色土層(2層)を掘り下げる。II区の北西断面から中央部にかけて落ち込みがある。75～80cm下がる。III区に土坑検出

Fトレンチ III区の中期を主とする層も、土師・須恵が混ざる。平板測量、遺物取り上げ。

II区・III区1層の掘り下げ、土器が多量に出土。

※I区マウンドからの層位とII区表土との整合が取れない。現状の1層をそのままとして遺物取り上げ。

### 8月22日(木)

Cトレンチ 貝層IV区は3層まで、V区は2層、他は3層

I・II区は3層掘り下げ、III・IV区は混土貝層(2層)の掘り下げ。III・IV区では広い範囲で灰の集積が現れた。V区もこのレベルまで掘り下げ。

Dトレンチ 貝層は3層に至る。IV区は攪乱層

写真・遺物上げを行う。II～IV区を主体に発掘を行う。IV区は黄褐色土の攪乱層で遺物の出土が多い。中期のものが多い。骨角器、貝輪出土。

Eトレンチ 攪乱層が続く。III区にピット検出。

黒色土(2層)を掘り下げ。II区の北側断面から中央部にかけて落ち込みがある。

Fトレンチ 中期層の下に前期の土器あり

### 8月23日(金)

Cトレンチ 今年の土坑の続き。III～VI区はそれぞれ貝層を掘り下げ。

I・II区は4層を掘り下げて、地山まで達した

ため、清掃後に今年のAトレンチの土坑も清掃。

III～V区では3層、VI区では4層の掘り下げ。

Dトレンチ 各区ともに貝層を掘り進め、I～III区は2層を終了し、3層が現れてきた。

午前中2層を発掘、純貝層に近い。午後から3層純貝層の掘り下げ。出土遺物が完全に近いものが多く前期のものである。III区は相変わらず混土貝層。貝層にてまとまった動物骨が出土。

※こちら辺では、断面図の層と記述の層位が食い違ってくる。

Eトレンチ 落ち込みを検出

I区は黄褐色層にいたる。II区は南西の壁面に新しい落ち込み検出。III区は落ち込みから土器破片がまとまって出土。

Fトレンチ 大体終了

III区1層掘り下げ。土器が大量に出土。大部分が中期の土器。I区とII区が接するところに前期の甕・壺形土器が認められた。

EトレンチとFトレンチの考察により、住居跡と判断できるので、拡張し掘り下げることとする。

### 8月24日(土)

Cトレンチ 土坑掘り下げ

写真撮影・平板測量・遺物取り上げ。IV区とV区の間で円形で長軸4～5cm、短軸2～4cmの礫のかたまりがみられた。IV区とVI区は黄褐色の混土貝層(4層)を排除し、下の黒色の混土貝層の抽出につとめた。前期土器出土。

Dトレンチ 貝層のうち第3層を発掘。多くの完全土器を発掘することができた。

I・II区は実測・写真。ほとんど純貝層となる。III区東側に純貝層が合ったが、ほかはさらさらした混土貝層でこれを2層として、下の黒色混土貝層を3層とした。これは貝層の下にあるものと推定、結局I・II区については貝層を3層とし、III・IV区については黒色混土貝層を3層とした。純貝層は板付I式土器の系統。

※貝層下の黒色混土貝層は、最終の土層断面図ではIV層である。途中の個別の遺物取上の層位や注記はそのまま考えられ、3層は東西で異なる層位であることから混同しやすい。

Eトレンチ 実測

Eトレンチに南西断面図作成及び平面図作成。

I区の南西断面の黒色土の落ち込みはすりばち状をなす。III区落ち込みの土器を取り上げる。

Fトレンチ 実測

II・III区2層に相当するI区6層に至りトレンチ全体で同一層となる。午後から遺構検出、II区中央を50cm掘り下げたところ地山の黄褐色土層が認められた。

※同一層としたが出土遺物の時代とは整合せず。

貝層がマウンドを形成していたか、平坦面が削平され結果として貝塚がマウンドとなったものかの検討が不十分である。

Hトレンチ Eトレンチの南側に4×4m掘げて、Hトレンチとする。

#### 8月25日(日)

Cトレンチ III～V区-6層, IV区-5層など層の差異が生じている。

午前中灰を含む混土貝層を剥ぎ取る。5層として剥ぐ。VII区5層, III・IV区4層なれど層の関係としては同じ。土器型式は前期のものが多く、中に数点の夜臼式土器を含むようである。小円礫群を1/10で実測。III・IV・V区の北側は傾斜激しく、遺物が混在し、鉄製品の出土は意義少なし。

Dトレンチ 純貝層を3層となし、その下の混土貝層を4層とした。

I・II区は第3層貝層下の褐色土層にて相当の厚さを持っており、これを4層とした。III・IV区については混土貝層下に褐色混土貝層で4層とした。なお昨日出土した分については3層としているが、この4層下が黒褐色土となっており、これを5層とする。この5層はI・II区の貝層下の本日発掘中の4層の下にあると予定され、本日一応層位が判明した。

※貝層や混土貝層が一様でなく、一般に貝塚にみられるブロック上の堆積など複雑な層が形成されていたことがうかがわれる。

Fトレンチ 実測図とピット掘り。

ピット平面図, 土層断面図作成。

Hトレンチ Eトレンチの面まで到達、遺構面が明確でない。

午前中で攪乱層の作業終了。Eトレンチとつなげて同一面としていく調査。

#### 8月26日(月)

Cトレンチ 発掘はほとんど終わり。

ごく少量の微貝粉黒土層(6層)を剥ぐ遺物出土ほとんど無く、下層までスコップに持ち変えて基盤層まで30～45cm掘る。土坑のプランが見える。

Dトレンチ 貝層ほとんど完了する。

I～III区において4層発掘。貝層下の4層を掘り上げる。IV区については、攪乱箇所は変わらず最下部の黄土層に到達。黒色土層を5層として発掘を行う。4層最下層あたりでは、夜臼系土器が非常に多いが、この中に中期とされてきた上げ底の底部が多く発見されている。前期にも上げ底がみられることも考えなければならない。

※特にIV区は上位からの攪乱が断面図から確認できる。期間が限られ、水平に掘り下げていっているために時期が混同されている。

Eトレンチ 実測

II区のHトレンチに接続する円形の落ち込みは直径1m30cm。III区の落ち込みは住居跡であるかどうか明らかではなかったが、作業の終わり頃に西北隅に径20～30cmくらいの範囲で灰らしい痕跡と炭化物を発見。

Fトレンチ 実測

Hトレンチ 遺構把握できず。

住居跡の存在を確かめようと作業を進める。柱穴を検出したが、落ち込みは把握できず。

#### 8月27日(火)

Cトレンチ 床面排土, 土坑検出

Aトレンチの1号土坑の全面検出のためにA0区を設定して、土坑検出面まで掘り下げる。床面の清掃、遺構検出作業。土坑(1号)の続きを出して、掘り下げて完掘する。平面図1/10で実測。II～III区壁面に同様の規模と思われる土坑を検出、これを2号とする。2号については床面まで掘り下げ。

Dトレンチ 貝層下, 黒色層の発掘調査

遺物の写真撮影, 遺物取り上げ。I～III区5層の発掘。相変わらず夜臼系土器が多い。I区5層から完全な無頸壺形土器が出土。

Eトレンチ 西端III区のところ落ち込みあり。

III区の落ち込みを追求。南側隅に壁の中に入り込んで住居跡の壁とみられるものが発見。その両側に溝のような落ち込みがある。黒色層の下には基盤の黄褐色土が検出され、住居跡と考えられる。

Gトレンチ 埋め戻し

Hトレンチ 基盤層を削る。柱穴らしきピットを検出。

ピット掘り下げ。遺構把握できず

※基盤層なのかと疑問が生じる。

#### 8月28日(水)

Dトレンチ 記録無し

6層掘り下げ、断面図は分担して書く。夜8時半鹿兒島に向かう。

Eトレンチ 記録無し

住居跡の追究、III区断面図および住居跡平面図の作成。北西隅の灰の部分は炉跡で、床面は非常に固い。

Hトレンチ 記録なし

※最終的には、HトレンチにはEトレンチからの土坑が掘削されており、図面が残っているが、そこに至る日誌は欠けていた。最終日近くで、Eトレンチの住居跡の掘り下げと図面作成、4号土坑の掘り下げと平面図作成など、調査終了日を迎えて大忙しであったことが推定される。

### 第3節 出土品の整理と研究

#### 発掘調査内容の公表

本貝塚を標式遺跡とする高橋式土器は、南九州の弥生時代前期を代表する土器型式として、全国的にも古くから知られてきた存在となっている。「高橋貝塚」や「高橋式土器」「貝交易」をキーワードとする主な文献をまとめたのが表2である。

昭和37(1962)年に発掘調査されて、早々に、弥生文化が南九州に早い時期に流入したとして、出土土器が新形式土器として分類される(文献1)。高橋1式から4式が設定され、1式として、壺形土器は研磨、底部円盤貼り付け、口縁部外反、肩部に段を有し、甕形土器は口縁部が外反するもので、胴部に張りなく、口縁下に突帯を巡らすものや胴部がやや張り出すものがあるが、口縁形状で統一している。「本遺跡では、縄文式系統の土器と弥生式土器とが第三層以下においては、明瞭に伴出関係を示すことが確認された。」として、縄文文化と弥生文化の併存を述べている。

そして文献2では金峰町郷土史の弥生時代を述べる中で、高橋貝塚が挙げられ、早速に発掘の経緯・成果が紹介されている。二次にわたる調査の概要を述べ、縄文系統の土器農耕文化を取り入れた弥生初期の文化と位置づけ、斎藤山遺跡に続く2番目の鉄器出土など、河口の所見をそのまま引用する。遺物の図は全てがスケッチである。文献3では、「南九州地方第I様式土器」として高橋貝塚出土土器を呈示(高橋1式と2式には分けていない。)高橋貝塚の1次調査出土土器をもって作成した可能性がある。文献4では、地形図やトレンチ配置図が示され、各トレンチの状況と土坑(文中はピット)や住居跡などについて記される。遺物はA～Dトレンチ出土のものが掲載され、特に図11～14図はDトレンチ出土の土器である。

「貝層及び貝層下の黒土層は層位が確実であって、弥生式前期と縄文晩期の遺物を出土しており、完全土器などはこの層から発見されている。」とし、再度「第3層以下においては縄文式系統土器と弥生式土器系統土器の伴出関係を明瞭に示している。」と述べる。文献4では、高橋1式を板付I式土器、高橋2式を板付II式として明確化した。が、甕形土器については口縁形状での型式設定のままであった。

文献5・文献6では、土器について板付遺跡のものからべて、質的になんら異なるものではないとされ、夜臼式土器と板付式土器の絡み合った姿が成立期の弥生文化の姿とするとした。以後この考え方で、土器の編年的位置づけが留置される。

文献7は昭和37年の1次の発掘調査速報で、文献

8は38年の2次の発掘調査速報である。文献9は文献4の報告の紹介で、いずれも図・写真はない。

初期稲作文化の流入地と、南海産貝交易の中継地としての位置づけで、文献12・14・20・30・35で紹介される。文献42・43でも同じ脈絡で語られ、文献38は弥生時代石器の全国集いで取り上げられた。

#### 土器編年について

文献10で南九州弥生式土器の再編年として、入来式土器を中期へ位置づけることが論旨であるが、突帯文系の甕形土器について縄文系土器とし、高橋一式(一式は原文)の甕形土器に関連するとした。突帯文土器の甕形土器は高橋一式ではないと言っていることになる。板付I式土器文化が夜臼式土器文化の地域へ伝播し吸収されていく過程の中での現象としておこったとした。文化論と土器編年との混同が感じられる。入来式土器の甕形土器の口縁部の系譜を考えて、縄文系土器の甕形土器を母体として発生したとした。

縄文土器の型式論から出発した河口は、様式論では成立する型式の異なる土器の併存を、文化論・地域論として解決しようとしたものと考えられる。そのため土器編年としては実態には即さないものであった。

これに対して、夜臼式・高橋1式・高橋2式の共伴・あるいは前後関係は実証されていないとの指摘が文献13でなされた。文献15では、I様式は高橋下層出土のもの(高橋1式と同様か)とされ、II様式も高橋貝塚出土土器を使いながら、ともに甕形土器が如意状口縁の甕形土器とされている。伴って出土した縄文系土器は編年上では入っていない。文献15を受けて文献17では「高橋I式とII式を研究史的にみれば、その提唱者河口貞徳自身(とくに、如意状口縁を有する板付系甕形土器をめぐって)の高橋I式とII式の名称の用い方とその編年的位置づけのしかたに不可解な部分があり、今後その名称を用いて様式の時間的位置づけをする場合、注意が必要」<sup>註1</sup>とされた。文献28は、これらの問題点を挙げて、鹿児島県の前期の遺跡での突帯文の出土例をあげて、縄文から続く刻目突帯文土器から前期末の無刻突帯への系譜が追えるとしながら、それらを含めて前期の土器としての判断には至っていない。同時に発表された文献27がこれらを解決するものであった。河口の設定した高橋1式と2式について、甕形土器について再評価した。河口は1式を如意状口縁をもつ甕、2式を突帯文甕として認識したが、のちに「縄文式系統土器」と伴出するとし、折衷土器を提起した。これらは、文献27で藤尾慎一郎のいう折衷土器と視点は同じであり、藤尾の全九州を含めた詳細な分析により、遠賀川式土器が出現する時期で薩摩西

表2 高橋貝塚関連の文献一覧

番号	刊行年	文献名	著者	備考
1	昭和38(1963)	「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18 九州考古学会	河口貞徳	
2	昭和38(1963)	「第三章 弥生文化時代の生活と遺蹟」『金峰郷土史』第一集 金峰町教委	桜井魯象 辻 正徳	
3	昭和39(1964)	「南九州地方」『弥生式土器集成 本編1』日本考古学協会弥生式土器文化総合特別委員会	河口貞徳	
4	昭和40(1965)	「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻第2号 東京考古学会	河口貞徳	
5	昭和41(1966)	「弥生文化の成立」『日本の考古学 III－弥生時代』河出書房	岡本 勇	
6	昭和41(1966)	「九州」『日本の考古学 III－弥生時代』河出書房	森貞次郎	
7	昭和42(1967)	「鹿児島県高橋貝塚」『日本考古学年報(昭和37年度)』15 日本考古学協会	河口貞徳	
8	昭和43(1968)	「鹿児島県高橋貝塚」『日本考古学年報(昭和38年度)』16 日本考古学協会	河口貞徳	
9	昭和45(1970)	「鹿児島県高橋貝塚」『日本考古学年報(昭和40年度)』18 日本考古学協会	河口貞徳	
10	昭和46(1971)	「南九州弥生式土器の再編年」『鹿児島考古』第5号 鹿児島県考古学会	河口貞徳 出口 浩	
11	昭和52(1977)	「南海産貝輪に関する考古学的考察と地名表」『立岩遺跡』河出書房新社	橋口達也	
12	昭和54(1979)	「高橋貝塚」『世界考古学事典(上)』平凡社	河口貞徳	
13	昭和54(1979)	「鹿児島県における弥生時代研究の現状」『九州考古学』第54号 九州考古学会	池畑耕一	
14	昭和56(1981)	「高橋貝塚」『鹿児島大百科事典』南日本新聞社	河口貞徳	
15	昭和56(1981)	「新南九州弥生土器集成」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
16	昭和60(1985)	「日本における稲作の開始とはじまりと発展」『石崎曲り田遺跡 III』福岡県教育委員会	橋口達也	
17	昭和61(1986)	「弥生土器について」『鹿児島大学郡元団地内遺跡(J・7地点)』鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室	中園 聡	
18	昭和61(1986)	「高橋貝塚」『鹿児島考古』第20号 鹿児島県考古学会	森貞次郎	
19	昭和61(1986)	「高橋貝塚の夏」『鹿児島考古』第20号 鹿児島県考古学会	出口 浩	
20	昭和63(1988)	「薩摩半島西岸域の遺跡 高橋貝塚」『日本の古代遺跡38 鹿児島』	河口貞徳	
21	昭和63(1988)	「貝輪源流の文様論」『日本民族・文化の生成－永井昌文教授退官記念論文集』	橋口達也	作業工程の一つとして
22	平成元(1989)	「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学 I 横山浩一先生退官記念論文集』	木下尚子	
23	平成2(1990)	「第一章 隼人の考古学と古代史 一南九州の考古学」『隼人世界の島々』海と列島文化第5巻 小学館	上村俊雄	
24	平成2(1990)	「第一章 隼人の考古学と古代史 一貝の道」『隼人世界の島々』海と列島文化第5巻 小学館	池畑耕一	
25	平成2(1990)	「II 縄文から弥生へ」『弥生時代の始まり』UP考古学選書11 東京大学出版会	春成秀爾	
26	平成5(1993)	「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 国立歴史民俗博物館	藤尾慎一郎	
27	平成5(1993)	「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会	藤尾慎一郎	
28	平成5(1993)	「鹿児島県弥生時代前期土器研究の現状」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会	東 和幸	
29	平成7(1995)	「高橋貝塚」『鹿児島県風土記』旺文社	河口貞徳	
30	平成8(1996)	「高橋式土器」『日本土器事典』雄山閣	本田道輝	
31	平成8(1996)	『南島貝文化の研究』法政大学出版局	木下尚子	
32	平成8(1996)	「鹿児島県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成－国立歴史民俗博物館資料調査報告書』7	宮田栄二	

番号	刊行年	文献名	著者	備考
33	平成9(1997)	「狩、漁、製塩」『弥生文化の研究』第2巻生業 雄山閣出版	金子浩昌 和田晴吾	
34	平成9(1997)	「九州南部地域の弥生土器編年」『人類史研究』9 人類史研究会	中園 聡	
35	平成9(1997)	『弥生の世界』歴史発掘⑥ 講談社	酒井龍一	
36	平成11(1999)	「地域の様相—南限の甕棺墓の実態にふれつつ—」『考古学ジャーナル』No451 ニューサイエンス社	中園 聡	
37	平成12(2000)	「縄文から弥生へ軟着陸の高橋貝塚」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
38	平成13(2001)	『弥生時代成立期の西日本・韓国の土器』国立歴史民俗博物館	藤尾慎一郎	
39	平成14(2002)	『考古資料大観 弥生・古墳時代』第9巻 小学館	禰宜田佳男	
40	平成15(2003)	『弥生変革期の考古学』同成社	藤尾慎一郎	
41	平成16(2004)	『九州弥生文化の特質』九州大学出版社	中園 聡	
42	平成17(2005)	「高橋貝塚」『先史・古代の鹿児島(資料編)』鹿児島県教育委員会	河口貞徳	
43	平成19(2007)	「第3章 弥生時代」『先史・古代の鹿児島(通史編)』鹿児島県教育委員会	堂込秀人 中園 聡	
44	平成23(2011)	『遺跡から出土する動物たち』西中川駿先生古希記念論集刊行会 南九州縄文研究会	西中川駿	
45	平成27(2015)	「南九州で発見された甕棺墓・甕棺片」『Archaeology from the South II』新田先生退職記念事業会	本田道輝	
46	平成31(2019)	「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早前期土器の編年」『鹿児島考古』第49号	川口雅之	
47	令和3(2021)	「鹿児島県における弥生時代研究の課題と展望」『鹿児島考古』第50号 鹿児島県考古学会	石田智子	
48	令和3(2021)	「鹿児島県の遺跡出土動物遺体」『鹿児島考古』第50号 鹿児島県考古学会	西中川駿・宮崎大和・松元光春	
49	令和4(2022)	「第6章 琉球列島の先史文化」『筑紫と南島』シリーズ 地域の古代日本(株)KADOKAWA	木下尚子	
50	令和4(2022)	「弥生貝交易の中継地—鹿児島県高橋貝塚のゴホウラ分析から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集 国立歴史民俗博物館	木下尚子	
51	令和4(2022)	「鹿児島県南さつま市高橋貝塚の年代的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集 国立歴史民俗博物館	木下尚子 坂本稔・瀧上舞	

部に前期水稲栽培が確実に伝播し、遠賀川式土器は九州の西海岸沿いに南下して突帯文土器と接触して折衷甕を成立させる。高橋貝塚は、玄界灘沿岸地域から西回りに外洋に面した地域の影響を受けるとし、水稲栽培が持ち込まれたとする。1式は遠賀川系・折衷系・突帯文系から構成、2式は突帯文系に遠賀川甕も含まれるとする。次の中期には薩摩は城ノ越の分布圏となるとする。なお、甕形土器については文献38で示される。

前期の甕形土器が遠賀川系・折衷系・突帯文系で構成されると指摘で、それぞれが型式変化する。

文献34では中園聡は、河口編年の再検討として、中期の土器について属性分析による編年を行い、黒髪式土器や中溝式土器といった他地域の土器との関係を明らかにした。前期の高橋Ⅰ式や高橋Ⅱ式については、山ノ口式までの系統関係にはほぼ同意できるとしている。

文献41では、河口の前期編年を使用しながら、さらに検討を必要とする。南海産貝交易の中継地とし

て、西北九州沿岸部との一定の交渉を想定する。この地域の甕棺資料に注意を促した。

これらの結果を踏まえて、文献46では薩摩半島西岸の弥生時代の土器を、刻目突帯文甕と板付系甕を形式として型式分類して、同じように浅鉢・壺を夜白系壺と板付系壺の型式分類も併せて、その型式変化と組合せから編年作業を行った。高橋貝塚出土土器(高橋Ⅰ式・Ⅱ式)を田布施Ⅲ式とした。板付Ⅱa併行の弥生時代前期前半の編年を行った。

このように土器編年では、それぞれの形式の型式変化と、それらの組合せによる様式設定に至ったが、なお前期の資料が少ない中で、高橋貝塚出土土器の実態が明らかになることが求められている。

#### 甕棺について

甕棺編年Ⅲ期(須玖・立岩式期)に、薩摩に大形甕棺が出現することは、熊本平野での隆盛と無関係ではないと述べられてきたが(藤尾1988)、文献36では中園が南限の甕棺墓の実態について述べる中で、

高橋貝塚出土資料の中に、中期初頭の金海式甕棺もしくはそれに先行する時期の甕棺口縁部とみられる破片があるとしている。下小路甕棺については、筑後平野から佐賀平野にかけての地域から持ち込まれたとし、木下尚子も文献22では有明海北岸のクリーク地帯から船積みされたと推測した。専用甕棺の成立から早い段階で南部九州にも甕棺墓が出現している可能性を述べ、被葬者は在地有力者とする。それは南西諸島と北部九州を結ぶ中継基地の可能性を指摘する。

この下小路遺跡の甕棺の形状からの産地については、橋口達也は否定している(橋口2005)。

高橋貝塚採集や発掘品の中に甕棺片が含まれることに着目していた本田道輝は、文献45で南九州の甕棺墓・甕棺片を集成した。薩摩半島の海岸部からの出土は多いが、墳墓の棺として用いられる事例は田布施平野・伊作平野に限られ、その他の集落遺跡の包含層や住居跡から少量出土することから別の用途で使用された可能性を指摘し、宮崎貴夫の甕棺コンテナ説(宮崎2005)への留意を促す。高橋貝塚にしても、北側を墓域として想定した場合、生活域での出土と考えられる。

木下が中期前半に高橋貝塚の役割が終わったとするが、佐賀平野や有明海沿岸部には、より近い有明海ルートがあったろう。中期に航路に変更があったと推定できないか。

### 貝輪等の交易について

橋口は、高橋貝塚の出土品について、貝輪製作からアプローチし、文献11で高橋貝塚出土の貝輪を、ゴホウラ製貝輪は広田型10・金隈型3、イモガイ製縦型1、オオツタノハ7と報告し、文献21では高橋貝塚でゴホウラの貝輪加工が行われたとし、「敲打の痕跡が認められるものが半製品である鹿児島県高橋貝塚出土例のみであり、(中略)打割もしくは敲く打を行うと破損の恐れがあり、後には砥石で研磨し整形する方法が最も安全な手段として行われた。」と述べられた。

文献23では、高橋貝塚出土貝製品が、奄美系土器(仲原式土器)とともに出土していることを上げて、南海産貝の交流を背景にしているとす。文献24も高橋貝塚が貝交易の中継地として位置づけた。

貝輪とそれに伴う貝交易については、文献22で木下は、高橋貝塚は南海産貝の陸揚げ、粗加工の場とし、高橋貝塚が前期後半から中期中頃まで機能したとする。そして主に西九州の外海ルートから福岡平野へ運ばれるとした。中期後半になると下小路甕棺墓をプロットして、有明海を経由する内海ルートも想定した。文献35も、貝輪の製作過程として高橋貝塚の出土品を使う。木下はさらに、文献49で高橋貝

塚は弥生時代の貝交易の中継地として重要として、文献50で出土したゴホウラ貝等の187点の詳細な観察を行い、文献51に採集した資料の年代測定結果をまとめている。

文献50では、文献51の結果も踏まえて、高橋貝塚は弥生前期中葉に始まり、前期後葉(前5世紀前葉)を中心に、中期前葉まで継続した集落遺跡とし、高橋貝塚人は当初から、沖縄貝塚人が作ったゴホウラの背面貝輪用粗加工品をもとに、西北九州人のために背面貝輪を作り、さらにゴホウラ原貝から北部九州人のために腹面貝輪粗加工品を作り、これらを北の消費地に輸出していた。腹面貝輪製作拠点は沖縄に移り、高橋貝塚を中継しなくなるなどして衰退していった。貝交易初期の経済的役割を果たしたとした。

文献50は高橋貝塚の出土貝6点・獣骨4点の放射性炭素年代測定を行い、V層で前8世紀後半から前7世紀後半、IV層では前7世紀前半から前6世紀前半の年代が測られ、これが高橋I式の年代とされ、II層では前7世紀前半から前6世紀後半の年代、これが高橋II式の年代とされた。土器編年では、高橋I式は板付I式新から板付IIa式、高橋II式は板付IIa式から板付IIb式の年代にあるとしたと評価した。

貝輪関係資料の詳細な情報はまとめられたが、出土遺物との関係は表層・I層の遺物の詳細が報告されていないため検討されていない面がある。甕棺片、赤色土器、石器石材等の遺物の検討が必要である。

ゴホウラ片がI・II層の出土量が増し、中期前半まで土器が多く出土し、甕棺片の存在など、粗加工品を経ずに原貝が運ばれた可能性はないかなども検討したい。

### 遺跡の評価

遺跡の評価としては、貝交易の位置づけについては述べたところであるが、文献16では稲作の普及は夜白式の下原遺跡から、高橋貝塚への連続性で、九州西岸を南下して熊本、鹿児島(薩摩半島)は北部九州からそうたいして遅れることなく稲作が開始された状況が見て取れるとされた。同様の評価で文献25では、突帯文の伝統をのこす弥生前期の土器として高橋貝塚の土器を例示した。

文献29で河口の認識は、縄文時代晩期には稲作文化が伝播していたこと、南海産貝輪の移入地であり、本土との中継地点、骨角器は縄文の伝統にあること、高橋貝塚で採取された動物は縄文時代貝塚と種類・量とともに同じであることを上げて、水田耕作を行うと同時に狩猟漁労活動を行ったとした。文献33ではイノシシ・シカとともに、イヌ、イノシシなどの犬歯に穿孔した垂飾品も出土し、縄文時代からの伝統的な強さをよく表しているとする。文献44・

48は鹿児島県下の遺跡の一つとして出土動物種を述べる。弥生時代の貝塚が少なく、縄文時代との比較は難しいが、獣骨等についても検討したい。

藤尾は、狩猟採集民が農耕化する過程を、煮炊き用土器である甕形土器の保有形態と遺跡の水田跡の発展形態から明らかにしようとしたが（藤尾1991, 文献26）、さらに詳細に甕組成パターンから集団間の相互交流モデルを復元し、福岡平野における農耕民化の過程を検討した（藤尾1999）。これは高橋貝塚に応用できるし、甕形土器の組成パターンを把握する必要がある。文献40では、弥生I期の甕組成パターンで、高橋貝塚は突帯文系が9割以上を占めるA型とされ、佐賀県丸山遺跡・熊本県斎藤山遺跡などと同様とされ、弥生稲作が始まり農耕社会が形成されても、煮炊き用甕の地域性はそのまま引き継がれるとした。早期や前期の資料として高橋貝塚の資料が使われる。

文献32では全国の農耕開始期の石器組成での鹿児島県を述べているが、土掘具や穂摘具など農耕関係の石器を定義づけたもので、それらの組成から農耕開始期を探る取組みであった。高橋貝塚は大陸系石器が石器組成の完全な一員となるとして、水田稲作の普及と生産を行った遺跡とした。組成は公表された石器のみで行われたものである。石器組成をとらえ直す必要がある。

河口は文献37において、最も重要な層序を正確に表現することに努めるとして、層位別の出土遺物を呈示し、新資料も発表した。夜白式の縄文土器群と弥生前期の弥生土器群とが一体となって、単一文化の様相を呈し、縄文文化と弥生文化とが単一の両側面の観を呈している。とした。

層位別に弥生土器と縄文土器を別々に掲載している。両土器文化の同時併存を意図したものと考えられる。このころは、型式学的な系統論を批判している時期である<sup>註2</sup>。トレンチ間の層位の整合性は取られておらず、以前発表した土器（選択した資料）によるものであることに注意を要する。出土土器については、層位ごとの把握が改めて必要となる。

遺跡の評価は、水田稲作の流入と貝交易の中継点として位置づけられてきた。貝塚形成は、西北九州系農耕民の入植の初期段階での食料獲得状況を表す可能性がある。安定的な稲作を中心とする生業体系成立前の状況で、貝塚後の遺跡の評価も必要であろう。

最新の動向（文献47）でも、南海産貝交易のみに触れられている。高橋貝塚の全貌が見えない中で詳細がわからず、河口による論説に評価できない状況が続いていたということになる。遠賀川式の拡散という旧パラダイムの中で、西北九州からの稲作の導入による弥生文化化が、縄文文化の中で進んだとい

う理解のままであった。現在、同時代の資料が増加し、石材の分析や朝鮮系無文土器などの研究が進み、新たな視点での研究が応用できる環境になった。それらを踏まえた遺跡の評価を試みたい。

#### 〈註〉

註1. 河口の高橋I式・II式とのギリシャ数字の使用は文献37から、文献15の「南九州I様式、II様式」の影響か

註2. 型式論・系統論の批判は下記文献である。  
河口貞徳1998「縄文土器型式の成立」『鹿児島考古』第33号 鹿児島県考古学会  
河口貞徳2001「巻頭言」『鹿児島考古』第35号 鹿児島県考古学会  
河口貞徳2003「土器はヒトから」『鹿児島考古』第37号 鹿児島県考古学会

「現在の編年で著しい誤りは、複数の型式の文化が、重複して存在している事実を認めていないことである。」（2003）と述べるが、高橋貝塚も論拠であったことは想像できる。アカホヤ論争での主張と矛盾があるようにも感じられる。

#### 〈参考文献〉

橋口達也2005『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣  
藤尾慎一郎1991「水稻農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』文教出版187-270  
藤尾慎一郎1999「福岡平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集  
宮崎貴夫2005「捨てられた甕棺—壱岐・原の辻遺跡の場合—」『西海考古』第6号 西海考古同人 103-119

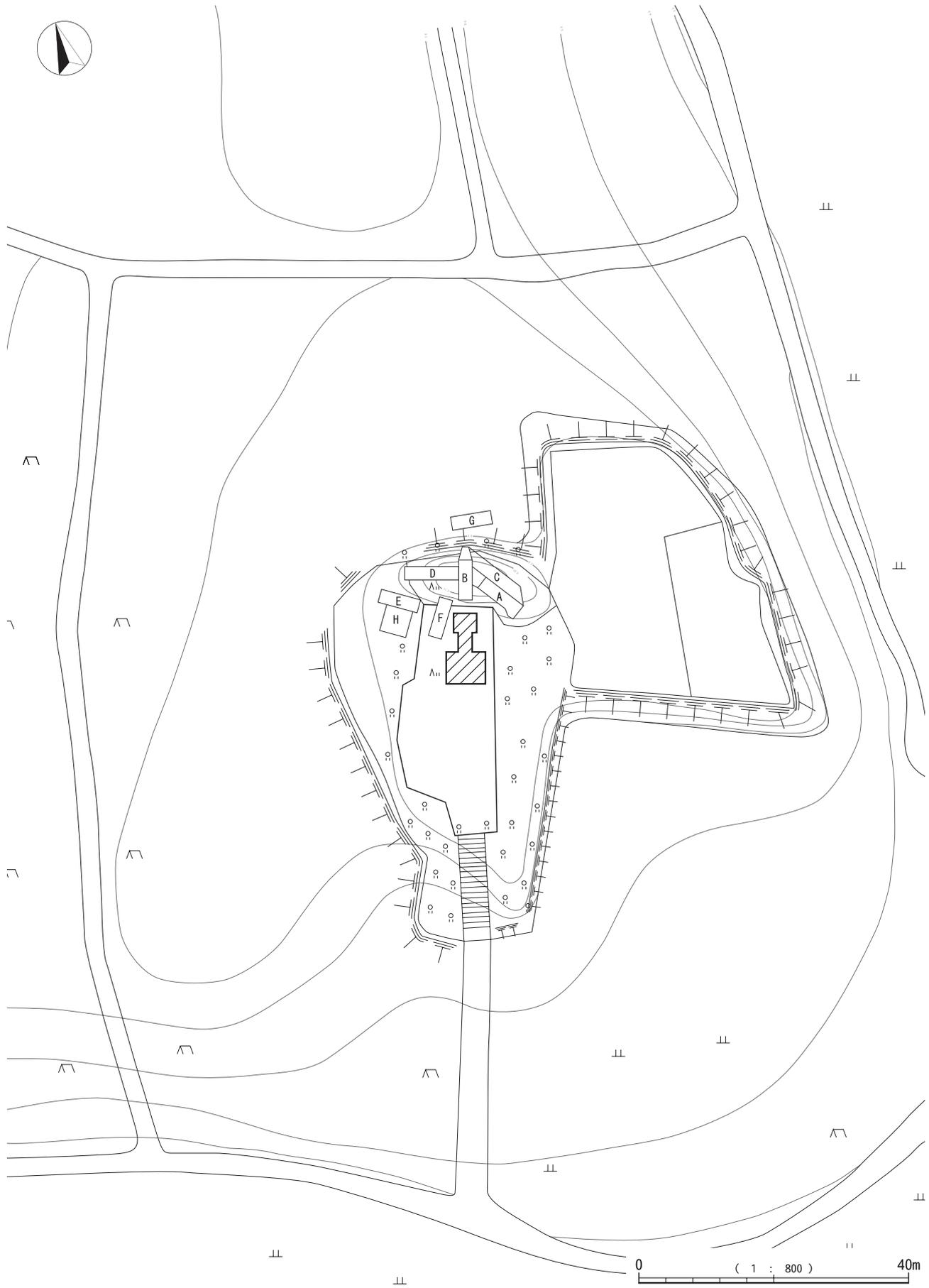


図2 遺跡周辺の地形図

## 第3章 発掘調査の概要と成果

### 第1節 調査の概要

高橋貝塚の発掘調査は、昭和37（1962）年8月に金峰町教育委員会が調査委員会をつくり、河口貞徳らにより発掘調査され、調査期間は8月2日（木）～8月12日（日）とされるが、7月31日（火）には河口らが現地入りし、8月1日（水）から調査開始の予定であったが、豪雨のため2日からとなった。調査員として河口貞徳、盛園尚孝、諏訪昭千代、出口浩、池水寛治、上村俊雄、辻正徳らと、高橋集落の方を人夫として、玉龍高校生、田布施中生徒を加えて発掘調査を行った。

昭和38（1963）年8月は県教育委員会・金峰町教育委員会の援助を得て河口貞徳らが調査した。調査期間は8月15日（木）～8月27日（火）で、調査員として河口貞徳、盛園尚孝、諏訪昭千代、出口浩、池水寛治、上村俊雄、河野治雄、辻正徳らと、玉龍高校生、吹上高校生、出水高校生らが参加した。その成果は1次調査が1963年に早速『九州考古学』に発表される（前章・文献1）。出土土器については、1964年に全国の弥生式土器を集成し全国編年を示した『弥生式土器集成 本編1』に南九州地域の第1様式として前期の土器として報告される（文献3）。

1次調査と2次調査と併せて、とくに2次調査の内容を中心に1965年には『考古学集刊』で発表され、高橋1式土器～高橋4式土器が設定され、高橋1式が板付I式に高橋2式は板付II式に比定し、高橋3式は中期、高橋4式は『弥生式土器集成 本編1』の南九州III様式に該当することになる（文献4）。南九州地域の前期からの稲作の開始と鉄器の使用が注目された。

図3が高橋貝塚に設定されたトレンチの配置図である。1次から2次にわたる調査区をまとめたものである。また各調査については、報告・公表した資料を示す。1次調査と2次調査を併せて、調査総面積は約120㎡に及ぶ。前章と同じく、トレンチの区をローマ数字で、土層は算用数字で統一する。

#### 1 第1次調査の概要

昭和37（1962）年8月2日（木）～8月12日（日）神社裏の貝塚はマウンド状となっており、その最高所から東南側にAトレンチを2×7mで設定し、最高所部分にマウンドを南北に縦断する位置にBトレンチを2×6mで設定した。Aトレンチは東側2×3mをI区とし、西側に2×2mでII区、III区とした。Bトレンチは南から2×2mでI区～III区とした。Aトレンチの西側III区には貝層があり、貝層の東側の広がり確認された。Aトレンチでは、貝塚の中央部に近いIII区に貝層が検出され、I・II区

からは貝層は検出されていない。そのためI・II区の掘削が先行して行われた。その後III区の貝層の調査を行い、最終日に前日の雨による流入土の除去作業を行っていたところに、黄褐色土を検出面として長方形のプランを把握した。そのため調査は1日延長した。この土坑についての完掘は次年度の調査時となる。Bトレンチは表土層の下に50cm前後の純貝層があり、表土層は黒色土層とあり、その下に黄褐色土層を1層として掘り下げ、2日ほどで貝層に達している。II・III区にかけて弥生中期の大形の破片が多く出土、I区では中近世の遺物が見られたが、その後弥生中期の土器が多くなる。I区に一部攪乱が入っていた。このように1層は土層図ではいっしょになっているが、本来は、黒色土の表土の下に黄褐色土層が、攪乱があっても遺物包含層であった可能性が高い。混土貝層の上には硬化面が見られ、混土貝層自体も固かったとする。4層からは夜白式土器が出土してくる。

Bトレンチの貝層下は本来の堆積と考えられて細かく分層している。貝層下は層位が7層と細分されてはいるが、後にDトレンチの発掘調査を経て、さらに河口の再検討で5層にまとめられている（文献37）が、層位の比較については次節で述べる。最終日に土層断面図を仕上げている。

#### 〈文献1の公表資料〉

第1図 壺1、無頸壺1、甕3、深鉢（小型甕）2、鉢2

第2図・第3図 壺7、甕・深鉢6、高坏2、鉢断面7

「本遺跡では、縄文式系統の土器と弥生式土器とが第三層以下においては、明瞭に伴出関係を示すことが確認された。」

第4図～第8図 土器出土状況写真

第9図 石鎌4、石槍1、尖頭器3

第10図 打製石斧4（要確認）、打製刃器1、片刃石斧1

第11図 片刃石斧5（方柱状片刃石斧、小型方柱状片刃石斧1）、石包丁2、石鎌1

第12図 紡錘車2

第13図 パイプ形土製品1

第14図 管玉2、骨角器垂飾7、利器8

第15図 貝輪3（ゴホウラ未製品1、オオツタノハ2）、鹿角1、牙3

第16図 靱痕土器1

#### 2 第2次調査の概要

昭和38（1963）年8月15日（木）～8月27日（火）Aトレンチの北側にCトレンチを2×10m足らずで

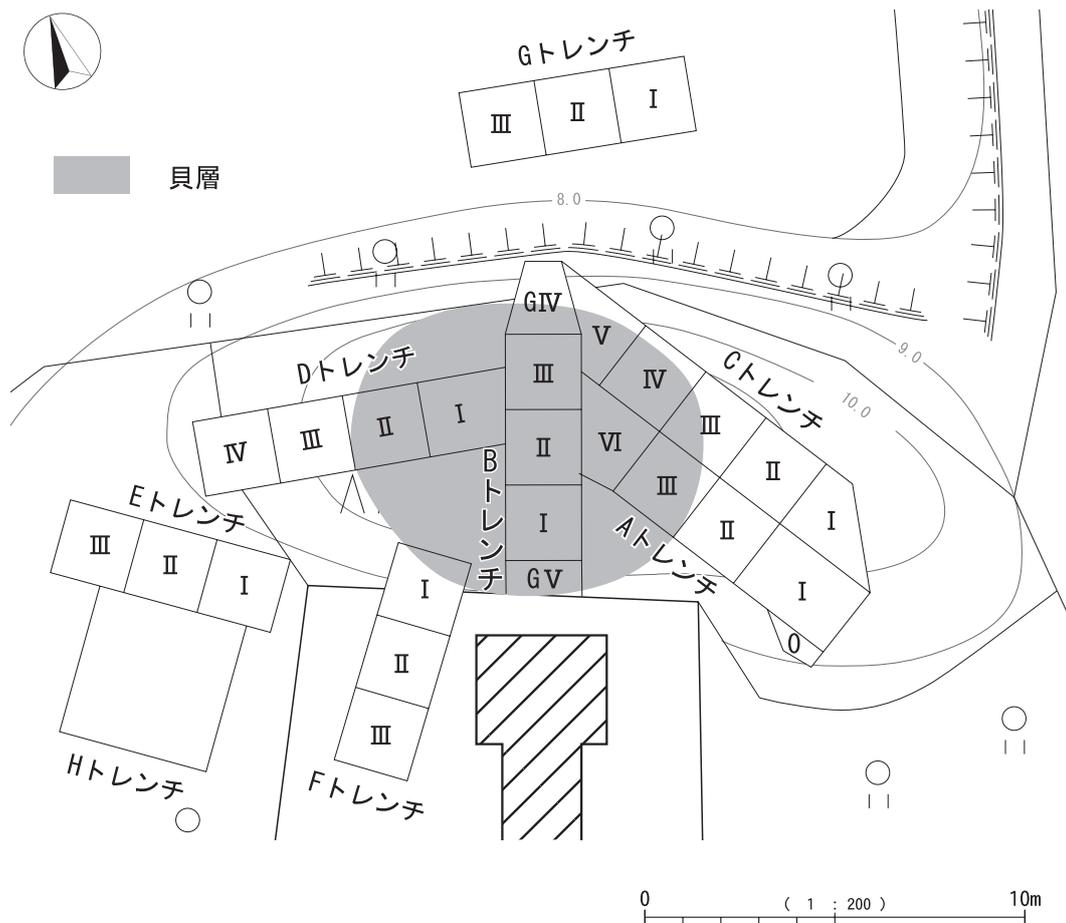


図3 トレンチ配置図

I区～V区まで設定し、Aトレンチの延長に新たにVI区を設定して、Bトレンチとぶつけた。Bトレンチの西側に直角にDトレンチを2×8mでI区～IV区設定した。貝塚の南側の神社のある台地上に、神殿の西側に東西方向にEトレンチを2×6m、南北方向にFトレンチを2×6m、北側の一段落ちた平坦地にGトレンチを東西方向に2×6m、それぞれ設定した。

Cトレンチでは、IV区とVI区では貝層が観られるが、東側ではみられない。Cトレンチでは円礫の集積が検出された。純貝層の範囲はCトレンチIV・VI区、Dトレンチ側I・II区まで、III区は攪乱していたが、途中まで伸びていた。Dトレンチ純貝層で厚いところで60cmを測る。Eトレンチの南側と西側に遺構と考えられる落ち込みがあり、このため南側に4×4mでHトレンチを設定した。Eトレンチの西側では円形状の溝状遺構とそこに硬化面、炉跡が検出され、溝状遺構を壁帯溝として住居跡の可能性が高い。Gトレンチに土坑を検出した。Cトレンチの北側でも、Aトレンチと合わせて1号土坑の精査途中で、土坑の隅と考えられるプランが検出された。掘り込みは1号土坑と同じように袋状の立ち上がりで、深さも同様であったので、1号土坑と同様

のものと判断して2号土坑とした。Gトレンチ出土土坑を3号土坑、Eトレンチで南側にあった落ち込みは、Hトレンチと合わせて円形の土坑となり、この土坑を4号土坑とする。FトレンチI区は、貝塚のある高まり部分にかかり、その傾斜部から掘り下げた。とくにIII区1層から中期の土器が多量に出土し（『高橋貝塚1』の図版11）、基盤層に近い褐色土層で遺構の検出を行った。その結果南西隅に落ち込みとピットを2つ検出した。

〈文献4の資料〉

- 第1図 遺跡の位置
- 第2図 高橋貝塚の地形図
- 第3図 高橋貝塚の範囲とトレンチ
- 第4図 高橋貝塚の土層断面図
- 第5図 Aトレンチのピット1実測図
- 第6図 Eトレンチ住居址実測図
- 第7図 壺14
- 第8図 鉢・無頸壺3, 甕11
- 第9図 甕5, 鉢5, 台付鉢2, 高坏7
- 第10図 壺口縁部4, 甕6, 底部12
- 第11図 拓本 甕31
- 第12図 拓本 壺10, 甕33
- 第13図 拓本 甕37, 壺6

- 第14図 甕14, 壺26
- 第15図 磨製石斧10, 横刃形2?
- 第16図 磨製石斧6, 打製石斧7, 不明2
- 第17図 石包丁9, 磨製石鏃1, 石剣1, 石鎌2,  
円盤形石製品1, 不明1
- 第18図 石鏃26, 石槍8, 石匙1, 磨製石鏃1, 砥  
石3, 敲石3, 石錘2, 穿孔具3
- 第19図 軽石製品11
- 第20図 骨角牙鏃20, 牙製釣針2, 骨牙利器6, 垂  
飾18
- 第21図 土製品5, 脚・土錘各1, 紡錘車12
- 第22図 貝輪8 (未製品含む), 玉類8, 垂飾1, 投  
弾4

### 3 各トレンチの土層について

土層図の層順や書き込みは当時のままの記入である。AトレンチとBトレンチはともに、純貝層が上位に、混土貝層が下位にある。この混土貝層についても、本来は純貝層の上下に形成されることが通常と考えたとするとDトレンチの純貝層の上の混土貝層がプライマリーな堆積と考えられる。このためAトレンチとBトレンチについては、上位が攪乱の度合いが大きいと判断できる。Aトレンチ南壁の3層は固く、斜面側に堆積した、貝層の上の混土貝層の可能性もある。炭酸カルシウムの影響もあろうが、固さは貝塚形成後の生活面であった可能性がある。1層について日誌では、Bトレンチの表土の黒色土層の下に黄褐色土層があり、それを1層としたとあり、土層断面図にはその記録はないが、色調を変えるほどの表土化がなかったとも考えられる。Aトレンチでは層位順が飛んでいるが、Bトレンチを基準とした4層は薄く、Aトレンチの北壁では見られず、Aトレンチの南壁の6層は、Bトレンチ東壁と南壁との5・6層とは一致しない。A I区で下層からピット(1号土坑)が検出されており、明確には掘り込み面がとらえられていないが、黒色粘質土中からの検出であろう。黒色粘質土は貝層下の土層でもあり、南壁の貝粉混入黒色土層3層と混土貝層の2層の関係が明確でなく、その上層か下層かは判断できないし、黒色粘質土も貝層の上位の可能性はあるが、貝層とはそう時間差はないものとする。Aトレンチの下位の攪乱層および黒色粘質土が、前期末～中期の包含層であった可能性もある。

『高橋貝塚1』の16頁図版12ではAトレンチとCトレンチの間に壁はなく平坦で、38年度のCトレンチ南壁は、Aトレンチの南壁と同一箇所、37年度Aトレンチ南壁を、さらに南側に削り込んだ面を実測したものと判断される。

Cトレンチの南壁では黝褐色層が梯形に落ち込んでおり、日誌に硬化面を伺わせる文章(8月19日)

からも、床面の可能性があり、中期の住居跡であった可能性がある。C I区・C II区の1層下・2層の出土遺物は貝層の上位の時期の遺物でまとめられる可能性もある。III区から貝層が確認されている。北壁は貝塚斜面にあたり、上層部分は流出したのか褐色層を欠く。III・IV区で広い範囲は灰層が形成されていた(8月22日)。Cトレンチ・Eトレンチでは、層順の数字が記されていない。

Dトレンチでは、純貝層を挟んで上下に混土貝層がある。III区・IV区は攪乱がかなり入っており、遺物の取り扱いには注意が必要である。貝層は東側に傾斜して、混土貝層中にも粘土貝層が傾斜に沿って入り、混土貝層自体が分層できることを表しており、貝層も傾斜方向への細かな層位が観察できる。時期差はさほどないものであろうが、東側から堆積したものである。

Eトレンチは表土の黒土層の下に褐色攪乱層とされた層が記録されているが疑問がある。II区に遺物量が多かったり(8月19日)、「遺物がぎっしり詰まった感じで多量に出土」(8月20日)は遺構の存在が推定され、南壁には真ん中に4号土坑の立ち上がりがあるが、その右側の立ち上がりも堅穴住居跡の立ち上がりの可能性がある。いくつかの遺構の切り合いが想定できる。Eトレンチの住居跡は深く、黒褐色層に掘り込まれている。このトレンチの上位の住居跡の可能性のあるものと、把握された住居跡には床面に高低差があり、複数時期の住居跡が形成された可能性がある。Fトレンチでは、前述の通り5層までが削られたと解釈したものと考えられるが、出土遺物が中期を主体としているので、貝層の上の褐色土層の堆積の可能性もある。もともと東側が高く西側に傾斜していた地形を神社建築時に削平して平坦化したのが、北東側から南西側に傾斜した自然地形が考えられる。

### 4 遺構検出状況と遺物出土状況について

トレンチは平行に掘り下げられて、貝層の検出を第一義としていたため、貝層がない部分での遺構検出は必ずしも十分な検討はなされなかったものと感じる。貝層を置いて、それ以外の区を掘り下げてるトレンチも多い。日誌の所見などから、調査時に認識された遺構と想定される遺構を入れ込んだ遺構配置図が図7である。Aトレンチの南側や4号土坑の上位、Fトレンチで検出した落ち込みの続きなどを書き込んだ。

平板測量で遺物の出土ドットを測量し、遺物台帳を作成し、1/50の遺物出土状況図が残されている。各トレンチで、遺物に番号がトレンチごとでそれぞれに振られている。遺物台帳には眼高の表示がなされておらず、河口の野帳等からも読み取れない。

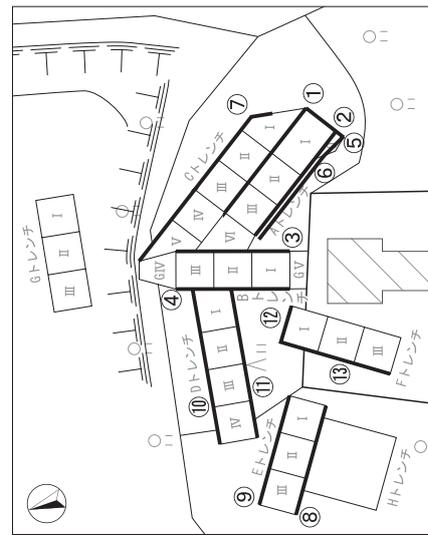
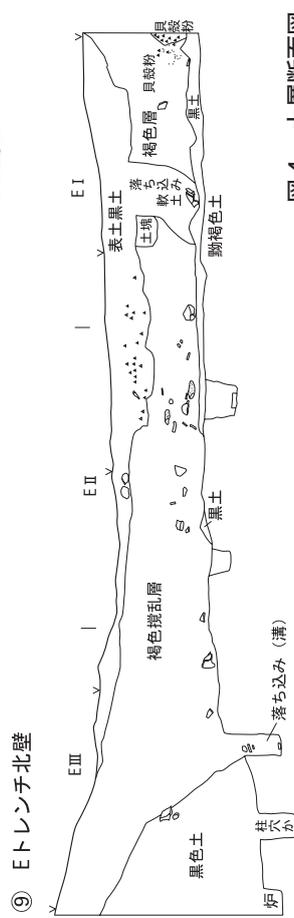
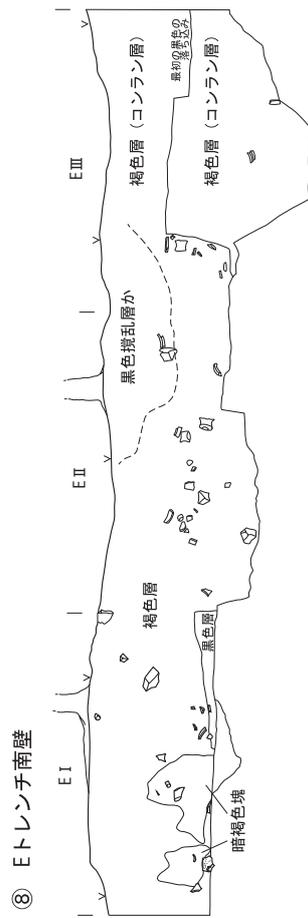
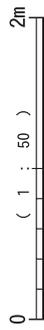
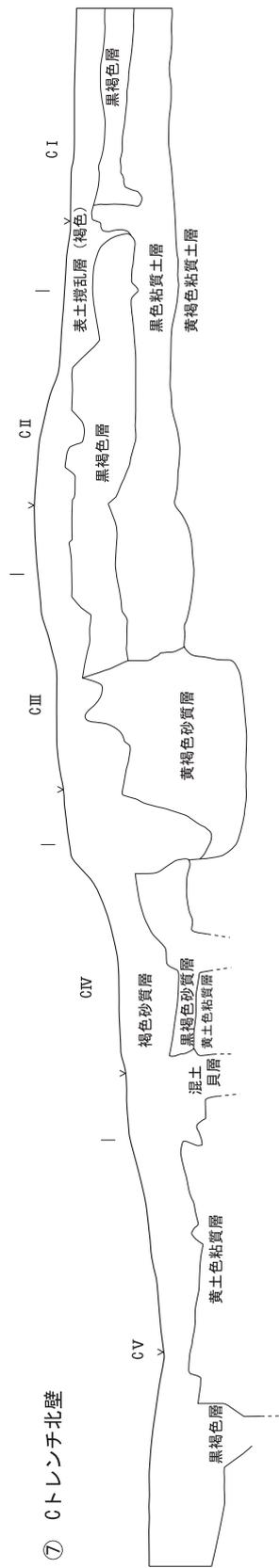
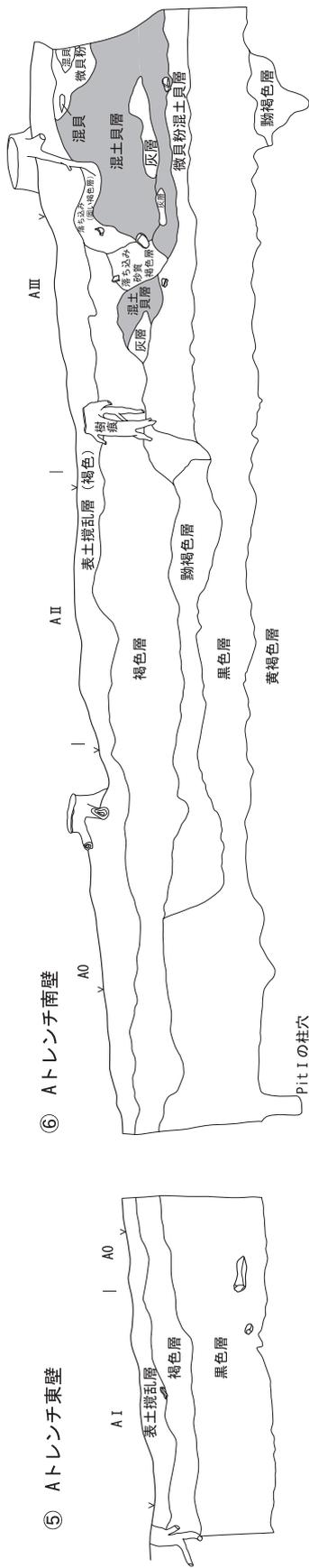


図4 土層断面図 (I)

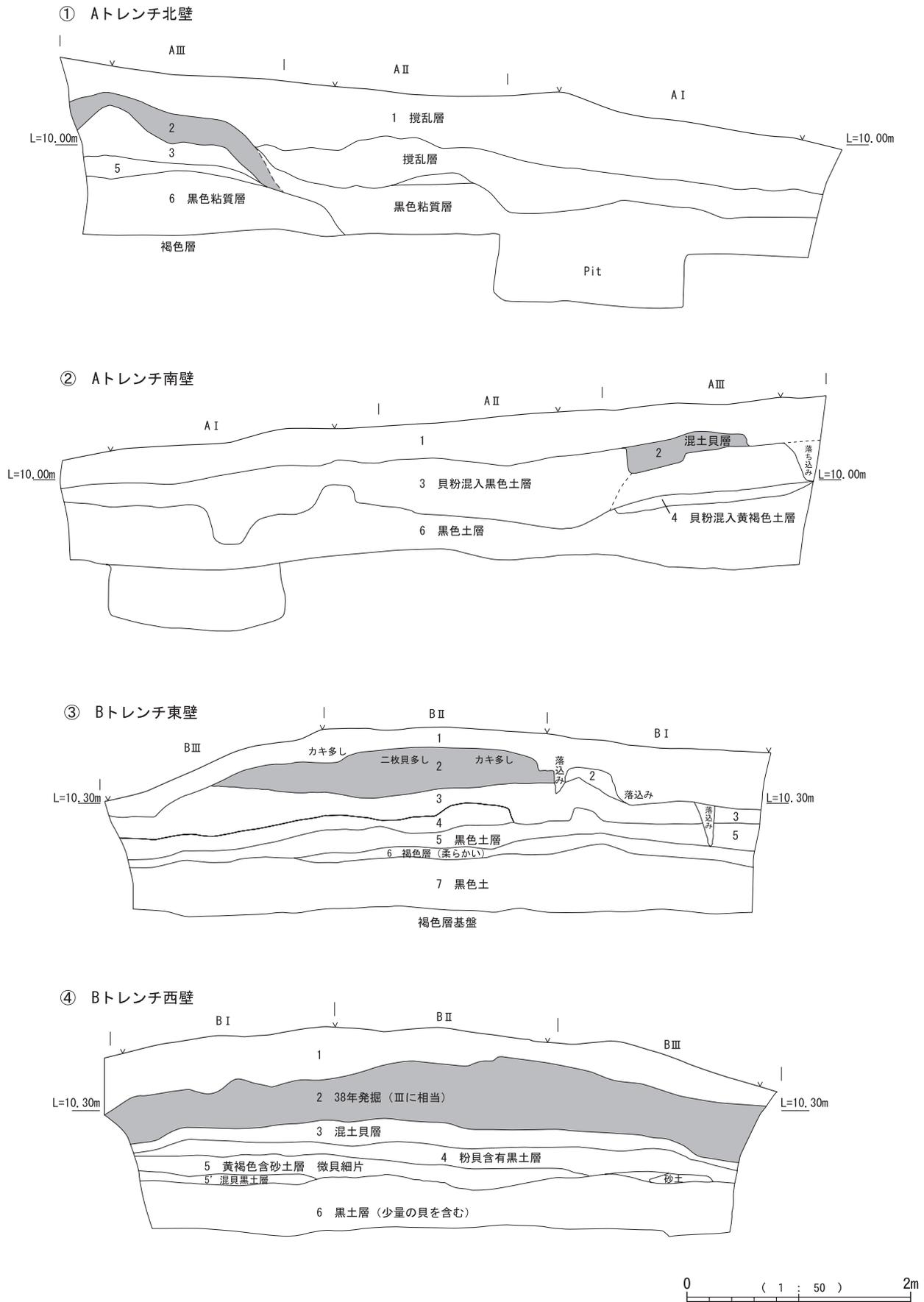
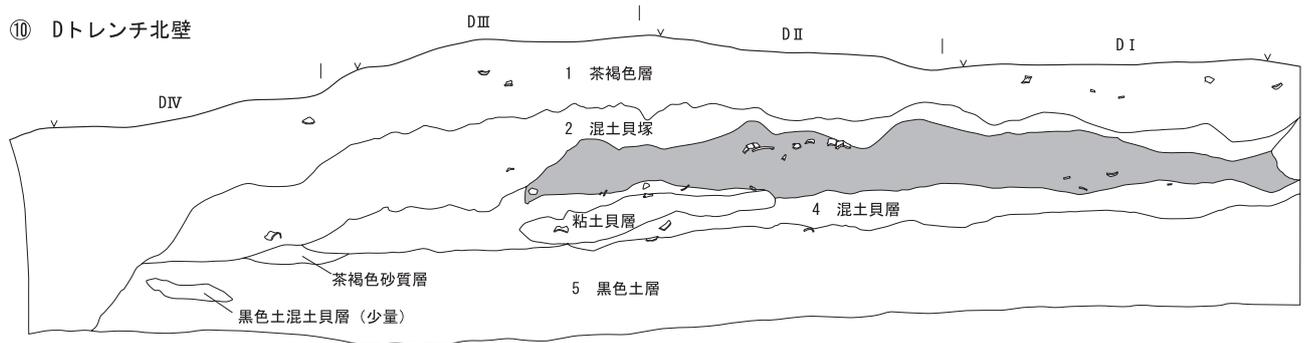
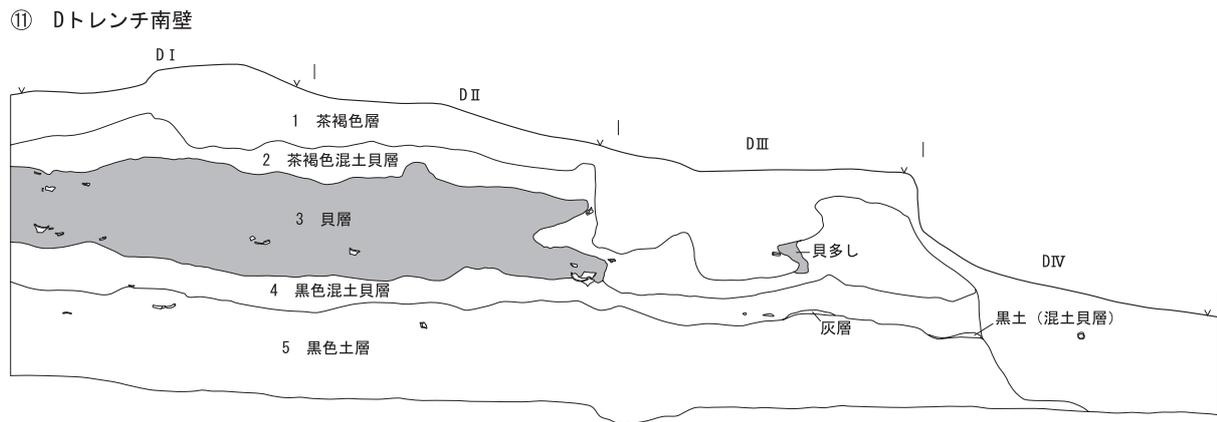


図5 土層断面図 (2)

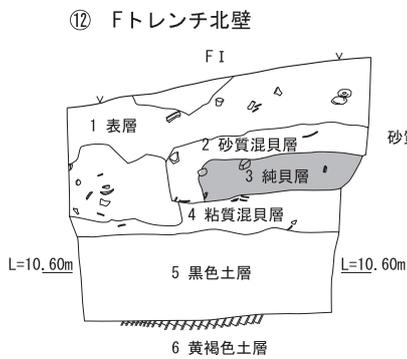
⑩ Dトレンチ北壁



⑪ Dトレンチ南壁



⑫ Fトレンチ北壁



⑬ Fトレンチ西壁

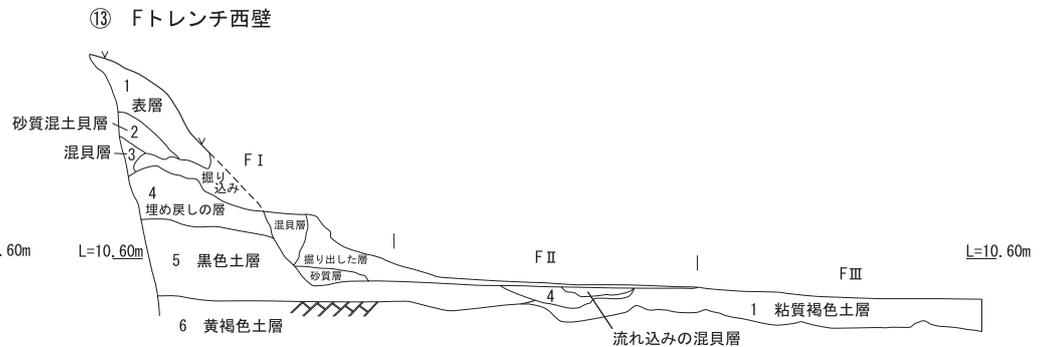


図6 土層断面図(3)

そもそも基準点について、1次調査は日誌に記され地形図に書き込まれているので、1次調査のものはこれを使用したものと推定できるが、平板図の高さが眼高からの深さなのか、基準点からの深さのかもわからなかった。2次調査では、神殿の基礎にも基準点を設定しているのので、どちらの基準点を使用したかもわからない。

遺物と遺物番号との同定も手間がかかる。2次調査では土層図の基準高も書かれておらず、遺物の垂

直分布との照合が困難である。日誌にはグランドレベルからの深さが作業進捗状況として記されており、それと日付・遺物台帳に記された高さなどを勘案していけば、復元は不可能ではないが、要する時間は取れない。

出土遺物は鹿児島市立玉龍高等学校に運ばれ、河口と考古学部の生徒で整理作業が行われたものと判断されるが、センターに搬入された時には、遺物の半数は水洗がなされていない状況であった。

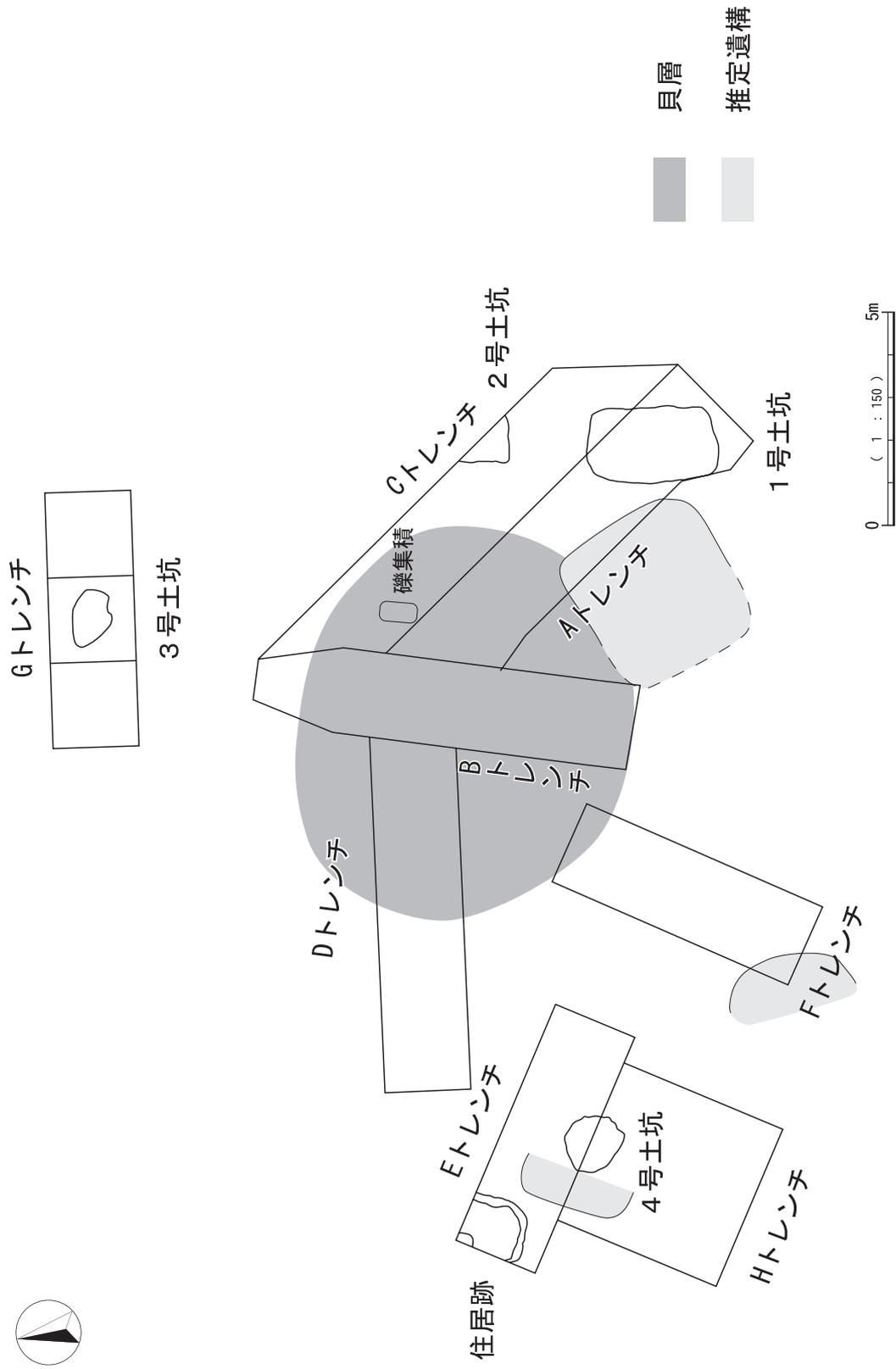


図7 遺構配置図 (推定図)

## 第2節 高橋貝塚の遺構

図7が各トレンチの遺構配置図である。各遺構の説明は文献3の記述を用いて、写真・図を配置する。その後に整理による記述を行うこととする。

Dトレンチは、文献3に「昭和37年のBトレンチ東側に直交してほぼ東西に長さ8m、幅2mのDトレンチを設定、」とあり、第2図の高橋貝塚の地形図には直角にトレンチが配されており、前報告書(『高橋貝塚1』)ではトレンチ配置図もこれに倣ったが、2次調査の終盤の遺構関係の配置図が取られており、トレンチを1/50で平板測量したもので、本報告のトレンチ配置図はそれに従うこととした。これは、当時1/500の地形図を町役場に依頼して、測量士の役場職員が地形図を作成しているが、これは1次調査が始まったばかりで、2次調査分は設定の考えに従って記入されたものと考えられる。その後実際の発掘調査後に各トレンチを測量したところ、Dトレンチは南側に若干ぶれており、これを河口もその後の報告等に使っている(文献3 第3図など)。遺構の認定は河口による。

前章と同じく、※は編者の書き込みである。

### 1 貝層

A・B・C・Dトレンチの調査により、貝塚の堆積の範囲は、南北約7m東西約10mの狭いものである。北側が急崖をなして貝の堆積がしにくかったとも考えられ、又後世客土用の土がこの地点から掘り



写真2 Bトレンチの西壁



写真3 Dトレンチ北壁



写真4 Dトレンチ北壁

取られたとも言われている。一方南側は神社建設のため敷地が削平された際に貝塚の南側が一部削られていることが推測できる。現況で貝塚のマウンドの最高部はBトレンチの中央部・東側付近と想定される。そこから純貝層は北西方向に堆積しているものと考えられる。

※貝層は写真4にあるように、Dトレンチ北壁の右側(東側)から斜め方向に、貝層が何層も積み重なった様子が見て取れる。東南側に貝塚のピークがあったことがわかる。東南側からいくつかの貝層のブロックが形成されていった。

### 2 住居跡

住居跡は3区の西側半分のところに発見した。はじめこの部分の上部に円形状の黒色層の落ち込みがあらわれて、上部の住居跡かと思われたが明らかでなかった。その後この黒色層を黄褐色の基盤面まで追突したところ明らかに住居跡が発見されたのである。この住居跡は大部分が北西断面下にくいこんでおり、その一部分しか発見されなかったが、発見された部分から見ると基盤面に18cmから30cm位の深さで掘り下げられ、中央に炉を設けた隅丸方形の堅穴住居跡かと想像された。住居跡の周りは基盤面の黄褐色のかたい層をもって壁としており、その内側に壁と床面の間に沿ってかなり深い溝のようなものをめぐらしているのが注目された。溝の幅は北西断面に見られる部分では10cm程であるが、場所によって15cmあるいは20cmの部分もみられ、溝の深さもところによって異なるが、20cm程であった。溝の中から黒褐色の土器の破片が出土した。その中の1片に中太の凹線を口縁下につけたものがあって、古い時期のものかと考えられた。炉は中央にあって床面は炉に向かって20度前後の傾斜をもって低くなっており、床面は固かった。炉は断面下にくいこんでいて、その全体は明らかでないが、南側の壁より95cm程のところから斜に掘り下げられていて、その深さは凡そ15cm程であった。炉の中から白々とした灰、赤茶けた灰、それに木炭灰、獣骨粉が出土した。炉





写真8 1号土坑床面遺物出土狀況



写真9 1号土坑完掘狀況

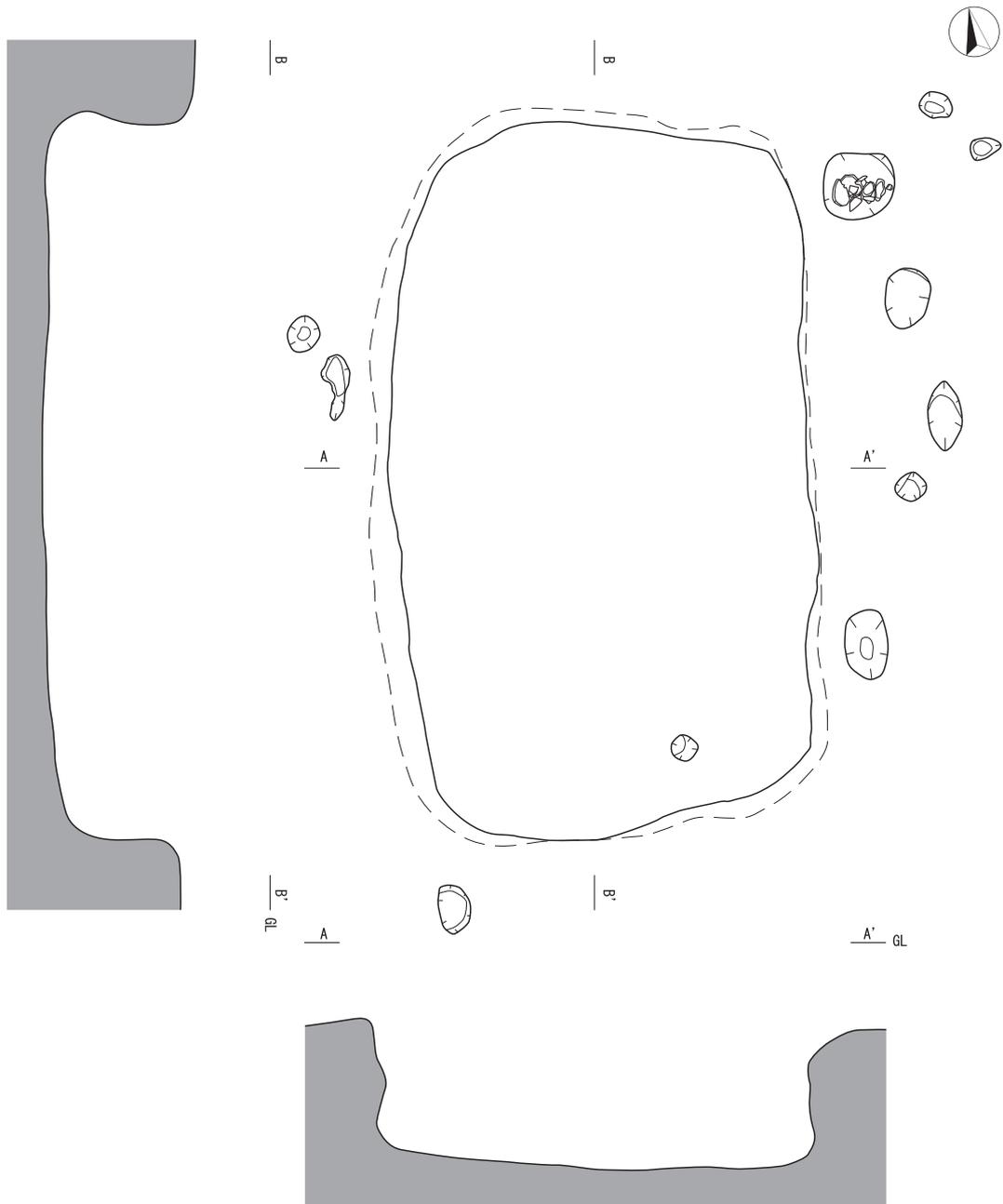


图9 1号土坑平面图·断面图

0 ( 1 : 30 ) 1m

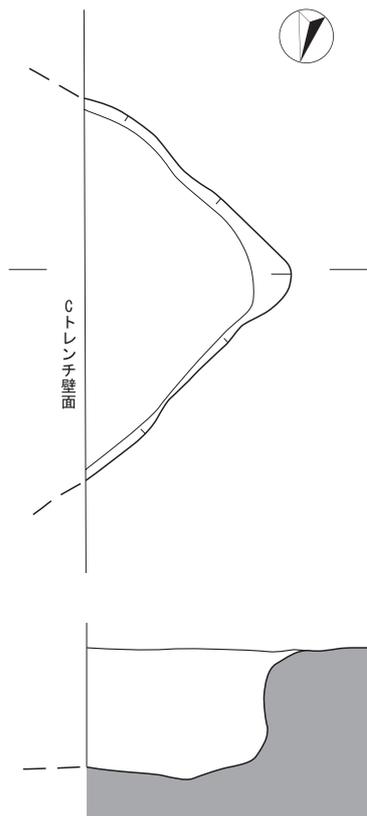


図10 2号土坑平面図・断面図



写真10 2号土坑完掘状況

### 2号土坑

Cトレンチの北側壁面で検出された。2号土坑も一部の検出であったが、その規格は1号と略々（ほぼほぼ）同型のものであると推定される。

※断面図はグランドレベルからの作図であると考えられる。

### 3号土坑

GトレンチのII区4層の地山と思われる面に、土坑（3号土坑）が検出された。土坑の大きさは1.31m×0.92m、深さは約14cmである。この土坑の周囲に柱穴と思われる小さな穴が9ヶ所（径6cm～9

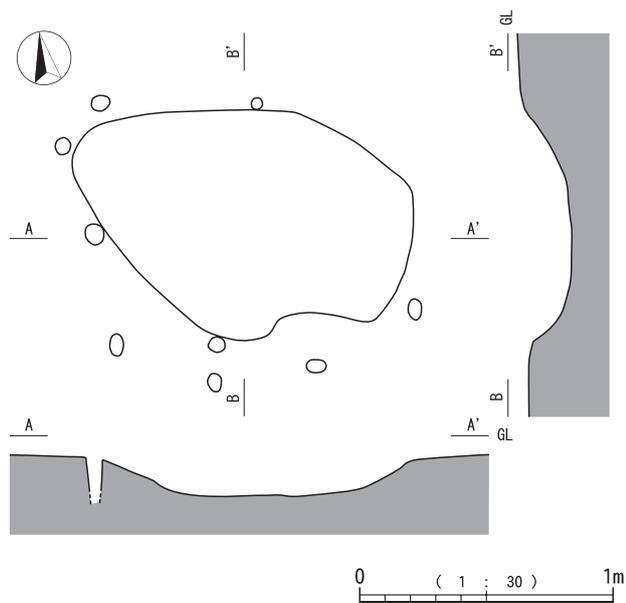


図11 3号土坑平面図・断面図

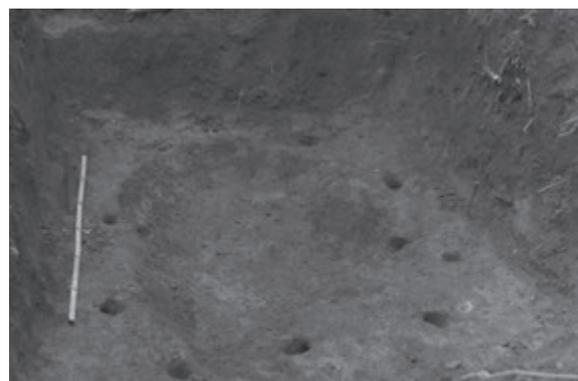


写真11 3号土坑完掘状況

cm）発見されている。この土坑内からは弥生前期の土器片のみ出土している。

### 4号土坑

次にHトレンチにまたがったII区南側の落ち込みは、黄褐色の基盤面に掘りこまれた130cm×120cmの楕円形のものであり、内壁はほぼまっすぐに下げられて北側一部に浅い棚状の凹みをつけたものである（Eトレンチ検出状況）。深さは25cm程で底はあまり平ではなく、中央部は心もち低い。この落ち込みの北側と東側に1個ずつの柱穴状のものがみられ、南側Hトレンチの中にも数個のかなり大きい柱穴状のものが発見されたが、これと関係をもつものか明らかでない。なおこの落ち込みの中から数片の土器片が出土した。口縁部の突帯に刻目をつけたもの、或いは口縁部突帯及びその下の突帯に刻目を施したものである。

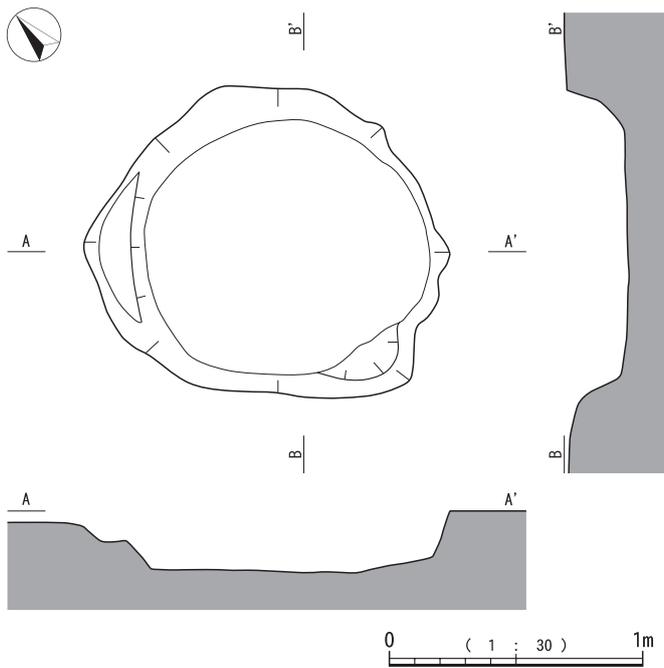


図12 4号土坑平面図・断面図



写真12 4号土坑

#### 4 礫集積

Aトレンチで検出の灰層はほぼほぼ同じ厚さでVI区からV区、IV区にかけて広範囲にみられた。灰層下の混土貝層中には、IV区とV区の境界付近に小円礫の43個が47cm×30cmの広さで集積されていたが、意図的に集めたものに間違いはない。復元すると方形のプランが想定される。

※方形に掘られた範囲＝土坑に埋納されていたと考えられる。

※平面図と断面図は、断面線がどこか不明で一致していなかった。見通し図のような作図であったが、出土状況の横方向からの写真が元になったものと考えられ、また集積状況が理解できるために掲載した。



写真13 礫集積平面状況



写真14 礫集積断面状況

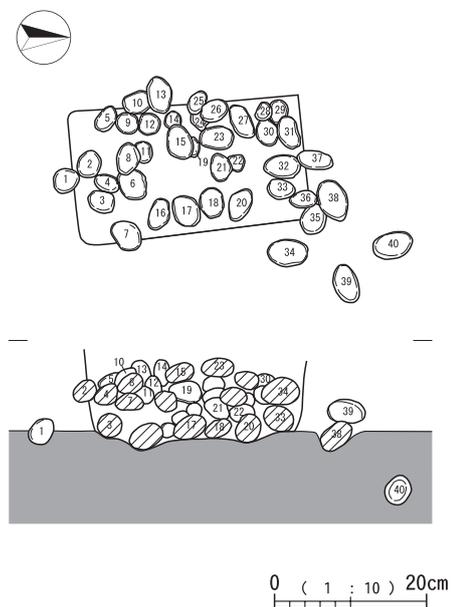


図13 礫集積平面図・断面図

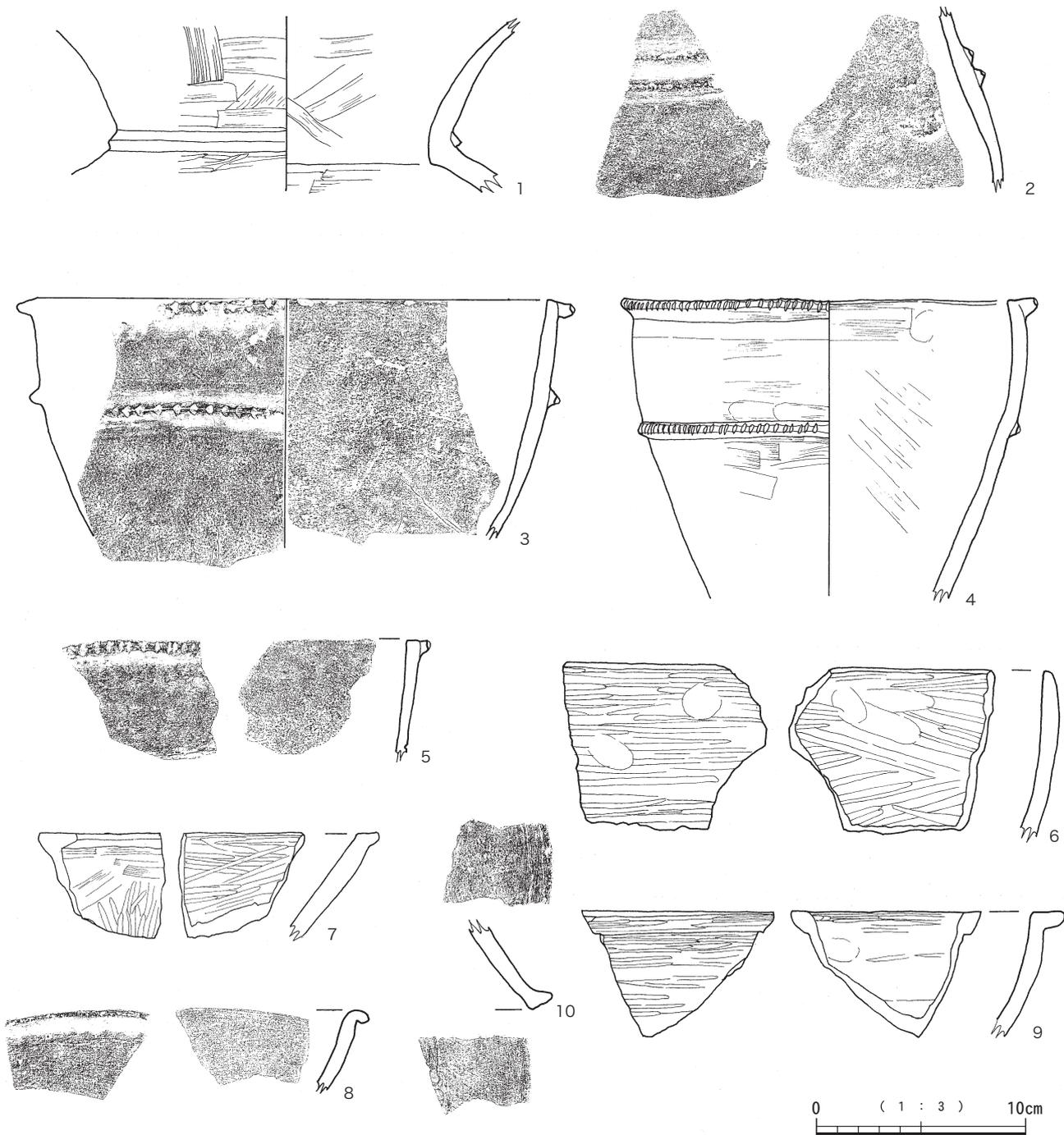


図14 出土土器 (1) 1号土坑

### 第3節 高橋貝塚の遺物

出土遺物について、土器・石器は今までの公表資料以外を中心として図化した。石器については、図化した以外の公開資料や写真として掲載した石器も計測し、一覧表に記載している。貝器や骨角器についても、図化したもの以外の公表資料や写真に掲載されたものも計測し一覧表に記載した。貝器、骨角器については、ほぼ全てが資料化されたことになると考える。石器も一覧表を含めて全量が把握できる

と考える。土器・石器については、河口による文献1及び文献4と、文献37の文献と合わせて検討できる資料として追加できたものとする。本来はこれらと合わせた実測図の掲載が望ましいが、ページが限られておりやむを得ない手法と判断している。

図化しなかった遺物については、図版に掲載したものもある。木下尚子により研究成果がまとめられた文献50の貝輪関係資料については、ほとんど図化は行わず、計測を行い、図版8に写真を掲載した。

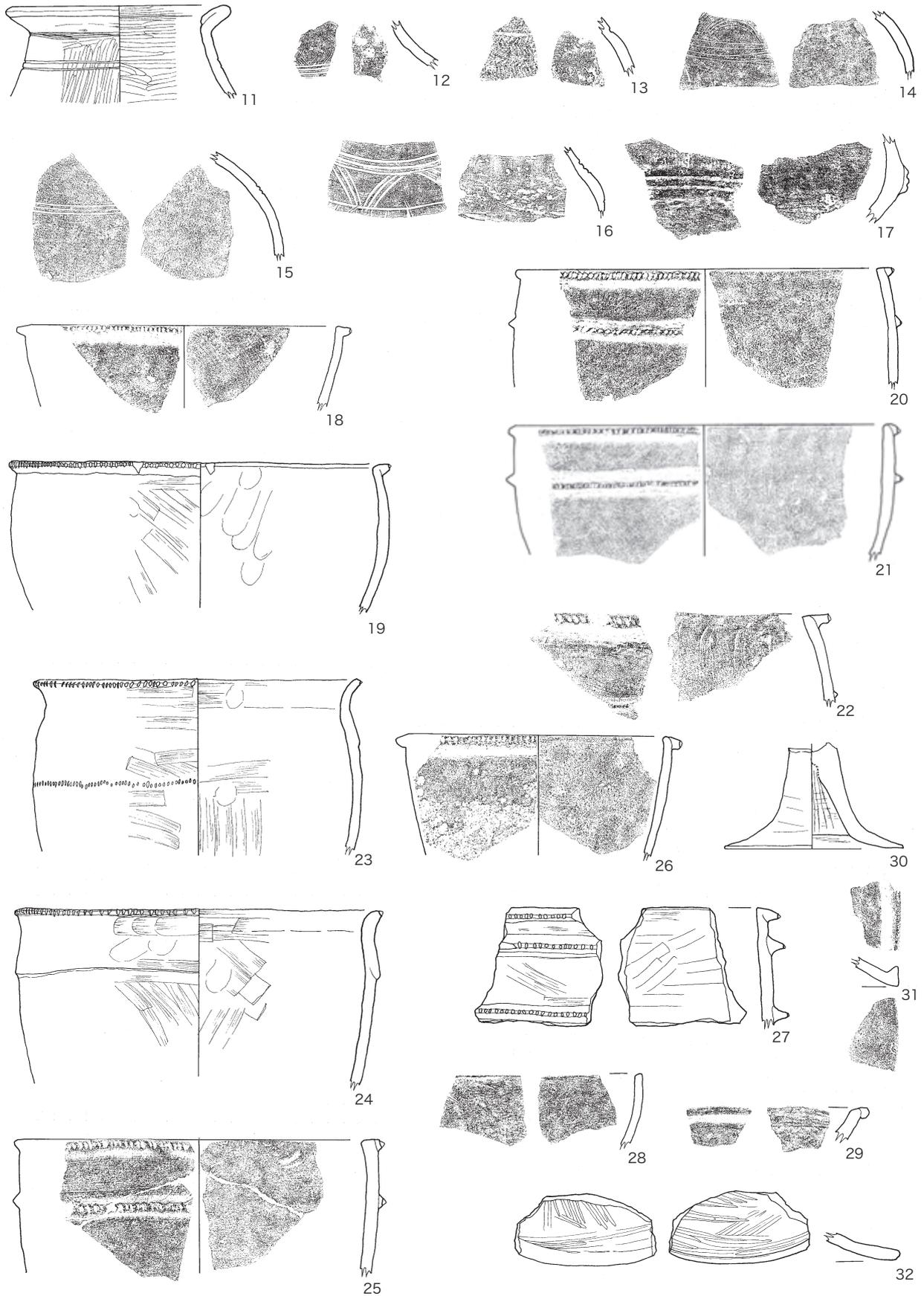


図15 出土土器 (2) Aトレンチ

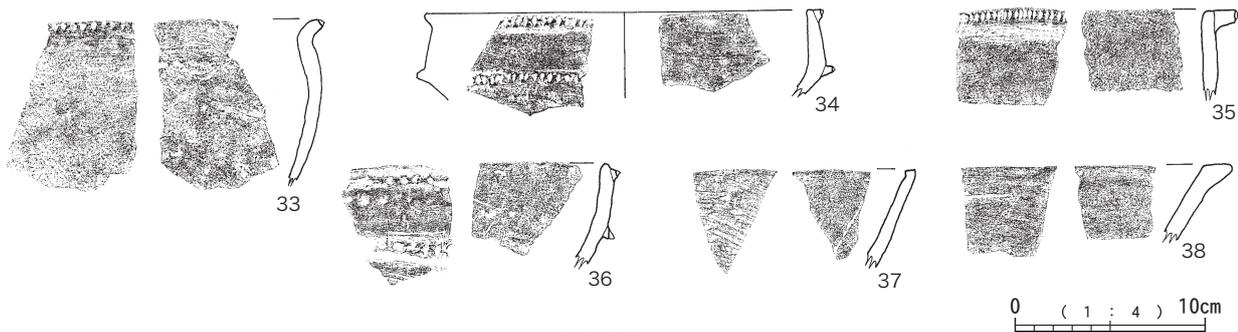


図16 出土土器 (3) Aトレンチ

それ以外の廃材についても図版9に現生貝とともに掲載した。それ以外の貝器は少なかった。

### 1 土器・土製品

整理作業を進めていったところ、AトレンチのPitないし土坑と記した土器が見つかった。これらは日誌から1号土坑出土土器と判断される。図14にまとめた。

図3の貝層の範囲と図4～6の土層断面図を見ればわかるように、AトレンチではⅢ区に貝層が残り、Bトレンチはほぼ全面に貝層が検出され、Cトレンチはやや不安定だがⅣ区とⅥ区に貝層が残り、DトレンチはⅠ・Ⅱ区に貝層がある。このため、土器のレイアウトは、Aトレンチについては、Ⅰ・Ⅱ区はまとめて1層から順に壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高坏形土器とレイアウトし、Ⅲ区についてはⅢ区のみで同じような形式順でレイアウトした。Bトレンチについては、地区を問わずに一括して1層から順に並べた。Cトレンチでは、Ⅰ～Ⅲ区をまとめて、Ⅳ区はⅥ区とまとめて、それぞれ一緒にレイアウトした。Dトレンチは、Ⅰ・Ⅱ区をまとめ、Ⅲ区・Ⅳ区でレイアウトし、以下E・F・G・Hトレンチはトレンチ毎にまとめた。既存の土器型式に含まれない無文土器についてはまとめて図化し、その他の土製品や彩色土器、他地域からの土器もそれぞれでまとめた。

Bトレンチの出土土器について、貝層下位の層位からも攪乱がないものとして、接合作業を行い、層位ごとに一定数抜き出したために、Bトレンチ出土土器が掲載数として多い。ちなみに河口の高橋Ⅰ式～4式の型式設定はDトレンチの遺物を中心としている。

個別の土器の説明は土器観察表による。

#### 1号土坑出土土器

1号土坑はAトレンチで検出された遺構である。

1は壺形土器の頸部で、2は壺形土器の胴部上半でいずれも突帯を施す。3～5は甕形土器で6～9は精製の鉢形土器か台付鉢形土器、10は脚部であ

る。3は、口縁上面が突帯と一体化して平面をなし、9は、山口県下関市綾羅木遺跡出土土器<sup>註1</sup>から前期に編年された、綾羅木Ⅲ式土器の鉢形土器である。7はこの影響を受けたものであろう。前期～中期の土器が混在しているが、遺構についてはこれらからは中期の前葉の時期が考えられる。

#### 各トレンチの土器

##### AトレンチⅠ・Ⅱ区出土土器

図15・図16はAトレンチⅠ・Ⅱ区の土器である。11～17は壺形土器である。11の口縁は外反し、頸部中程に沈線を施す。12～16は肩部から胴部に沈線文を施す壺形土器で、12は平行線文の上部に斜沈線がはみ出している。13は羽状文、14・16は平行線文・重弧文である。17は胴部に突帯を貼り付けて、2条の連続刺突状に押し引いた沈線を引き、綾羅木Ⅲ式の壺の胴部である。

18～27は甕形土器で前期の後葉から中期までのものが見られる。18は口縁に突帯を貼付け刻目を施す。上面が平坦にナデにより整形される。19は胴部が膨らむ器形で、口縁はやや内傾する。20も胴部が膨らむ器形で、口縁と口縁下に2条の突帯を貼付け、口縁部は平坦である。21は口縁と口縁下に2条の突帯を貼付け、口縁端部は丸い。22も口縁と口縁下に2条の突帯を貼付け、口縁部上面は広い平坦面をなす。23は口縁が外反して端部に刻目をなすとともに、胴部にも刺突文が巡る。板付遺跡出土土器などにも見られる。24は口縁部が外反し、口縁下が幅広く肥厚して胴部突帯を見かけ上形づくる。25は細い突帯を貼付け、刻目を施す。口縁上面は面となる。26はやや小型の甕形土器で口縁部に突帯を貼付け刻目を施す。27は口縁部に2条、胴部に1条のやや高い突帯を貼付け刻目を施す。31と32は甕形土器の蓋形土器である。28と29は鉢形土器で、30は高坏形土器の脚部である。28は腕状に直口して立ち上がり、29は口縁に貼付け突帯で、上面に面をつくる。

33～38は、4層以下の層位であるが、攪乱が窺われる。33は口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形である。34は胴部で屈曲する浅鉢形土器と考えられ、口

縁部と胴部に突帯を巡らす。35は口縁部突帯の上面に広い平坦面を持つ。36は深鉢形で、口縁部の突帯が端部から下がって貼り付けられる。37・38は鉢形土器である。縄文晩期の土器と中期初頭の甕形土器が出土している。

### AトレンチⅢ区出土土器

2層が貝層にあたる発掘区である。

39～47は1層出土の土器である。39は口縁に三角突帯を貼付ける。突帯の下端処理が粗い。端部は上に面を作る。40は口縁に三角突帯を貼付け、刻目を施す。上面に水平面を持つ。41は外反する口縁で刻目を施す。42は口縁部に幅広の突帯を貼付け、胴部の突帯は低い。43は口縁部と口縁下に刻目突帯を施す。44は底部であるが、1層でも肥厚して脚台とはならない平底である。甕形土器は、口縁の上面が面をなすものが多い。45と46は蓋形土器である。47は鉢形土器で、綾羅木Ⅲ式の影響が伺われる。内外面共にヘラミガキされる。48～52は2層出土の土器である。48は口縁が外反し、端部に刻目を施し、外面はハケ目調整で他地域の土器の可能性が高い。49も口縁部が外反し端部に刻目を施す。胴部は膨らまず底部に至る。50・51は浅鉢形土器と考えられる。52は、破片が2層と4層で接合されたものであるが、藤尾のいう折衷甕にあたる(文献27)。53～55は3層出土の土器であるが、53・54は胴部が膨らまず、砲弾形をなす。55・56は浅鉢形土器。56～59は4層・5層出土土器である。57は壺形土器で、平行沈線と重弧文をなす。58は口縁下に突帯を貼り付け、胴部に突帯を貼付けて胴部で屈曲する。59は口縁部に刻目突帯をなす。

### Bトレンチ出土土器

図18～図24はBトレンチで出土した土器である。60～86は1層から出土したものである。60～65は壺形土器で、66～81・85が甕形土器、82～84が鉢形土器、86が高坏形土器の脚部である。60は胴部最大径が下がり、頸部の締まりが弱い。61は大型のもので、肩部に平行沈線と多条の三角形文を施す。62は小型で平行線文と重弧文を施す。63は頸部に刻目突帯を巡らすもので、頸部に突帯から縦方向に沈線が引かれる。64は肩部に平行沈線文、65は平行沈線文と三角形沈線文が施文される。壺形土器では前期後半～末のものが見られる。66～81は甕形土器で、口縁部の外側に突帯・刻目突帯を貼り付ける一条甕(66～73)と、口縁が外反し外端部に刻みを施すもの(1層では掲載なし)、口縁部と胴部に突帯・刻目突帯を貼り付ける二条甕(74～81)からなる。73は口縁下に沈線が引かれる。77は胴部に2条の刻目突帯を貼り付ける。81は貝殻条痕で器面が調整され、

突帯は口縁下に貼り付けられ、刻目も大きい。古い時期のものである。他は口縁の上面に面が作られ、上面がまっすぐ平坦となる二条甕が多い。82～84は鉢形土器である。高坏形土器の脚部が出土している。甕形土器の底部は85に見られるように中央がわずかに円形の上げ底で、丸く削られたようなものも見られる。脚台とはならない。

87～108は2層出土の土器である。87～89は壺形土器で、頸部に平行沈線を回す。87は、平行沈線下は貝殻による重弧文である。88は頸部に4条の平行沈線が回る。89は胴下半から底部である。90～101は甕形土器で、口縁部の外側に刻目突帯を貼り付ける一条甕(90・93・94)と、口縁が外反し外端部に刻みを施すもの(91・92・95)、口縁部と胴部に刻目突帯もしくは突帯を貼り付ける二条甕(97～101)からなる。一条甕は三角突帯が多く、二条甕は口縁上面の平坦面形成が弱い。90は外面がハケ目調整で、90の同一個体となる底部では、安定した平底である。96は甕形土器と思われる破片で、河口が繊維痕土器としたものである(文献37)。100は大型の甕形土器である。102は蓋形土器、103～106・108は鉢形土器ないし高坏形土器の杯部、そり胴部から底部と考えられる。107は蓋形土器である。108は浅鉢形土器の底部と考えられる。

109～136は3層出土土器である。109～112は壺形土器である。頸部から胴部に段の痕跡をわずかに残すものと、沈線を引くものがある。110は沈線で段を顕す。111・112は肩部の段はなくなり、沈線で文様を描く。113～128は甕形土器で、口縁部の外側に刻目突帯を貼り付ける一条甕(113～116・118)と、口縁が外反し外端部に刻みを施すもの(117・119～121)、口縁部と胴部に刻目突帯を貼り付ける二条甕(122～127)からなる。113は胴部に穿孔がなされている。122・123・124は肩部の屈曲が強い。125は如意状口縁に胴部に突帯を貼り付ける折衷型である。126は古い土器が混入か。128は突帯の下縁調整があまり行われていないが、胴部はヨコナデされている。129は蓋形土器とした。130～132は鉢形土器で、136は台付鉢形土器か高坏形土器の脚部である。133と135は、口縁に幅広の肥厚帯を持つ。木器由来の高坏形土器の可能性もある。

137～146は、4層出土の土器である。137は球形の胴部で肩部の沈線は、全周が一条ではなく、数単位に分断されて施文される。138は外反する口縁に間を置いて刻目がランダムに施され、胴部の上位に穿孔がある。139～142は口縁部と胴部上位に突帯を持つ甕形土器である。突帯はいずれも口縁端部より下位に貼り付けられる。141は口縁端部に直接刻目を施し、内側に条痕が残る、小型のものである。143・144は胴部下半であるが、底部は、わずかに上

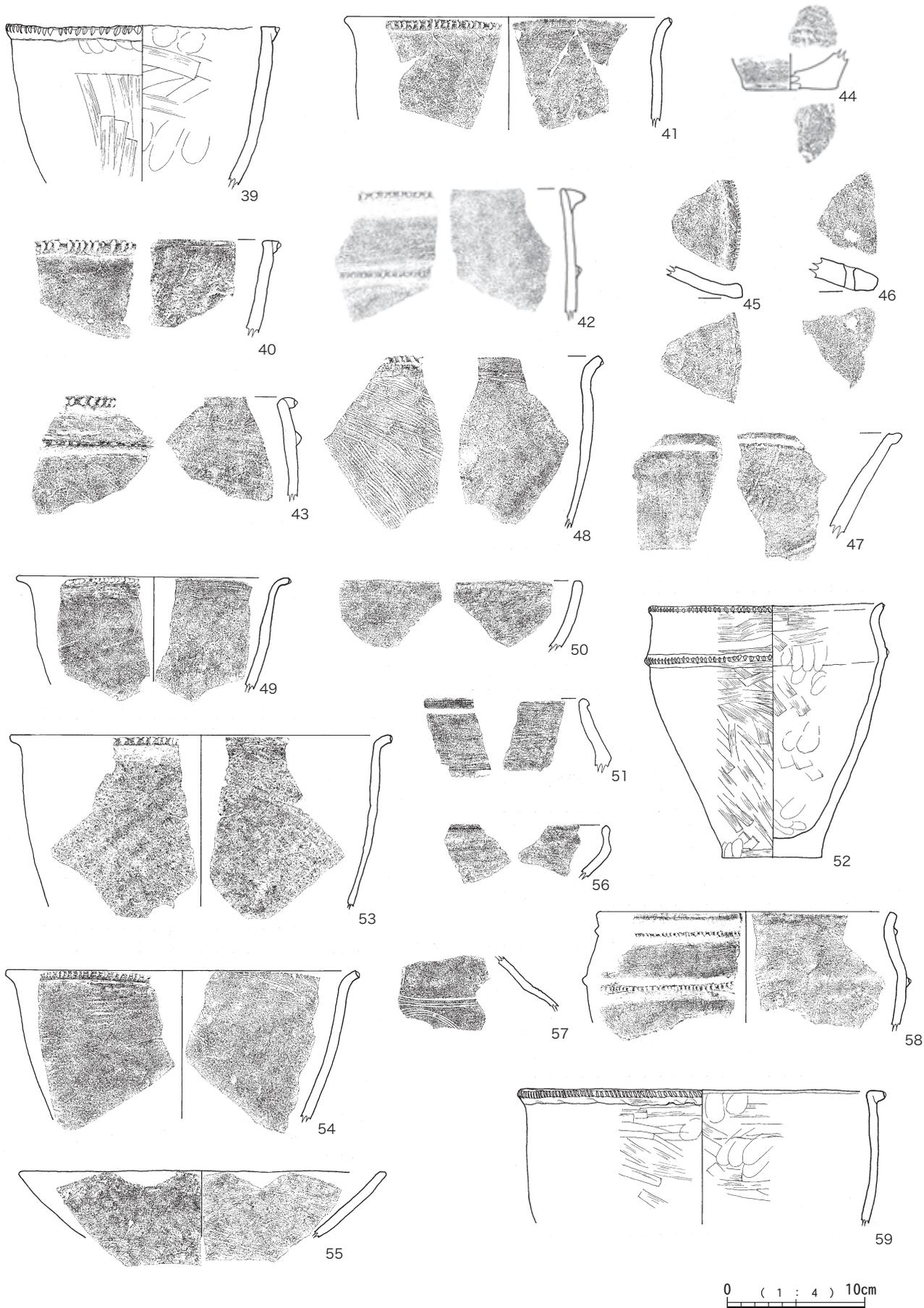


図17 出土土器(4) Aトレンチ

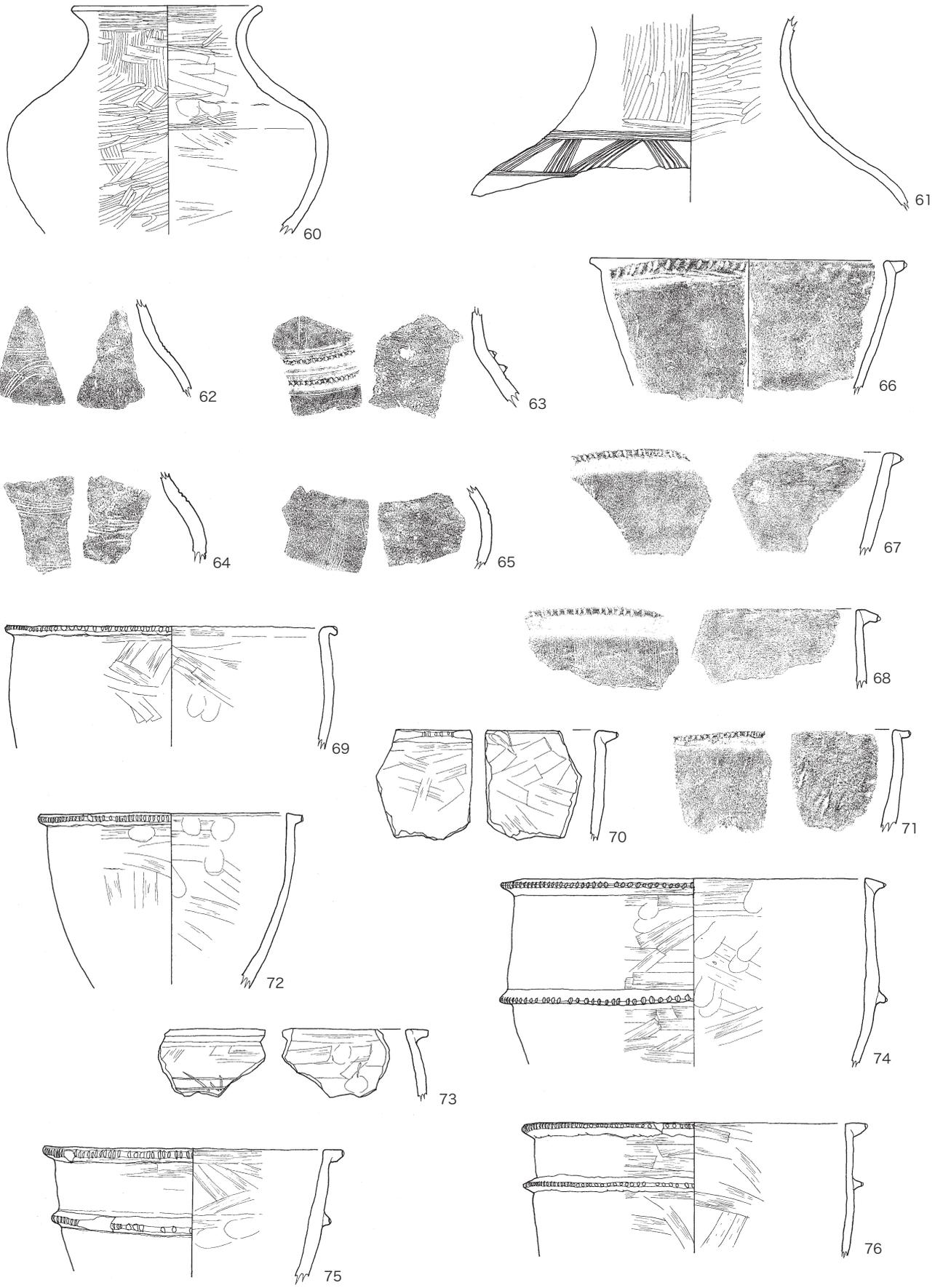


図18 出土土器 (5) Bトレンチ

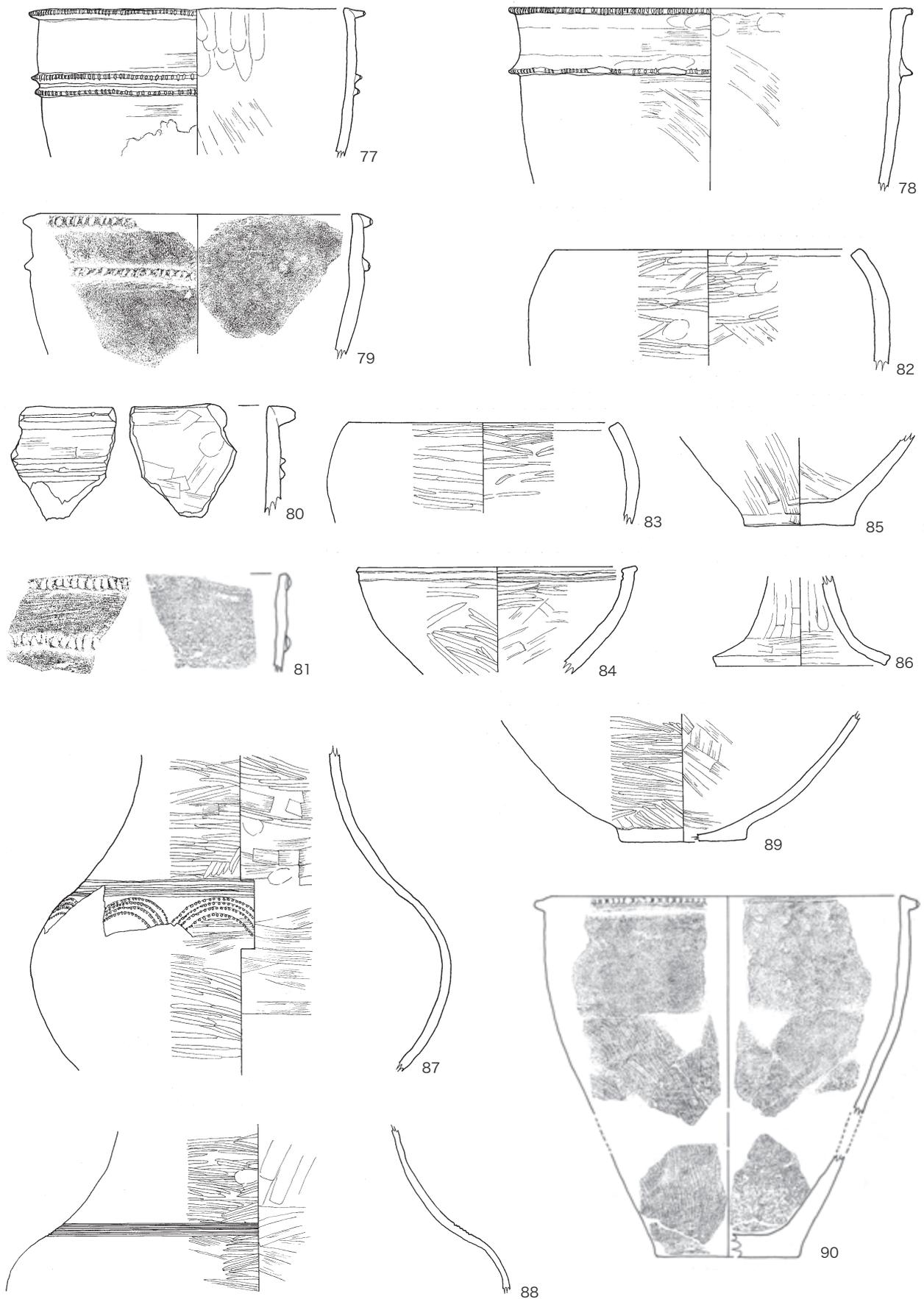


図19 出土土器 (6) Bトレンチ

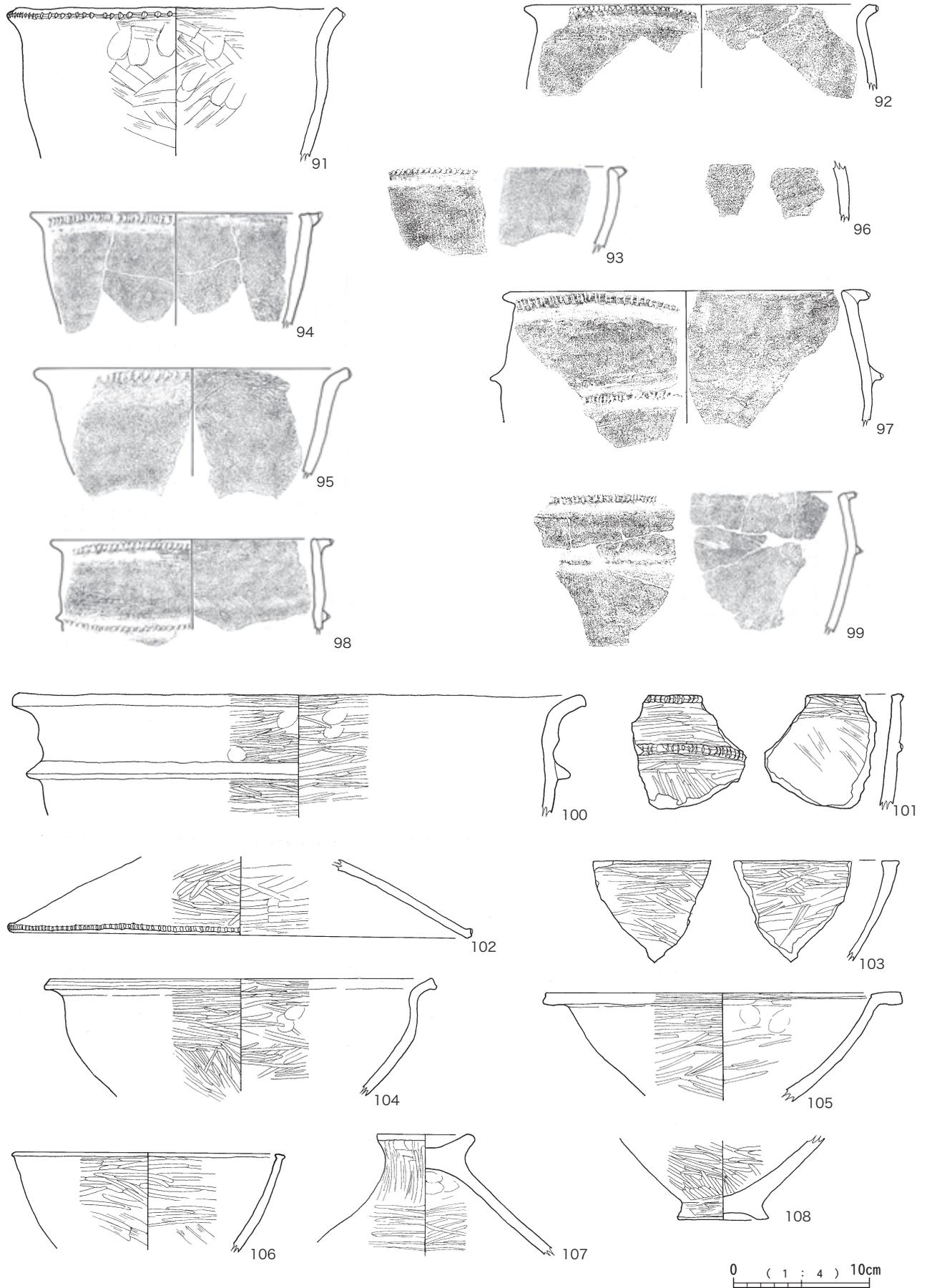


図20 出土土器(7) Bトレンチ

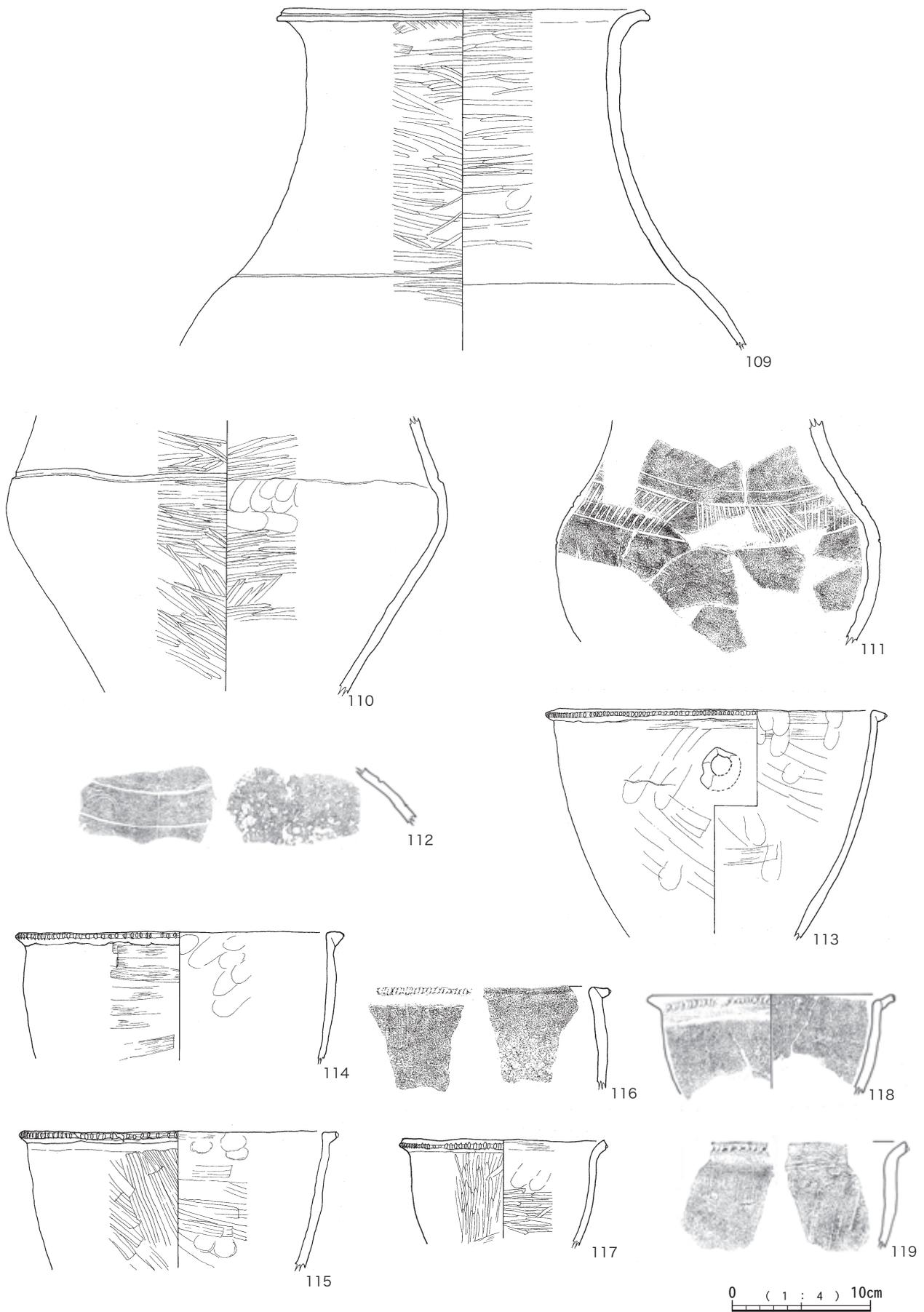


図21 出土土器 (8) Bトレンチ

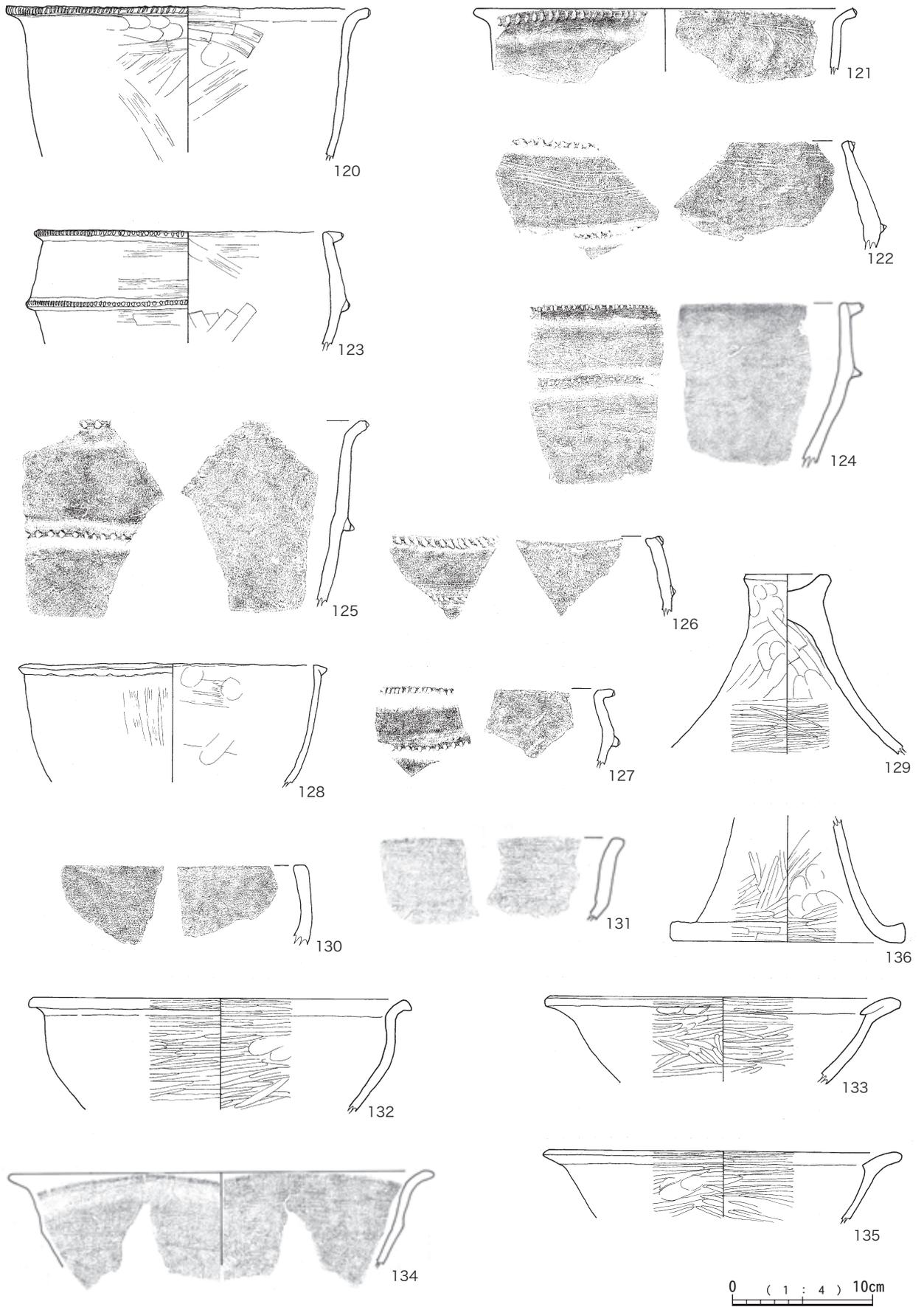


図22 出土土器(9) Bトレンチ

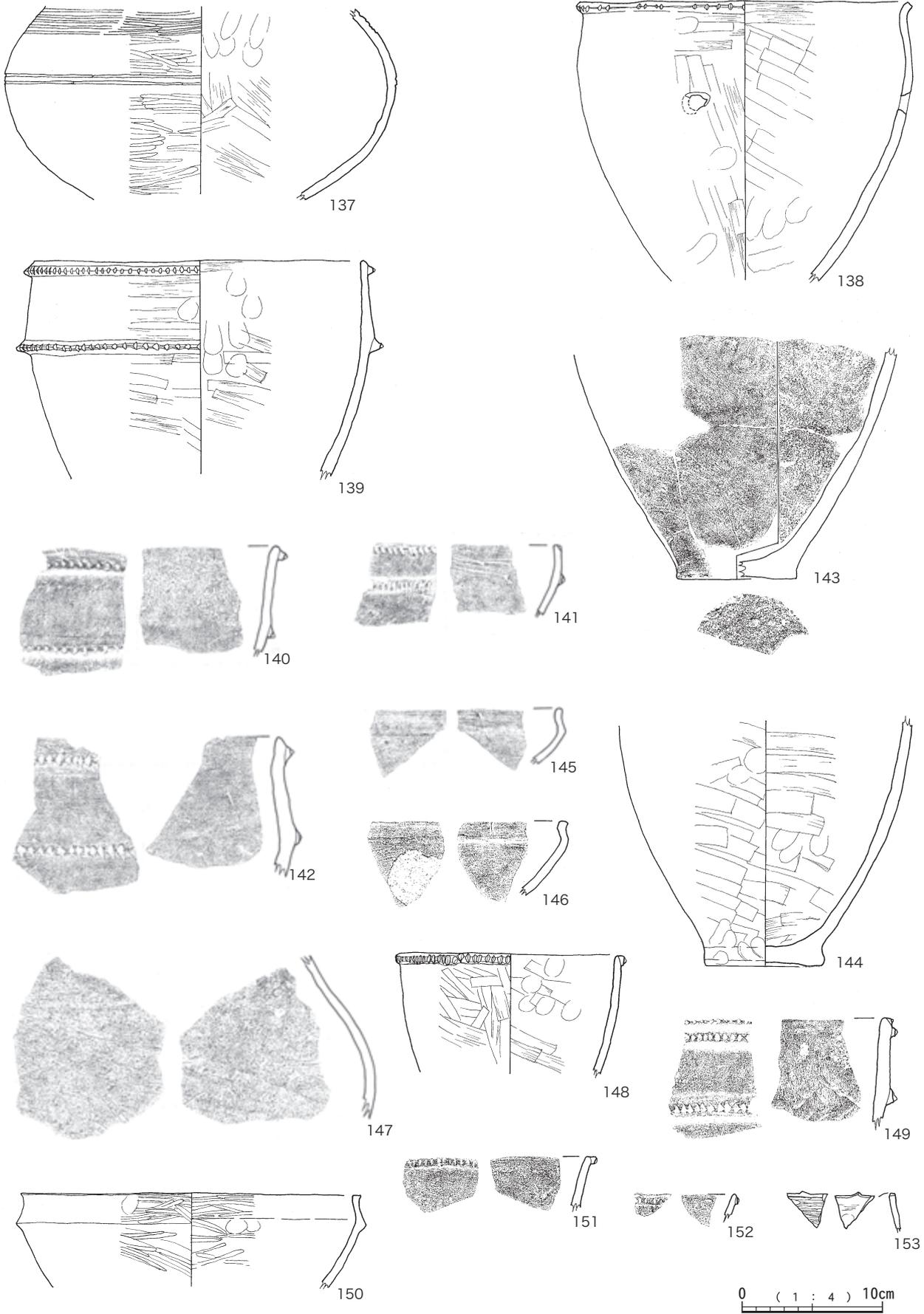


図23 出土土器 (10) Bトレンチ

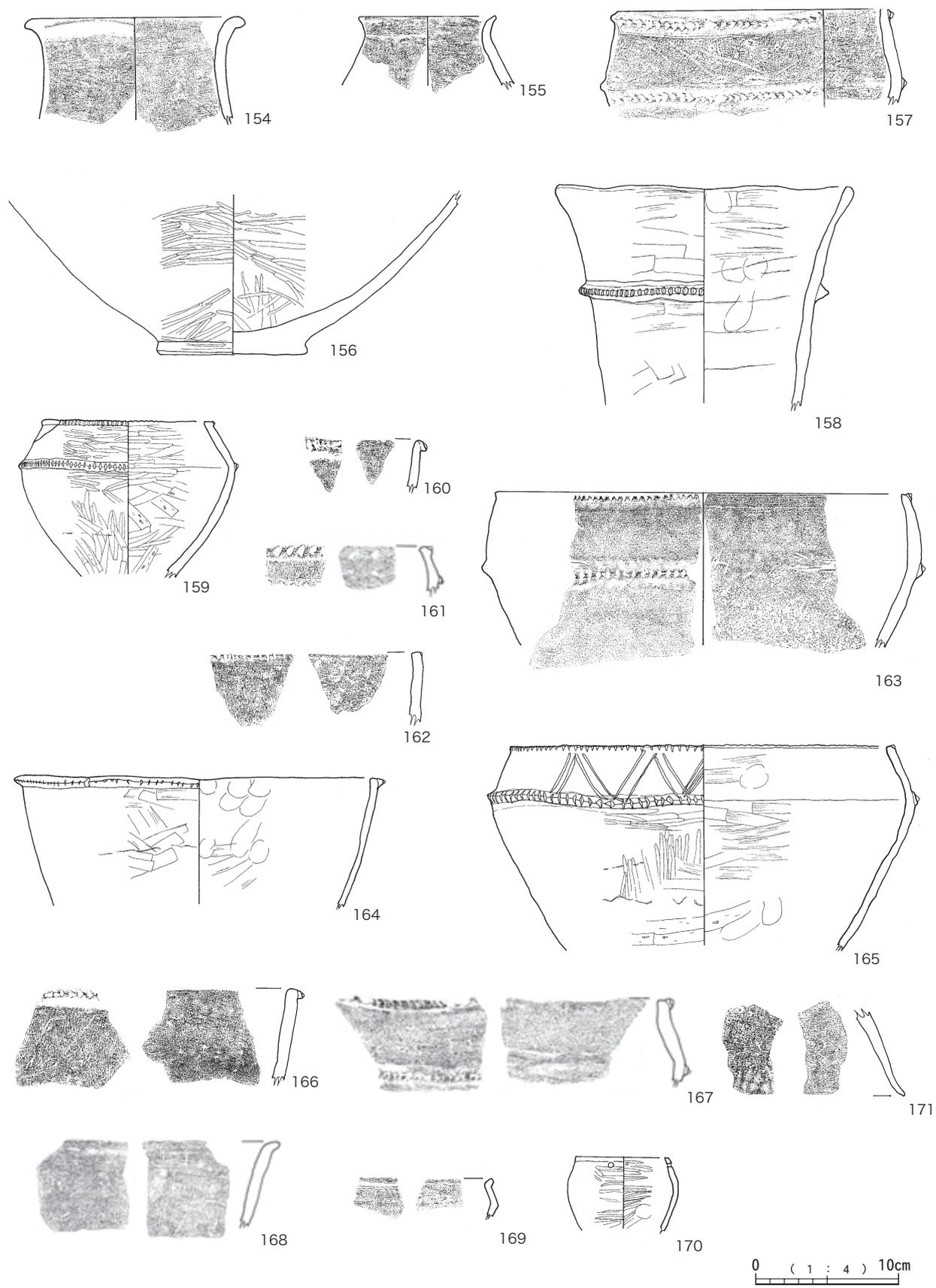


図24 出土土器 (11) Bトレンチ

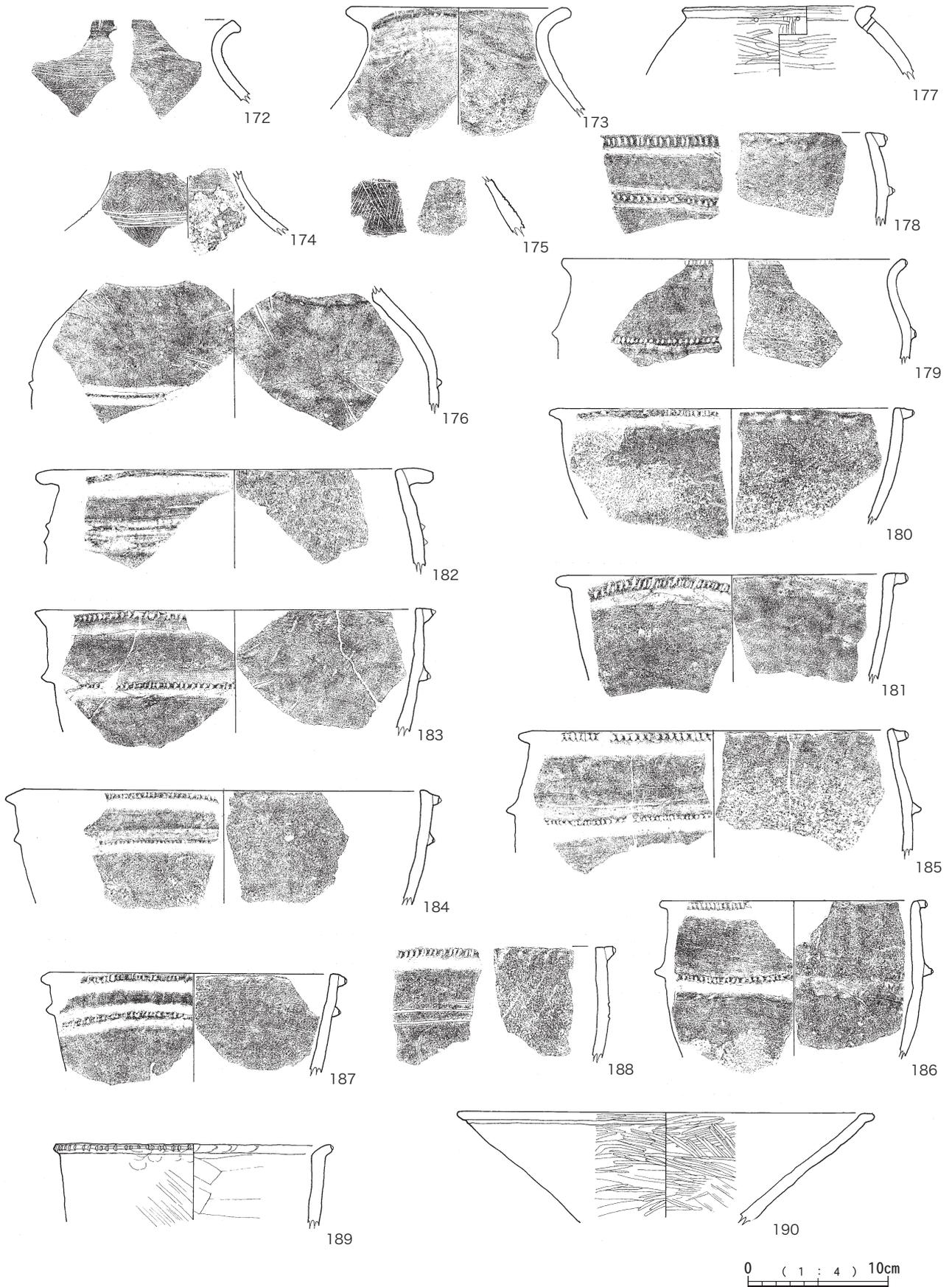


図25 出土土器 (12) Cトレンチ

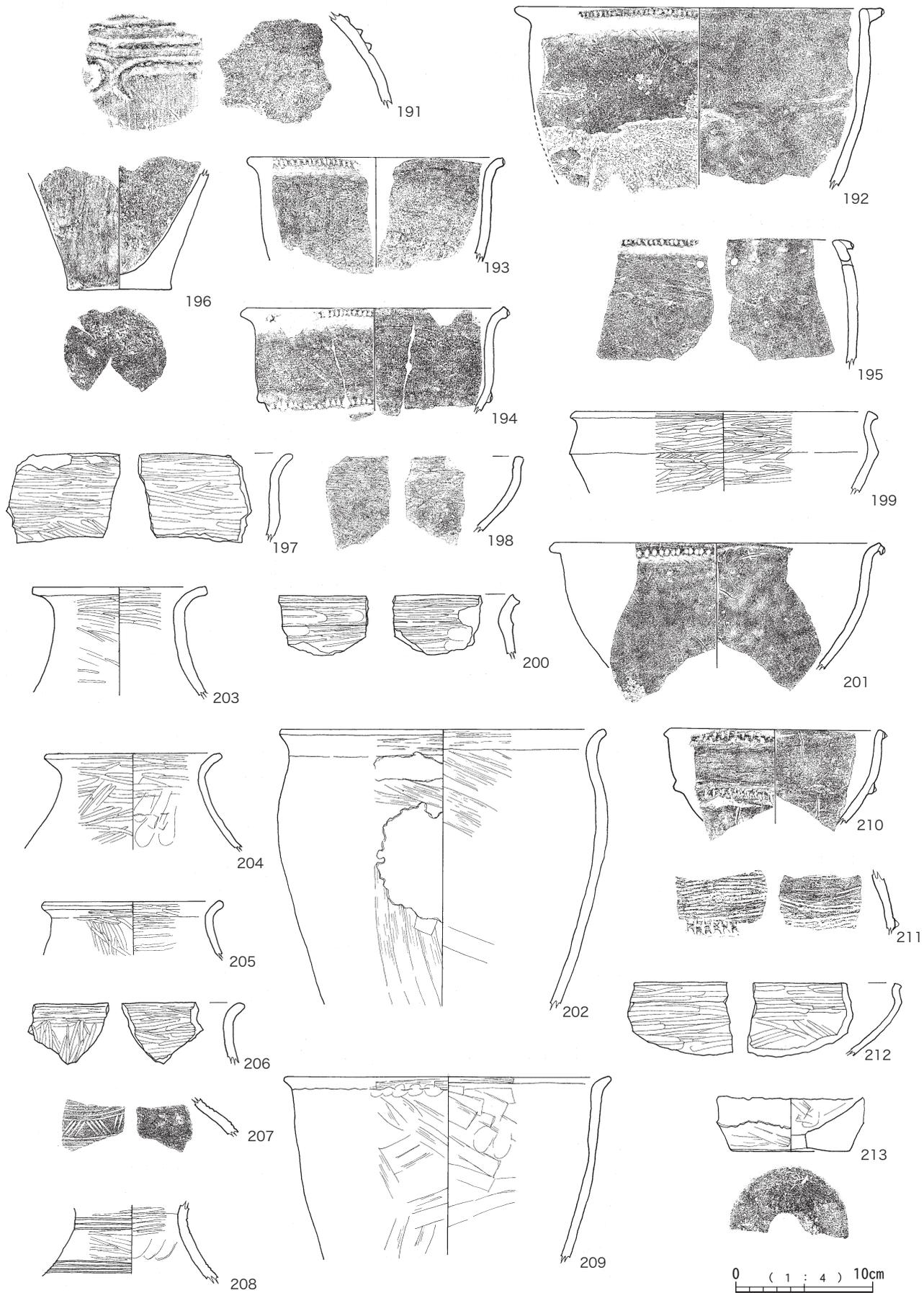


図26 出土土器 (13) Cトレンチ

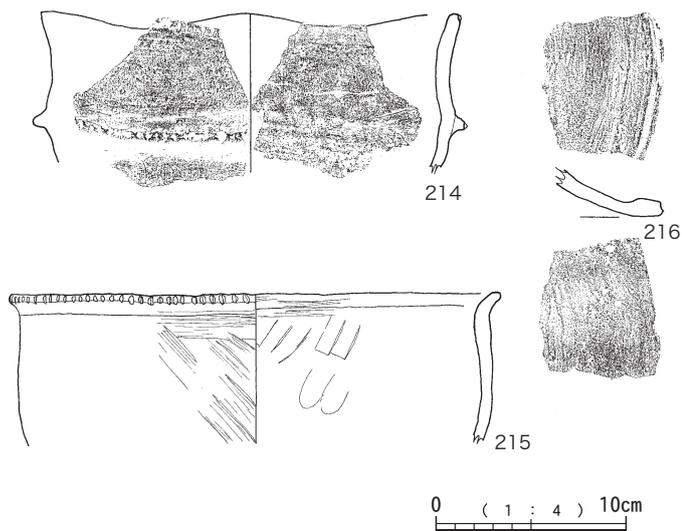


図27 出土土器 (14) Cトレンチ

げ底気味で、全体にあまり膨らまずスマートに立ち上がる。145と146は浅鉢形土器で、晩期からの器形を継承している。突帯文土器から高橋Ⅰ式への漸移層かとも考える。

147～153は5層出土土器である。4層と近い特徴の土器群である。147は壺形土器の頸部から胴部で肩部に段がうかがえる。148は口縁部に刻目突帯を貼付ける。149は口縁下と胴部に突帯を貼付け、口縁端部にも刻目を施す。150は口縁部が肩部で屈曲して立ち上がる浅鉢形土器である。151は小型の甕形土器の可能性はあるが、内面はナデ、外面は工具ナデで調整され刻目突帯を、貼付ける。152は口縁下に細い突帯を貼付け、153は鱗状突起を口縁に有する小型の精製土器である。

154～171は6層出土土器で、154～156が壺形土器、157～167深鉢形土器、168・169が鉢形土器、170が小型無頸壺である。154は小さい口径がそのままあまり拡がらずに胴部につながるものと考えられる。155は頸部が短い可能性が強い。157は屈曲する口縁部で、内側は横方向に外側は縦方向のヘラミガキで調整される。158はラップ状に拡がる器形で、口縁はやや外反して、頸部に一条の突帯が巡る。159・161・167は口縁端部にわずかに肥厚させ外端部に刻目を施す。いずれも屈曲する器形のものである。162・165は口縁の外端部に刻目を施す。160は小型の深鉢土器で、口縁部に突帯を貼付ける。165は、やはり屈曲する器形で、突帯間に2条の沈線で三角文を描く。169は黒川式土器の精製浅鉢に近い。170は小型の無頸壺としたい。171は台付鉢形土器の脚部と考えられる。これらは夜白式土器の一群ととらえられる。

### Cトレンチ出土土器

173～190はCトレンチのⅠ～Ⅲ区の土器である。172・191～216はⅣ～Ⅵ区出土の土器である。Ⅳ・Ⅵ区には2層に貝層が残る。

172～177は壺形土器である。177は無頸壺である。174は鋭い斜沈線を切って沈線が施される。175は三角形に沈線を充填する。176は胴部に突帯を持つ。178は口縁部と口縁下に刻目突帯を貼付け、口縁部上面に面をなす。179は外反する口縁部に胴部最大径の部分に突帯を持つ。180・181は刻目突帯を貼付けて口縁部上面に面をつくる。182はL字状口縁をなし、胴部に無刻目突帯が2条巡る。182・183・184・185は、口縁部形態と器形に、184→183→185→182と甕形土器の型式学的な変化をよく示す資料である。188は三角形の突帯を貼付け、下位に2本の平行沈線を巡らす。189は口縁部がわずかに外反し口縁端部に刻目を施す。190は台付鉢の鉢部と考えられる。

191～216はC-Ⅳ区～Ⅵ区の出土土器である。191～204までが3層までの出土土器で、205～216は4層以下の出土土器である。191は壺形土器の胴部上位で、突帯を持つ。192～196・202は甕形土器である。197～201は鉢形土器である。192は刻目突帯を口縁部に貼付け、上面は水平な面をなす。193は口縁部が外反して、端部に刻目を施す。194は外反する口縁で、端部の下端部に刻みを施し、胴部の屈曲部に刻目突帯を巡らす。195は胴部が膨らむ器形で、口縁部に刻目突帯を貼付け、口縁下に補修孔を持つ。196は底部で、安定した平底である。197は口縁部がまっすぐに立ち上がり、端部が外反する。198は碗形の浅鉢形土器、199は口縁部が内傾して立ち上がり端部が外反する浅鉢形土器である。200は口縁がわずかに外反して、口縁部に凹線を巡らす。内外面が研磨された浅鉢形土器である。201は口縁に刻目突帯を巡らす浅鉢形土器である。202は口縁部が外反して端部に刻目を持たない甕形土器である。203・204は壺形土器である。

205・206は頸部が立ち、口縁が急に外反する壺形土器である。207は壺形土器の肩部で、平行沈線と三角文で沈線を引き、208は平行線文を口縁下と頸部に巡らす。

209は口縁が外反し無刻目のものである。210は刻目突帯文の鉢形土器になる。211は内外面が貝殻条痕で調整され、胴部で屈曲する夜白式土器の甕形土器である。212は晩期の精製土器に近い器形である。213と出土層位が不明であるが、甕形土器の底部を穿孔したもので甕である。214はBトレンチ158と同じ最下層出土の土器と似ており、夜白式土器に属するものであろう。215は短く外反する口縁部に刻目を施す。216は蓋形土器である。

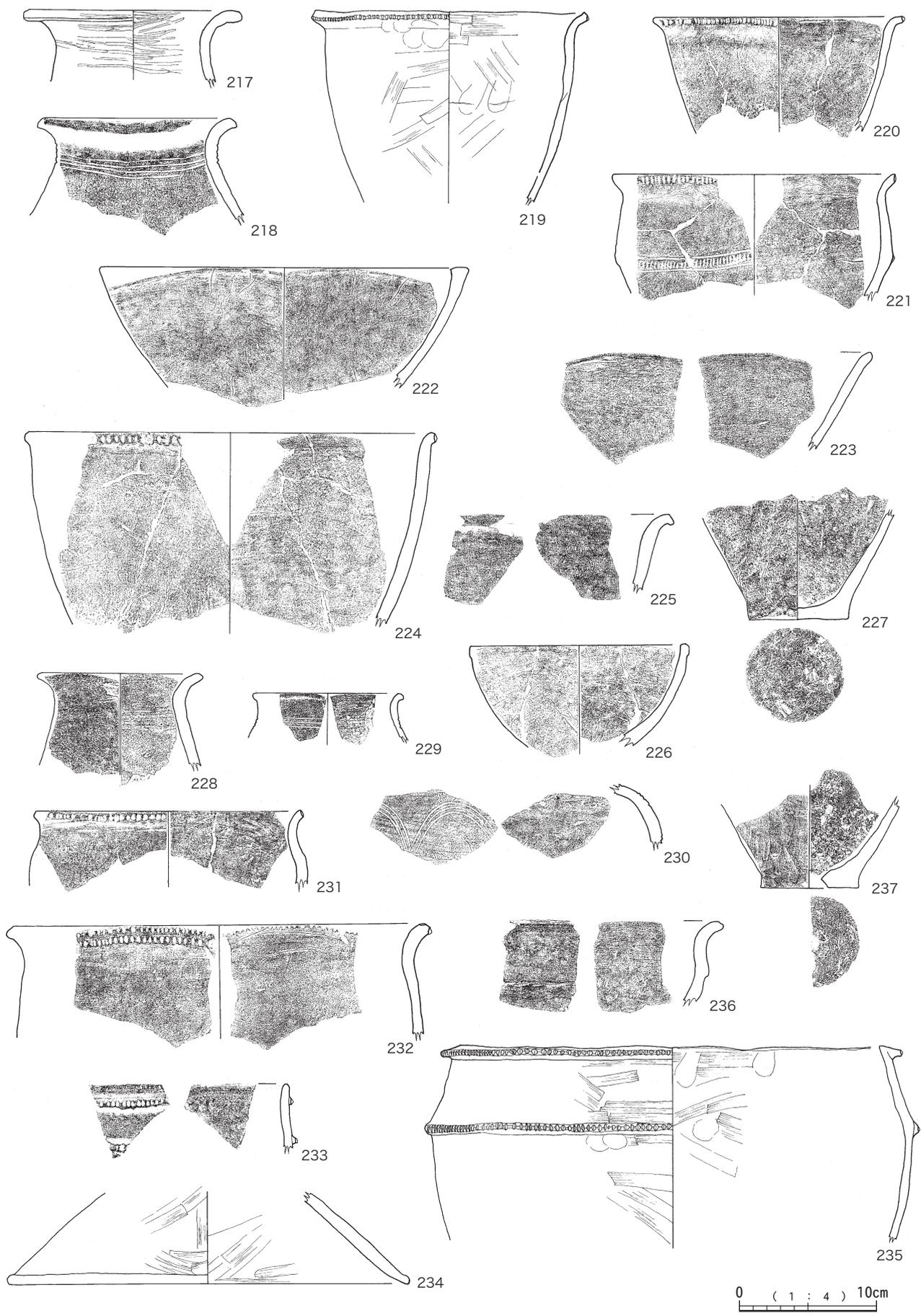


図28 出土土器 (15) Dトレンチ

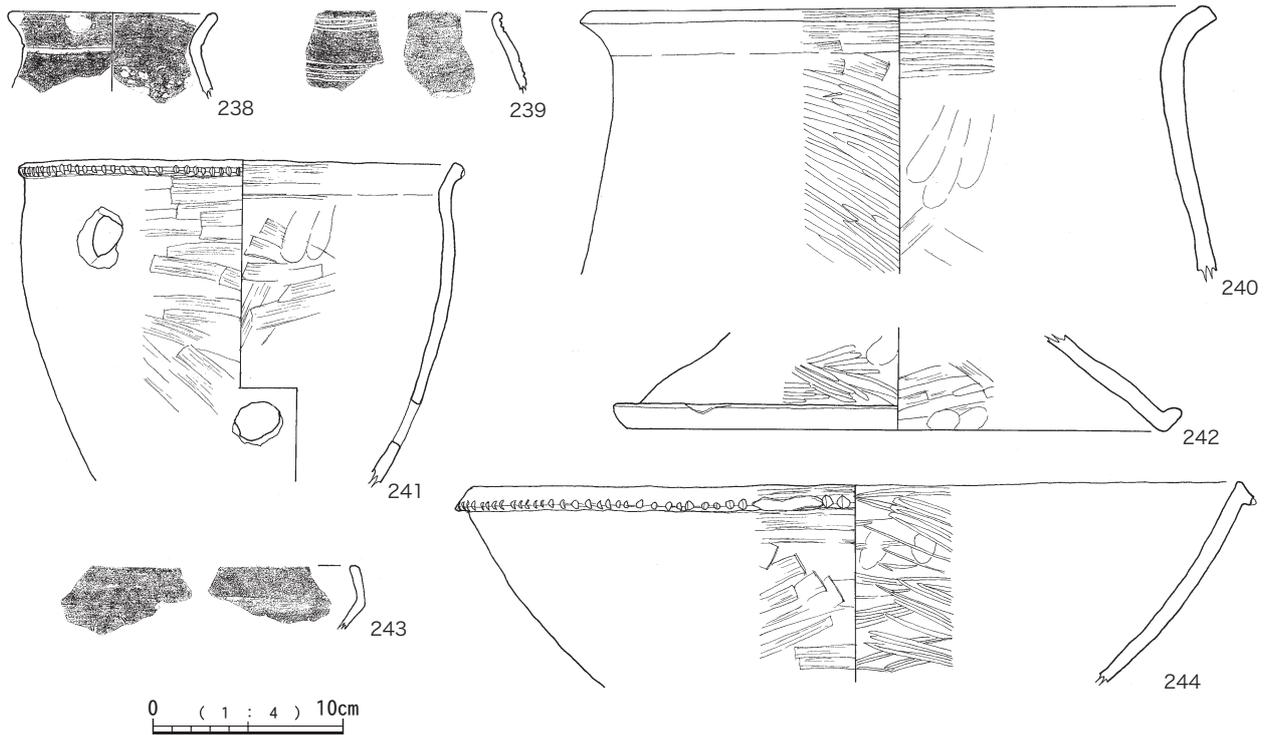


図29 出土土器 (16) Dトレンチ

#### Dトレンチ出土土器

217～274がDトレンチ出土土器である。217～245・249はⅠ・Ⅱ区出土土器で、246～248・250～274がⅢ・Ⅳ区出土土器である。217・219～223がⅠ・Ⅱ区2層出土土器である。217は壺形土器、219～221が甕形土器、222・223は鉢形土器である。219・220は屈曲する口縁で、端部に刻目を入れる。221は、口縁部は外反して端部に刻目を入れるが、胴部屈曲部では、刺突文の上下に沈線を引き、見かけ上の刻目突帯を顕すものである。222は椀形の鉢形土器の鉢部である。

218・224～227は3層からの出土のものである。218は壺形土器である。224は甕形土器で口縁端部がわずかに屈曲して外反し、刻目が施される。225は口縁が外反する鉢形土器、226は椀形の鉢形土器である。227は甕形土器の底部で、安定した平底である。

228～237は4層出土の土器である。228～230は壺形土器で、228・229は口縁部で、229は口縁下に沈線を2条巡らす。230は肩部に重弧文の沈線を施す。231～233は甕形土器で、231は外反する口縁部の端部に、232は外反する口縁端部の上下端に刻目を施している。233は口縁部から下がった位置に突帯を貼付け、下位に突帯とともに刻目を施す。234は甕形土器の蓋形土器と思われる。235は口縁端部に突帯を貼付け、上面にやや広い面がつくられる。236は鉢形土器。237は甕形土器の底部で真ん中に穿

孔して甑とする。

238～244は5層出土の土器である。238は口縁部と頸部の境目に段がある。239は無頸壺で、沈線が施される。240は大型の壺形土器である。241はわずかに外反する口縁部で端部に刻目が施される。242は蓋形土器、243は浅鉢形土器である。244は内面が丁寧にヘラミガキされ、外面が工具ナゲで、突帯文土器の半粗製鉢に近い。

D-Ⅲ・Ⅳ区は貝層が無く、貝層を切り込んで遺構等で攪乱されていた。下位の4層と5層は攪乱が及んでいないと判断できる。245～267までは3層から上位の出土土器で、268～273は4層と5層出土土器である。

245～248は壺形土器で、古いものと新しいものが混在している。245は口縁部が大きく外反する。246は口縁部と頸部の境に沈線を巡らす。247は肩から胴部上半に矢羽根状の沈線を上下の平行沈線で挟む。248は頸部側に鋭い細い沈線がはみ出して施文される。249は鉢形土器で、若干内傾して立ち上がった口縁が端部で短く外反する。250は刻目突帯を口縁部と胴部に2条貼付け、口縁部突帯の下縁を指頭で押さえる。口縁上部は内斜する。251は如意状口縁で、口縁端部に刻目が施される。252は甕形土器の蓋である。253は刻目突帯を口縁部と胴部に2条貼付ける全体が外開きの器形である。254は口縁部がやや内傾して立ち上がり、胴部と口縁部に刻

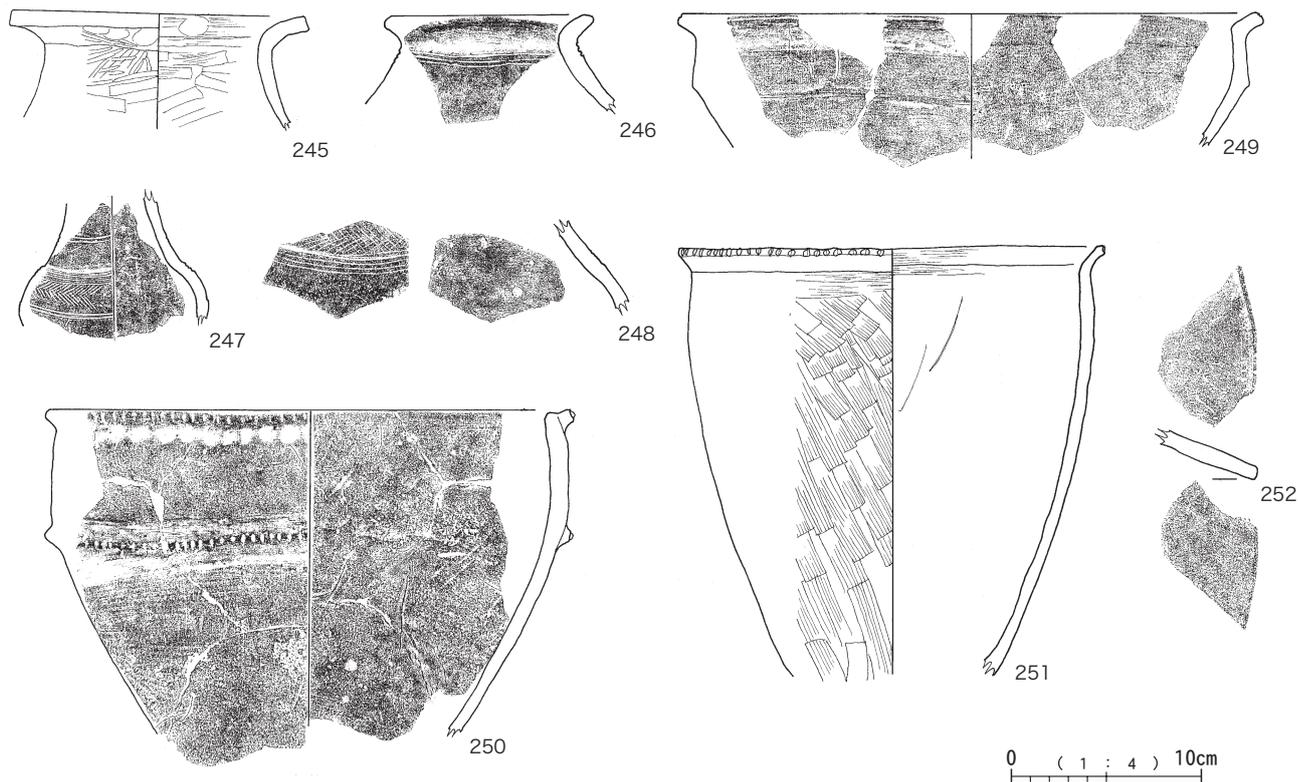


図30 出土土器 (17) Dトレンチ

目突帯を巡らせる。255は幅広の刻目突帯を貼付ける。256は外反する口縁部である。胴部に刻目突帯を貼付ける。257・258は底部中央に穿孔した甕形土器である。259～267は鉢形土器あるいは台付鉢形土器の鉢部である。259は口縁部が屈曲して外反する鉢形土器である。261は口縁部が全体で肥厚する鉢形土器で、台付鉢形土器の可能性もある。260は綾羅木Ⅲ式土器の鉢形土器である。262は肩部で屈曲して内傾する口縁部の鉢形土器である。263は262に比べると屈曲が弱く、直立して立ち上がり口縁端部が外反する。264・267は碗状の鉢部で、台付鉢の可能性が高い。265は口縁部の外端部から縦方向に粘土紐を垂らして貼付けられるものである。266は小型の精製土器である。

268～273は4層・5層出土土器である。268は刻目突帯部分が強く屈曲する器形で、調整は内外面ミガキであり、夜白式系の深鉢と考えられる。269と270は壺形土器で、頸部や肩部に沈線を施す。271～273如意状口縁の甕形土器は、いずれも口縁端部外側に刻目を施す。274は表層出土の円盤状の土製品である。穿孔が1孔あるが用途は不明である。

#### Eトレンチ出土土器

Eトレンチは層位が安定していない。

275～288はEトレンチ出土土器である。275～

282は壺形土器である。283～286が甕形土器、287が鉢形土器、288は蓋形土器の可能性もある。275は口縁部が大きく外反する。276は口縁部が上面に面を作り、L字状の口縁をなす。277は鋤形口縁に近く、内側に稜が出て、広い口縁部正面に沈線が縦方向に2条間隔を置いて刻まれる。口縁部の端部には凹線が一条入る。中期の壺形土器である。278は大きく外反する口縁部の内外面に細い突帯を貼付け、突帯と口縁端部に刻目が入る。東九州の土器に類似する。279は頸部が短く、口縁端部に凹線が入る。280～282は頸部から肩部あるいは胴上部で、平行沈線文で挟まれた中に、三角形文や三角形充填文の沈線文を施す。283はL字状口縁で胴部に2条の刻目突帯を巡らす。284はL字状口縁の小型の甕形土器である。285は甕形土器の口縁部で、L字状で口縁部とその下の突帯を縦位突帯で結ぶものと思われる。286は口縁部に刻目突帯が巡り、胴部が張らずに口縁に至る器形であろう。287は口縁部が立ち上がり、端部が外反する鉢形土器である。288は穿孔を持つ張出し部があり、紐跡もあることから紐を通して使用していたものと考えられる。蓋形土器であろう。中期前半の土器が主体である。

#### Fトレンチ出土土器

289～295はFトレンチの出土土器である。289は

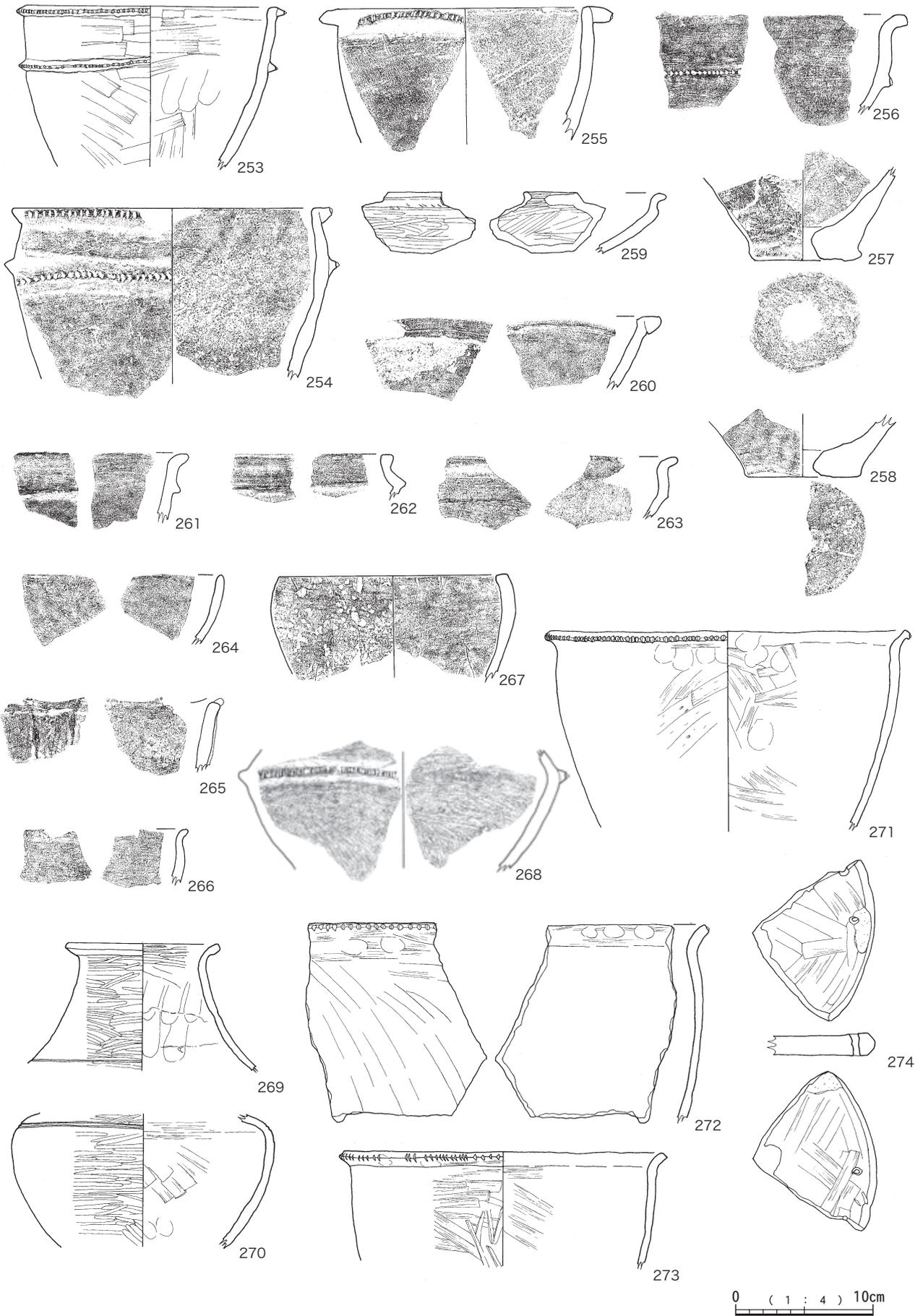


図31 出土土器 (18) Dトレンチ

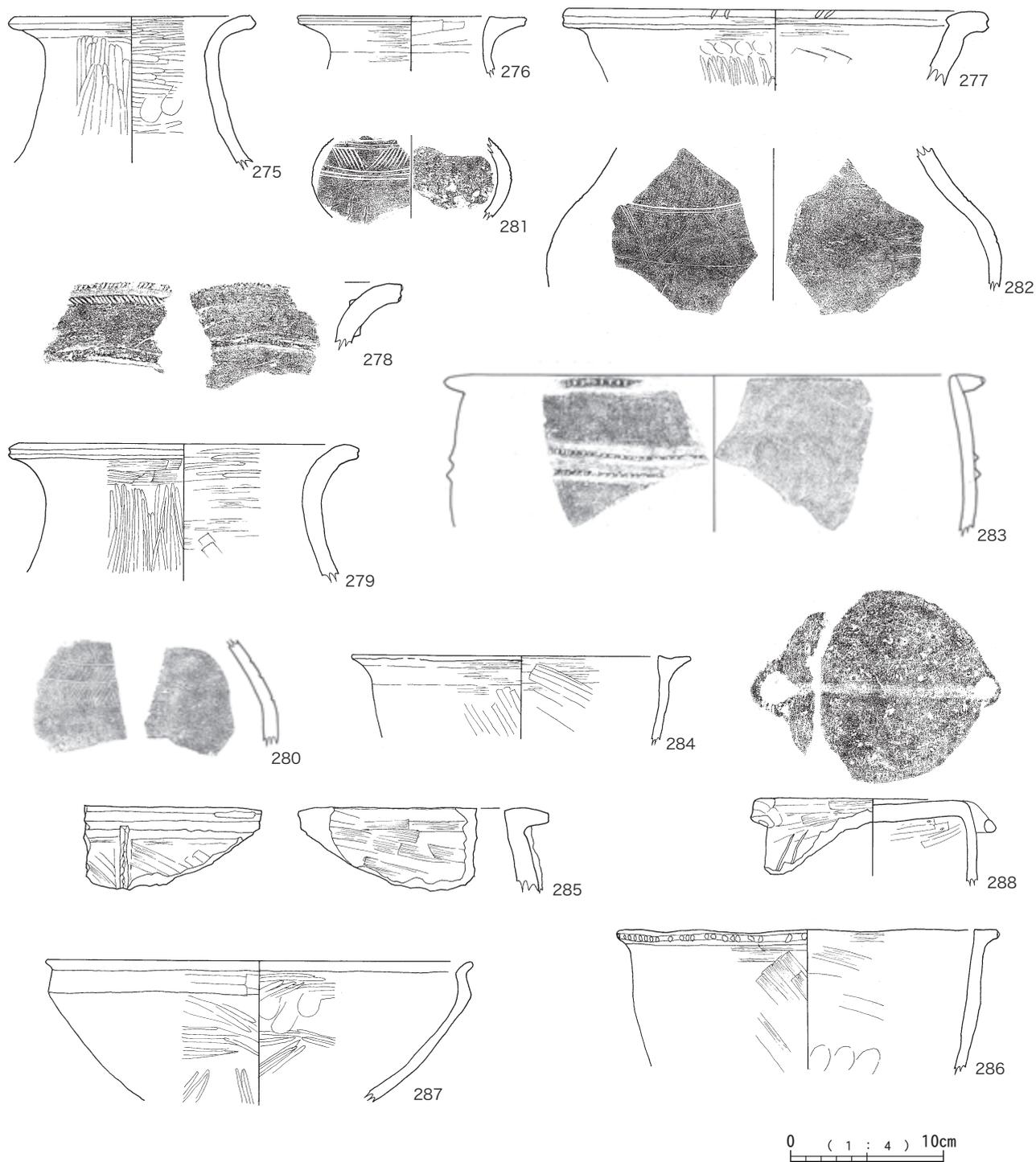


図32 出土土器 (19) Eトレンチ

頸部が長く内傾して口縁部に至る壺形土器で、肩部に沈線が回る。290は壺形土器の胴上部で、綾杉文の沈線文が施される。291～294は甕形土器で、291は貝殻条痕で調整され、口縁部突帯は口縁部の上端から下位に貼付けられる。292は砲弾形の器形で、口縁部と胴部に刻目突帯が貼付けられる。293は口縁部突帯が張出し、上面に面を作る。292の器形と同

様で、胴部に2条貼付けられる。294は口縁部に刻目突帯が回る。295は肩部で立ち上がり端部が外反する鉢形土器である。291が夜白式土器、289が前期、292～294は前期末～中期にあたる。

#### G・Hトレンチ出土土器

296～300はGトレンチ及びHトレンチ出土土器で

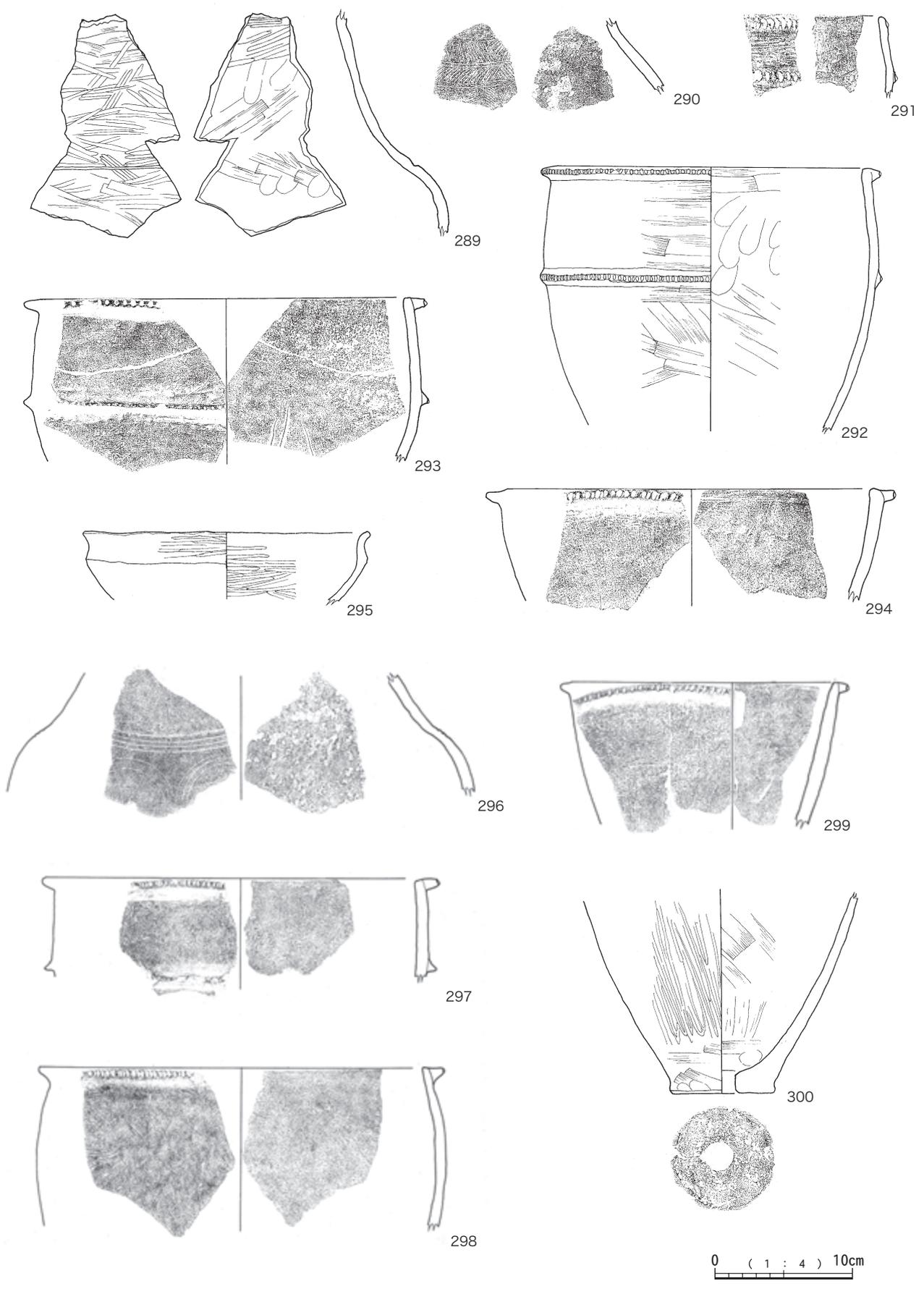


図33 出土土器 (20) F・G・Hトレンチ

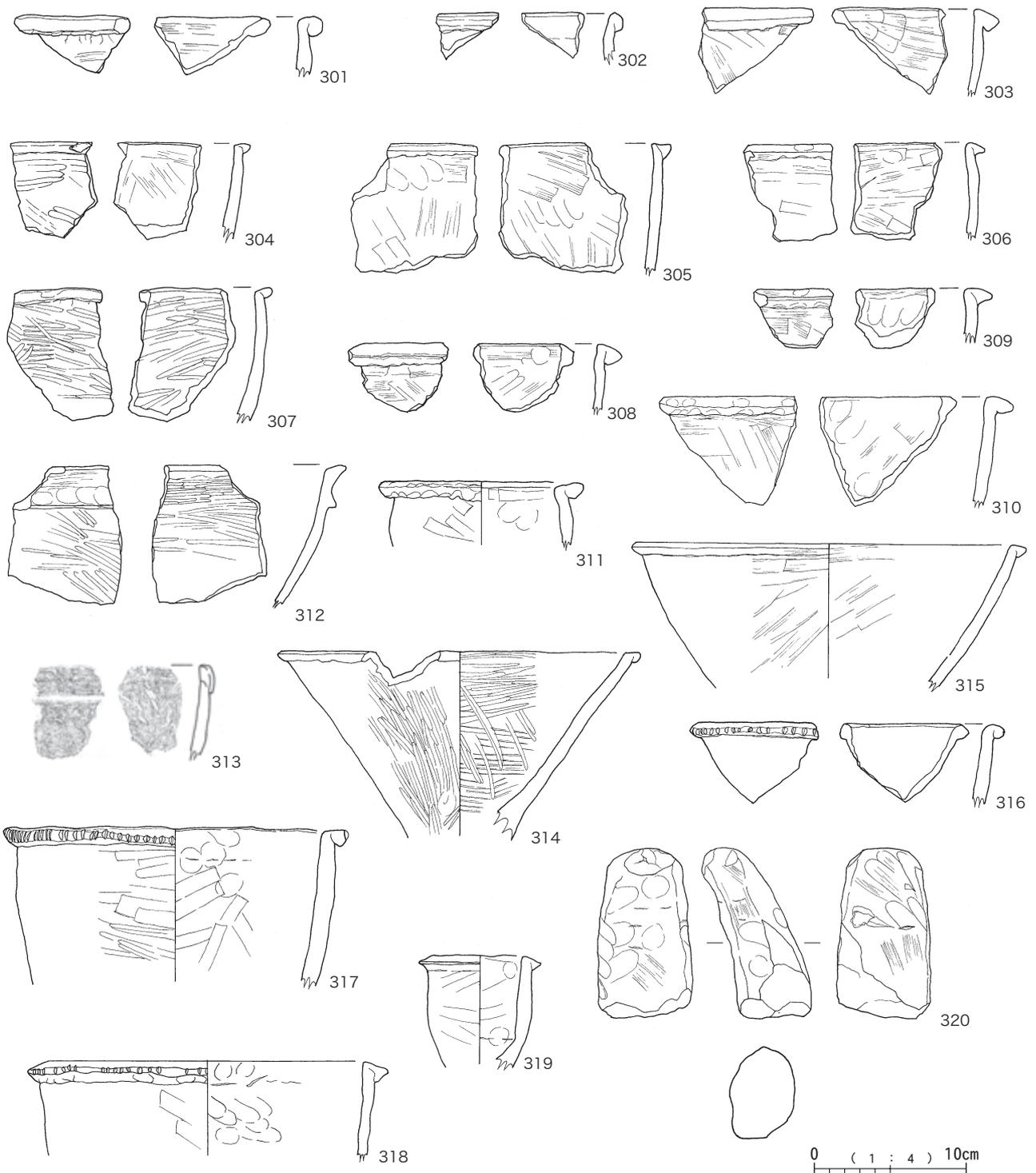


図34 出土土器 (21) 無文土器

ある。296は肩部から胴部上面に平行沈線文と重弧文が施される。297は口縁部と胴部に2条の刻目突帯を巡らす。口縁部上面に面が形成される。298・299は口縁部に三角形の刻目突帯が巡る。300は甕形土器の胴部下半部であるが、やや胴部が膨らむ器形で、底部の中央を穿孔して、甌として使用した。

各トレンチ出土土器は、甕形土器は如意状口縁のもの、口縁部に一条刻目突帯を持つ甕形土器と口縁部が外反し胴部には刻目突帯が回る甕形土器のそれぞれの形式で、型式が追えそうである。甕形土器は、この3つの型式の甕形土器の組合せで型式変化していき、壺形土器と鉢形土器が加わる様式構成をなす。

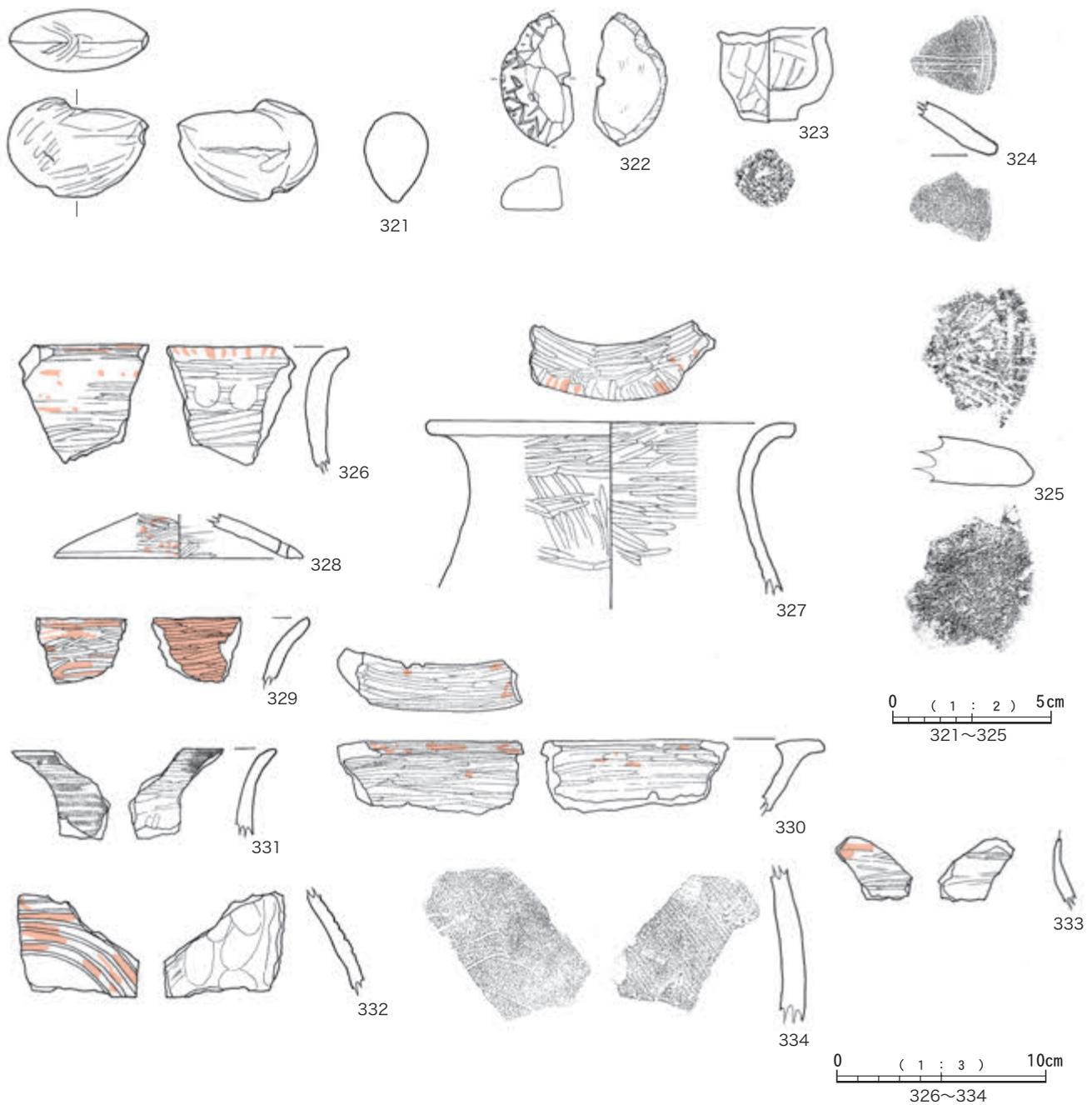


図35 出土土器 (22) 彩色土器

**無文土器**

ここでの無文土器は、土器の分類上のもので、朝鮮無文土器を念頭としながらも、系譜的には遠いものである。在地の弥生土器とは、刻目を持たず、突帯が丸く、突帯の下縁調整がなされないなどの特徴と、土器色が明るく、胎土が多孔質であるなどの、異なる一群の土器である。

301・302は口縁端部を丸く巻き込み、刻目を有さない無文土器である。図版2の552・553は丸い突帯部分である。303～311・319は、全体に小型で、断面は貼り付けで巻き込みは明確に見られないが、突

帯に刻みが入らず、突帯の下辺処理がなされておらず、土器色が薄く胎土も異なることから、無文土器で分類した。その他のものは図版2の554～561にも掲載した。313は帯状に口縁部を肥厚させる。314は三角形粘土帯土器の影響を受けた可能性がある。316～318は刻目突帯であるが、同様に突帯の下辺処理がなされていないものである。一部は入来式土器に入るものもあるのかもしれない。320は支脚で、後期の末のものと考えられる。562は牛角形把手の可能性もある。

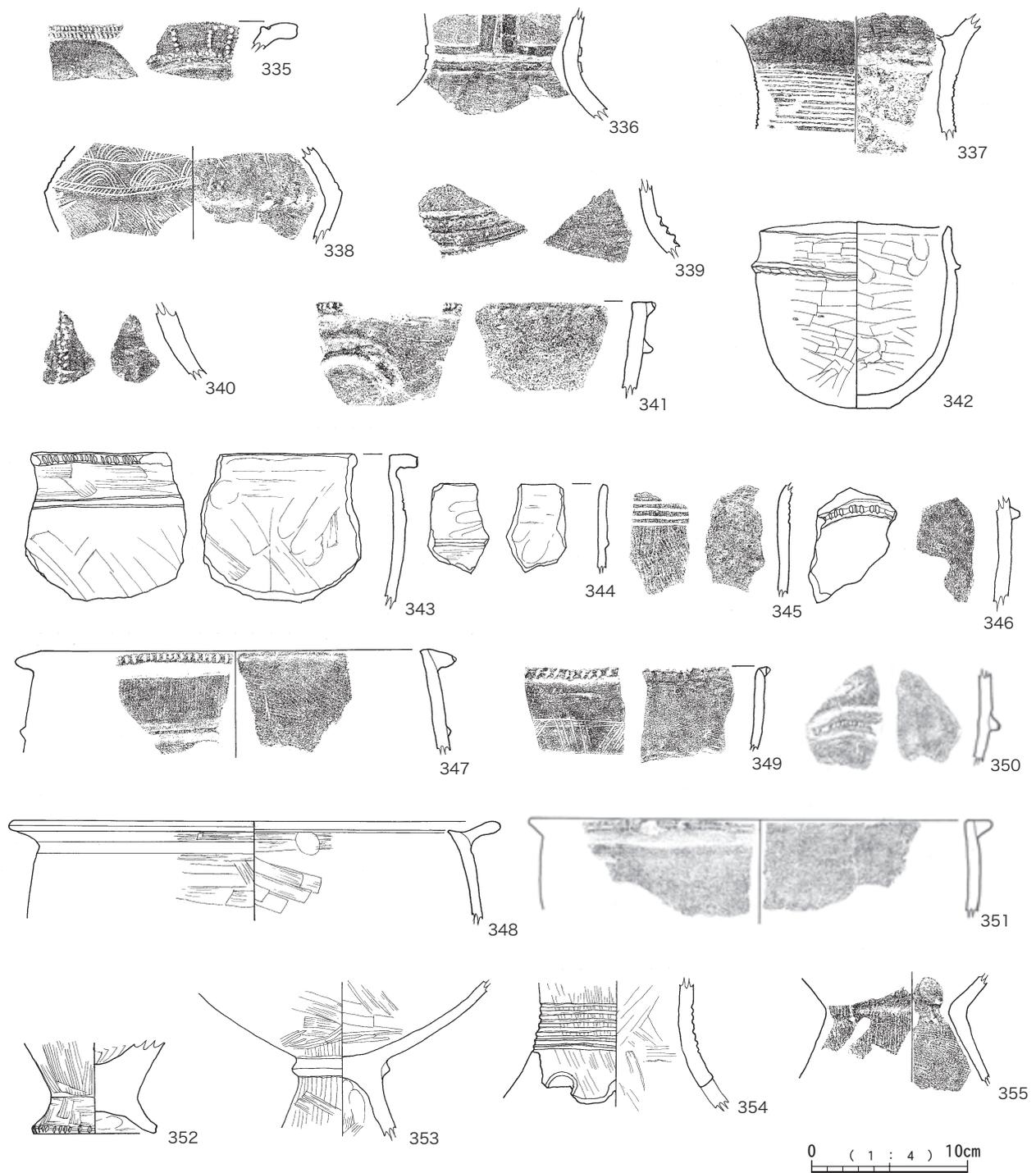


図36 出土土器 (23) 他地域の土器

#### 土製品・彩色土器等

321は河口により「水鳥」の土製品として報告されたものである(文献37)。全面が研磨され、ヘラ状工具で形づくられる。322は中央に穿孔があり、放射状に刺突文や沈線で文様が入られるもので、紡錘車の可能性がある。323は手づくねの小型土器で貝層の上からの出土である。ヘラ状工具で成形している。324は壺形土器の蓋である。325は円形をな

し、上面に沈線を放射状に引き、底面が中央にむけてわずかに湾曲した土製品である。

326~333は彩色土器である。彩色土器は、331の黒色以外は赤色の顔料が塗布される。328の壺の蓋形土器を除けば壺形土器である。334は中期の甕形土器の胴上部に、線刻を施すもので、内側はハケ目外側は工具ナデ後ナデである。

表3 Bトレンチ甕形土器口縁部形状による出土破片数

	如意形	貼付凸帯	直口	口縁下凸帯	合計
1	18	391	—	—	409
2	41	95	—	—	136
3	39	68	—	—	107
4	5	13	1	—	19
5	3	17	1	—	21
6	0	23	—	1	24
合計	106	607	2	1	716

表4 Dトレンチ甕形土器口縁部形状による出土破片数

	如意形	貼付凸帯	直口	口縁下凸帯	合計
1	27	477	1	2	507
2	29	96	—	—	125
3	30	25	—	—	55
4	28	23	2	2	55
5	23	21	2	8	54
合計	137	642	5	12	796

■ … 純貝層

### 他地域の土器

335は大きく開く口縁部の内面に突帯が巡り、円形の刺突文が施される。口縁外端部には沈線を横方向に引いた後に、短沈線で刻目が施される。339の壺形土器の肩部の貼付突帯とその間に円形の刺突文を施すものと、340の壺形土器の円形刺突文のある頸部のものとは同一個体の可能性もある。336は壺形土器の頸部である。幅広な突帯で文様をなす。同様の文様のモチーフは、龍郷町ウフタ遺跡の壺形土器、十島村宝島の壺形土器、与論町上城遺跡の壺形土器と似ている。これらは弥生時代前期の時期であり年代的にも整合する。337は壺形土器の頸部に沈線が12条施され、口縁部内側には突帯をもつもので、北四国地方の阿方式土器の壺形土器の頸部である。338は後期の免田式土器の壺形土器の胴部である。341は口縁部に低い刻目突帯を巡らす、口縁下に外耳を貼付ける。342はよく知られる仲原式土器の完形品である。343はL字状に外反する口縁部で、口縁下に2条の沈線を巡らせる。西部瀬戸内の中期前葉の土器の可能性もある。344は口縁部を幅広く肥厚させる甕形土器で、これも仲原式にみられる。346・350も山なりの刻目のある短突帯を貼付けているが、これも外耳土器と判断できる。沖縄・奄美の弥生時代併行期の土器の影響と考えられる。

345は、第Ⅱ様式の甕形土器で、備讃瀬戸あたりの甕形土器の可能性もある。347は口縁部に規則正しい刻目をなす突帯で、351も同様に、縦方向のハケ目調整を突帯間になす。北九州からの搬入品である。348は鋤形口縁で、北九州の中期土器であろう。349は口縁刻目突帯の下位に、沈線で三角文を描く。352はハケ目調整で、底部脚の外端部に刻目を施す。353は脚に縦方向のハケ目調整がなされる。これらは北九州からの搬入品と考えられる。354は西部瀬戸内Ⅳ様式の器台の可能性もある。355も器台であるが南九州以外の搬入品であろう。

この他の出土品として、土製品では紡錘車と土製円盤（図版10 697～722が土製円盤、723～726が紡錘車破片、紡錘車の完形品は既報告）がみられた。

出土状況については、表3～表6にある。土器の総量は全体のパンケース数と、ここに上げる甕形土器のトレンチでの口縁数、甕棺・大甕破片数、丹塗り土器の葉変数から察していただくしかない。

表3・表4はBトレンチとDトレンチにおける甕形土器の口縁部の形状による層別の出土破片数である。Bトレンチは5層から如意状口縁が出現し、6層は夜白式土器の層と考えられる。その上位の層から如意状口縁が流入して、如意状口縁と貼付突帯の口縁の甕形土器が共存していることを示している。貝層下で、遠賀川系の甕形土器が本格的に流入してきた。上層では突帯のものが凌駕するが一定数が継続する。

また、表5・6は、各トレンチにおける層位ごとの甕棺・大型甕形土器と丹塗り土器の破片数である。図版3に甕棺・大甕の破片を抽出したものと、丹塗り土器を抽出したものを示す。1層を中心に出土している。そして、A～Cトレンチの3層以下とDトレンチの3層から5層のものは、発掘区での攪乱の度合いを示す結果となる。甕棺・大甕はA～Cトレンチ、つまりは貝塚の北東側の斜面方向に多く出土している。破損して廃棄された可能性もうかがえる。

中期の1層の破片数の多さが理解されると考えるが、前期を凌駕する土器片が出土している。おそらくは中期の包含層であったと考えられる。日誌を読むと当初は表土剥ぎを行って、つぎに1層と記述されているのであるが、土師器等の出土で、攪乱ととらえられている。攪乱はあるものの、前期末～中期の包含層と考えられる。そして、甕棺祭祀も行われていた可能性が強い。

主要な土器の時期は、従来に加えて前期末～中期が加わる。またそれ以降も中期を通じて遺跡地であったものと考えられる。

表5 甕棺破片層位別出土表

	A	B	C	D	E	F	G	H	その他	合計
表土	2	6	—	—	2	4	—	—	2	16
1	40	26	15	36	57	19	3	—	38	234
2	1	1	6	1	2	1	—	—	—	12
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4	—	—	—	2	—	2	—	—	—	4
5	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
層不明	—	1	8	2	5	1	—	—	22	39
攪乱	—	—	2	—	—	—	—	8	—	10
遺構内	1	—	—	—	—	—	—	1	—	2
合計	44	34	33	41	66	27	3	9	62	319

表6 丹塗り土器層位別出土表

	A	B	C	D	E	F	G	H	その他	合計
表土	—	3	1	1	—	—	—	—	—	5
1	70	13	42	27	28	9	—	—	1	190
2	8	4	29	—	1	8	2	—	—	52
3	5	2	6	8	—	—	—	—	—	21
4	1	2	—	4	—	—	—	—	—	7
5	—	—	—	21	—	—	—	—	—	21
6	3	2	—	—	—	—	—	—	—	5
層不明	4	—	24	2	—	3	—	—	23	56
攪乱	—	—	—	—	—	1	—	12	3	16
遺構内	11	—	5	—	—	—	—	—	2	18
合計	102	26	107	63	29	21	2	12	29	391

## 註

註1 令和6年9月28日・29日に行われた鹿児島大学石田智子准教授が主催し、弥生土器研究ネットワークの九州弥生研究ネットワーク・弥生時代中期土器併行関係検討会が共催した『弥生土器検討会』が県立埋蔵文化財センターで開催された。そこでたくさんの方々から高橋貝塚の土器について、御教示・示唆をいただいた。特に綾羅木式土器については、山口大学埋蔵文化財資料室の田畑直彦氏のご教示による。以下の記述で「綾羅木式土器」は同じである。また無文土器、他地域の土器についても検討していただいた。

## 2 石器・石製品

356～358は石鏃、359は石鏃の未製品である。360～376は石錐である。360～367は以前の報告で石槍として報告してあったものである。356は黒曜石の石鏃の完形品で、357は安山岩の石鏃の完形品で、いずれも抉りの浅い石鏃である。358は安山岩

の石鏃で先端と片脚を欠く。359は安山岩の剥片で、石鏃の素材剥片である。360は黒曜石の剥片の側縁部を刃潰しして紡錘形とし、両先端が摩滅している。361は黒曜石の剥片の先端部に、横方向からの整形剥離を行い、先端部を作り出す。362は安山岩の剥片の両側縁から横方向の整形剥離で先端を作り出し、先端から槌状剥離も入り、先端部は摩耗している。363は黒曜石の剥片の両側縁から横方向の整形剥離で先端を作り出し、先端は摩耗している。364は安山岩の剥片で、紡錘形をなすが、下側の先端部に縦方向の剥離が見られる。365は安山岩を石材とし、362や367の石錐と同形のものと考え、先端部が欠損したものととらえた。366は黒曜石の縦長剥片を紡錘形となして、上下両先端とも縦方向の使用による槌状剥離がみられる。367は安山岩の剥片の側縁部は整形剥離し、先端部が摩耗している。368は黒曜石の石錐で、先端部を欠くが、先端部側縁に横方向から錐部を作り出す細かな剥離が見られる。369から376はよく見られる形状の石錐である。

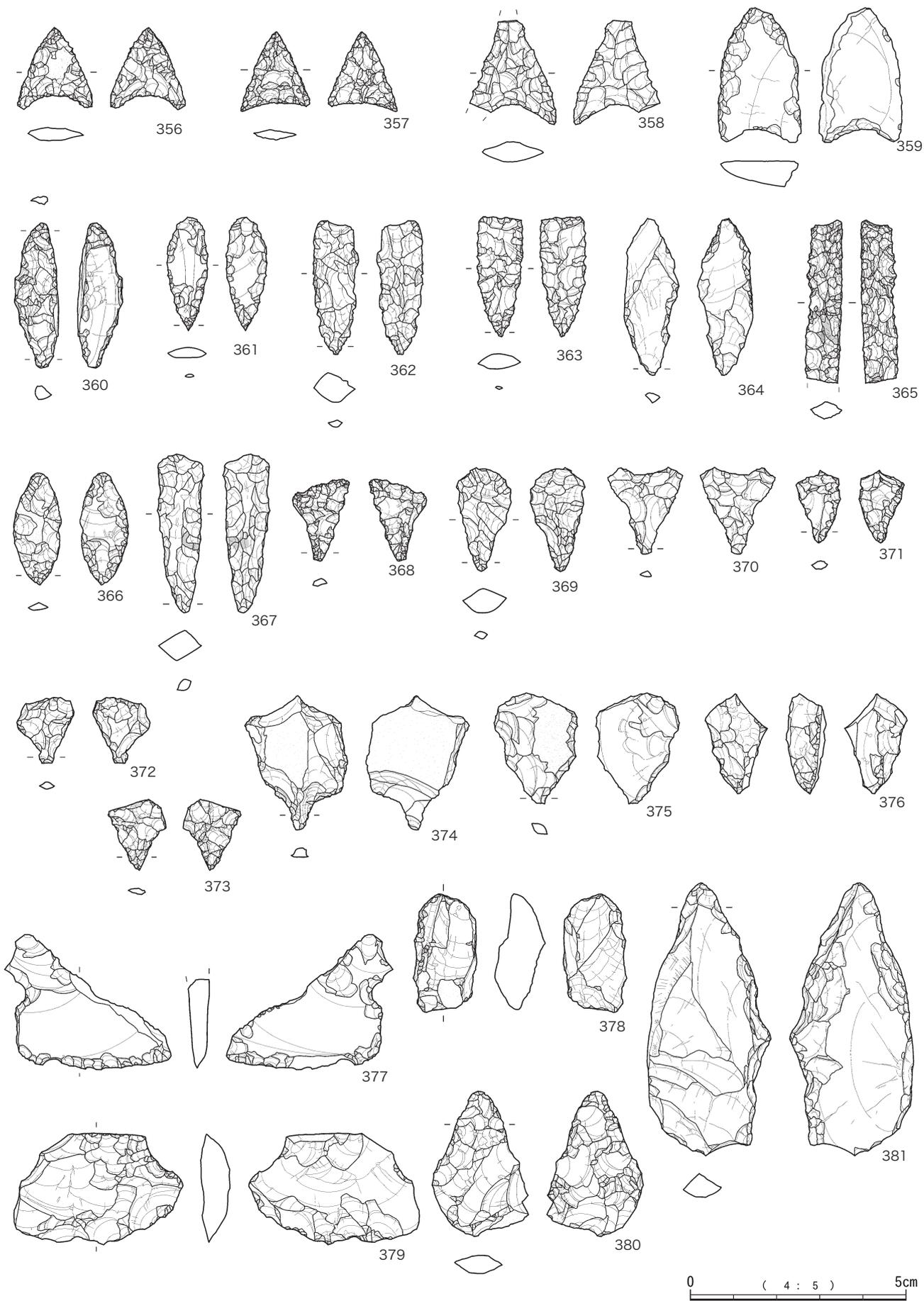


图37 出土石器 (1)

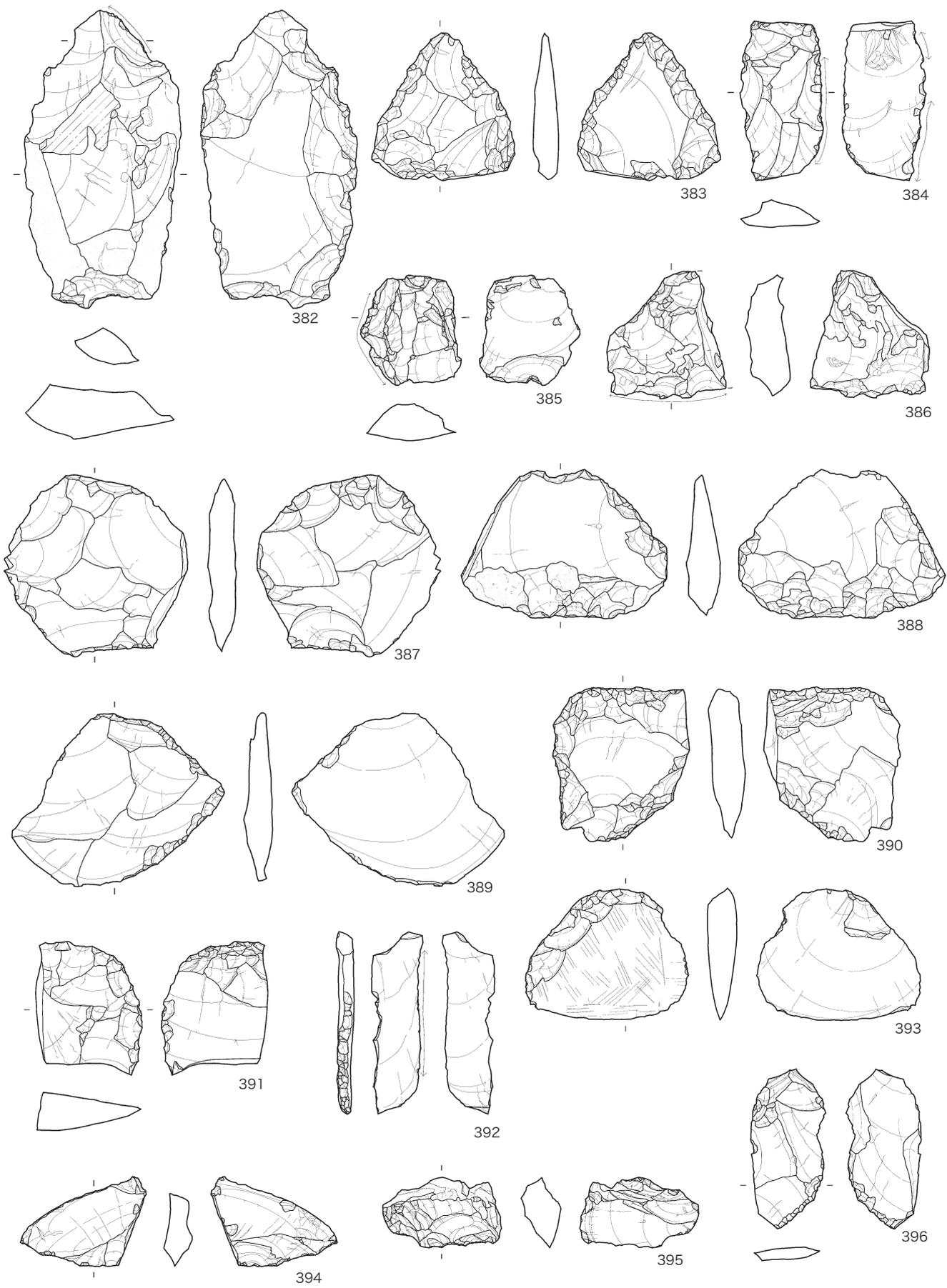


图38 出土石器 (2)

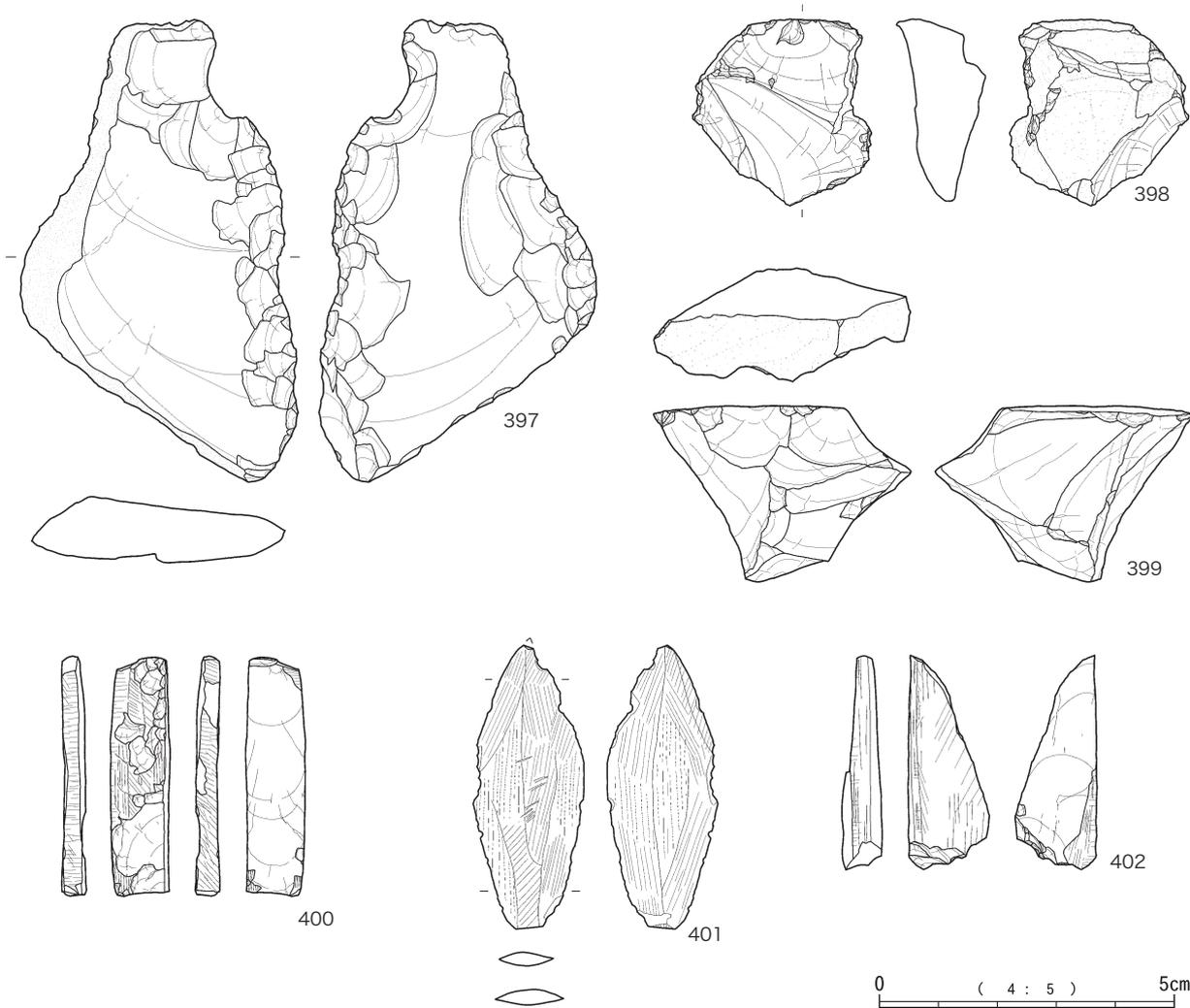
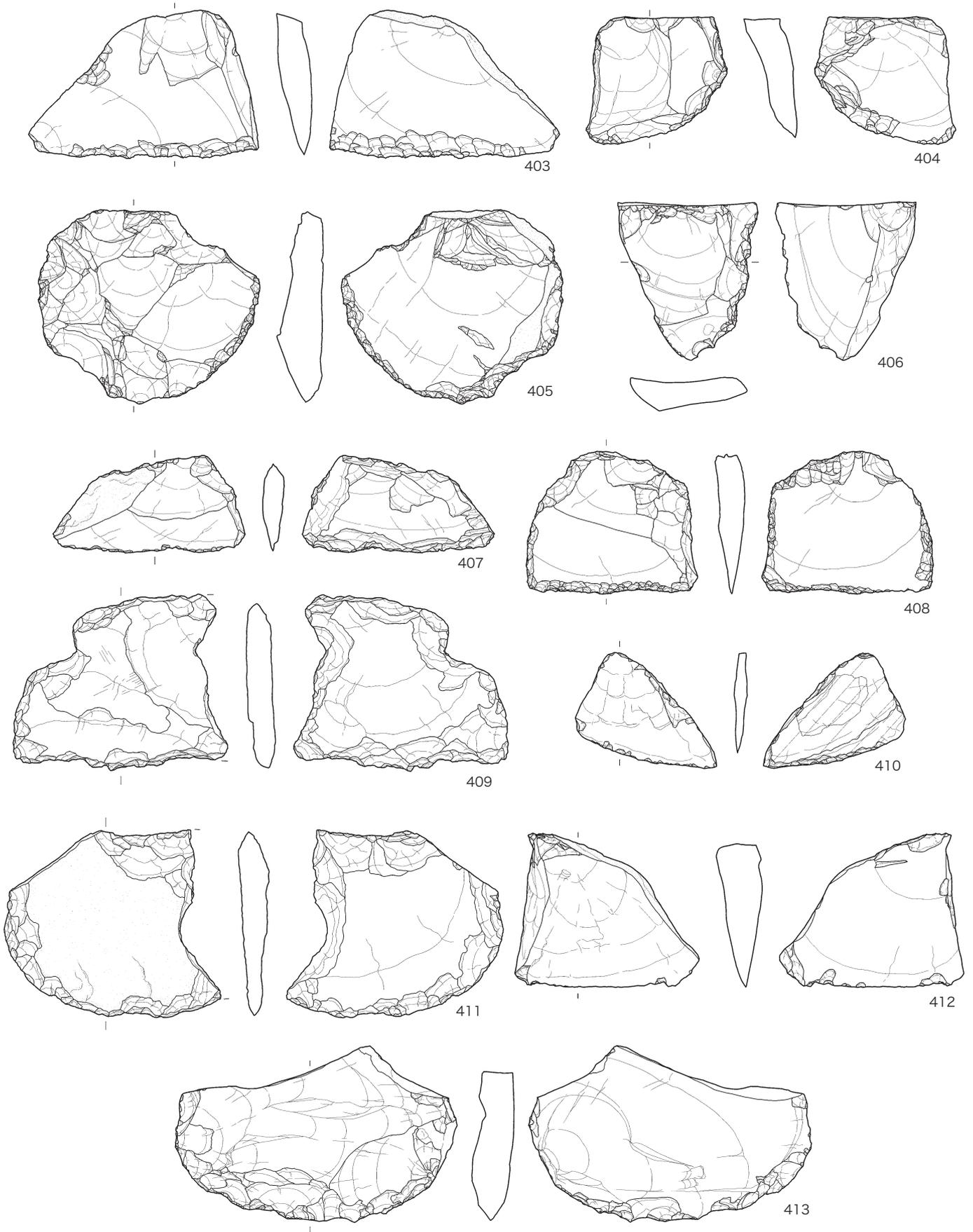


図39 出土石器 (3)

369は黒曜石の身の厚い剥片を素材として、周縁を丁寧に整形する。370は黒曜石の三角形の剥片を用いて錐部を作り出す石錐で、先端を欠く。371は黒曜石のもう少し大きな石錐が、基部の欠損後に作り直して使用されたものと考えられる。372は安山岩製の石錐で先端を欠くが、錐部の作りだしが顕著である。373は黒曜石の石錐で、基部の一部が欠ける。374は黒曜石、375は安山岩を石材とし、剥片形状をあまり変えず錐部をつくる。376は黒曜石の石錐で、基部を欠くがやや大型の石錐である。これらは黒曜石と安山岩を石材とした剥片を用い、側縁部から横方向の剥離を入れ錐部を作り出し、先端部の使用による縦方向の剥離と先端部の摩耗で、錐として使用されたと判断した。377は黒曜石の横剥ぎ剥片の形状を大きく変えず、下辺縁辺に刃部をつくり、つまみ部の挟りを入れる石匙である。378・379は楔形石器、380～383は尖頭器、384～397は使用痕剥片と二次加工剥片である。378は黒曜石の剥片の上下端部に潰れが見られる。379は黒曜石で、上の打面

に礫皮面を残し、横長剥片の縁辺に刃部が作られるが、上下に潰れが見られ、打面側の平坦面を利用して楔形石器として使用したと考えられる。380は黒曜石の剥片で、右下部に一部に礫皮が残る。左側側縁部を使った削器とも考えたが、断面線の下に平行にかすかにくびれが見られ尖頭器とした。381は頁岩の横剥ぎ剥片で周縁を整形して尖頭状に作る。382は安山岩の横剥ぎ剥片を素材として、打瘤側を大きく剥離して厚みを取り、先端部を作り出す。383は玉髓の剥片で、打面・打瘤が残るが三角形の剥片の周縁を整形して尖頭器としている。384・385は黒曜石の剥片の鋭い側縁部に使用痕跡が見られる。386は黒曜石の折断剥片で、下辺に刃部形成を行う二次加工剥片である。387は安山岩の円盤状の剥片で鋭い側縁を選択して使用された。388は安山岩の剥片の下辺に刃部形成され、他は整形剥離は見られない。389は安山岩の剥片の下辺を使用、搔器的な使用か。390は安山岩の剥片で、上辺と下辺に打撃痕があり、楔形石器の様な使い方が想



0 ( 1 : 2 ) 10cm

图40 出土石器(4)

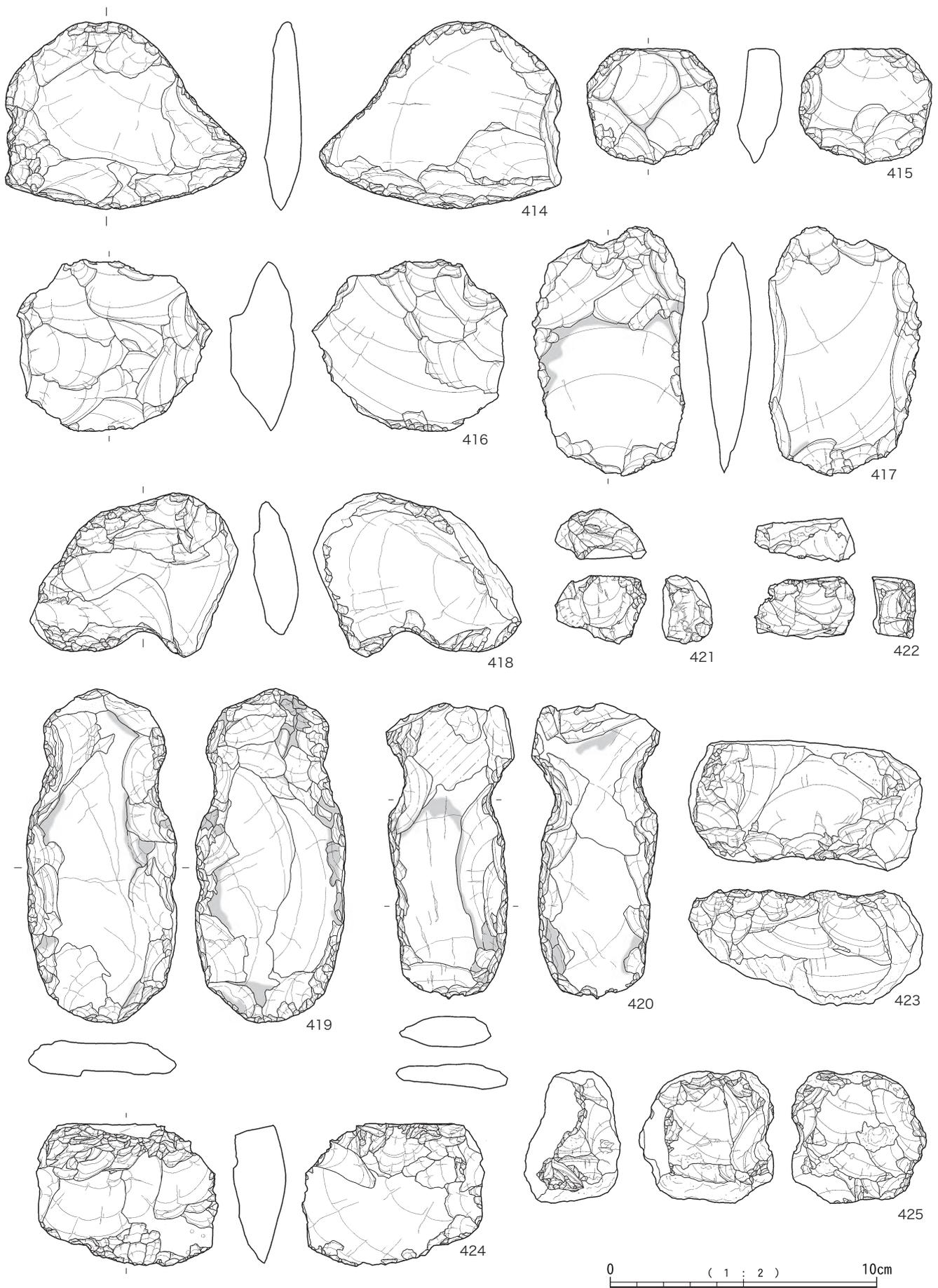


图41 出土石器 (5)

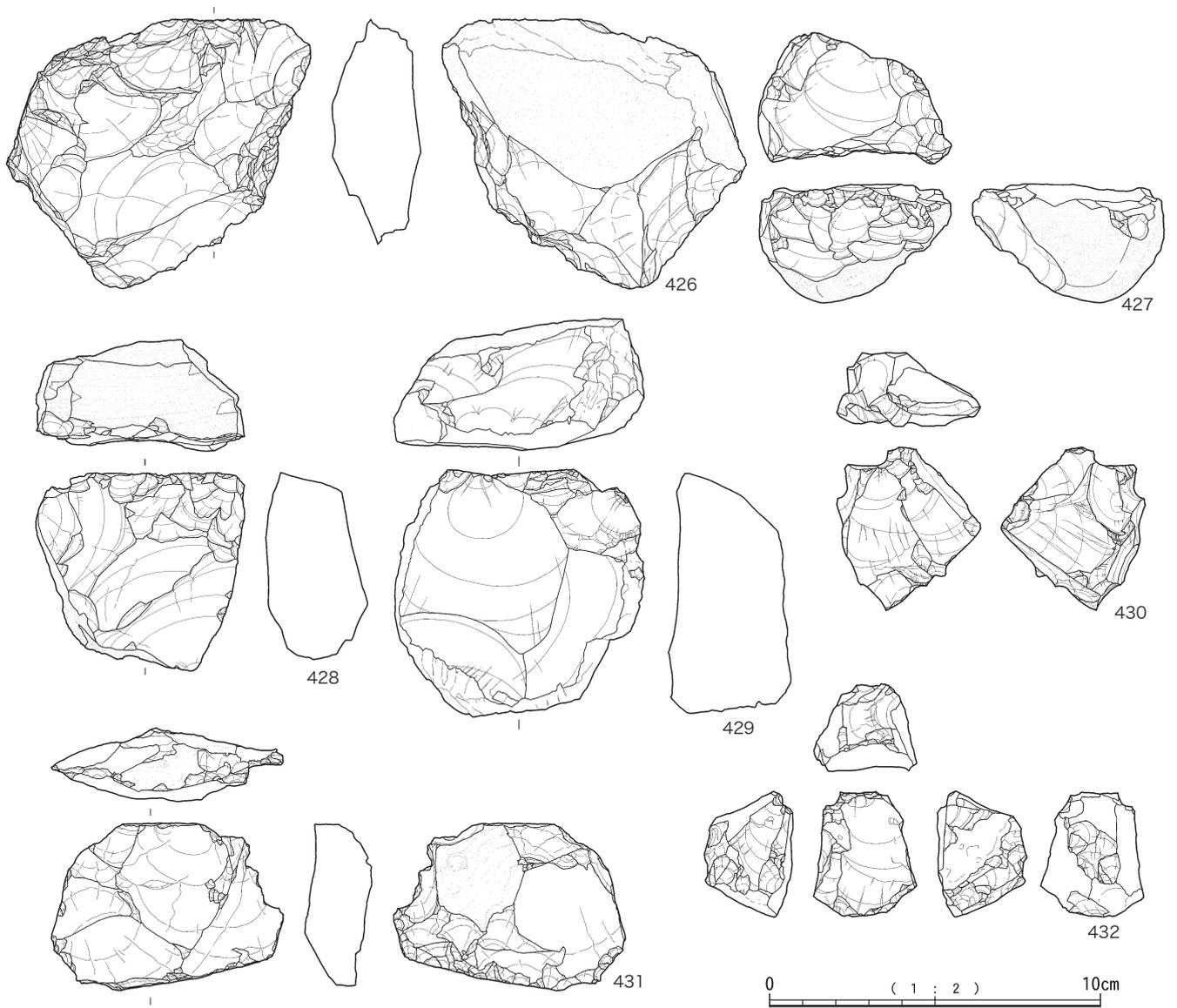


図42 出土石器 (6)

定される。391は安山岩の剥片形状から置いているが、右上辺に刃部形成がみられる二次加工剥片である。392は安山岩の剥片の左側縁にブランティグがなされ、鋭い右側の側縁に使用痕がある。393は安山岩の剥片で、背面に研磨面があり、下辺を使用して、下方縁辺に横方向の擦痕が見られる。394は黒曜石の剥片の下辺に使用痕がみられる。395は黒曜石の剥片で、剥片方向では縦位置になるが、上辺の礫皮面と下辺に使用痕が見られ、楔形石器的に使用されたものと考えられる。396は安山岩の剥片で、下縁部に微細剥離がみられる。397は左側に礫皮面が残り、右側縁に刃部と抉りが形成される。抉りを評価すれば石匙といえる。いずれも剥片形状に顕著な整形剥離を行わず、鋭い縁辺部を使用している。

398・399小型の石核で、黒曜石や安山岩を用いて、石鏃や石錐の小型のツールに合わせて小さな剥片を剥出する。401は頁岩の柳葉形の磨製石鏃であ

る。400は層灰岩、402は頁岩で方形を呈し、研磨してある石製品である。402は薄手の磨製石器の破損品の可能性がある。

403～406・408・411～413・415～418は安山岩、407・410・414は頁岩、409はホルンフェルスの剥片利用の石器である。403～411・413は横刃形石器、412は収穫具、414～418は大型の楔形石器とする。403は打面に礫皮面を残し、下辺に刃部をつくり右側縁は摩耗している。404は打面に礫皮を残し、右側から下辺が刃部である。405は打面・打瘤を残して、剥片末端の鋭いエッジを利用する。406は右側縁が刃部である。素材剥片時に新たな剥片が剥出されている。407は横剥ぎの剥片の下辺を刃部として使用。408は方形の剥片形状のまま、打面・打瘤側に若干の整形剥離を行い、左側縁と下辺に刃部をつくる。409は下辺を刃部として、抉りを持つもので、打製石包丁ともいえる。410は石包丁の未製品

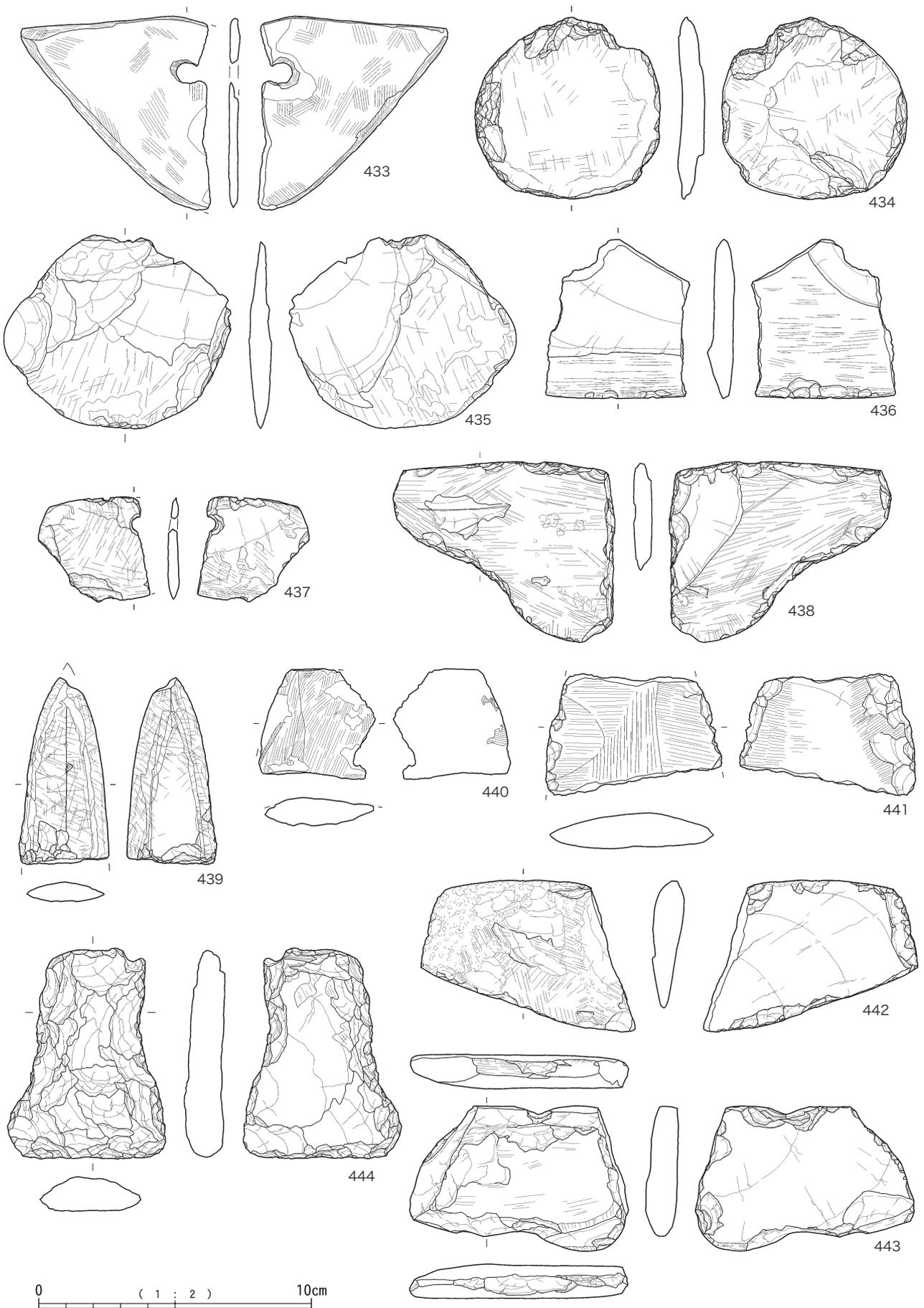


图43 出土石器 (7)

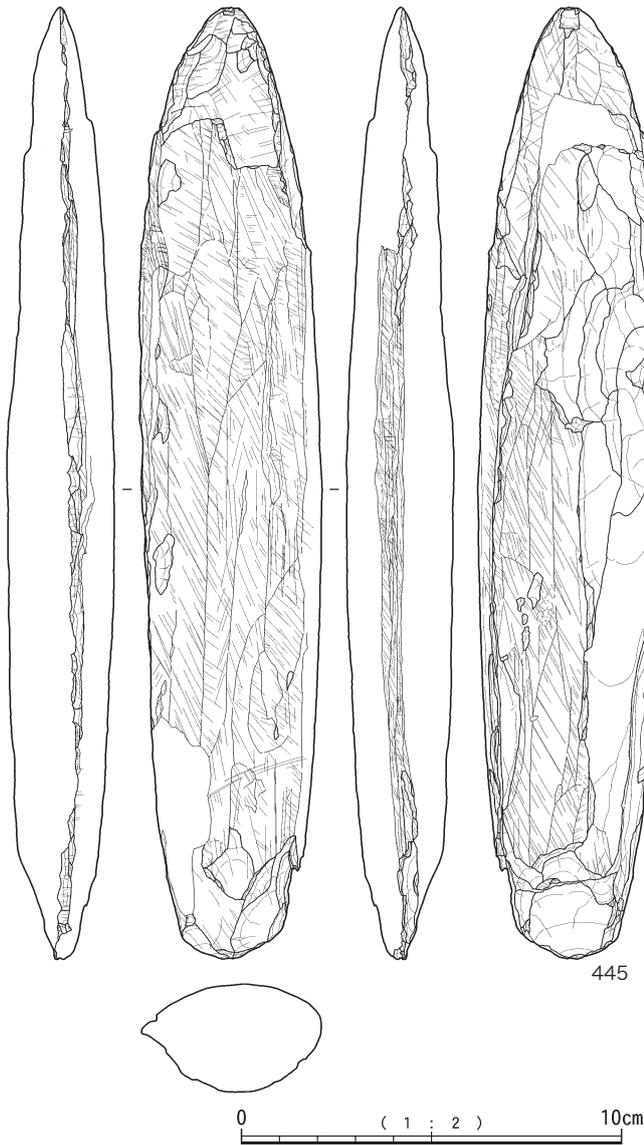


図44 出土石器(8)

の可能性がある。411は背面に礫皮が残り、左側縁から下辺にかけて刃部となす。412は上辺から右辺に礫皮面があり、下辺に使用痕がある使用痕剥片であるが、収穫具とする。413は縦長剥片の長い縁辺を利用して刃部とする。これらは打面や打瘤を薄くするという整形剥離が行われず、剥片形状を変えないまま、鋭い側縁を刃部として使用する。上層から出土するので、石包丁と併存して使用されたものと考えられる。

414は上下の刃部に敲打による潰れが見られ、大型の楔形石器の可能性もある。415も同様に上辺と下辺に敲打による潰れがあり、大型の楔形石器と考えられる。416も同様の潰れが見られる。417は安山岩の大型の使用痕剥片であるが、上下の細かな剥離状況から、大型の楔形石器としての可能性がある。418は安山岩の剥片の下部に丸く擦り・潰れ痕跡があるものである。棒状のものの研磨具の可能性もあ

る。424は安山岩の剥片で、上下に剥離痕が著しい。これも楔形石器とする。419・420はホルンフェルス素材とする打製石斧で、貝層の下からの出土である。

421～423・425～432は石核である。421・422はやや小型の石核で421は2層出土、422は3層出土、423・426は4層出土、残りは1層からの出土である。421・422は黒曜石の石核で、礫素材で貝殻状の剥片を剥出する。423は黒曜石の石核で、裏面は礫皮であり大きな礫素材で、最終作業面は打面調整しながら剥出を試みているが、良好な剥片が取れずに廃棄したものと考えられる。425は赤色の玉髓の石核である。礫素材を回しながら打面調整を行わずに剥片を剥出する。426は安山岩の石核で、裏面は礫皮面である。これも打面を転移しながら剥出を試みている。427は玉髓の石核で、石核調整・打面調整を行わずに貝殻状の剥片を取っている。428・429・431は安山岩の石核で、打面を転移しながら剥出する。430はオパールで、432は玉髓の石核で、縦長の剥片の剥出を目的としている。

433～437は磨製の収穫具である。433は石包丁で、堇青石を石材とする<sup>註1</sup>。堇青石の石包丁については図版6に掲載した。図版6には石鎌も掲載したが、図版6の下の2点は紫色味がなく、キラキラとした印象も薄く、石材は異なると思われる。434はホルンフェルスの扁平な円礫を研磨し、周縁に打撃による剥離や潰れがみられる。楔形石器の可能性もある。435は頁岩のほぼ円形の礫で、全体が研磨されている。436は石包丁としたが、安山岩で刃部は鈍い。刃部に横方向の擦痕が入る。437は頁岩の石包丁で、刃部と孔跡が残る。438は頁岩で、全体を研磨して、この形状を作っている。朝鮮青銅器時代の石刀形石製品に似ている。439は磨製石剣の刃部先端部に当たる。研磨して堆積岩の変成岩の石材の縞模様を研ぎ出す。440・441は磨面に稜が作られており、442・443含めて、磨製石製品の一部と考えられる。442は細かな敲打による整形で未製品の可能性がある。444は、研磨面は見られないが、石剣の基部に形状が似ており、未製品段階の破損品と考えた。下部の敲打痕による潰れがみられるので、敲打具の可能性もある。445は頁岩の磨製の石剣であるが、表面が垂離して部分的に剥落している。身が厚く縄文的なところと、切先部分は磨製石剣に似ているところがある。443・444は石鎌の茎部の可能性もある。

446は大型の伐採斧で今山産玄武岩製の大型蛤刃石斧である。表裏の剥離面が再研磨されている。447はホルンフェルスの加工斧である。448～457が柱状片刃石斧の破損品等である。448・454～457は層灰岩製、その他はホルンフェルス製の石製品である。448は刃部と対面に抉りが入れられ、通常と反対と



图45 出土石器 (9)

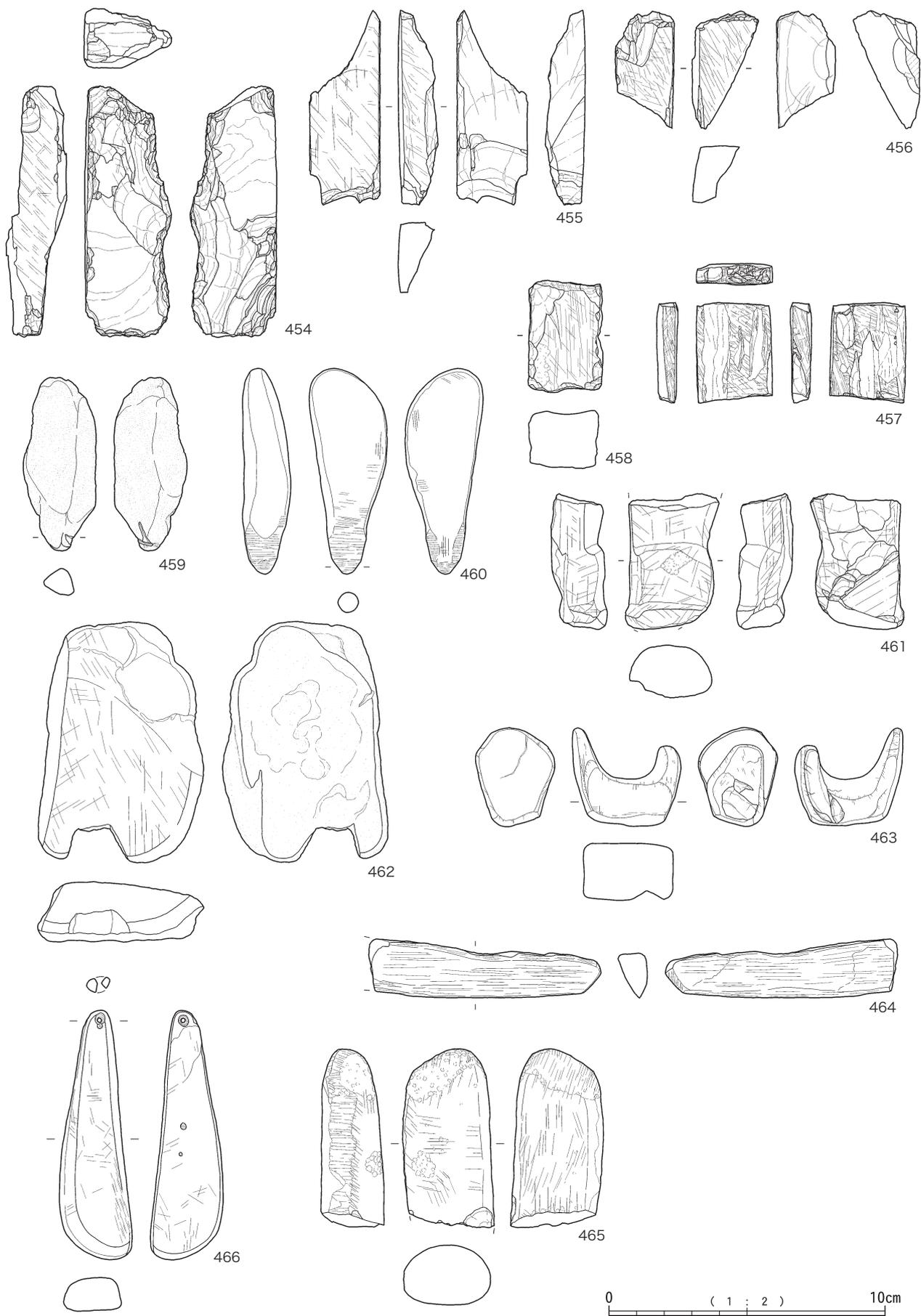


图46 出土石器 (10)

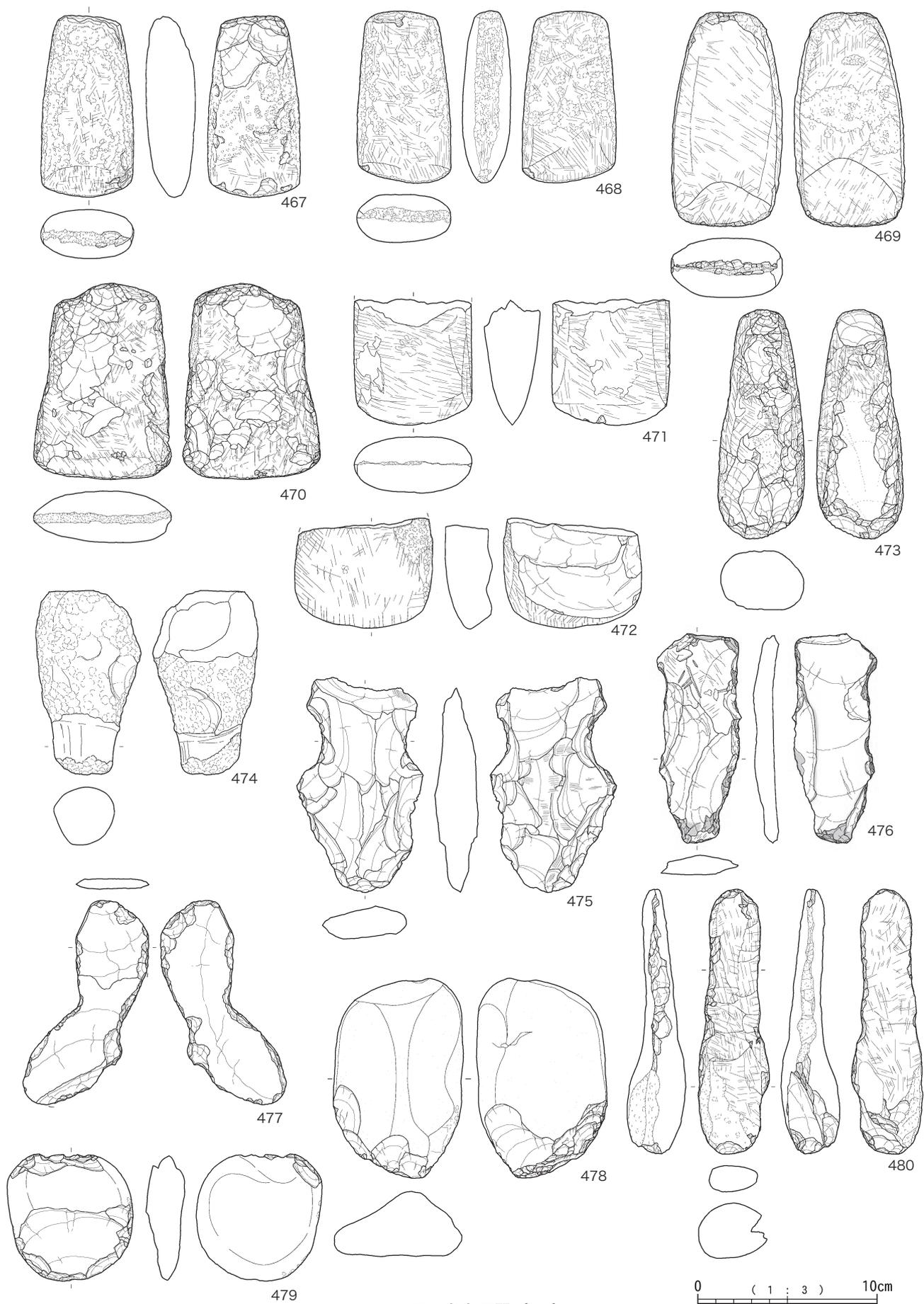


图47 出土石器 (11)



图48 出土石器 (12)



図49 出土石器 (13)

なっている。再利用を試みた可能性がある。449は層灰岩とは異なるが、緑色と紫色の互層をなすホルンフェルスを石材としている。片刃面が下部に見られるが、厚さを薄くしようと再利用を試みた可能性がある。450は破損品であるが、抉りが欠損し、石器幅も節理で層状に欠け落ちている。451は抉りが

2か所あり北九州の中期前半以降のものと類似する。448・454～457は図版5の写真にあるように層灰岩を石材としている。図版5～620のような石器素材で流通された可能性もある。

458は凹面の磨面を持つ、砂岩の砥石片である。459は砂岩、460はホルンフェルスの自然の楕円形

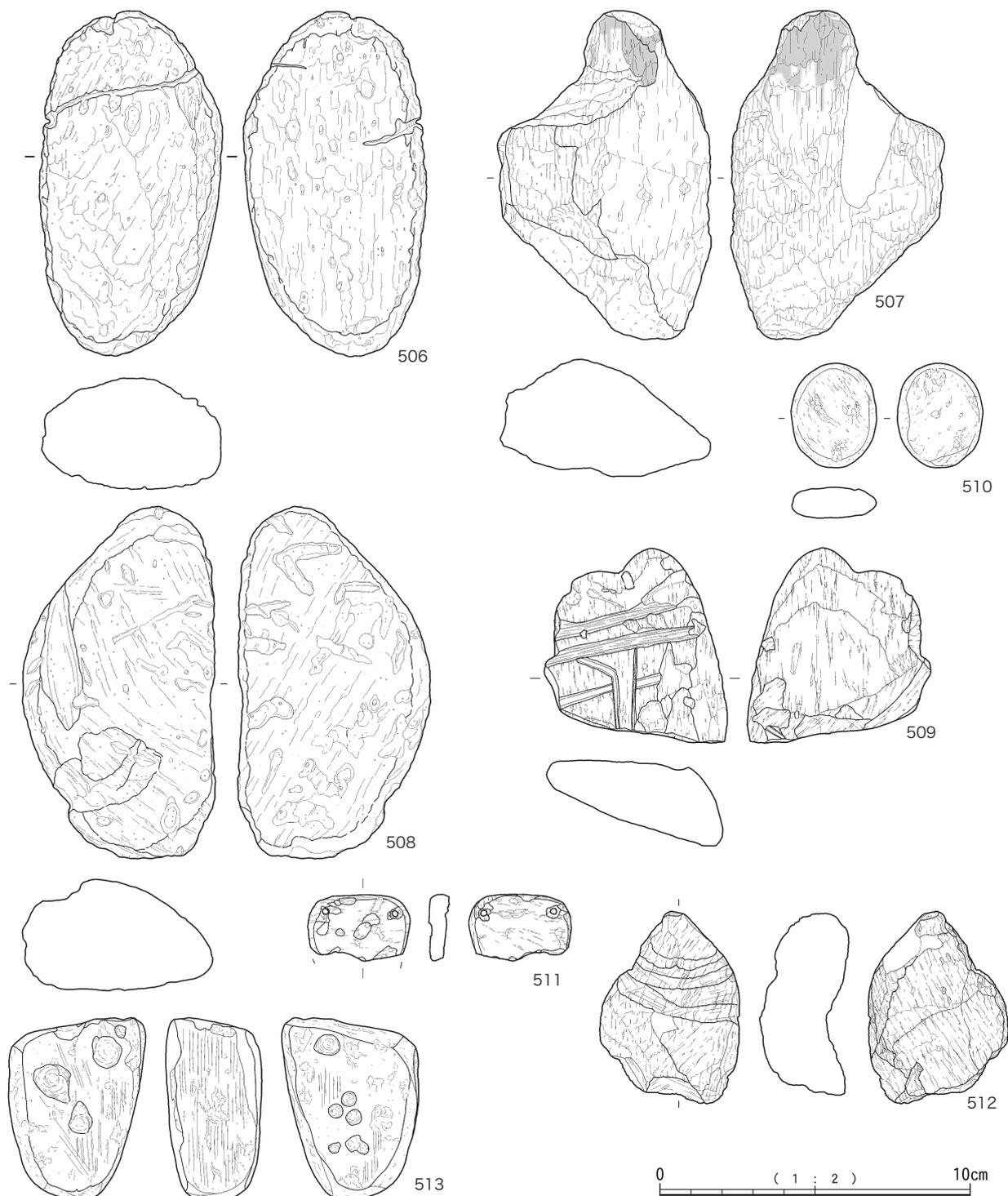


図50 出土石器 (14)

の円礫を用いて、先端に回転穿孔の痕跡が観られ、穿孔具である。461～464は用途不明の磨製石製品である。463はホルンフェルス，他は砂岩である。461は方柱状に途中に段を持って全体が研磨される。462は全体が研磨されるが，下部が方形に欠ける。463は自然物かどうかの判断も含めて不明品である。464は三角柱状に全面が研磨される。上面の割れ面にも研磨が入っており，擦り切り石器の破損

品の再利用品と思われる。465は砂岩の磨・敲石で，縄文の石棒が想起される。先端は敲打され，左側縁に線状痕が多条にある。466はホルンフェルスの礫を使用して，上部端に穿孔が施され，垂飾であろうが，真ん中付近に2孔の穿孔しようとした痕跡がある。

467～472は磨製石斧である。470はハンレイ岩で，他はホルンフェルスである。467～470は刃部が

表7 出土石器組成表

器種	剥片	チッブ	素材	石鏃	石匙等	尖頭器	ドリル	楔形石器	横刃形石器	石包丁	穿孔具	石劍	擦切石器	二次加工剥片・使用痕剥片	石核	磨製石斧	柱状片刃石斧	打製石斧	礫器	磨石・敲石類	棒状敲石	台石・石皿	砥石	輕石製品	投彈	不明磨製石器	その他石器	合計
個数	826	233	104	68	7	4	21	7	10	32	7	2	15	13	45	72	18	24	12	670	4	92	130	249	122	13	14	1651
	%			4.1	0.4	0.2	1.3	0.4	0.6	1.9	0.4	0.1	0.9	0.8	2.8	4.4	1.1	1.5	0.7	40.6	0.2	5.6	7.9	15.1	7.4	0.8	0.8	100
	順位 (10位)			7						9					8	6		10		1		5	3	2	4			

表8 磨製石器層位別出土表

	石包丁	穿孔具	石劍	擦切石器	柱状片刃石斧
表・1	21	1	2	9	9
2	3	2	-	-	-
3	3	-	-	1	-
4	1	-	-	-	1
5	1	1	-	-	-
6	1	-	-	-	-
不明	2	3	-	4	6
攪乱	-	-	-	1	-

敲打により潰れている。471・472は使用による折断した刃部であろう。473は砂岩の磨製石斧の基部を転用した敲石と考えられる。474は砂岩で、径の大きな穿孔用の穿孔具である。石器でなく貝器の穿孔具の可能性もある。475・476は尖頭状のホルンフェルス製の打製石斧、477もホルンフェルス製の撥状の打製石斧の破損品である。478・479はホルンフェルスの礫器とした。478は楕円礫の先端に刃部を形成し使用している。479は扁平な円礫の上下端に打撃痕がある。434と同様に楔形石器的な使用も考えられる。480は砂岩の礫で、先端が膨らんだ礫の先端部に細かな敲打痕跡があり、薄くなった部分は研磨され、その両側面は線状痕が多条に入る。樹皮布叩石の可能性があると考える。481と483はいずれもホルンフェルス製の方形の扁平な形状で表裏面には研磨が見られるが、両側縁に線状痕がある。482もホルンフェルス製の礫で、方形ではないが片側縁に線状痕が見られる。これらは465を含めて、擦りと掻くような機能を果たし、固い対象物で使用されたものでなく、くり返しの使用の結果の痕跡と考え、木材の加工にかかる工程や植物質の繊維の取り出しや樹皮の精製に用いられた可能性がないか検討が必要と考える。484はホルンフェルスを石材とし、485は砂岩の方柱状の用途不明の磨製石製品である。486は円柱状をなす全面が研磨された石製品で、先端には敲打痕がみられる。これらは手持ちの砥石として検討が必要である。487～496は線状の研磨面や砥石面が明瞭であり、いろいろな形状の砥石と判断した。493が頁岩で、他は砂岩である。487は安定した面は見られないが、溝状の研磨痕跡があり筋砥石である。488・489も溝状の研磨痕がある。490も砥石面がある。495・496は線状痕が残されている。

497～503は磨石・敲石類である。石器として最も個数が多い。組成表で確認してほしい。504・505は石皿である。

506～513は軽石製品の中で代表的なものである。最も多いのが506、508、510など略楕円形をなすものである。形状を整形し、研磨するもの(510、511、513)、線刻を施すもの(509)、削り込みを施すもの(506、507、512)、穿孔を施すもの(512、513)がある。

表7は、出土した石器の組成表である。特に安山岩・黒曜石・玉髓の素材礫、それらのチップ・剥片・石核がみられ、使用痕剥片や二次加工剥片もみられることから、これらの剥片石器類の製作を行っていた。石器類だけで、比率をみると磨石・敲石類が最も多く、軽石製品、砥石、台石・石皿、石斧、石鏃と続く。磨石・敲石類と石皿はセットで、石斧

類と砥石はセットが考えられるが、砥石は鉄器用の砥石の可能性もある。投弾の数も多い。

石斧類以外の磨製石器、大陸系磨製石器について出土層位ごとの数量は、表8である。石包丁・柱状片刃石斧は表層や1層からの出土であり、土器のところで1層に前期末～中期の包含層の可能性を指摘したが、層灰岩製の柱状片刃石斧、堇青石の石包丁、安山岩や黒曜石など石材の流入は時期的には符合する。

在地的な横刃型石器を取穫具とするなど、水田稲作文化の流入での適応状況が窺われる。また木材加工斧や大型楔形石器は、貝交易に係る丸木舟や準構造船の木材加工に関係するものと考えられる。

註1. 堇青石は対馬産のホルンフェルスである。新潟大学森貴教准教授の指摘による。この他に今山産石斧や層灰岩について指導を受けた。

#### 〈参考文献〉

- 能登原孝道・中野伸彦・小山内康人2007「いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』第82号 九州考古学会
- 森貴教・柚木雅樹・渡部芳久・梅崎恵司・川野良信2023「吉野ヶ里遺跡出土層灰岩製石器の石材原産地推定と考古学的意義」『九州考古学』第98号 九州考古学会

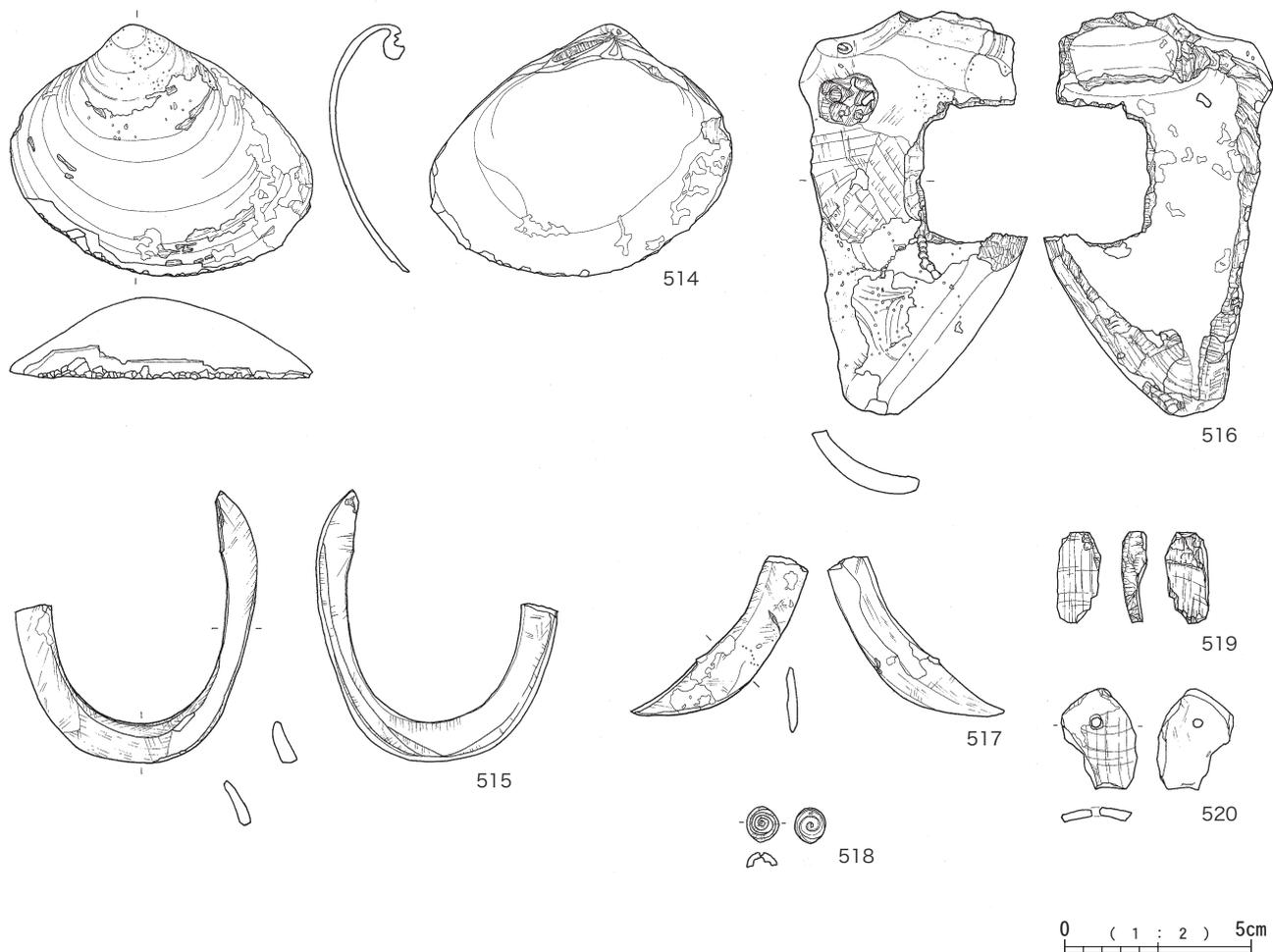


図51 出土貝器

### 3 貝製品、自然貝

#### (1) 貝製品

貝製品については、第2章第3節で述べたが、貝輪・貝輪加工品・廃材等の詳細な研究が木下尚子(文献50)によりなされ、貝輪未製品としての出土数はゴホウラ類が177点、オオツタノハが8点、イモガイ類が2点とされている。これに貝層中の自然貝類が3ケース保管されていた。図版8には文献50で掲載した貝輪・貝輪加工品・廃材のゴホウラとオオツタノハ、図版9にはその他のゴホウラ製貝輪廃材、図版10の上にはオオツタノハの貝輪・未製品とイモガイを掲載した。

他の貝器等は、文献1と文献4に貝小玉が2個掲載されている。

貝製品及び自然貝は浅パンケースに12箱であったが、多くは貝輪の加工品と廃材であった。

514はハマグリ貝の貝刃である。516はゴホウラの腹面の加工品である。515はゴホウラの腹面貝輪の破損品で、517・519は背面貝輪の一部と考えられる。518は貝小玉、520の貝種は不明であるが、垂飾品の一部と考えられる。

なお図版8・9・10のほとんどとそれ以外の自然貝については、国立科学博物館の2024年度企画展「貝類展：人はなぜ貝に魅せられるのか」における展示で展示した。

#### (2) 自然貝

貝層中の貝種については、ナガガキ・オキシジミ・ハマグリ・マシジミ・タケノコカワニナ・ウミニナ・マルタニシ・ギンタカハマ・サルボウが報告され、ウスカワマイマイ・アズキガイは貝塚形成中あるいは貝塚形成後の混入と記録される。これに収蔵されていた自然貝をみるとサザエ・カガミガイ・ウミギク・タカラガイ・エビスガイ・ベッコウカサカガイなどの多様な貝類が残されていた。

吹上浜の砂丘の後背地に、西流してきた万之瀬川が、南に向きを変える河岸に立地している高橋貝塚の自然環境が窺われる。

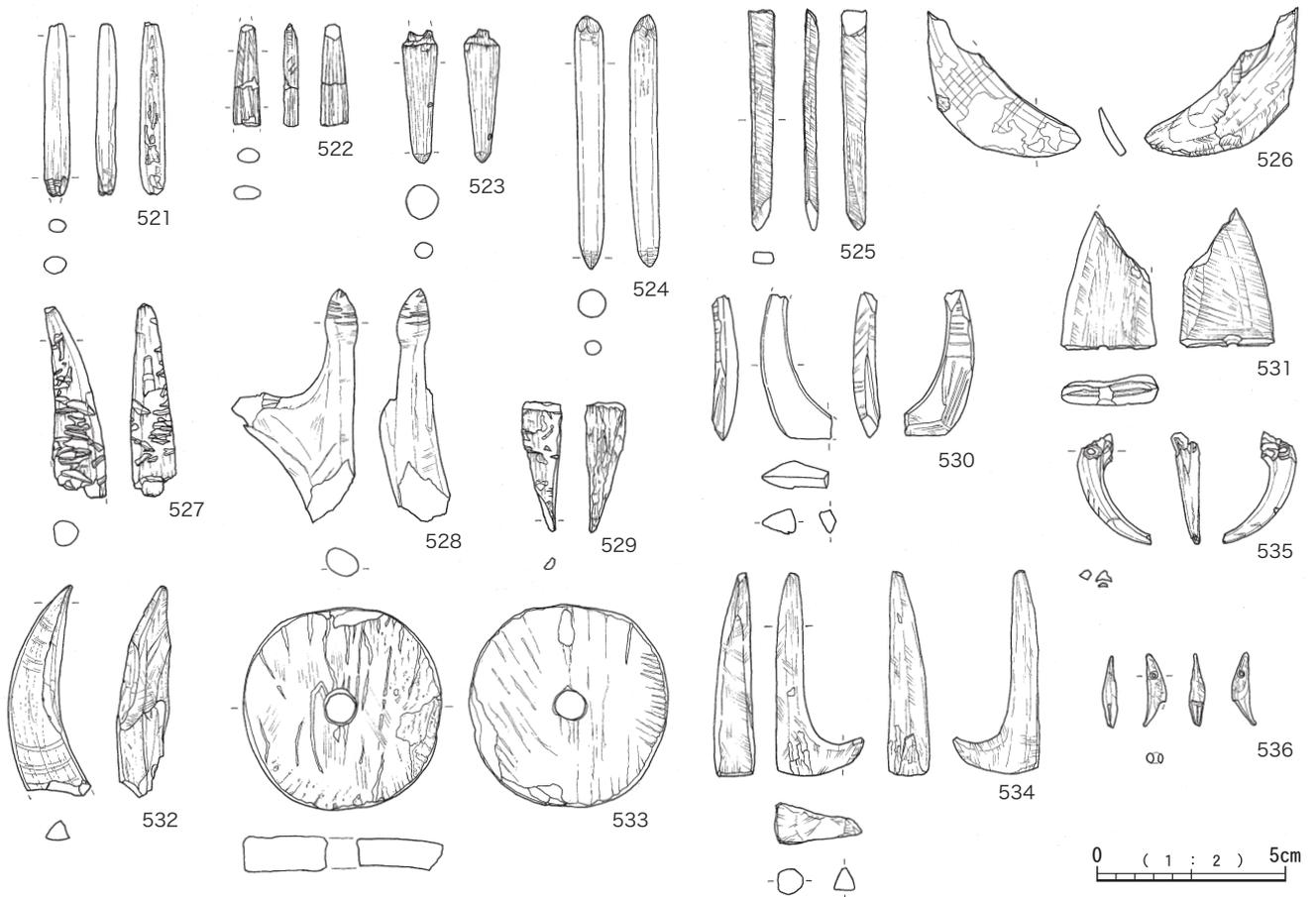


図52 出土骨角器

#### 4 骨角製品・獣骨

##### (1) 骨角製品

骨角器は、すでに文献1・4・37などでも報告しており、今回図・写真等に掲載してないものについては、遺物計測表の最後に遺物番号が付かずに実測番号のみの計測表の掲載となる。問い合わせには実測番号で対応できるように一括して保管する予定である。

貝層や貝層下からの出土が多く、特に小さな骨は貝層から出土している。

521は、中型哺乳類の四肢骨製の骨鏃状製品である。鏃部の表面は骨の形状に沿って研磨し、背面は平滑に仕上げる。基部は抉るように削り取っている。522は、中型哺乳類の四肢骨製のヘラ状製品先端部である。正面背面ともに丁寧な研磨が施される。全面が炭化している。このため最下層でも残存したものと考えられる。523は、中型哺乳類の四肢骨製の骨鏃状製品基部である。丁寧な面取りを施しており、ほぼ円錐の形状をしている。524は、中型哺乳類の四肢骨製の刺突具である。先端部は削りによってやや鋭く仕上げている。反対側も削りを施すが粗い。体部は研磨し、断面円形に仕上げている。

525は、中型哺乳類の四肢骨製のかんざし状製品である。全面に丁寧な研磨を施しており、擦痕が多数確認できる。断面は長方形に仕上げている。両端は欠損している。526は、猪牙製のヘラ状製品である。エナメル部分を剥ぎ取って使用している。刃部裏面には一部擦痕が残る。527は、鹿角製の不明骨製品である。全面に削りを施しているが、自然面である鹿角表面の溝が残る。用途は不明であるが、先端部を使用した押圧具の可能性はある。

528は、鹿角製の不明製品である。鹿角の枝部を使用している。枝部の短角を削って丸く仕上げ、刻みを数回施している。紐擦れ痕が多数あり、穿孔具の可能性もあるが、用途は不明である。529は、中型哺乳類の四肢骨製の骨錐状製品である。ケズリによって、先端を鋭く仕上げている。530は、猪牙製のヘラ状製品である。表面には自然面であるエナメル質が残るが、裏面はエナメル質を削り取っている。下面は裏面から削り取ることによって、刃部を形成している。横方向の擦痕がみられる。

531は、猪牙製の素材である。エナメル部分を剥ぎ取って使用している。下面は割断面である。両面から擦り切りにより溝を彫り、中心に穿孔すること

によって切断したとみられる。532は猪牙製で先端の右側に加工を施し、右側面は平坦面でエナメル質が残る。擦痕が多くみられ、刺突具と考えられる。533は、亀甲製の紡錘車である。正面裏面ともに丁寧な研磨を施しているが、一部に自然面が残る。直径5.3cm、厚さ1cmのほぼ正円形を呈する。534は、鹿角製で、鹿角の枝部を使用しており、全面丁寧な研磨で成形している。全面に擦痕が残っているが、紐ずれ痕は確認できなかった。西北九州型結合式釣針の軸部であると考えられる。猪牙製の結合式釣針の針部とみられるような遺物735～738も確認されたが、534と合致するものはなかった。

535は、小型哺乳類の骨製の垂飾品である。1ヶ所両面からの穿孔を施している。そのほかは全て自然面が残っている。536は、小型哺乳類の犬歯製の垂飾品である。1ヶ所両面からの穿孔を施している。穿孔部は面取りによって平坦に仕上げられており、擦痕が多数確認できる。犬歯下部を削って、尖らせるような加工は、図化・写真撮影はしなかったが実測番号28・30・31でみられた。黒川洞穴の骨角器でもみられ注意を要する。

図版11 727～748・図版12 749～761は実測せずに写真として掲載のものである。727・728は骨鏃状製品である。基部の挟りがわずかに残存している。729は基部が折れており、523と同様のものである。730～734は骨針または刺突具である。736は522と同一製品の可能性がある。

735～738は不明猪牙製品である。737・738は湾曲部内側を横方向からの研磨により湾曲を強くし、先端部を尖らせてあり、前述した534を軸部として、西北九州型結合式釣針の針部の可能性がある。739～748は不明鹿角製品である。鹿角の先端部を研磨して丸く仕上げている。527と同じく押圧具の可能性がある。

749～761は鹿角の素材であるが、749～755は枝部が残っており、先端部を利用した押圧具や枝部を利用した釣針の未製品の可能性がある。押圧具とした場合、握りやすい構造でもある。756～761は切断されており、カットマーク（解体痕）が明瞭に残っているものである。いずれも擦り切りによって溝を彫った後に切断されている。

掲載遺物以外のものも、刺突具、押圧具が多い。釣針は猪牙製のものである。

## (2) 獣骨

高橋貝塚から出土した脊椎動物遺体は、パンケース30箱分あり、今回全点の観察を行った。確認できた動物種としては、以下の通りである。出土割合（点数）としてはシカ43%、イノシシ34%であり、この2種で全体の8割近くを占める。次に多いのが

クロダイ11%である。魚類としてはほとんどがクロダイまたはタイ科であり、歯骨と前上顎骨が多く見られた。最小個体数としては、シカ16頭、イノシシ14頭、タヌキ3頭、ノウサギ2頭、イヌ1頭、カワウソ1頭、サル1頭、ウシ1頭、ウマ1頭、カメ1匹、カモ1匹、クロダイ16匹、ヘダイ2匹、ブリ1匹、イロブダイ1匹、ハタ1匹である。

シカ・イノシシの骨は、新鮮な骨を割ったときに見られるスパイラルフラクチャー（螺旋骨折）が多く確認できた。骨を切断し、髓を取り出していた可能性が考えられる。また、肩甲骨・上腕骨・脛骨・寛骨が多かったのに対して、中手骨・中足骨等の四肢骨末端の骨がほとんど確認できなかった。中手骨・中足骨製の骨角製品は出土しているため、素材となる中手骨・中足骨は別の場所で保管・加工されていた可能性がある。

全国的に縄文時代後期から晩期での貝塚ではシカ・イノシシが多数出土するようになり、タヌキ・テン・イタチといった多様な小動物の出土が見られる。弥生時代ではそもそも貝塚の事例が少ないが、小動物の種類が減少するといわれている。高橋貝塚においても小動物の出土は少ない。I層からウシ・ウマの骨が出土しているが少量であり、近世以降のものと考えられる。

動物種	同定骨数
シカ	170
イノシシ	135
サル	1
タヌキ	7
カワウソ	1
ノウサギ	7
イヌ	3
ウシ	3
ウマ	1
カメ	2
カモ	5
クロダイ	43
ヘダイ	4
イロブダイ	1
タイ?	10
ブリ	2
ハタ?	1

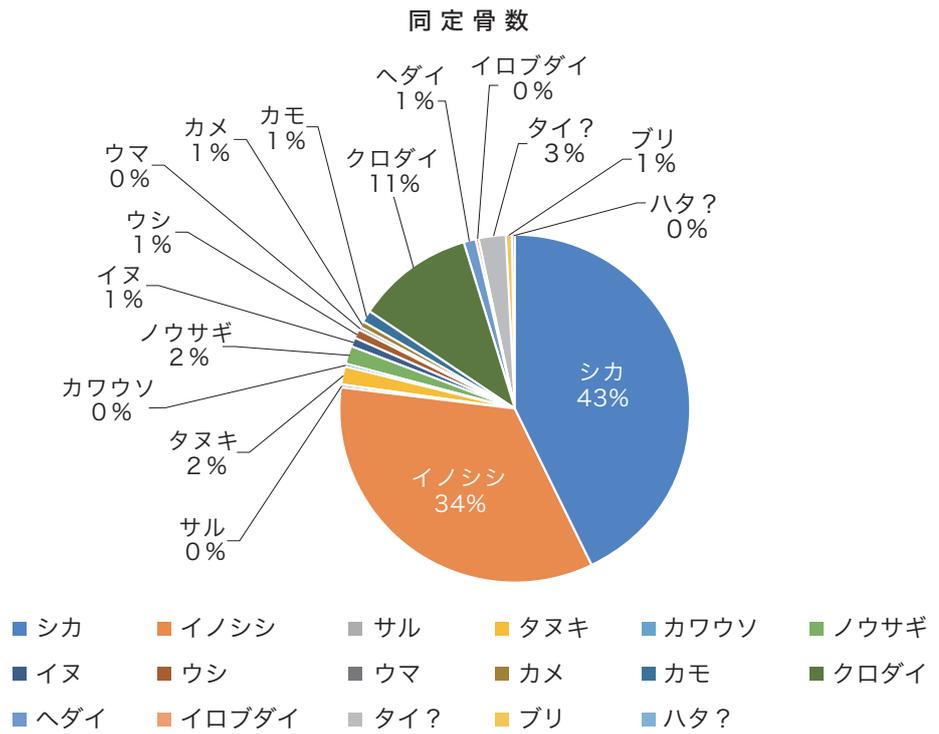


図53 動物種同定円グラフ

表9 シカ・イノシシ出土部位数

シカ	部位数	左右	左右数	最小個体数
下顎骨	12	L	4	
		R	8	8
肩甲骨	29	L	13	
		R	16	16
上腕骨	24	L	10	
		R	14	14
橈骨	9	L	4	
		R	5	5
尺骨	13	L	10	
		R	3	10
大腿骨	2	L	1	
		R	1	1
脛骨	16	L	11	
		R	5	11
寛骨	15	L	7	
		R	8	8
仙骨	7	W	7	7
中足骨	4	L	3	
		R	1	3
中手骨	2	L	1	
		R	1	1
踵骨	9	L	2	
		R	7	7
距骨	5	L	3	
		R	2	3

16

イノシシ	部位数	左右	左右数	最小個体数
下顎骨	16	L	8	
		R	8	8
肩甲骨	17	L	11	
		R	6	11
上腕骨	20	L	8	
		R	12	12
橈骨	16	L	7	
		R	9	9
尺骨	10	L	6	
		R	4	6
大腿骨	2	L	0	
		R	2	2
脛骨	10	L	7	
		R	3	7
寛骨	20	L	14	
		R	6	14
仙骨	5	W	5	5
中足骨	0	L	0	
		R	0	0
中手骨	0	L	0	
		R	0	0
踵骨	10	L	4	
		R	6	6
距骨	9	L	8	
		R	1	8

14

## 5 土器圧痕

### (1) はじめに

高橋貝塚では、イネ圧痕の存在が調査時から知られており(文献1)、南九州における稲作伝播を示す古い資料とされていた。改めて本遺跡の植物利用等を検討するため、土器圧痕調査を実施した。

### (2) 分析方法

整理作業の過程において、圧痕の可能性があるものを抽出し、さらに実体顕微鏡で観察し、レプリカを作成する候補を選別した。次に、台帳を作成し、検出部位等の基礎資料を記録した。検出した圧痕には、資料整理番号としてTKH0001から番号を付し、同一個体に2点以上が検出された場合は、枝番を付した。底部(底面)圧痕が認められる資料についても、底部1から番号を付し、台帳作成及び記録作業を行った。

レプリカの作成にあたっては、離型剤(パラロイドB-75 5%アセトン溶液)を圧痕内部及び周辺に塗布し、シリコン・ゴム(株)アグサジャパン製ブルーミックスソフト使用)を用いて型取りを行った。なお、硬化したレプリカを取り外した後、塗布した離型剤はアセトンで洗浄した。底部圧痕についても、同様の手順でレプリカ作製を行った。

作成したレプリカは、県工業技術センターが所有するデジタルマイクロスコープ(HiRox社製RH-2000)を使用して観察、測長、及び撮影を行い、最終的に種実・昆虫等と確認できたものは同定作業を実施した。

### (3) 結果(表10, 図54~図56)

調査の結果、33点の土器片から37点の圧痕の候補を検出し、デジタルマイクロスコープ等による観察から礫や木片と判断したものを除き、24点を最終的に種実・昆虫類と判断した。

個別の検出面や法量、同定結果等は表10に示した。

#### イネ

(TKH0001・0002・0003・0004・0006・0013・0014・0016・0017・0020・0027・0030-1・2・0031)

穎果、籾殻、玄米といった、複数の形態が確認され、種別の点数では最も多い。TKH0002・0003・0016は玄米が割れた状態であり、やや摩滅しているがTKH0030も同様の可能性がある。KH0017は厚みがなく、しいな等の未熟果と考えられる。

#### エノコログサ属・アワ近似種

(TKH0011・0023)

TKH0011は、平面が水滴型を呈し、先端が尖る。顆粒状突起は明瞭であるが、断面形が「D」字形に近く、エノコログサ属の中でも大型のアカ

ノエノコログサの可能性もある。また、TKH0023は表面に顆粒状突起に類する細かい凹凸がみられるが、形態が不整形であるため、近似種とした。

#### キビ(TKH00021・0026)

やや先端が尖る円形を呈し、表面は平滑である。外穎と内穎の境界が明瞭で、TKH0021では外穎の先端がくちばし状であることが分かる。

#### サンショウ属(TKH00009)

側面観が「D」字型を呈し、表面に広く深い網目状の皺がある。また、側縁に大きなへそがある。特徴から、サンショウ属でもカラスザンショウに比定される。

#### ネズミの糞(TKH00005)

長軸5.06mmの長楕円形を呈し、片方の端部がやや尖る。表面に、組織等は認められない。小畑・宮浦(2020)の報告による資料と類似する点から、ネズミの糞と判断した。

#### その他の圧痕

(TKH00008・0015・0018・0022)

TKH0008は、葉片である。細かい並行葉脈が確認でき、イネ科植物に類似する。TKH0015は先端が尖る楕円形の種実で、側面に縫合線のような溝がある。また、表面に不規則な皺が寄っている。TKH0018は丸みを帯びた水滴型の種実であるが、器面が荒れており、詳細な観察はできなかった。TKH0022は、扁平な楕円形を呈し、表面は平滑である。形態からダイズ属ツルマメに類似するが、へそは確認できなかった。

#### 底部・胴部圧痕(底1~10)

木葉痕が主体を占め、葉脈は羽状・網状・掌状があり、羽状が主体である。いずれも種同定には至らなかったが、底6はフキ等、底9はサトイモ科の特徴をもつ。底2は蓆状の圧痕で、さつま町向井原遺跡に類例があり、時期的にも近い。

底10は、底部圧痕ではなく、胴部片と判断した。平織の布痕であり、1cmあたり経11本・緯16本と密に編まれている。部分的にやや太めの糸も入るが、おおよそ0.6mm程の糸で編まれている。

### (4) まとめ

高橋貝塚では、イネが最も多く、次いで、アワ、キビが検出された。キビ圧痕の検出は、県内初である。イネは、穎果と玄米の状態が確認され、玄米は半割状態が複数認められた。県内でイネ圧痕は多数検出されているが、割れた状態の検出例は少ない。コメの状態ではヒビが入る現象は「胴割れ」と呼ばれ、登熟期の高温が原因で発生する事例が報告されている。今後、類例の検証が必要である。また、ネズミの糞と考えられる圧痕を1例検出した。ネズミ

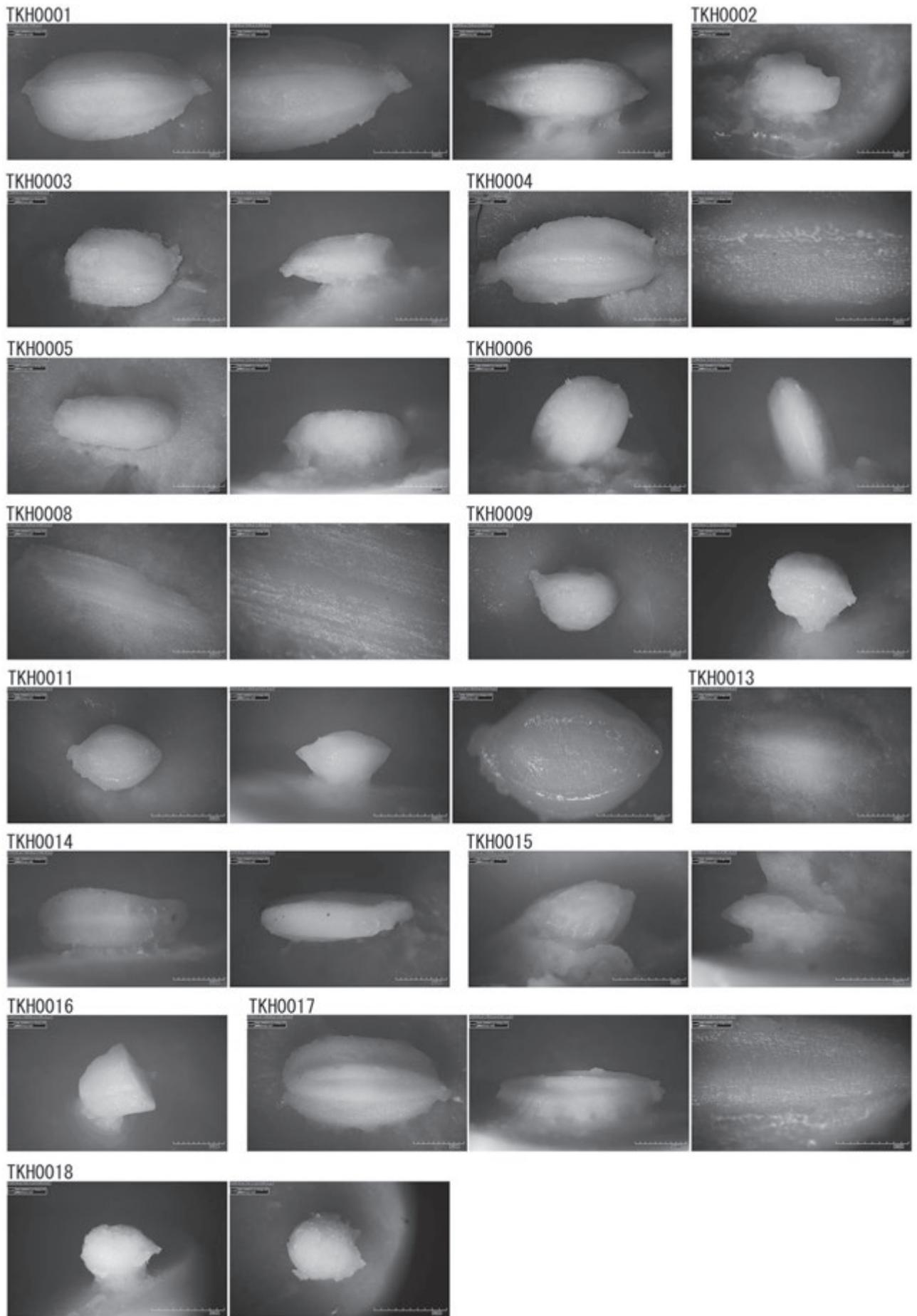


図54 検出圧痕 デジタルマイクログラフ写真①

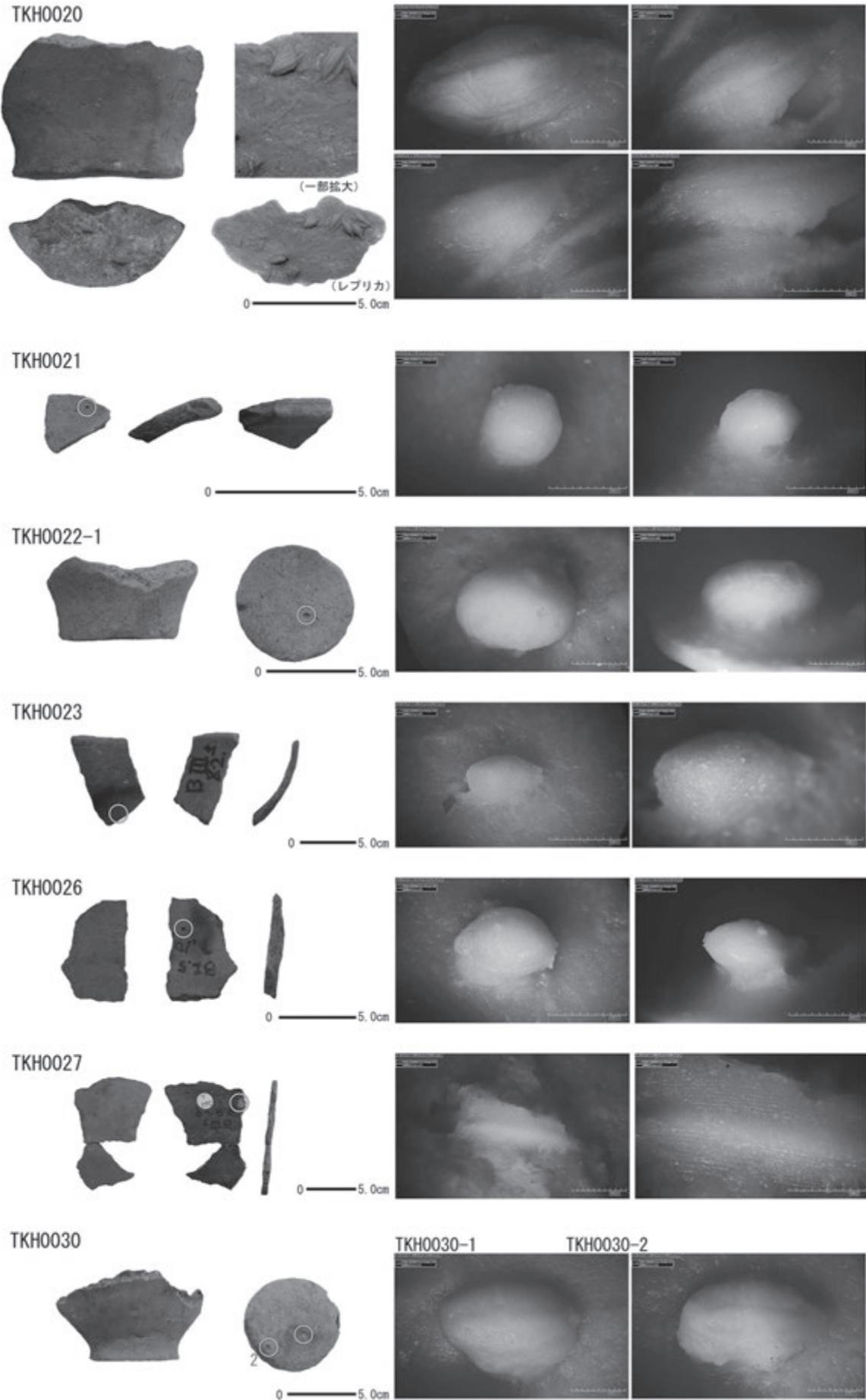
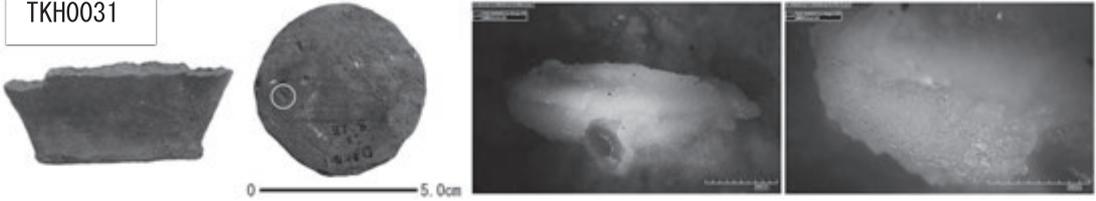


図55 検出圧痕 デジタルマイクロスコープ写真②

TKH0031



底 1



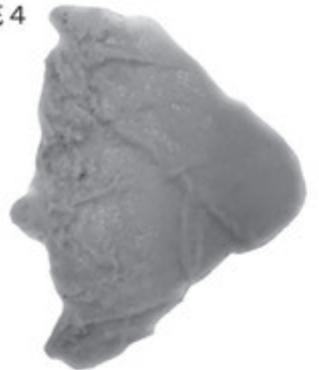
底 2



底 3



底 4



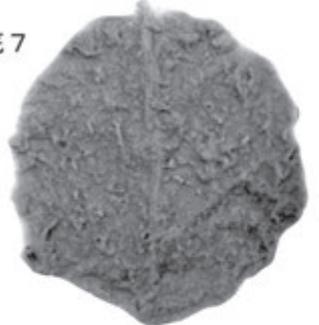
底 5



底 6



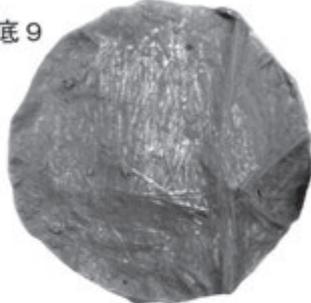
底 7



底 8



底 9



底 10

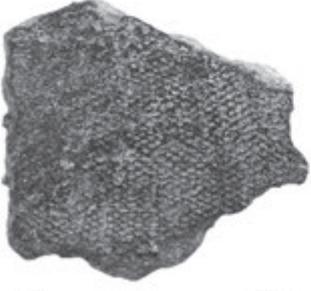


図56 検出圧痕 デジタルマイクロスコープ写真③・敷物圧痕レプリカ

の糞の圧痕は、縄文時代後半を中心に、南九州で類例があり（小畑（編）2024）、土器の製作環境を示す例として注目される。

底部圧痕では、複数種の木葉痕が検出された。敷物として用いられる植物は有用植物が多いため（真邊2015）、本例も同様の可能性がある。また、胴部の布目圧痕は経緯が密であり、弥生時代の平均値とされる16.1×9.0本（布目1995）と同等のものであった。

〈引用・参考文献〉

小畑弘己（編）2024 『土器圧痕集成2・3』熊本大学大学院人文社会科学研究所小畑研究室  
 小畑弘己・宮浦麻衣 2020 「宮崎地域の縄文時代後期を中心とした土器圧痕調査」『人文科学論集』第1号 熊本大学大学院人文社会科学研究所 布目順郎 1995 『倭人の絹』小学館  
 真邊彩 2015 「南九州における縄文時代の木葉利用について」『Archaeology from the SouthⅢ』本田道輝先生退職記念事業会

表10 検出圧痕一覧

資料番号	掲載番号	器種	層位	時期（搬入/在地）	検出部位	検出面	圧痕の種類	法量(mm)			備考	
								長さ	幅	厚さ		
TKH 0001		甕棺	1層	前期末（搬）	口唇	外面	イネ（穎果）	7.46	3.54	2.18		
TKH 0002		甕	5層	前期末（在）	口縁	内面	イネ（玄米）	(3.57)	2.49	1.69	半割状態	
TKH 0003		甕棺	1層	中期末（搬）	胴	内面	イネ（玄米）	(4.46)	3.02	1.89	半割状態	
TKH 0004		甕	4層	前期中葉（搬）	口縁	内面	イネ（穎果）	7.48	3.22	2.13		
TKH 0005		甕	1層	前期後葉（在）	胴	外面	ネズミの糞	5.06	2.09	2.14		
TKH 0006		壺	1層	前期中葉（搬）	胴	断面	イネ（玄米）	(3.78)	3.32	2.26		
TKH 0008		甕蓋	不明	前期前半（在）	胴	外面	葉片（イネ科か）	(7.42)	1.77	-		
TKH 0009		甕	2層	前期後葉（搬）	胴	外面	サンショウ属 (カラスザンショウ)	3.54	2.70	2.78		
TKH 0011		鉢	2層	前期末（在）	口縁	内面	エノコログサ属 有ふ果	2.58	1.82	1.37		
TKH 0013		甕	1層	前期前葉（在）	底	底面	イネ（穎果）	6.16	3.14	-		
TKH 0014		甕	6層	前期前葉（在）	口縁	外面	イネ（穎果）	6.04	2.66	1.97		
TKH 0015		鉢	3層	前期中葉（在）	胴	断面	不明種実	(2.69)	(1.83)	1.00		
TKH 0016		甕	2層	前期後葉（在）	口縁	外面	イネ（玄米）	(2.80)	2.87	1.72	半割状態	
TKH 0017		甕	1層	前期末（搬）	口縁	外面	イネ（穎果）	6.65	3.61	1.45	未熟米か	
TKH 0018		甕	1層	前期末（搬）	胴	外面	不明種実	2.26	1.97	1.46		
TKH 0020		甕	6層	縄文晩期・夜臼（搬）	底	底面	イネ（穎果）	7.57	3.55	-	文献1・文献20 ※長さ・幅は 4点の平均値	
TKH 0021		壺	2層	中期初頭（在）	口縁	内面	キビ有ふ果	2.18	2.10	1.74		
TKH 0022	1	甕	不明	前期末（搬）	底	底面	不明種実	4.51	3.18	2.61	ソルマメ近似	
TKH 0023		鉢	表土	前期末（搬）	胴	外面	アワ近似種	1.89	1.17	0.96		
TKH 0026		甕	1層	前期前葉（搬）	胴	内面	キビ有ふ果	2.95	2.08	(1.39)		
TKH 0027		甕	5層	前期中葉（搬）	胴	断面	イネ（粳穀）	4.05	1.66	-		
TKH 0030	1	壺	3層	前期後葉（搬）	底	底面	イネ（玄米）	(4.77)	3.68	1.74	半割状態か	
	2	〃	〃	〃	〃	〃	イネ（玄米か）	(5.48)	(3.38)	2.32	半割状態か	
TKH 0031		壺	3層	前期後葉（搬）	底	底面	イネ（粳穀）	7.05	2.29	-		
底部	1	-	壺	不明	時期不明（搬）	底	底面	木葉	-			羽状葉脈
	2	-	壺	不明	成川（在）	底	底面	蓆状	底径6.8cm			
	3	-	壺	1層	中期初頭（搬）	底	底面	木葉	底径6.16cm			網状葉脈か
	4	-	壺	1層	中期初頭（搬）	底	底面	木葉	-			羽状葉脈 (複数置き換え)
	5	-	甕	1層	前期末（搬）	底	底面	繊維、松葉状	底径8.22cm			
	6	-	甕	1層	前期末（搬）	底	底面	木葉	底径8.93cm			掌状葉脈 (フキ等に類似)
	7	-	壺	6層	縄文晩期（搬）	底	底面	木葉	底径5.77cm			羽状葉脈
	8	-	甕	3層	中期中葉（在）	底	底面	木葉	底径4.20cm			羽状葉脈
	9	-	甕	2層	前期後葉（在）	底	底面	木葉	底径7.67cm			羽状葉脈 (サトイモ科類似)
	10	96	甕	2層	時期不明（搬）	胴	外面	布（平織）	-			文献37。 1cmあたり緯16本×経 11本。1本0.634mm。

## 第4節 甕棺その他の弥生土器について

鹿児島国際大学 鐘ヶ江 賢二

高橋貝塚からは、他地域との交流を示す土器が出土しており、北部九州の弥生時代の甕棺片も出土している。ここでは、他地域との交流を示す甕棺や日常用器種の弥生土器について説明することにした。甕棺型式の記述は、橋口達也の編年（橋口1979）に基づく。北部九州の弥生時代甕棺の編年は、森貞次郎によって示された編年（森1966）を基本とし、橋口の編年も森の編年を発展させたものと評価される。しかしながら留意すべき点は、金海式を中期初頭まで下げるべきとする指摘（柳田編1981）、金海式と城ノ越式が一定期間併存したとする指摘（宮井1996）など、前期と中期の編年観の再考が主張されていることである。また一系列的な編年ではなく、複数の系統が融合することにより中期の大型甕棺が成立するとする説（片岡1983）や、口縁部と胴部の属性の組み合わせに基づき複数の系統で編年を行う研究（梶原2016）もある。したがって、口縁や胴部属性も複数系統に分かれ、一定の時間幅をもつ可能性が高く、甕棺の口縁部や胴部のみからの型式や時期の認定は検討課題が多いことを付言しておくたい。

K01は、弥生時代前期の甕棺口縁部とみられるもので、KIb式に相当すると推測する。口縁部は外反し、上下端部に刻目を施す。K02も同様の特徴を持つ個体で、K01と同一個体の可能性がある。K03も前期甕棺片で、口縁は外反し口唇部に刻目はみられず、内面に粘土帯貼付による段が形成される。KIb式あるいはKIcの時期と考えられる。

K04は、中期初頭の日常用器種の甕である。口縁部～胴上部が残存し、全体に摩滅しているが、口縁部と口縁部直下、および胴上部に二条の突帯が廻り、刻目が認められる。形状からいわゆる亀ノ甲タイプの甕の特徴と評価できるが、胴部にも複数の刻目突帯が加わっており、同様な特徴の甕の出土が宮崎県高鍋町の持田中尾遺跡や宮崎市下郷遺跡、鹿屋市榎木原遺跡などで報告されている（栗畑2006）。K05は、弥生時代の日常用器種の前期後半の壺である。口縁部は外反し、全体にミガキが施され、内面の口縁部下に粘土帯の貼付による突帯状の段が形成される。口唇部は丸く仕上げられ刻目はみられない。類似した形態の壺は鹿屋市榎木原遺跡や宮崎市下郷遺跡等でも出土が報告されており、K04とともに大隅半島および日向地方との交流をうかがうことができる。K06は、中期初頭の壺の口縁部片である。口縁部はいわゆる亀ノ甲タイプの甕と同様の形状を呈し、先端に刻目を施す。口縁上部には山形の沈線が描かれ、瀬戸内地方のⅡ・Ⅲ様式系土器の要

素と評価されうる。類似した文様をもつ壺は、志布志市高吉B遺跡や指宿市成川遺跡などで出土している。

K07は、甕棺の胴部片で、外面に3条の沈線が描かれる。甕棺の胴部沈線は、前期のKIb式から増加するが、KIc式やKIIa式でも看取され、前期後半から中期前半の時期の範疇のものとする。K08は、肥後地方の黒髪式の甕棺の口縁部片である。口縁上部がわずかにくぼんでおり、外面口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。黒髪式の口縁の特徴と判断でき、口径から甕棺と判断したが、日常器種の可能性もある。

K09、K10、K11は北部九州の中期甕棺の口縁部である。KIIc式～KIIIa式の「丸みを帯びた甕棺」（橋口1979；中園2004）の口縁部と考えられる。口縁はやや外に垂れた形状で、口唇部はくぼむ。口縁部下から胴部はやや広がる。南さつま市の下小路遺跡（河口他1976）や日置市入来遺跡（河口1976）でも、同様の丸みを帯びた中期後半の甕棺が出土している。K12は甕棺の口縁部で断面が「く」を呈し、KIIIc式～KIVa式の甕棺と推測される。口唇部にはくぼみがある。

甕棺の胎土を観察すると、K01、K02、K07は石英や長石類を多く含み、花崗岩類に由来する胎土と推測される。一方、K03は、角閃石や輝石などの有色鉱物や火山ガラスを多く含み、石英や長石類は目立たない。中期中葉～後半のK09、K10、K11はほぼ同一型式の北部九州の甕棺とみなされるが、石英や長石、雲母などの花崗岩質の粒子を多く含むことが特徴として挙げられる。K11は、石英や長石とともに、白雲母とみられる粒子を含み、佐賀平野付近の胎土の組成を示す可能性がある。黒髪式のK08は、角閃石や輝石などの有色鉱物を多く含み、花崗岩組成の土器とは異なる。中期末～後期初頭のK12は、花崗岩由来の胎土である。このように、甕棺の胎土の組成にもバリエーションがあり、複数の産地の土器が搬入された可能性を示している。土器胎土の詳細については、今後分析を進めたい。

K13は、日常器種の後期後半の甕の口縁部である。外面は縦方向、内面は横方向のハケメが施される。口縁と胴部の屈曲部に突帯がめぐる。ハケメや屈曲部の突帯の形状から、北部九州系の後期土器の可能性もある。

### 〈文献〉

梶原慎司2016「汲田式土器の成立過程—弥生時代前期後半から中期前半における大型甕棺の分類と編年—」『九州考古学』第91号

片岡宏二1983「弥生時代中期前半期の甕棺について—特に三国丘陵周辺の資料を中心に—」『津古・東宮原遺跡』小郡市文化財調査報告書第18集

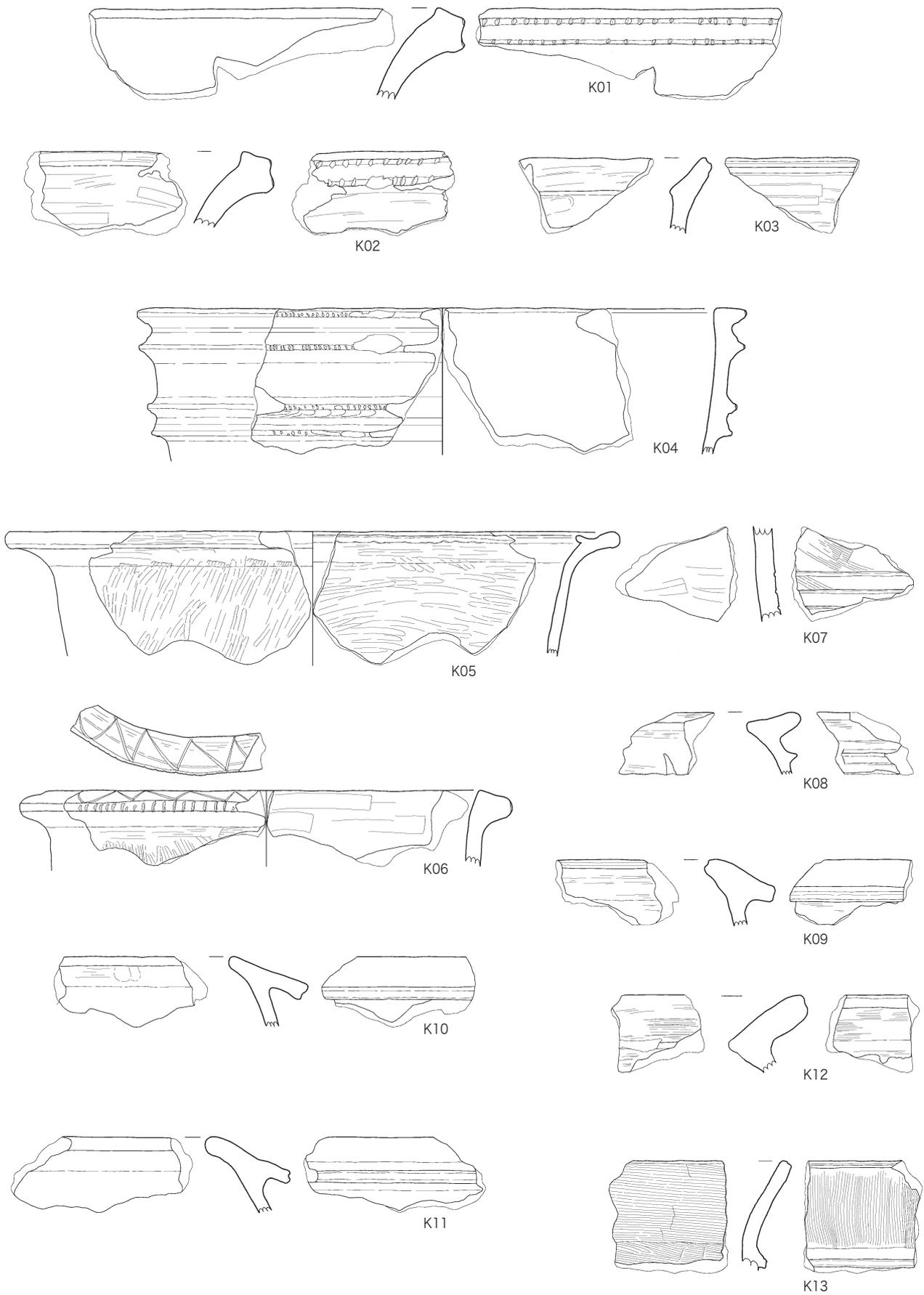


图 57 甕棺他実測図

河口貞徳1976「入来遺跡」『鹿兒島考古』第11号  
 河口貞徳・旭慶男・最所大輔1976「下小路遺跡」  
 『鹿兒島考古』11号  
 桑畑光博2006「東南部九州における縄文から弥生へ  
 の土器変遷」『大河』第8号  
 中園聡2004『九州弥生文化の特質』九州大学出版会  
 橋口達也1979「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員  
 会編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告

告』X X X I 中巻  
 宮井善朗1996「吉武遺跡群における若干の問題—  
 「前期末、中期初頭」を中心に—」『みずほ』20  
 森貞次郎1966「弥生時代における細形銅剣の流入に  
 ついて—細形銅剣の編年的考察—」金岡丈夫博士  
 古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』平凡社  
 柳田康雄編1981『三雲遺跡II』福岡県文化財調査報告  
 書第60集

表11 土器観察表(1)

押図 番号	掲載 番号	写真 掲載	器種	部位	トレンチ	区	層	文様	器面調整				胎土					色調		文献・備考					
									内面	外面	石英	長石	角閃石	砂礫	他	内面	外面								
14	出土土器(1)	1	壺	頸部	A	-	一号土坑	突帯	工具ナデ																
		2	壺	腹部	A	-	一号土坑	刻目突帯	ナデ 一部ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		3	壺	口-胴部	A	I	一号土坑	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		4	壺	口-胴部	A	I	一号土坑	刻目突帯	工具ナデ ナデ 指アト	指ナデ ナデ 工具ナデ															
		5	壺	口-胴部	A	-	一号土坑	刻目突帯・沈線	ナデ	ナデ															
		6	鉢	口縁付近	A	I	一号土坑	-	ミガキ 指アト	ミガキ 指ナデ															
		7	鉢	口縁部	A	I	一号土坑	-	ミガキ ナデ	ミガキ ハケ目 工具ナデ															
		8	鉢	口縁部	A	-	一号土坑	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		9	○	鉢	口縁付近	A	I	二号土坑	-	ミガキ ナデ 指アト	ミガキ ナデ														
		10		高坏	脚部	A	I	一号土坑	-	ナデ	ヨコナデ ナデ														
15	出土土器(2)	11	壺	口縁部	A	II	1	沈線	ヘラミガキ	ミガキ ナデ															
		12	壺	頸部	-	-	-	沈線(平行)	ミガキ	ミガキ															
		13	壺	腹部	A	I	2	沈線(羽状)	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		14	壺	腹部	A	I	1	沈線(平行・重弧)	ナデ	ヘラミガキ															
		15	壺	肩部付近	A	II	3	沈線	工具ナデ後ナデ	ヘラミガキ															
		16	壺	腹部	A	II	4	沈線(平行・重弧)	指頭圧痕 一部ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		17	○	壺	腹部	A	II	2	沈線 突帯 木目押圧	ミガキ	ミガキ ハケ目														
		18	壺	口-胴部	A	II	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		19	壺	口-胴部	A	II	2	刻目突帯	指ナデ ナデ	工具ナデ後ナデ 指アト															
		20	壺	口-胴部	A	I	2	刻目突帯	ナデ	ミガキ ナデ															
		21	壺	口-胴部	A	I	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ 指頭圧痕	工具ナデ後ナデ															
		22	壺	口-胴部	A	I	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ヘラミガキ															
		23	壺	口-胴部	A	II	1	刻目 刻突文	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ															
		24	壺	口-胴部	A	II	1	刻目	工具ナデ ナデ	ナデ 指圧痕 工具ナデ															
		25	壺	口-胴部	A	II	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	ナメハケ目後工具ナデ後ナデ															
		26	壺	口-胴部	A	II	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		27	壺	口-胴部	-	-	-	-	刻目突帯	工具ナデ	工具ナデ														
28	鉢	口-胴部	A	II	3	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ																	
29	鉢	口縁部	A	I	3	突帯	ヘラミガキ	ヘラミガキ																	
30	高坏	脚部	A	I	1	-	工具ナデ ナデ シボリ	ナデ 赤色顔料塗布																	
31	蓋	蓋	A	II	1	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ																	
32	蓋	蓋	A	I	2	-	ミガキ	ミガキ																	
16	出土土器(3)	33	壺	口-胴部	A	I	4	刻目	ナデ	工具ナデ ナデ															
		34	浅鉢	口-胴部	A	II	4	刻目突帯	ナデ	ナデ															
		35	壺	口-胴部	A	II	6	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		36	深鉢	口縁部	A	II	4	刻目突帯	指オウエ 工具ナデ後ナデ	指オウエ 工具ナデ後ナデ															
		37	鉢	口-胴部	A	I	6	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		38	鉢	口-胴部	A	I	6	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		39	壺	口-胴部	A	III	1	刻目突帯	工具ナデ 指アト	工具ナデ ナデ 指アト															
		40	壺	口-胴部	A	III	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		41	壺	口-胴部	A	III	1	刻目	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
17	出土土器(4)	42	壺	口-胴部	A	III	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		43	壺	口-胴部	A	III	1	刻目突帯 突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		44	壺	底部	A	III	1	-	ヘラミガキ 工具ナデ後ナデ	圧痕 工具ナデ後ナデ															
		45	蓋	蓋	A	III	1	刻目	ナデ	ナデ															
		46	蓋	蓋	A	III	1	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		47	○	鉢	口-胴部	A	III	1	沈線	工具ナデ後ナデ ヘラミガキ	工具ナデ後ナデ ヘラミガキ(細)														
		48	壺	口-胴部	A	III	2	刻目	ハケ目 ナデ	ハケ目															
		49	壺	口-胴部	A	III	2	刻目	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		50	浅鉢	口縁部	A	III	2	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		51	浅鉢	口-胴部	A	III	2	沈線	ミガキ	ミガキ															
18	出土土器(5)	52	○	壺	完形	A	III	2-4	刻目 刻目突帯	ナデ	ナデ														
		53	壺	口-胴部	A	III	3	刻目	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		54	壺	口-胴部	A	III	3	刻目	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	工具ナデ ナデ															
		55	浅鉢	口-胴部	A	III	3	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		56	浅鉢	口-胴部	A	III	4	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		57	壺	頸部付近	A	III	4	沈線(平行・重弧)	器面剥落	ミガキ															
		58	壺	口-胴部	A	III	4	刻目突帯	ナデ	ナデ															
		59	壺	口-胴部	A	III	5	刻目突帯	指圧痕 指ナデ 工具ナデ	指圧痕 工具ナデ															
		60	壺	口-胴部	B	II	1	-	ミガキ 工具ナデ	ヘラミガキ ナデ かすかに段痕跡															
19	出土土器(6)	61	壺	頸-腹部	B	II	1	沈線(平行・三角)	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		62	壺	頸部	B	I	1	沈線(平行・重弧)	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		63	壺	頸部	B	I	1	刻目突帯 沈線(平行・重弧)	ミガキ	ミガキ															
		64	壺	肩部	B	III	1	沈線(平行)	ヘラミガキ ヘラ後	ヘラミガキ															
		65	壺	腹部	B	III	表	沈線(平行・三角) 沈線文	ヘラミガキ	ヘラミガキ															
		66	壺	口-胴部	B	I	1	刻目突帯	ナデ 工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ 工具調整															
		67	壺	口-胴部	B	I	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		68	壺	口縁部	B	I	表	刻目突帯	工具ナデ ナデ	ハケ目															
		69	壺	口-胴部	B	II	1	刻目突帯	指押さえ 工具ナデ	工具ナデ															
		70	壺	口縁部	B	III	1	刻目突帯	工具ナデ	工具ナデ															
		71	壺	口-胴部	B	II	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ															
		72	壺	口-胴部	B	II	1	刻目突帯	ナデ	ナデ															
		73	壺	口縁部	B	III	表	突帯 沈線	指押さえ 工具ナデ	工具ナデ															
		74	壺	口-胴部	B	III	1	刻目突帯																	

表12 土器観察表(2)

種別 番号	図号	発掘 番号	写真 掲載	器種	部位	トレンチ	区	層	文様	器面調整				胎土					色調		文献・備考					
										内面		外面		石英	長石	角閃石	砂礫	他	内面	外面						
										指ナデ	ナデ	指ナデ	ナデ													
77	19	77	裏	口-胴部	B	III	表	刻目突帯	指ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
78		裏	口-胴部	B	I	1	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
79		裏	口-胴部	B	III	1	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	指頭圧痕	工具ナデ後ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
80		裏	口縁部	B	II	1	突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
81		裏	口-胴部	B	II	1	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
82		鉢	口縁部	B	I	1	-	-	ミガキ	指オサエ	ナデ	ナデ	指オサエ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
83		鉢	口-胴部	B	I	1	-	-	へらミガキ	ナデ	ナデ	へらミガキ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
84		鉢	口縁部	B	I	1	沈線	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
85		裏	底部	B	III	1	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
86		高坏	胴部	B	I	1	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
87	壺	口-胴部	B	I	2	沈線(平行)	自製刺突(重道)	ハケ目	ナデ	指ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
88	壺	胴-胴部	B	II	2	沈線(平行)	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
89	壺	胴-底部	B	II	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
90	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	指頭圧痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
91	裏	口-胴部	B	I	2	刻目	ハケ目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
92	裏	口-胴部	B	II	2	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
93	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
94	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
95	裏	口-胴部	B	I	2	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
96	裏	胴部	B	II	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文献37P48第5図、文献42P227第9図	
97	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
98	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
99	裏	口-胴部	B	I	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
100	裏	口縁部	B	II	2	突帯	指押さえ	ミガキ	指押さえ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
101	裏	口縁部	B	II	2	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
102	裏	蓋	B	I	2	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
103	鉢	口-胴部	B	III	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
104	鉢	口-胴部	B	III	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
105	高坏	口-胴部	B	III	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文献1 P2第3図13、文献2 P31第3図13、文献4 P90第9図44、文献37P51第6図11	
106	鉢	口-胴部	B	I	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
107	蓋	口-胴部	B	II	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
108	洗鉢	底部	B	I	2	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
109	壺	口-胴部	B	III	3	沈線文	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文献1 P2第3図2、文献2 P31第3図2	
110	壺	胴部	B	I	3	沈線	指圧痕	指ナデ	ミガキ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
111	壺	胴-胴部	B	I	3	沈線	沈線文	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
112	壺	胴部	B	II	3	沈線(平行・重道)	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
113	裏	口-胴部	B	III	3	刻目突帯	指圧痕	指ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
114	裏	口-胴部	B	I	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
115	裏	口-胴部	B	II	3	刻目突帯	指圧痕	ハケ目	ナデ	ハケ目	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
116	裏	口-胴部	B	II	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
117	裏	口-胴部	B	II	3	刻目	ナデ	へらミガキ	ナデ	へらミガキ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
118	裏	口-胴部	B	II	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
119	裏	口-胴部	B	I	3	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
120	裏	口-胴部	B	III	3	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
121	裏	口縁部	B	III	3	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
122	裏	口-胴部	B	III	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
123	裏	口-胴部	B	III	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
124	裏	口-胴部	B	II	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
125	裏	口-胴部	B	III	3	刻目	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
126	裏	口-胴部	B	II	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
127	裏	口-胴部	B	III	3	刻目突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
128	裏	口-胴部	B	II	3	突帯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
129	裏	蓋	B	III	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
130	鉢	口縁部	B	III	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
131	鉢	口-胴部	B	III	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
132	鉢	口-胴部	B	III	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
133	高坏	口-胴部	B	II	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文献1 P2第3図14、文献2 P31第3図14、文献4 P90第9図46	
134	高坏	口-胴部	B	II	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
135	高坏	口-胴部	B	I	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
136	高坏	胴部	B	III	3	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
137	壺	胴部	B	III	4	沈線	指圧痕	指ナデ	ナデ	指ナデ																



表14 土器観察表(4)

種別 番号	複製 番号	写真 掲載	器種	部位	トレンテ	区	層	文様	器面調整				胎土				色調		文献・備考						
									内面		外面		石英	長石	角閃石	砂礫	他	内面		外面					
									内面	外面	内面	外面													
32	(19)	図	33	275	壺	口-頸部	E	I	1	-	指ナデ ナデ	ヘラミガキ 工具ナデ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	暗赤褐色	暗赤褐色	庄農				
				276	壺	口-頸部	E	II	1	-	-	工具ナデ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-		淡褐色	淡褐色		
				277	壺	口-頸部	E	III	2	-	凹線 沈線	工具ナデ ナデ	工具ナデ 指アト ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		黄灰色	黄灰色		
				278	壺	口-頸部	E	II	1	-	刻目 刻目突帯 凹線	ナデ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-		暗赤褐色	暗赤褐色		
				279	壺	口-頸部	E	II	2	-	凹線	ミガキ ナデ	工具ナデ ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		黄灰色	黄褐色		
				280	壺	頸部	E	III	-	-	沈線(円状・三角)	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		黄灰色	淡褐色		
				281	壺	頸部	E	II	1	-	沈線(平行・三角)	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		褐色	暗赤褐色		
				282	壺	頸-肩部	E	III	1	-	沈線(平行・三角)	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		黄褐色	黄褐色		
				283	壺	口-頸部	E	I	1	-	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	ハケ目	○	○	-	○	-	○	-		灰褐色	灰褐色		
				284	壺	口-頸部	E	II	1	-	-	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○	-		赤褐色	赤褐色		
				285	壺	口-頸部	E	II	2	-	縦位突帯	工具ナデ	工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-		赤褐色	赤褐色		
				286	壺	口-頸部	E	II	1	-	刻目突帯	ナデ 工具ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-		赤褐色	赤褐色		
				287	浅鉢	口-頸部	E	II	1	-	-	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		暗褐色	褐色		
				288	蓋	蓋	E	III	1	-	結痕	工具ナデ ヘラナデ	工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-		淡褐色	淡褐色	穿孔有	
				289	壺	頸-胸部	F	I	1	-	沈線	ミガキ 工具ナデ 指圧痕	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-		赤褐色	褐色		
				290	壺	胸部	F	I	2	-	沈線(綾杉文)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-		赤褐色	赤褐色	庄農	
				291	壺	口-頸部	F	I	5	-	刻目 刻目突帯	工具ナデ後ナデ	貝殻条痕	○	○	-	○	-	○	-		黒褐色	黒褐色		
				292	壺	口-頸部	F	I	2	-	刻目突帯	ナデ 工具ナデ	ナデ 工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-		淡褐色	暗赤褐色		
				293	壺	口-頸部	F	I	1	-	刻目突帯	ナデ	ナデ 工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-		黄灰色	淡赤褐色		
294	壺	口-頸部	F	II	2	-	刻目突帯	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	赤褐色	赤褐色							
295	浅鉢	口-頸部	F	II	4	-	-	ミガキ	工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-	淡褐色	黄灰色							
296	壺	頸-胸部	G	I	2	-	沈線(平行・重弧)	ナデ ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-	赤褐色	赤褐色							
297	壺	口-頸部	H	-	-	-	pitC	刻目突帯 突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄褐色	黄褐色						
298	壺	口-頸部	-	-	-	-	-	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○	-	○	-	○	-	灰褐色	暗褐色						
299	壺	口-頸部	H	-	-	-	カクラン	刻目突帯	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄灰色	灰褐色						
300	壺	胸-底部	-	-	-	-	-	工具ナデ 指アト	ミガキ 工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-	褐色	赤褐色	穿孔有						
301	○	壺	口-頸部	-	-	-	-	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	淡褐色	紅色							
302	○	壺	口-頸部	A	I	1	-	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄灰色	黄灰色	庄農						
303	壺	口-頸部	D	IV	1	-	-	指ナデ 工具ナデ ナデ	ハケ目 ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄灰色	明赤色							
304	壺	口-頸部	C	V	-	-	-	ナデ	ミガキ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黒色	淡褐色							
305	壺	口-頸部	A	III	1	-	-	工具ナデ後ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	淡褐色	暗褐色							
306	○	壺	口-頸部	B	III	1	-	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	褐色	黒褐色							
307	壺	口-頸部	C	-	-	-	-	ヘラミガキ	指圧痕 ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-	暗赤褐色	暗赤褐色							
308	○	壺	口-頸部	C	I	-	-	ナデ	ハケ目 ナデ	○	○	-	○	-	○	-	淡褐色	淡褐色							
309	壺	口-頸部	-	-	-	-	-	指ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄褐色	黄褐色							
310	壺	口-頸部	E	II	2	-	-	工具ナデ 指アト 指ナデ	工具ナデ 指アト ハケ目	○	○	-	○	-	○	-	赤褐色	褐色							
311	○	壺	口-頸部	C	I	2	-	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄灰色	黄灰色							
312	壺	口-頸部	B	I	1	-	突帯	ミガキ ナデ	工具ナデ ミガキ	○	○	-	○	-	○	-	黒褐色	赤褐色							
313	鉢	口-頸部	A	II	1	-	-	ヘラミガキ ミガキ	ヘラミガキ ミガキ	○	○	-	○	-	○	-	赤褐色	灰褐色							
314	台付鉢	口-頸部	A	I	1	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	灰褐色	淡褐色						
315	台付鉢	口-頸部	D	I	1	-	-	工具ナデ ナデ	ハケ目 工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	暗灰褐色	黄灰色						
316	壺	口-頸部	D	III	1	-	刻目突帯	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	○(内)	淡褐色	淡褐色						
317	壺	口-頸部	D	I	6	-	刻目突帯	指圧痕 工具ナデ ナデ	工具ナデ ミガキ ナデ	○	○	-	○	-	○	-	黄灰色	黒灰色							
318	壺	口-頸部	C	-	-	-	カクラン	ナデ 指ナデ	ナデ(剥落)	○	○	-	○	-	○	-	淡赤褐色	淡赤褐色							
319	○	小型鉢	口-頸部	B	I	1	-	-	指ナデ ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	褐色	褐色 剥落						
320	支脚	脚部	D	IV	1	-	-	工具ナデ 指アト 指ナデ	工具ナデ 指アト 指ナデ	○	○	-	○	-	○	-	赤褐色	赤褐色							
35	(2)	図	36	321	土製品	-	-	-	-	抉り	-	ミガキ	○	○	-	○	-	雲母	-	黒褐色	文献37P47第14回、文献42P227第8回				
				322	筋線半	-	A	II	3	-	沈線	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-		暗褐色	暗褐色		
				323	手捏ね土器	完形	D	III	2	-	-	指圧痕 工具ナデ	ナデ 工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-		黒褐色	黒褐色		
				324	壺の蓋	蓋	F	I	2	-	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	暗褐色		暗褐色			
				325	土製品	-	C	III	2	-	沈線	ナデ	ナデ	△	△	-	△	-	△	-		暗灰色	赤褐色		
				326	壺	口-頸部	-	-	-	-	-	ミガキ 指アト	ミガキ ナデ	○	○	-	○	-	○	-		暗赤褐色	暗赤褐色		
				327	壺	口-頸部	B	III	2	-	-	ミガキ	ミガキ 工具ナデ	○	○	-	○	-	○(少)	金雲母		褐色	褐色		
				328	蓋	蓋	D	III	4	-	-	工具ナデ ナデ	ミガキ	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	褐色		褐色			
				329	壺	口-頸部	B	II	5	-	-	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		雲母(◎)	灰褐色	赤褐色	
				330	壺	口-頸部	D	I	4	-	-	ミガキ 工具ナデ?	ミガキ	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	赤褐色		赤褐色			
				331	壺	口-頸部	B	III	4	-	-	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	△	△	-	○	-	○(白色砂礫)	灰褐色		灰褐色			
				332	壺	頸部	B	III	6	-	沈線	指圧痕 指ナデ	ミガキ	○	○	-	○	-	△	-		雲母	褐色	暗赤褐色	
				333	壺	頸部	B	II	2	-	-	ヘラミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		○	-	黒褐色	黒褐色
				334	壺	頸部	H	-	-	-	カクラン	沈線	ハケ目	工具ナデ後ナデ	○	○	-	○	-	○		-	暗褐色	黄褐色	
				335	壺	口-頸部	E	I	1	-	刻目突帯 刻突 沈線	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-		○	-	黄灰色	黄灰色
				336	壺	頸-肩部	D	IV	1	-	浮文	工具ナデ	工具ナデ	△	△	-	△	-	△	-		淡褐色	淡褐色		
				337	○	壺	頸部	D	III	1	-	沈線 内貼付突帯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○		-	黄褐色	赤褐色	
				338	壺	頸部	A	II	1	-	沈線(重弧)	ナデ	ハケ目	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	灰褐色		黄灰色			
				339	壺	頸部	B	II	1	-	突帯 刻突文	ミガキ	ミガキ	○	○	-	○	-	○	-		○	-	淡褐色	淡褐色
340	壺	頸部	C	V	-	-	1か2	刻突文	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○	-	○	-	○	-	黄褐色	黄褐色						
341	○	壺	口-頸部	A	I	3	-	刻目突帯 突帯(外耳)	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	○	○	-	○	-	○(※)	-	黄灰色	黄灰色						
36	(2)	図	37	342	壺	完形	B	I	3	突帯	指圧痕 ナデ ヘラナデ	ヘラナデ	○	○	-	○	-	○	-	黒褐色	黒褐色	文献1P1第1回2、文献2 P28第1回2、文献4 P89第8回19、文献37P52第7回26			
				343	壺	口-頸部	D	IV	1	刻目突帯 沈線	工具ナデ 指アト	工具ナデ 指アト	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	灰褐色	灰褐色					
				344	壺	口-頸部	D	II	1	突帯	指ナデ ナデ	指ナデ ナデ ミガキ(一部)	○	○	-	○	-	○	-	○	-		赤褐色	黒褐色	
				345	○	壺	頸部	-	-	-	沈線多条	ナデ	ハケ目	◎	◎	-	○	-	○(白色砂礫)	暗褐色	暗褐色				
				346	○	壺	頸部	B	I	1	刻目突帯(外耳)	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	○		-	赤褐色	灰褐色
				347	壺	口-頸部	-	-	-	-	刻目突帯 突帯	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	-	○	-	○	-	○		-	黄褐色	黄褐色
				348	壺	口-頸部	F	II	4	-	-	指圧痕 工具ナデ	ハケ目 工具ナデ	○	○	-	○	-	○	-	○		-	黄灰色	黄灰色
				349	壺	口-頸部	E	III	-	-	刻目突帯 沈線(三角)	工具ナデ	工具ナデ	○	○	-	○	-	○(赤色泥岩礫)	黄褐色	灰褐色				
				350	○	壺	頸部	B	II	2	刻目突帯(外耳)	ナデ	ナデ	○	○	-	○	-	○	-	○		-	暗黄灰色	暗黄灰色
				351	壺	口-頸部	-	-	-																

表15 土器観察表(5)

挿入 番号	掲載 番号	写真 掲載	器種	部位	トレンチ	区	層	文様	器面調整					胎土					色調		文献・備考
									内面	外面	石突	長石	角閃石	砂礫	他	内面	外面				
図 版 1	548	○	壺	完形	D	III	3	刻目 刻目突帯	ナデ									赤褐色	暗赤褐色	文献4 P89第8回28、文献37P51第6回15、文献42P224第3回15	
	549	○	壺	胴-底部	-	-	-	沈線(三角・矢羽根)	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	550	○	壺	完形(半分)	D	II	2	刻目突帯	ナデ									淡褐色	暗赤褐色	文献1 P1第1回10、文献2 P26第11回7、文献3 PL.20 11、文献4 P89第8回26、文献37P51第6回6、文献42P224第3回6	
図 版 2	551	○	無頸壺	完形	A	III	3	沈線(平行・三角)	ヘラミガキ ナデ									赤褐色	赤褐色	文献1 P1第1回7、文献2 P28第1回7、文献3 PL.20 6、文献4 P88第7回9、文献37P51第6回14、文献42P224第3回14 2 対穿孔有	
	552	○	壺	口縁部	A	I	1	-	ナデ									黄灰色	黄灰色		
	553	○	壺	口縁部	D	IV	1	-	ナデ									赤褐色	赤褐色		
図 版 3	554	○	壺	口縁部	C	I	1	-	ナデ									灰色	灰色		
	555	○	壺	口縁部	C	II	3	-	ナデ									淡褐色	淡褐色	庄痕	
	556	○	壺	口縁部	A	I	1	-	ナデ									褐色	褐色		
図 版 3	557	○	壺	口縁部	D	II	1	-	ナデ									褐色	淡褐色		
	558	○	壺	口縁部	D	II	1	-	ナデ									褐色	灰色		
	559	○	壺	口縁部	A	I	1	-	ナデ									淡褐色	淡褐色		
図 版 3	560	○	壺	口縁部	D	II	5	-	ナデ									淡褐色	淡褐色	庄痕	
	561	○	壺	口縁部	-	-	-	-	ナデ									淡褐色	淡褐色		
	562	○	把手	突帯	F	I	表採	-	ナデ									赤褐色	灰色		
図 版 3	563	○	壺	口縁部	E	II	1	刻目	ナデ									黄灰色	黄灰色	庄痕	
	564	○	壺	口縁部	D	IV	1	刻目	ナデ									黄灰色	褐色		
	565	○	大壺	口縁部	C	III	2	突帯	ナデ									淡褐色	淡褐色		
図 版 3	566	○	壺	口縁部	C	?	1	-	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	567	○	大壺	口縁部	A	III	1	突帯	ハケ目	ナデ								黄褐色	黄褐色		
	568	○	壺	口縁部	-	-	上	突帯	ナデ									赤褐色	赤褐色		
図 版 3	569	○	壺	口縁部	C	IV	擾乱	-	ナデ									暗赤褐色	暗赤褐色		
	570	○	大壺	口縁部	-	-	上	突帯	ナデ									褐色	褐色		
	571	○	壺	口縁部	-	-	上	突帯	ナデ									黄灰色	黄灰色		
図 版 3	572	○	大壺	口縁部	-	-	上	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	573	○	大壺	口縁部	-	-	上	刻目突帯	ハケ目	ナデ								黄褐色	褐色		
	574	○	壺	頸部	B	III	1	突帯 沈線	ハケ目	ナデ								褐色	褐色	庄痕	
図 版 3	575	○	壺	頸部	A	I	1	突帯 沈線	ナデ									黄褐色	暗褐色		
	576	○	大壺	頸部	A	I	1	突帯	ハケ目 ナデ	ナデ								黄褐色	黄褐色		
	577	○	大壺	頸部	A	-	pit内	突帯	ナデ									淡褐色	淡褐色		
図 版 3	578	○	壺	頸部	-	-	上	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	579	○	大壺	頸部	-	-	上	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	580	○	壺	頸部	H	-	カクラン	突帯	ナデ									淡赤褐色	淡赤褐色		
図 版 3	581	○	壺	頸部	-	-	上	突帯	ナデ									褐色	褐色		
	582	○	壺	頸部	H	-	カクラン	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	583	○	壺	頸部	-	-	上	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
図 版 3	584	○	壺	頸部	H	-	カクラン	突帯	ナデ									褐色	暗褐色		
	585	○	壺	頸部	-	-	上	沈線	ナデ									淡赤褐色	赤褐色		
	586	○	壺	頸部	E	II	1	沈線	ナデ									黄褐色	淡赤褐色		
図 版 3	587	○	壺	頸部	D	III	4	刻目突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	588	○	壺	頸部	G	III	1	-	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	589	○	壺	頸部	E	II	1	-	ナデ									淡褐色	茶褐色		
図 版 3	590	○	壺	頸部	D	III	2	-	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	591	○	壺	底部	C	III	2	-	ナデ									茶褐色	茶褐色		
	592	○	壺	底部	D	III	1	-	ナデ									黄褐色	灰色		
図 版 3	593	○	壺	底部	E	I	1	-	ナデ									赤褐色	灰褐色		
	594	○	壺	口縁部	D	IV	1	内) 貼付突帯	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
	595	○	壺	口縁部	D	II	2	口) 凹線	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
図 版 3	596	○	壺	口縁部	C	I	2	縦線文	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
	597	○	壺	口縁部	B	III	1	上面暗文	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
	598	○	壺	口縁部	C	表彩	-	-	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
図 版 3	599	○	壺	頸部	F	-	-	突帯	ナデ									黄褐色	黄褐色		
	600	○	壺	口縁部	F	カクラン	-	上面暗文	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
	601	○	壺	口縁部	B	II	1	突帯 胴) 沈線	ミガキ									赤褐色	赤褐色		
図 版 3	602	○	壺	胴部	C	II	2	胴) 突帯	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	603	○	壺	胴部	A	I	1	胴) 突帯	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	604	○	壺	胴部	C	I	1	胴) 刻目突帯	ナデ									黄褐色	赤褐色		
図 版 3	605	○	壺	口縁部	A	III	1	突帯 胴) 沈線	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	606	○	壺	胴部	C	I	1	突帯 胴) 暗文	ミガキ									黄褐色	赤褐色		
	607	○	壺	胴部	C	IV	1	胴) 突帯	ナデ									黄褐色	赤褐色		
図 版 3	608	○	高坏	坏部	C	-	カクラン	外) 暗文	ミガキ									黄褐色	赤褐色		
	609	○	高坏	坏部	F	III	1	-	ミガキ									黄褐色	赤褐色		
	610	○	壺	胴部	B	IV	2	胴) 沈線	ミガキ									黄褐色	赤褐色		
図 版 3	611	○	高坏	坏部	A	I	1	-	ミガキ									黄褐色	赤褐色		
	612	○	壺	胴部	C	II	-	底) 刻目突帯	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	613	○	壺	底部	A	III	1	-	ナデ									黄褐色	赤褐色		
図 版 3	614	○	壺	底部	A	II	2	-	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	615	○	高坏	坏部	A	II	1	-	ナデ									黄褐色	赤褐色		
	616	○	高坏	坏部	F	IV	-	-	ナデ									黄褐色	赤褐色		

表16 土製円盤等計測表(1)

挿入 番号	掲載 番号	写真 掲載	実測 番号	器種	トレンチ	区	層	めんこ法量				備考
								長径(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	
図 版 10	697	○	516	土製円盤	-	-	-	4.21	4.42	0.9	19.0	写真のみ
	698	○	515	土製円盤	-	-	-	3.80	3.87	1.0	16.0	写真のみ
	699	○	509	土製円盤	E	III	1	2.83	2.92	1.12	10.0	写真のみ
	700	○	281	土製円盤	C	-	表採	4.20	4.37	0.81	19.0	写真のみ
	701	○	220	土製円盤	A	I	1	2.32	2.13	0.4	2.0	写真のみ
	702	○	513	土製円盤	-	-	-	5.35	5.11	0.9	25.0	写真のみ
	703	○	512	土製円盤	-	-	-	4.81	4.66	1.18	32.0	写真のみ
	704	○	55	土製円盤	B	I	1	4.70	5.21	5.75	22.0	写真のみ
	705	○	517	土製円盤	-	-	-	4.22	4.68	1.09	20.0	写真のみ
	706	○	396	土製円盤	D	I	3	4.62	5.18	0.79	22.0	写真のみ
図 版 10	707	○	376	土製円盤	D	III	2	5.83	5.79	0.86	36.0	写真のみ
	708	○	520	土製円盤	-	-	-	5.81	5.89	1.65	73.0	写真のみ

表17 土製円盤等計測表(2)

挿図番号	掲載番号	写真掲載	実測番号	器種	トレンチ	区	層	めんご法量				備考
								長径(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	
図版10	709	○	514	土製円盤	-	-	-	6.66	6.52	0.85	45.0	写真のみ
	710	○	519	土製円盤	-	-	-	3.03	2.87	0.86	10.0	写真のみ
	711	○	521	土製円盤	D	III	4	3.82	4.91	0.83	17.0	写真のみ
	712	○	216	土製円盤	A	I	1	5.59	4.38	1.09	34.0	写真のみ
	713	○	510	土製円盤	E	III	1	3.55	3.63	0.73	12.0	写真のみ
	714	○	397	土製円盤	D	I	3	5.44	(4.00)	1.07	29.0	写真のみ
	715	○	511	土製円盤	-	-	-	3.20	2.99	0.77	9.0	写真のみ
	716	○	219	土製円盤	A	I	1	4.57	4.21	1.1	22.0	写真のみ
	717	○	518	土製円盤	E	I	1	3.74	4.10	0.86	16.0	写真のみ
	718	○	218	土製円盤	A	I	1	4.07	4.06	1.28	22.0	写真のみ
	719	○	222	土製円盤	A	I	1	3.36	3.45	1.26	15.0	写真のみ
	720	○	221	土製円盤	A	I	1	4.75	4.00	1.25	23.0	写真のみ
	721	○	215	土製円盤	A	I	1	2.95	2.61	0.71	6.0	写真のみ
	722	○	217	土製円盤	A	I	1	3.96	3.59	0.7	10.0	写真のみ
	723	○	506	紡錘車	C	VI	3	(5.00)	-	0.95	15.0	穿孔有、写真のみ
	724	○	507	紡錘車	B	III	4	(4.70)	-	0.94	12.0	穿孔有、写真のみ
725	○	505	紡錘車	D	II	2	(3.90)	-	0.94	9.0	穿孔有、写真のみ	
726	○	508	紡錘車	E	II	1	(4.80)	-	1.0	13.0	穿孔有、写真のみ	

表18 出土石器計測表(1)

挿図番号	掲載番号	実測番号	写真掲載	器種	トレンチ	区	層	法量(cm)			重量(g)	石材	文献				
								長さ	幅	厚さ			1	2	4	20	
図37 出土石器(1)	356	95		石鏃	B	I	1	1.95	1.75	0.31	0.78	黒曜石					
	357	90		石鏃	D	IV	2	1.9	1.2	2.8	0.55	安山岩					
	358	89		石鏃	E	II	1	2.5	2	0.5	1.45	安山岩					
	359	93		石鏃未製品	D	IV	2	3.16	1.9	0.65	4.01	安山岩					
	360	74	○	石鏃	C	VI	2	3.4	0.6	0.9	3.02	黒曜石					
	361	124	○	石鏃	D	I	1	2.62	0.95	0.3	0.76	黒曜石			P102第18図72		
	362	114	○	石鏃	D	III	5	3.15	1.05	0.71	1.88	安山岩			P102第18図75		
	363	125	○	石鏃	D	II	4	2.85	1.05	0.4	1.09	黒曜石			P102第18図74		
	364	45	○	石鏃	C	I	1	3.66	1.27	0.3	1.82	安山岩					
	365	92	○	石鏃	E	II	1	4.85	0.9	4	1.59	安山岩					
	366	76	○	石鏃	A	III	5	2.63	1.14	0.48	1.08	黒曜石					
	367	126	○	石鏃	D	III	1	3.7	1.12	0.72	2.54	安山岩			P102第18図76		
	368	94		石鏃	B	III	1	1.9	1.4	0.3	0.54	黒曜石(腰岳)					
	369	122		石鏃	A	III	4	2.42	1.28	0.66	1.6	黒曜石	P5第9図5				
	370	75		石鏃	B	III	3	2.05	1.7	0.5	9.4	黒曜石					
	371	97		石鏃	D	I	2	1.73	1.05	0.34	0.53	黒曜石					
	372	71		石鏃	-	-	-	1.55	1.3	0.4	0.62	安山岩					
	373	72		石鏃	A	II	1	1.6	1.35	0.4	5.8	黒曜石					
	374	42	○	石鏃	D	II	4	3.15	2.4	2	5.61	黒曜石					
	375	73	○	石鏃	A	I	1	2.6	1.95	0.65	3.05	安山岩					
	376	127		石鏃	A	III	1	2.35	1.45	0.95	2.37	黒曜石					
	377	70		石匙	-	-	-	3.15	3.85	0.55	4.51	黒曜石					
	378	33		楔形石器	C	III	1	2.79	1.5	1.2	4.79	黒曜石					
	379	137		楔形石器	A	II	1	2.65	3.9	0.8	7.29	黒曜石					
	380	129		尖頭器	A	III	1	3.2	2.28	0.75	4.91	黒曜石					
	381	108		尖頭器未製品	D	I	4	6.4	2.88	0.72	17.05	真岩					
	図38 出土石器(2)	382	31		尖頭器	C	III	1	6.8	3.6	1.69	36	安山岩				
		383	123		尖頭器	B	III	3	3.44	3.28	0.77	7.92	玉髓	P5第9図7			
		384	128		使用痕剥片	A	III	1	3.76	1.9	0.65	4.98	黒曜石				
		385	38		使用痕剥片	C	III	2	2.58	2.8	0.89	5.16	黒曜石				
		386	40		二次加工剥片	D	III	5	2.98	2.76	1.12	8.65	黒曜石				
		387	54		二次加工剥片(楔形石器)	E	III	1	4.2	4.25	0.8	13.51	安山岩				
		388	62		二次加工剥片	D	I	1	3.48	4.75	0.9	13.58	安山岩				
		389	46		二次加工剥片	C	I	2	4	4.85	0.73	10.75	安山岩				
		390	65		二次加工剥片(楔形石器)	A	II	2	3.6	3.1	1.1	11.92	安山岩				
		391	142		二次加工剥片	-	-	-	3.1	2.48	0.9	7.15	安山岩				
		392	99		二次加工剥片	C	III	2	4.25	1.2	0.4	1.88	安山岩				
393		103		二次加工剥片	D	I	3	3.05	3.75	0.7	8.31	安山岩					
394		49		二次加工剥片	C	VI	1	2.1	2.9	1.5	3.49	黒曜石					
395		43		二次加工剥片(楔形石器)	C	VI	2	1.64	2.73	0.95	3.38	黒曜石					
396	32		使用痕剥片	C	III	1	3.7	1.72	0.59	3.17	安山岩						
図39 出土石器(3)	397	55		二次加工剥片(石匙)	C	-	-	7.9	4.7	1.3	43.4	安山岩					
	398	37		石核	C	IV	2	3.18	3.03	1.58	10.63	黒曜石					
	399	39		石核	C	I	-	3	4.3	2	17.72	安山岩					
	400	96		磨製石製品	E	III	1	4.19	1.03	0.34	2.85	磨灰岩					
	401	109	○	磨製石鏃	B	I	3	4.85	1.9	0.4	3.91	真岩			P102第18図66		
図40 出土石器(4)	402	105		磨製石製品片	C	IV	3	3.78	1.4	0.7	2.95	真岩					
	403	116	○	横刃型石器	A	III	-	5.6	8.67	1.9	61.45	安山岩	P7第10図4		P99第15図11		
	404	23		横刃型石器	D	I	3	4.85	5.38	2	38	安山岩					
	405	15	○	横刃型石器	C	II	1	7.31	8.32	1.82	95	安山岩					
	406	164		横刃型石器	D	I	1	5.98	4.28	1.3	39.19	安山岩					

表19 出土石器計測表(2)

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	トレンチ	区	層	法量(cm)			重量(g)	石材	文献				
								長さ	幅	厚さ			1	2	4	20	
図40 出土石器 (4)	407	26	○	横刃型石器	E	III	1	3.68	7.2	102	26	頁岩					
	408	28	○	横刃型石器	D	I	-	5.42	6.45	1.15	38	安山岩					
	409	86	○	横刃型石器	-	-	-	6.7	8.02	1.3	79.36	ホルンフェルス					
	410	47		横刃型石器	B	I	1	3.55	5.6	0.6	12.28	頁岩					
	411	41		横刃型石器	D	II	1	7.1	8.1	1.35	87	安山岩					
	412	168		収穫具	D	I	1	5.85	6.95	1.8	65.02	安山岩					
	413	135	○	横刃形石器	B	III	1	6.7	10.55	1.68	116.36	安山岩					
図41 出土石器 (5)	414	98	○	大型楔形石器	D	I	5	7.1	9.06	1.43	104.19	頁岩					
	415	118		大型楔形石器	D	I	3	4.45	5.1	1.72	45.89	安山岩			P100第16図24		
	416	115		大型楔形石器	D	II	-	6.5	6.85	2.75	113.84	安山岩			P99第15図12		
	417	119		大型楔形石器	B	III	4	5.73	9.42	1.9	129.15	安山岩	P7第10図6		P100第16図24		
	418	134	○	大型楔形石器	B	I	1	6.2	77.5	1.8	95.88	安山岩					
	419	14		打製石斧	C	VI	3	12.6	5.68	1.89	149	ホルンフェルス					
	420	16		打製石斧	C	III	3	11.5	4.84	1.3	86	ホルンフェルス					
	421	107		石核	B	II	2	2.68	3.5	1.9	15.54	黒曜石					
	422	106	○	石核	C	IV	3	2.36	3.75	1.63	14.32	黒曜石					
	423	78	○	石核	A	III	4	4.4	8.74	4.98	213	黒曜石					
	424	141	○	楔形石器	B	I	表土	5.34	6.8	2.2	76.4	安山岩					
	425	20		石核	E	II	1	5.04	5.1	3.6	107	玉髄					
	図42 出土石器 (6)	426	148		石核	F	I	4	8.7	10.2	4	265	安山岩				
427		83		石核	-	-	上	3.6	5.8	4	74.93	玉髄					
428		154		石核	E	-	-	6.05	6.3	3.4	149.57	安山岩					
429		130	○	石核	A	III	1	7.35	4.52	4.15	275	安山岩					
430		101		石核	D	I	1	5	4.35	2.36	31.21	オパール					
431		63	○	石核	D	I	1	5.1	7	2.2	74.12	安山岩					
432		132	○	石核	A	II	1	3.9	2.7	3.1	31.59	玉髄					
433		48	○	石包丁(穿孔有)	E	I	2	7.15	7	0.5	28.67	葦青石					
434		18		大型楔形石器	G	IV	表	6.7	6.85	1.08	64	ホルンフェルス					
図43 出土石器 (7)		435	34		収穫具	-	-	-	7.2	8.3	0.96	52	頁岩				
	436	64		石包丁	H	-	カクラン	5.87	5.25	1	42.07	安山岩					
	437	50		石包丁(穿孔有)	F	III	1	3.95	4.1	0.49	9.6	頁岩					
	438	193	○	石刀形石製品	D	IV	1	8.13	6.58	0.66	48.84	頁岩			P100第16図25		
	439	111	○	磨製石剣	E	I	1	6.9	3.35	0.7	18.87	ホルンフェルス(頁岩)			P101第17図35		
	440	80		磨製石製品	-	-	-	4.1	4.3	1.1	23.88	珪質頁岩					
	441	81	○	磨製石製品	E	II	1	4.51	6.5	1.45	61.19	安山岩					
	442	167		磨製石製品	D	III	3	5.55	7.83	1.2	61.55	ホルンフェルス(頁岩)					
	443	161	○	磨製石製品	-	III	2	5.38	8	1.25	81.77	ホルンフェルス					
	444	8	○	石剣基部未製品	-	-	-	7.8	5.8	1.6	82	緑泥片岩					
	図44	445	9	○	石剣状石器	-	-	-	25.25	4.8	2.85	428	頁岩				
図45 出土石器 (9)	446	6		大型給刃石斧	C	I	2	12.3	7.1	3.24	408	玄武岩					
	447	4		加工斧	-	-	-	6.22	3.83	1.4	46	ホルンフェルス					
	448	166	○	柱状片刃石斧	-	-	-	8.35	2.95	3.38	125.35	層灰岩					
	449	1		柱状片刃石斧	-	IV	4	9.2	5.33	3.01	254	ホルンフェルス					
	450	7		柱状片刃石斧	C	II	1	9.08	3.99	2.5	153	ホルンフェルス					
	451	21		柱状片刃石斧	F	III	1	4.05	9.25	3.37	213	ホルンフェルス(硬質砂岩)					
	452	140		柱状片刃石斧	D	II	1	10.59	4.4	3.45	284	ホルンフェルス					
	453	131		柱状片刃石斧	A	III	1	0.4	3.32	1.5	23.12	ホルンフェルス					
	454	57	○	柱状片刃石斧	C	VI	-	9.1	3.2	2.2	73.05	層灰岩					
	455	53	○	柱状片刃石斧	A	III	1	7.1	2.5	1.4	30.34	層灰岩					
図46 出土石器 (10)	456	56	○	柱状片刃石斧	C	III	1	4.3	2.43	2.15	17.02	層灰岩					
	457	87	○	柱状片刃石斧	E	II	1	3.7	2.8	0.8	15.2	層灰岩					
	458	149		砥石片	E	III	1	4.1	2.2	2.2	30.64	砂岩					
	459	66		穿孔具	A	II	2	6.35	2.65	2	38.44	砂岩					
	460	112		穿孔具	E	III	1	7.58	2.85	1.78	43.47	ホルンフェルス(頁岩)					
	461	51	○	磨製石製品	B	II	-	5	3.4	2	43.75	砂岩					
	462	30	○	磨製石製品	G	IV	1	8.8	6	2.2	140	砂岩					
	463	100		磨製石製品	-	-	-	3.6	3.95	2.9	26.88	ホルンフェルス(砂岩)					
	464	67		磨製石製品	F	II	-	2.2	8.4	1.3	26.78	砂岩					
	465	139		棒状磨砕石	D	II	1	6.55	3.62	2.3	77.37	砂岩					
	466	121		垂飾(穿孔有)	I	I	4	9.1	2.66	1.32	45.29	ホルンフェルス			P108第22図175		
	図47 出土石器 (11)	467	27		磨製石斧	E	I	1	10.17	5.18	2.79	257	ホルンフェルス				
		468	36		磨製石斧	D	I	3	9.62	5.2	2.71	253	ホルンフェルス				
469		5		磨製石斧	-	-	-	12	6.6	3.3	416	ホルンフェルス					
470		3		磨製石斧	-	-	-	10.99	7.62	2.9	370	ハンレイ岩					
471		69		磨製石斧	D	I	1	7.08	6.5	3.19	213	ホルンフェルス(硬質砂岩)					
472		133		磨製石斧	B	I	1	6.15	8.65	3.42	187.72	ホルンフェルス					
473		158		敲石	F	I	1	12.8	4.9	3.4	283	砂岩					
474		77		穿孔具	-	-	-	10.3	5.9	5.5	315	砂岩					
475		61		打製石斧	D	III	1	12.02	7.01	2.5	190	ホルンフェルス(頁岩)					
476		60		打製石斧	D	IV	1	11.7	4.72	1.52	83.7	ホルンフェルス(頁岩)					
477		2		打製石斧	-	-	-	11.4	6.95	0.8	62	ホルンフェルス					
図48 出土石器 (12)	478	136		礫器	A	II	2	11.13	7.15	3.9	400	ホルンフェルス					
	479	59		礫器	C	II	1	7.1	7	2.3	141.17	ホルンフェルス(頁岩)					
	480	113	○	樹皮布叩石	A	II	1	14.8	4	3.3	178.14	砂岩			P102第18図82		
	481	120	○	不明石製品	B	II	2	12.3	3.2	1.25	77.86	ホルンフェルス(頁岩)	P7第10図2		P100第16図21		
	482	152		不明石製品	C	II	1	9.78	4.05	2.15	96.25	ホルンフェルス					
	483	10	○	不明石製品	F	I	4	8.9	3.28	1.68	82	ホルンフェルス					
	484	79		不明石製品	D	I	1	11.93	3.23	2.3	123.66	ホルンフェルス					
	485	88	○	磨製石製品	B	I	6	9.3	4.73	1.95	139.35	砂岩					
	486	25	○	不明石製品	D	I	1	9.51	3.4	3.1	146	砂岩					

表20 出土石器計測表 (3)

挿入 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	トレンチ	区	層	法量 (cm)			重量 (g)	石材	文献			
								長さ	幅	厚さ			1	2	4	20
図48 出土石器(12)	487	12		筋砥石	-	-	-	9.9	4.41	4.55	257	砂岩				
	488	163		砥石	D	I	1	5.8	6.8	6.15	344	砂岩				
	489	11		砥石	-	-	-	8.35	5.98	5.44	300	砂岩				
	490	110		砥石	A	I	1	5.43	4.08	1.35	37.62	砂岩	P8第11図3		P101第17図38	
	491	153		砥石	E	I	1	17.4	5.6	7.9	1239	砂岩				
	492	102		砥石	E	II	1	19.0	4.6	4.3	698	砂岩				
	493	117		砥石	C	IV	6	8.02	2.97	0.8	28.56	真岩			P100第16図26	
	494	150		砥石	C	IV	1	7.5	4.3	3.7	147.74	砂岩				
	495	162		砥石	C	I	2	15	14.6	4.2	1279	砂岩				
	496	13		砥石	D	IV	1	7.15	5.8	1.06	51	砂岩				
図49 出土石器(13)	497	155		磨砕石	E	II	1	13.6	10.6	5.5	1255	花崗岩				
	498	35		磨砕石	D	I	3	7.55	3.5	2.2	94	ホルンフェルス				
	499	156		磨砕石	E	II	1	12.9	9.6	5.2	1060	砂岩				
	500	159		磨砕石	F	II	4	12.6	8.3	5.4	945	砂岩				
	501	157		磨砕石	F	III	1	11.2	9.2	4.3	644	砂岩				
	502	151		磨砕石	E	II	1	9.25	7.35	2.2	215	砂岩				
	503	160		磨砕石	E	II	1	11.2	6.2	3.8	395	砂岩				
	504	19		石皿	A	III	3	11.35	10.4	3.72	558	ホルンフェルス(頁岩)				
	505	82		石皿	D	IV	1	13.3	12.48	4.5	1060	砂岩				
	506	22		軽石	A	II	2	11.15	5.95	3.7	60	軽石				
図50 出土石器(14)	507	144		軽石製品	E	II	1	10.7	7.9	3.9	47.05	軽石				
	508	146		軽石製品	E	II	1	11.42	6.21	3.63	60.24	軽石				
	509	143		軽石製品	C	VI	2	6.32	5.95	3.05	15.49	軽石				
	510	147		軽石製品	E	III	1	3.4	2.75	1.1	2.28	軽石				
	511	138		軽石製品	A	III	1	2.18	3.3	0.75	2.3	軽石				
	512	85		軽石	C	II	1	6.3	4.6	2.9	21.73	軽石				
	513	145		軽石製品	E	III	1	5.85	4.4	3.1	27.47	軽石				
	617	183	○	ノミ状石器	D	II	1	9.8	3	1.89	75.22	層灰岩			P99第15図6	
	618	178	○	柱状片刃石斧	D	IV	1	4.95	2.72	1.5	41.21	層灰岩			P99第15図5	
	619	68	○	磨製石製品	-	I	-	5.29	2.35	1.6	14.88	層灰岩				
図版5	620	181	○	柱状片刃石斧	D	III	1	8.55	4.3	2.36	113.81	層灰岩			P99第15図10	
	621	197	○	石包丁(穿孔有)	C	VI	-	6.2	9.15	1.03	42.33	キンセイ石			P101第17図30	P107 34
	622	201	○	石包丁	D	IV	1	9.8	5.7	1.35	100.03	キンセイ石			P101第17図43	
	623	200	○	石包丁	D	III	2	4.45	4.3	0.74	16.97	キンセイ石			P101第17図33	
	624	196	○	石包丁(穿孔有)	A	II	1	4.15	6.8	1.32	100.04	キンセイ石	P8第11図1	P38	P101第17図28	P107 34
	625	270	○	石包丁	D	III	1	5.8	8.7	0.7	48.95	キンセイ石				
	626	271	○	石包丁	E	II	1	3.3	0.6	0.5	13.74	キンセイ石				
	627	272	○	石包丁(穿孔有)	A	II	2	4.1	4.5	0.72	12.37	キンセイ石				
	628	273	○	石包丁	A	II	1	4.9	4.4	0.55	15.38	キンセイ石				
	629	170	○	石包丁	E	II	1	5.4	7.5	1.06	43.18	キンセイ石			P49 II	
図版6	630	274	○	石包丁	D	IV	1	5.25	5.95	0.76	28.16	キンセイ石				
	631	202	○	石鏃	D	III	1	15.25	4.35	1.13	123.09	ホルンフェルス(砂岩)			P101第17図37	
	17			伐採斧	E	II	1	16.7	7.15	4.92	852	ホルンフェルス(砂岩)				
	24			磨砕片	D	II	2	7.6	4.9	0.66	27	層灰岩				
	29			打製石斧	-	-	-	9.95	6.05	1.55	82	真岩				
	44			石鏃	C	II	1	3.7	3.14	2.08	16.86	黒曜石				
	52			擦り切り石器、棒状石斧	C	II	-	5.95	2.1	2.08	44.22	ホルンフェルス(泥岩)				
	58			大型擦り切り石器	A	III	1	11.8	15.3	1.32	304	砂岩				
	84			磨製石製品	-	-	-	4.12	6.92	2.06	32.54	ホルンフェルス				
	104			磨製石製品	C	VI	1	5.1	4.3	1.68	43.83	ホルンフェルス				
本報告書・未掲載分	165			不明石器	D	I	1	3.75	1.85	1.88	17.86	砂岩				
	169			石鏃の最終(途中折れ)	D	II	1	6.4	9.1	0.7	48.84	真岩			鹿児島考古 第11号 P76 第37図(6)	
	171			石鏃	-	-	-	2.2	1.5	0.34	1.03	安山岩	P7第9図1			
	172			磨製石鏃	A	III	2	2	1.95	0.47	1.59	真岩	P7第9図3			
	173			石鏃	A	I	-	2.4	1.8	0.5	1.57	安山岩	P7第9図4			
	174			磨製片刃石斧	A	II	-	7.2	3.1	2.92	111.16	ホルンフェルス(頁岩)	P7第9図5			
	175			尖頭器	A	III	3	3.66	2.5	1.11	7.47	安山岩	P7第9図6			
	176			ドリルの可能性	B	I	5	3.7	1.3	0.49	2.13	安山岩	P7第9図8			
	177			柱状片刃石斧	A	II	1	10.1	3.4	3.2	181.83	ホルンフェルス(砂岩)	P8第11図4		P99第15図1	
	179			柱状片刃石斧	-	-	-	8.3	3.5	2.26	78.55	ホルンフェルス(頁岩)			P99第15図7	
	180			柱状片刃石斧	D	I	1	7.5	2.7	4.29	153.84	ホルンフェルス(砂岩)			P99第15図9	
	182			ノミ状石器	B	I	-	3.7	0.9	0.64	2.71	ホルンフェルス(砂岩)	P8第11図5		P99第15図4	
	184			砥石	A	II	1	7	2.7	0.28	77.25	層灰岩	P8第11図7		P99第15図2	P107 34
	185			砥石	A	II	1	4.45	2.32	0.86	21.09	層灰岩	P8第11図6		P99第15図3	P107 34
	186			片刃石斧	D	III	1	3.48	14.66	3.24	280	ホルンフェルス			P99第15図8	
	187			磨製石斧	B	III	3	11.66	6.7	2.16	250	ホルンフェルス	P7第10図1		P100第16図13	
	188			磨製石斧	D	I	1	10.83	6.35	2.88	276	ホルンフェルス(砂岩)			P100第16図14	
	189			磨製石斧	B	I	4	8.2	4.8	1.99	125.42	蛇紋岩	P7第10図3		P100第16図17	
	190			磨製石斧	E	III	1	7.9	5.2	2.4	167.26	ホルンフェルス(砂岩)			P100第16図18	
	191			磨製石斧	D	III	?	9.9	5	1.96	113.5	ホルンフェルス(頁岩)			P100第16図20	
	192			横刃形石器	C	II	2	4.08	6.3	1.1	38.78	安山岩			P100第16図23	
	194			石包丁	D	I	5	3.5	3.42	0.65	7.85	安山岩			P100第16図27	
	195			磨製石斧	E	III	1	10.19	4.6	3.41	261	ホルンフェルス			P100第16図15	
	198			石包丁	A	I	-	7.4	5.1	0.8	29.63	真岩	P8第11図2		P101第17図31	
	199			石包丁	E	II	1	10.2	6	0.82	67.35	砂岩			P101第17図32	
	203			擦切具	C	IV	3	8.8	6.8	0.88	82.73	砂岩			P101第17図36	
	204			擦切具	D	II	1	5.7	5.8	0.38	21.97	砂岩			P101第17図40	
	205			擦切具	B	I	-	5.45	3.75	0.5	21.84	砂岩			P101第17図41	
	206			砥石	E	II	1	8.52	4.75	0.7	60.15	砂岩			P101第17図39	
	207			円形石製品	G	III	1	5.18	5.2	0.59	23.96	砂岩			P101第17図42	

表21 出土石器計測表(4)

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	トレンチ	区	層	法量(cm)			重量(g)	石材	文献			
								長さ	幅	厚さ			1	2	4	20
		208		石包丁	D	IV	2	4.21	10.5	0.87	61.3	崖青石		P55 4	P101第17図29	P107 34
		209		石鏃	B	II	1	1.4	1.41	0.32	0.25	頁岩			P102第18図44	
		210		石鏃	C	VI	2	1.9	1.9	0.37	0.95	安山岩			P102第18図45	
		211		石鏃	D	IV	1	2	1.66	0.32	0.63	安山岩			P102第18図46	
		212		石鏃	D	II	1	1.61	1.41	0.44	0.78	安山岩			P102第18図47	
		213		石鏃	C	III	2	1.68	1.3	0.3	0.39	黒曜石			P102第18図48	
		214		石鏃	D	I	1	2.15	1.41	0.3	0.59	安山岩			P102第18図49	
		215		石鏃	C	I	4	1.7	1.42	0.31	0.42	黒曜石			P102第18図50	
		216		石鏃	D	I	2	1.8	1.54	0.39	0.79	安山岩			P102第18図51	
		217		石鏃	C	VI	2	1.95	1.62	0.36	0.81	安山岩			P102第18図52	
		218		石鏃	D	III	2	1.47	1.4	0.28	0.47	安山岩			P102第18図53	
		219		石鏃	-	-	pit内	1.8	1.3	0.75	0.59	黒曜石			P102第18図54	
		220		石鏃	C	IV	2	1.95	2.31	0.48	1.32	安山岩			P102第18図55	
		221		石鏃	D	I	5	1.99	1.22	0.3	0.51	黒曜石			P102第18図56	
		222		石鏃	D	III	2	1.81	1.19	0.45	0.51	安山岩			P102第18図57	
		223		石鏃	D	II	4	2.02	1.45	0.33	0.59	黒曜石			P102第18図58	
		224		石鏃	C	III	2	2.14	1.7	0.39	0.81	安山岩			P102第18図59	
		225		石鏃	D	I	2	1.49	1.27	0.29	0.39	安山岩			P102第18図60	
		226		石鏃	D	II	1	1.85	1.41	0.3	0.54	黒曜石			P102第18図61	
		227		石鏃	C	III	4	1.68	1.51	0.33	0.6	安山岩			P102第18図62	
		228		石鏃	D	II	1	1.8	1.75	0.44	0.82	安山岩			P102第18図63	
		229		石鏃	C	II	3	2.26	1.95	0.44	1.1	黒曜石			P102第18図64	
		230		石鏃	D	III	5	3.5	2.13	0.38	1.54	黒曜石			P102第18図67	
		231		石鏃	C	II	1	1.85	1.61	0.4	0.67	黒曜石			P102第18図68	
		232		石鏃	C	I	1	1.42	1.28	0.28	0.36	安山岩			P102第18図69	
		233		石鏃	C	I	3	1.72	1.19	0.4	0.64	黒曜石	P7第9図7		P102第18図71	
		234		石匙	D	I	1	2.22	1.61	0.6	1.6	黒曜石			P102第18図65	
		235		石匙	B	II	3	2.38	3.28	0.8	3.74	黒曜石			P102第18図79	
		236		ドリル	C	II	3	1.91	0.75	0.28	0.43	安山岩			P102第18図70	
		237		ドリル	D	II	1	3.09	1.14	0.3	1.2	安山岩			P102第18図73	
		238		ドリル	D	III	5	3.43	0.9	0.56	1.82	安山岩			P102第18図77	
		239		ドリル	C	I	4	5.1	0.96	0.48	3.1	安山岩			P102第18図78	
		240		敲石	D	IV	1	7.35	3	1.9	67.24	ホルンフェルス			P102第18図80	
		241		敲石	B	II	1	4.9	3.45	2.53	67.56	砂岩			P102第18図85	
		242		敲石	D	III	1	6.75	4.5	2.85	80.25	安山岩			P102第18図87	
		243		砥石	D	I	1	10.4	3.7	1.87	92.38	砂岩			P102第18図81	
		244		砥石	D	IV	1	10	3.8	2.37	136.73	砂岩			P102第18図83	
		245		石錘	-	-	-	6.12	4.65	2.6	111.55	砂岩			P102第18図84	
		246		石錘	A	I	5	6.6	6.4	2.77	158.72	砂岩			P102第18図86	
		247		穿孔具	C	VI	5	7.58	2.8	2.13	69.25	砂岩			P102第18図88	
		248		穿孔具	D	III	2	6.7	1.9	1.4	25.74	ホルンフェルス			P102第18図89	
		249		穿孔用石器	D	III	4	5.51	2.38	2.1	35.37	砂岩			P102第18図90	
		250		軽石製品	D	III	1	16.4	4.7	2.5	49.66	軽石			P104第19図91	
		251		軽石製品	E	II	1	7.7	6.6	5.25	42.81	軽石			P104第19図92	
		252		軽石製品	D	III	-	9.3	4.9	3.25	54.07	軽石			P104第19図93	
		253		軽石製品	C	IV	2	6.9	3.7	1.39	12.55	軽石			P104第19図94	
		254		軽石製品	E	I	1	5.25	4.9	2.01	15.32	軽石			P104第19図95	
		255		軽石製品	C	V	1	7.2	5.28	2.5	26.24	軽石			P104第19図96	
		256		軽石製品	A	-	-	6	4.55	2.06	14.25	軽石			P104第19図97	
		257		軽石製品	D	II	1	3.03	2.33	0.69	1.47	軽石			P104第19図98	
		258		軽石製品	C	III	2	2.07	1.57	0.53	0.73	軽石			P104第19図99	
		259		軽石製品	A	I	3	9.3	5.35	4.06	38.49	軽石			P104第19図100	
		260		軽石製品	C	VI	2	7	5.6	1.9	17.59	軽石			P104第19図101	
		261		軽石製品	G	III	1	8.4	5.7	5.43	76.9	軽石			P104第19図102	
		262		勾玉形石製品	C	IV	3	2.4	1.8	0.95	5.25	砂岩			P108第22図174	
		263		管玉	-	-	-	0.6	2.19	0.16	1.31	碧玉			P108第22図178	
		264		管玉	C	-	-	0.62	2.03	0.14	1.3	ヒスイ			P108第22図179	
		265		管玉	B	-	-	0.79	1.47	0.21	1.05	滑石	P9第14図14		P108第22図180	
		266		管玉	C	II	2	0.38	0.84	0.13	0.18	ヘキ玉			P108第22図181	
		267		管玉	C	I	2	0.32	0.74	0.09	0.11	ヘキ玉			P108第22図182	
		268		管玉	B	I	4	0.4	0.7	0.1	0.9	ヘキ玉	P9第14図13		P108第22図183	
		269		石包丁再加工	D	II	1	3.4	2.4	0.27	3.39	頁岩			P108第22図191	

本報告書・未掲載分

表22 出土貝製品計測表

採掘 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	貝種	トレンチ	区	層	法量(cm)			重量(g)	文献
									長さ	幅	厚み		
図 51	514	8		貝刃	ハマグリ	B	II	3	6.72	8.2	2.21	36.88	
	515	15	○	貝輪破損品	ゴホウラ	D	I	3	7.2	6.7	0.5	14.21	文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7 ①-A
	516	9		貝輪	ゴホウラ	B	I	3	10.9	6.2	1.75	92.57	
	517	6		貝輪片	ゴホウラ	C	IV	2	4.33	4.75	1.3	5.56	
	518	3		貝小玉	-	B	II	3	1	0.85	0.5	0.25	
	519	7		貝輪片	ゴホウラ	A	-	-	2.48	1.25	0.7	2.45	
520	5		垂飾品?	-	C	IV	2	2.75	1.98	0.4	1.5		
図 8	632	11	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	C	IV	4	11.45	6.75	1.0 1.75	110.72	文献4 P108 第22図177, 文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7 ①-1
	633	12	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	B	II	2	10.75	6.35	0.38 0.5	54.36	文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7①-2
	634	13	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	D	III	2	12.78	6.65	1.0 1.65	151.12	文献50 P81 図7①-3
	635	14	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	B	I	3	6.5	4.05	0.65	23.55	文献50 P81 図7①-4
	636	16	○	貝輪	ゴホウラ	D	III	2	5.5	1.08	0.55	6.44	文献50 P81 図7①-B
	637	17	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	B	I	3	9.55	9.75	0.65 0.5	143.88	文献1 P109 第15図1, 文献4 P108 第22図176, 文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7②-C
	638	18	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	B	III	-	9.4	9.02	0.85 0.45	134.98	文献50 P81 図7②-D
	639	19	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	D	I	1	10.45	7.78	0.75 0.45	134.18	文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7②-E
	640	20	○	貝輪粗加工品	ゴホウラ	B	I	2	8.02	7.4	0.7 0.35	77.73	文献50 P81 図7②-F
	641	21	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	II	2	7.45	9	1.05	127.64	文献50 P81 図7②-G
	642	22	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	II	1	7.95	7.2	0.65	63.97	文献50 P81 図7②-H
	643	23	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	3	9.55	6.5	1.04 0.45	102.11	文献50 P81 図7③-I
	644	24	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	III	2	7	6.7	0.4 0.4	50.39	文献50 P81 図7③-J
	645	25	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	2	6.8	5.51	0.2 0.1	14.87	文献50 P81 図7③-K
	646	26	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	2	0.8	5.12	0.45	20.84	文献50 P81 図7③-カ
	647	27	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	II	1	7.89	6	2.15	62.11	文献50 P81 図7③-ア
	648	28	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	III	1	7.5	3.25	0.77	9.15	文献50 P81 図7③-イ
	649	29	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	1	11.45	8.69	0.45	78.81	文献20 P19 図27, 文献50 P81 図7③-ウ
	650	30	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	1	9.7	4.08	1.4	54.03	文献50 P81 図7③-エ
	651	31	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	II	3	9	3.75	1.54	23.56	文献50 P81 図7③-オ
	652	32	○	貝輪磨材	ゴホウラ	?	III	1	5.55	0.88	0.75	3.86	文献50 P81 図7④
	653	33	○	貝輪磨材	ゴホウラ	A	III	1	7.5	1.55	0.91	8.15	文献50 P81 図7④
	654	34	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	III	2	5.69	1.7	1.03	9.2	文献50 P81 図7④
	655	35	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	III	1	5.4	1.72	0.57	3.55	文献50 P81 図7④
	656	36	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	III	1	4.65	1.35	0.91	4.8	文献50 P81 図7④
	657	37	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	III	1	3.11	1.09	0.83	2.27	文献50 P81 図7④
	658	38	○	貝輪磨材	ゴホウラ	G	III	2	4.35	1.69	0.76	4.53	文献50 P81 図7④
	659	53	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	3.48	1.1	0.5	16.6	文献50 P81 図7④
	660	39	○	貝輪磨材	ゴホウラ	A	III	-	6.45	1.25	0.95	5.57	文献50 P81 図7④
	661	40	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	IV	1	4.45	1.05	0.71	2.51	文献50 P81 図7④
	662	41	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	3.5	1	0.75	1.95	文献50 P81 図7④
	663	42	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	III	1	5.3	2.35	1	9.39	文献50 P81 図7④
	664	43	○	貝輪磨材	ゴホウラ	G	III	2	5.15	1.1	1.1	6.86	文献50 P81 図7④
665	44	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	II	3	9.1	1.02	0.65	7.51	文献50 P81 図7④	
666	45	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	0.7	0.82	0.44	1.93	文献50 P81 図7④	
667	46	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	III	2	5.35	1.14	0.47	3.28	文献50 P81 図7④	
図 9	668	71	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	7.1	2.98	1.2	16.09	
	669	57	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	8.37	3.8	1.39	35.33	
	670	72	○	貝輪磨材	ゴホウラ	C	IV	2	11.25	5.96	1.8	54.69	
	671	65	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	10.05	10	1.85	119.34	
	672	73	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	11.38	6	1.65	107.21	
	673	56	○	貝輪磨材	ゴホウラ	-	-	-	13.9	5.98	2.55	205	
	674	76	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	II	5	7.95	2.53	1	12.83	
	675	64	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	2	6.7	5.9	1	49.99	
	676	58	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	1	11.6	2.85	1.95	68.05	
	677	74	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	II	2	9.92	2.9	1.66	44.72	
	678	62	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	IV	1	8.31	3.34	1.49	34.65	
	679	60	○	貝輪磨材	ゴホウラ	C	VI	2	12	4.89	2.25	91.62	
	680	63	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	2	5.3	2.45	0.98	11.58	
	681	75	○	貝輪磨材	ゴホウラ	B	I	2	6.62	7.9	0.78	58.16	
	682	61	○	貝輪磨材	ゴホウラ	C	VI	5	11.29	3	1.6	71.44	
	683	68	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	11	2.8	1.29	39.01	
684	66	○	貝輪磨材	ゴホウラ	C	IV	2	11.35	3.28	1.39	51.61		
685	67	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	9.78	2.3	1.69	48.87		
686	69	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	10.15	3.35	1.46	47.48		
687	59	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	III	2	10.65	2.3	1.29	27.45		
688	70	○	貝輪磨材	ゴホウラ	D	I	2	9.3	2.7	1.8	43.66		
図 10	689	10	○	貝輪	オオツタノハ	D	I	3	7.51	5.55	0.15 0.4	17.71	文献4 P108 第22図170, 文献20 P19 27
	690	47	○	貝輪未製品	オオツタノハ	B	I	1下	6.61	5.25	0.4	9.73	文献1 P9 第15図3, 文献4 P108 第22図168
	691	48	○	貝輪	ゴホウラ	B	II	?	7.42	5.6	0.35 0.38	12.83	文献1 P9 第15図2, 文献4 P108 第22図169, 文献20 P19 27
	692	49	○	貝輪未製品	ゴホウラ	D	I	3	6.95	5.4	0.35 0.25	15.6	文献4 P108 第22図171, 文献20 P19 27
	693	50	○	貝輪未製品	ゴホウラ	C	IV	3	7.25	5.3	0.38 0.4	18.38	文献4 P108 第22図172, 文献20 P19 27
	694	51	○	貝輪未製品	ゴホウラ	C	IV	2	5.6	3.6	0.25 0.35	10.45	文献4 P108 第22図173
	695	52	○	貝輪未製品	ゴホウラ	E	I	1	10.91	8.75	0.55 0.6	87	文献20 P18 27
696	54	○	不明	イモガイ	C	VI	2	10.7	5.95	0.45	61.76	文献50 P85 図13-1	
本 報 告 書 未 掲 載 分	55			貝輪片	-	B	I	6	8.15	3.25	0.4	17.19	文献20 P19 27
	77			磨材	ゴホウラ	E	II	1	13.12	3.02	1.46	48.13	文献4 P106 第20図128
	78			磨材	ゴホウラ	B	II	1	8.5	1.3	0.96	10.38	文献4 P106 第20図129
	79			磨材	ゴホウラ	E	II	1	5.35	1.01	0.66	3.11	文献4 P106 第20図130
	80			貝小玉	巻貝殻頂	-	-	表	1.15	1.6	0.76	1.71	文献4 P106 第20図143
81			貝垂飾	ゴホウラ	C	VI	3	5.2	3.18	0.74	10.72	文献4 P106 第20図185	

表23 出土骨角器計測表(1)

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	素材	トレンチ	区	層	法量(cm)			重量(g)	文献					
									長さ	幅	厚さ		1	2	4			
図 52	出土骨角器	521	45	○	骨鏃状製品	中型・四股骨	C	Ⅲ	2	4.61	0.7	0.47	1.93					
		522	73	○	へら状製品先端部	中型・四股骨	C	Ⅵ	6	2.8	0.75	0.4	0.93					
		523	46	○	骨鏃状製品基部	中型・四股骨	D	Ⅱ	3	3.46	0.92	0.9	1.85					
		524	44	○	刺突具	中型・四股骨	D	Ⅱ	1	6.8	0.8	0.75	4.48					
		525	34	○	かんざし	中型・四股骨	D	Ⅲ	2	5.5	0.75	0.35	1.99					
		526	81	○	へら	猪牙	D	Ⅳ	2	5.45	1.95	0.2	3.72					
		527	12	○	不明製品	鹿角	C	-	-	5.2	1.24	1.2	5.28					
		528	5	○	不明製品	鹿角	A	Ⅲ	5	6.25	3.35	0.8	10.5	P9第14図4	P40	P106第20図132		
		529	82	○	骨鏃状製品	中型・四股骨	B	Ⅱ	2	3.55	1.05	0.75	2.37					
		530	3	○	へら状製品	猪牙	-	Ⅰ	2	3.9	1.8	0.7	2.79			P106第20図126		
		531	61	○	素材	猪牙	D	Ⅰ	1	3.7	2.6	0.8	4.84					
		532	2	○	刺突具	猪牙	B	Ⅲ	3	5.15	1.7	1.4	7.97	P9第15図6				
		533	63	○	紡錘車	カメ・骨	B	Ⅲ	4	5.4	5.3	1	15.84					
		534	4	○	結合釣針	鹿角	A	Ⅲ	1	5.4	2.35	1.2	5.11	P9第14図5		P106第20図131		
		535	74	○	垂飾品	小型・犬歯	B	Ⅱ	1	3	2	0.6	0.52					
		536	6	○	垂飾品	小型・犬歯	B	Ⅱ	5	2	0.5	4.5	0.36	P9第14図10		P106第20図140		
		図 版 11	出土骨角器	727	32	○	骨鏃状製品	小型・犬歯	Bt	Ⅱ	6	5.54	0.56	0.32	1.22			
				728	75	○	骨鏃状製品	小型・犬歯	B	Ⅱ	1	5.15	0.76	0.45	1.31			
729	68			○	骨鏃	小型・犬歯	D	Ⅱ	2	2.78	1.02	1.04	2.28					
730	47			○	刺突具	小型・犬歯	C	Ⅳ	2	3.62	0.44	0.33	0.51					
731	49			○	刺突具	小型・犬歯	B	Ⅰ	2	5.58	0.85	0.43	2.07					
732	66			○	刺突具	小型・犬歯	C	Ⅳ	2	4	0.97	0.31	0.88					
733	33			○	刺突具	小型・犬歯	C	Ⅳ	2	4.73	0.69	0.47	1.59					
734	76			○	刺突具	小型・犬歯	C	Ⅵ	6	2.21	0.62	0.3	0.7					
735	48			○	不明猪牙製品	猪牙	D	Ⅲ	2	3.76	0.57	0.43	1.57					
736	65			○	不明猪牙製品	猪牙	C	Ⅵ	2	5.5	0.71	0.6	2.53					
737	69			○	不明猪牙製品	猪牙	D	Ⅱ	-	7.1	0.94	0.9	4.92					
738	42			○	不明猪牙製品	猪牙	D	Ⅰ	1	8.85	1.77	0.88	11.03	P9第15図7				
739	40			○	不明鹿角製品	鹿角	A	Ⅲ	3	3.89	1.57	0.88	2.47					
740	39			○	不明鹿角製品	鹿角	A	Ⅲ	4	5.3	0.92	0.6	3.23					
741	23			○	不明鹿角製品	鹿角	C	Ⅵ	1	5.51	0.85	0.85	0.85					
742	57			○	不明鹿角製品	鹿角	D	Ⅰ	5	4.6	1.7	1.69	3.73					
743	41			○	不明鹿角製品	鹿角	D	Ⅲ	2	7.51	1.64	1.02	8.8					
744	67			○	不明鹿角製品	鹿角	C	Ⅵ	2	7.75	1.83	1.12	9.57					
745	13			○	不明鹿角製品	鹿角	B	Ⅰ	2	7.8	1.6	1.34	9.9					
図 版 12	出土骨角器			746	14	○	不明鹿角製品	鹿角	B	Ⅲ	2	12.25	2.26	1.55	27.74			
		747	37	○	不明鹿角製品	鹿角	A	Ⅲ	2	8.4	1.43	1.05	10.11					
		748	50	○	不明鹿角製品	鹿角	C	Ⅲ	2	9.5	1.33	1.23	16.17					
		749	1	○	押圧具	鹿角	B	Ⅰ	1	17.95	6.85	2.35	102.26	P9第15図4				
		750	11	○	押圧具	鹿角	B	Ⅲ	3	8.3	3.88	1.9	27.52					
		751	43	○	押圧具	鹿角	G	Ⅳ	2	9.75	0.21	3.39	54.84					
		752	22	○	押圧具	鹿角	D	Ⅰ	3	10.9	4.62	1.38	1.38					
		753	21	○	押圧具	鹿角	D	Ⅰ	2	11.6	2.66	1.43	1.43					
		754	64	○	押圧具	鹿角	D	Ⅱ	1	14.4	4.06	2.09	39.77					
		755	54	○	押圧具	鹿角	B	Ⅲ	3	13	4.3	1.75	44.14					
		756	51	○	素材	鹿角	-	-	-	14	5	2.78	63.78					
本 報 告 書 ・ 未 掲 載 分	出土骨角器	757	38	○	素材	鹿角	D	Ⅲ	2	7.85	2.33	1.31	17.61					
		758	80	○	素材	鹿角	B	Ⅱ	3	9.6	2.63	2.32	22.38					
		759	78	○	素材	鹿角	B	Ⅱ	5	7.4	4.28	1.61	23.01					
		760	79	○	素材	鹿角	D	Ⅱ	3	19.2	3.62	3	51.48					
		761	55	○	素材	鹿角	B	Ⅲ	4	21	6.38	4.54	132.14					
		7				へら	中型・四股骨	E	Ⅰ	1	8.45	2.02	0.8	8.91				
		8				板状	カメ・甲骨	F	Ⅱ	4	5.33	3.4	0.74	10.62				
		9				横切断	猪牙	B	Ⅱ	1	5.04	1.84	1.9	9.23				
		10				板状	クジラ	B	Ⅰ	2	24.6	7.3	1.75	175.78				
		20				刺突具	鹿・下顎	B	Ⅱ	2	9.8	16.61	1.47	44.93				
		24				針	魚骨	D	Ⅲ	2	4.76	0.6	0.35	0.35				
		25				切断	中型・四股骨	B	Ⅱ	6	0.5	2.05	1.08	1.08				
		26				刺突具	魚骨	B	Ⅲ	2	5.95	3.05	0.34	0.34				
		27				歯部切断	魚骨	B	Ⅲ	2	5.8	0.95	0.65	3.36				
		28				下部切断	猪牙	D	Ⅲ	4	7.45	1.74	1.61	7.99				
29				へら	中型・助骨	D	Ⅱ	4	7.4	1.79	0.31	3.53						
30				下部切断	猪牙	C	Ⅳ	2	6.73	1.64	0.95	8.33						
31				下部切断	小型・犬歯	C	Ⅳ	2	3.22	0.51	0.36	0.7						
35				押圧具	小型・四股骨	E	Ⅰ	2	4.85	1.4	1.02	2.98						
36				押圧具	鹿角	D	Ⅰ	4	13.45	2.11	2.2	47.6						
52				押圧具	鹿角	B	Ⅱ	4	8.25	2.07	1.39	16.89						
53				押圧具	鹿角	C	Ⅴ	2	10.08	1.22	1.44	11.5						
59				刺突具	鹿角	C	Ⅲ	1	6.1	2.22	1.02	4.94						

表24 出土骨角器計測表(2)

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	写真 掲載	器種	素材	トレンチ	区	層	法量 (cm)			重量(g)	文献		
									長さ	幅	厚さ		1	2	4
		60		刺突具	?	C	IV	2	10.6	1.2	0.71	7.39			
		62		刺突具	歯	D	I	4	5.7	0.9	0.65	3.06			
		70		へラ	?	D	IV	-	7.19	1.18	0.88	5.92			
		71		棒状	クジラ	F	II	4	17.6	1.99	1.85	30.04			
		72		棒状	クジラ	F	II	5	12.3	1.9	1.64	31.4			
		77		押圧具	鹿角	C	VI	5	4.9	1.78	1.01	5.42			
		83		鏃	中型・四股骨	C	VI	5	8.35	1.24	0.66	6.21			P106第20図103
		84		鏃	中型・四股骨	F	I	4	5.8	1.19	0.72	4.16			P106第20図104
		85		刺突具	中型・四股骨	D	III	3	6.6	0.79	0.65	2.79			P106第20図106
		86		刺突具	中型・四股骨	B	I	3	6.45	5.88	0.49	2.53	P9第14図8		P106第20図107
		87		刺突具	中型・四股骨	D	I	4	5.61	0.72	0.62	2.01			P106第20図108
		88		刺突具	中型・四股骨	D	II	2	4.62	0.71	0.54	1.48	P9第14図15		P106第20図111
		89		刺突具	小型・四股骨	B	II	6	4.19	0.62	0.53	1.34			P106第20図112
		90		骨鏃	鹿角	D	I	2	3.88	0.9	0.92	2.17			P106第20図114
		91		骨針	小型・四股骨	-	-	-	3.55	0.26	0.23	0.22			P106第20図115
		92		刺突具	中型・四股骨	D	I	3	4.8	0.6	0.35	1.19	P9第14図7		P106第20図116
		93		加工品	中型・四股骨	D	II	4	6.91	0.58	0.47	1.55			P106第20図118
		94		押圧具	中型・四股骨	D	III	2	7.75	0.73	0.74	4.85			P106第20図119
		95		刺突具	中型・四股骨	-	-	-	10.8	1.05	0.45	3.68			P106第20図120
		96		鏃	サメ歯	-	-	-	3.53	1.49	0.53	1.14			P106第20図121
		97		釣針	猪牙	-	-	-	2.61	1.05	0.25	0.43			P106第20図122
		98		釣針	猪牙	-	-	-	2.65	1.5	0.32	0.71			P106第20図123
		99		刺突具	中型・四股骨	D	III	4	4.81	0.9	0.76	2.65			P106第20図124
		100		へラ状加工品	猪牙	C	III	2	3.31	2.23	0.49	4.14			P106第20図125
		101		へラ状加工品	猪牙	B	I	6	4.79	1.7	0.71	6.9			P106第20図127
		102		刺突具	外科・前顎骨	B	II	2	5.57	3.73	0.91	4.22			P106第20図133
		103		垂飾	猪牙	F	I	4	2.69	0.83	0.5	1.15	P9第14図6		P106第20図134
		104		垂飾	猪牙	C	VI	3	3.16	0.86	0.55	1.32			P106第20図135
		105		垂飾	猪牙	C	V	3	3.49	1.13	0.77	2.4			P106第20図136
		106		垂飾	小型・犬歯	D	II	5	2.19	0.5	0.33	0.35	P9第14図10		P106第20図137
		107		垂飾	小型・犬歯	D	II	4	2.03	0.7	0.33	0.25			P106第20図138
		108		垂飾	小型・犬歯	D	II	3	1.94	0.5	0.33	0.32			P106第20図139
		109		垂飾	猪牙	D	III	2	4.26	2.35	0.39	3.43			P106第20図141
		110		丸玉	鹿角	B	II	6	1.43	1.69	1.58	3.12	P9第14図11		P106第20図142
		111		垂飾	小型・四股骨	B	I	4	5.68	1.64	0.82	4.77	P9第14図2	P40	P106第20図144
		112		垂飾	小型・四股骨	B	II	-	5.2	1.51	0.51	1.75	P9第14図3	P40	P106第20図145
		113		垂飾	中型・四股骨	D	II	5	3.4	1.38	0.45	1.13			P106第20図146
		114		垂飾	中型・四股骨	A	III	2	3.57	1.54	0.79	1.32	P9第14図1	P40	P106第20図150
		115		垂飾	小型・歯	A	III	-	2.62	0.66	0.23	0.44	P9第14図9		P106第20図151
		116		垂飾	猪牙	D	III	2	6.11	2.1	0.51	6.04			P106第20図184
		117		垂飾	猪牙	G	IV	2	7.15	2.59	0.48	8.52			P106第20図186

本報告書・未掲載分

## 第4章 総括

### 第1節 整理作業でわかったこと

貝層を中心として、弥生時代以前の遺物に限って遺物整理を進めた。表層からは弥生時代中期土器、弥生時代後期土器が出土している。古墳時代の成川式土器は少数で、ほとんどみられなかった。土師器は糸切り底のものを中心として、割花文や草花文の青磁、国産陶器が見られる。弥生前期から中期前半の遺物に絞った整理作業を行った。

記録してある遺構の他に、土層断面図や日誌からは、とくに神社側に、堅穴住居跡などの遺構が展開した可能性が高い。これらは、出土遺物や土層断面の高さから、貝塚形成後の中期に形成された可能性がある(図7 遺構配置図)。

河口編年(文献4・文献15・文献37)は、Dトレンチの出土土器を中心として組み立てられ、その後文献による第II様式では如意状口縁の甕形土器も含むものとなっている。BトレンチとDトレンチにおいて、甕形土器の口縁部形状で層位ごとに計数した。その結果は表3と表4であるが、つねに如意状口縁と刻目突帯口縁が出土し、1層になると刻目口縁のものが圧倒する。Bトレンチは2層が貝層で、Dトレンチは3層が貝層であるが、貝層の形成前に両者が併存している。

今回はBトレンチ層別出土土器(図58)で、変遷を追うと、如意状口縁の板付I式・II式の影響の土器は、B-4・D-5層から出土してくる。それより上層は甕形土器は刻目突帯文土器の一条甕と二条甕と如意状口縁の板付系甕の3形式<sup>註1</sup>が併存する。一条甕は三角突帯を口縁部外側に貼付けるが、口縁の上面が水平となり胴部が膨らむ器形となり、上層になると上面の幅が広がっていく。二条甕は、例えば文中の184→183→185→182の型式変化で、183が高橋I式土器、185が高橋II式に該当する。板付系土器の如意状口縁は、外反が大きく口縁の刻目が無いかまばらなものから、胴部が立ち上がりあるいは膨らむ結果として外反度合いが緩くなり刻目が密に精緻になる。折衷型といわれる52・125なども出土する。上層へいくと板付系は割合が減じていく。前期の甕形土器の器面は、ほとんどが工具ナデ後にナデ消しで調整され、ハケ目は圧倒的に少ない。

壺形土器については、口縁部の段構成の破片が稀であり、屈曲が強くてほとんどが肥厚しない口縁となる。高橋I式では、口縁部や頸部と肩の付け根の段の痕跡が窺われるが、高橋II式では、沈線文の壺形土器となる。

高橋I式とII式を後世の河口の修正された土器型式の概念でとらえると、貝層出土の土器群が高橋II式、貝層下の土器群が高橋I式と整理した方がよい。

表5の甕棺破片数は、各トレンチで1層から出土する。表6の丹塗り土器の出土破片数は、1層が多いが、CトレンチとDトレンチで下層出土のものが多く見られ、CトレンチI区～III区と北側の攪乱状況と、DトレンチのIII・IVの攪乱状況が反映している。甕棺破片については在地系と佐賀平野や筑後地方など有明海沿岸部のものがみられる。

中期の遺物はあるが、底部以外で明確な入来式の特徴的な口縁端部に凹線を回す土器は少なかった。突帯を持つ山ノ口式土器系のものはみられた。土器の胎土については、雲母がみられるもの、赤色泥岩礫の入ったものが判別しやすい。丹塗り土器では、赤色泥岩礫を胎土に含むものは、内面調整にミガキがなされていない、着色がなされていない。精巧なものは搬入品であることが窺われるので、赤色泥岩礫を含む胎土を用いた土器が在地の土器の可能性はある。他地域の土器も赤色泥岩礫を含まない。

中期中葉以降は甕棺破片・丹塗り土器は存在するが、生活に伴う土器は多くない。

無文土器の数は少なく、半島の無文土器とは直接に結びつかない<sup>註2</sup>としても、佐賀平野部から有明海を通じた航路が想定されるとすれば、無文土器と分類した土器は一部に入来式土器を含む可能性があるとしても、土器の胎土・発色から地元の土器群とは違和感があり、変容した無文土器がさらに変容したものにとらえられないであろうか。今後の資料の増加に期待したい。

1層の土器群は、日置市六つ坪遺跡や南九州市古市遺跡の前期末から中期初頭にあたり、文献46の川口の田布施IV式土器の時期に当たる。

石器については、一括取上げが多く、層位ごとに示せなかったが、表8にあるとおり大陸系磨製石器は1層からの出土が多い。貝層堆積後に水田稲作の本格化が窺われる。水田稲作は、5層段階に導入が始まり、1層から本格化したと考えられる。

石鏃・石匙・石錐・楔形石器など剥片石器の石器石材を見てみると、在地の玉髓、桑ノ木津留産黒曜石が見られるが、安山岩はおそらく多久地方の安山岩が圧倒する。黒曜石は腰岳が多く用いられている。素材や石核・剥片・碎片なども出土しており、礫素材を持ち込んで、遺跡内で製作したことは明らかである。地元産では玉髓の石材が目立つ程度である。とくに上層は安山岩の原石、石核、大形の剥片が目立つ。これで製作された横刃形石器も上層から多く出土する。

414~417などの大型の楔形石器については、縄文時代からすでに南九州市宮ノ上遺跡や南さつま市芝原遺跡などで、木材の打割用くさびの指摘がなされ

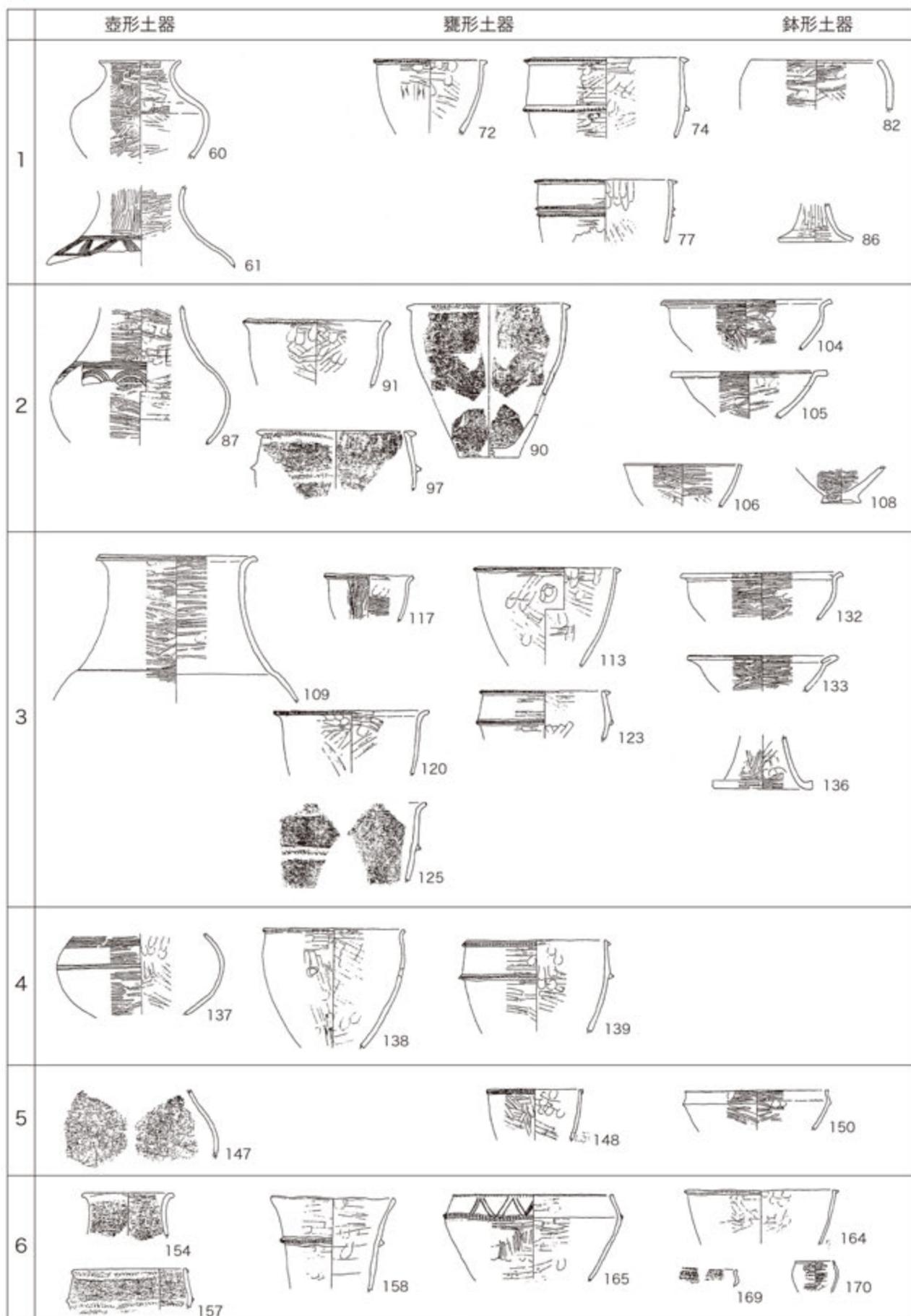


図58 Bトレンチ 層別出土土器

ている。これらは貝層下からも出土している。高橋貝塚の立地や舟運として丸木舟の存在等を考えると興味深い。

扁平片刃石器の石材には層灰岩が使用されたものが見られることが明らかになった。また、石包丁の多くの石材に堇青石ホルンフェルス製のものがあつた<sup>註3</sup>。

480は樹皮布叩石とした。本県では、鹿屋市王子遺跡、同田原迫ノ上遺跡、同十三塚遺跡、南さつま市持躰松遺跡などで出土している。

樹皮布叩石については、中園らにより「手持ち砥石」ではないかとの否定的な見解があり（中園ほか2020）、高橋貝塚についても記述があり、実測図は無いがおそらくこの480に触れている。この検討の中で、平坦な砥石面を有するものは指摘の可能性もあるが、面が形成されず断面が丸いもので、敲打痕跡が顕著なものについてはにわかに首肯できない。鹿児島県の文化財保護審議会委員であった小林孝子は、「布」について、まさに打ち叩いて、広く平らに延べ広げるものという漢字の意から、樹皮布を初現的な布であることを示唆するものと解した。具体的には本州島のカジノキや南西諸島のオオハマボウをあげた。また繊維を採取するにも、扱き、あるいは肉質部を扱き落とす。また、「打つ」「叩く」という動作は、樹皮布に限らず、織布製作の工程において、布をやわらげ、光沢を出すための槌（きぬた）を用いて叩くとされる（小林1998）。横方向に多条の線状痕がある石器も、固い樹木の皮の扱き落とす道具や木材のバリ取りなどの道具とはならないのであろうか。考古学における先史・古代の植物利用については、近年研究成果が著しく、植生と共に、織布や編組製品の道具も意識する必要がある。

貝製品については、ゴホウ類の分析は木下尚子の論文（文献50）に詳しい。その他の貝製品は貝塚の割に少なかった。

骨角器については、多種多様な骨角器が出土している。またシカとイノシシを中心に、活発な狩猟活動と残存しにくいクロダイやタイなどの魚骨からは同じく漁労活動が行われた。表層からの古代・中世の牛・馬については後世のもので混入したものである。

骨角器では、出土量の多いシカの角や、シカ・イノシシの手足骨・中足骨を用いて骨角器とした。刺突具と押圧具が目立ち、これらは籠など編組製品の製作に用いられた可能性もある。

庄痕では、文献1で報告された靱の庄痕は、Bトレンチの最下層の出土で、夜白式土器の時期であり、その時期に米が持ち込まれ作られていた。80頁の一覧のとおり、イネ、アワ、ヒエが検出された。

土製円盤については、ほとんどが10～40gの範囲に入り、縄文時代と同様の使用が考えられる（堂込

2025）。

なお、今回実測図にはないが、文献4の管玉179は糸魚川産のヒスイで、管玉180は滑石で、他は碧玉であることが、遺物材料研究所の藁科哲男により同定された（報告は頁数の関係で割愛）。碧玉製の管玉については、弥生時代早期から中期に該当する<sup>註4</sup>。

## 第2節 考古学的成果と課題

土器型式で考えると、Dトレンチでは、板付I式が4層から、II a式が3層から、II b式が2層から出土している。西北九州型の甕形土器がC-4層、D-5層から出土している。これと今回のBトレンチとC・Dトレンチの遺物を層位ごとに検討すると、貝層が高橋II式で板付II b式に、貝層下が高橋I式で板付II a式にほぼ相当し、弥生前期の土器型式としては、高橋I式の前にI型式が、高橋II式の後に前期末にI型式が存在することが予測される。最下層は夜白式土器を含む突帯文土器の時期である。綾羅木III式土器は貝層から出土しており、年代的に整合する（田畑2021）。なお遺物の中には2・3片の縄文後期土器が含まれていた。

甕棺は前期末から中期を通じてみられる。中期の生活用の土器が総体的に少ないことを考えると、前期の貝塚形成の時期とは別のところに、集落の存在が想定される。高橋貝塚のある神社部分が高橋集落の東南隅に位置し、堀川が眼下にあり、万之瀬川も南に隣接する。このため舟運の窓口として機能し、中期は現在の高橋集落地に集落があり、その北東側に下小路甕棺墓が検出されていることから、その周辺が墓域とされた可能性が強い。このように考えると、貝輪交易の中継地として使用され始めた時期には水田稲作は定着せず、狩猟・漁労に依存していた時期に高橋貝塚が形成された。その後水田稲作の収量が安定し、周辺の地域の生産物の交換経済に組み込まれた結果、定着性が高まり、中期集落が形成された。そして高橋貝塚のところは荷揚げ地として使用された。

数は少ないが擬無文土器が混入している。朝鮮系無文土器の中で後期無文土器と言われる一群で、福岡平野や佐賀平野、熊本平野に集中する（片岡1999、山崎2021）。これらの変容型式として、無文土器の一群は成立しないのであろうか。今後の課題としたい。

吉野ヶ里遺跡出土の層灰岩を分析し、原産地を韓半島南部の義鳳山産の石材として研究がなされ、それらが北部九州に供給されて居ることが、韓半島の初期鉄器文化の流入に関わると考えられている。また最も多く出土しているのは佐賀平野、筑後川流域である（森ほか2023）。

堇青石ホルンフェルス製石器の石材産地は、対馬の

下島が想定されており(能登原ほか2007)、遺跡の出土石器数の分布から、多くが壱岐島→福岡平野→二日市地峡帯→佐賀平野へ持ち込まれ使用されている。これらの分布を見ても、対馬・壱岐から福岡平野、二日市地峡、佐賀平野に出土量が多く、有明湾岸からの搬入が考えられる。さらに剥片石器の石材も西北九州のものである。

つまり従前から指摘されてきた甕棺にとどまらず、有明湾岸地域との濃密な関係性を示している。

高橋貝塚の貝輪交易の役割として、「まず沖縄貝塚人が作った背面貝輪用粗加工品をもとに西北九州人のための背面貝輪を作り、さらにゴホウ原貝から北部九州人のために腹面貝輪粗加工品をつくり、これらを北の消費地に輸出していた。→高橋貝塚人は途中から背面貝輪製品とともに粗加工品も併せて作るようになった。→まもなく腹面貝輪粗加工品の生産拠点は高橋貝塚から沖縄に移り高橋貝塚の腹面貝輪粗加工品の生産量は激減する。→腹面貝輪粗加工品が中継地を介さず消費地に届くようになると高橋貝塚の存在価値は低下し、遺跡は衰退する。→南島から北部九州へ粗加工品直送が実現し、同時に薩摩半島を介さず有明海沿岸から弥生社会に入るルートが開かれる。」(文献50)。とされたが、貝輪の型式別のニーズが各地域で異なり、そのため中央部には穿孔するが、粗加工品の南島から北部九州への直送が実現した。依然として高橋の中継地としての機能は維持された。有明海ルートにより、弥生中期以降に福岡平野周辺においてゴホウ腕輪の消費が急増する。高橋貝塚の役割は終焉をむかえず、高橋貝塚の上層の遺物の出土状況からは、前期末～中期初頭に有明海ルートが開かれ、その後の中期の土器や甕棺・丹塗り土器の流入は、高橋貝塚は変わらず中継地として有明海へ南島産貝が搬入されたと考えられる。

周辺を含めた高橋遺跡が、中期を通して集落地であり、交易の中継地としての機能は保ち続けたものと考えられる。

前期後葉には、貝塚形成が東南側から行われており、東南部に生活域があったことが考えられる。入植が始まり、住居跡を含む遺構が形成されたということであろう。高橋貝塚の南側を含めて、その後の住居は西側の現在の高橋集落側に拡大した。そこを居住域として、その北側には下小路遺跡の甕棺墓が存在する。

高橋貝塚からの出土した甕棺片の多さは、仮に北側の下小路遺跡の甕棺墓周辺を墓域としてとらえても、南側は集落地であり、コンテナとしての使用も考えられる(宮崎2005)。その中継地としての重要性は中期を通じて継続する。

無文土器、層灰岩製の片刃石斧、堇青石ホルン

フェルス製の石包丁、甕棺片、丹塗り土器などに加えて、石器素材の黒曜石・安山岩からも、有明海の内湾地域からの搬入が考えられる。貝輪原料は高橋貝塚で触れられることなく、原貝が佐賀平野や筑後川河口などへ届けられ、それらは北九州の消費地に拡散された。金隈型や土井が浜型や諸岡型の各型式の貝輪製作には、消費地の近くでの製作が効率的ではなかったろうか。

## 註

- 1 この名称は文献によるが、細かな設定でなく、便宜上のものである。
- 2 2024年9月28日・29日に、科学研究費補助金基盤研究C「接触領域としての南部九州における弥生社会変化の考古学的研究」(研究代表者石田智子)が主催した『弥生土器検討会』に多くの参加者から指導・助言を得た。
- 3 新潟大学准教授 森貴教氏の指導による。
- 4 熊本大学大坪先生の指導。

## 〈参考文献〉

- 片岡宏二1999『弥生時代 渡来人と土器・青銅器』考古学選書 雄山閣出版
- 小林孝子1998「II 鹿児島県の紡織習俗」『鹿児島県文化財調査報告書』第44集 鹿児島県教育委員会
- 田畑直彦2021「山陰地方における綾羅木・高槻系土器」『島根県古代文化センター研究論集』第25集 島根県古代文化センター
- 堂込秀人2025(予定)「土製円盤考」『高宮広土先生退職記念論文集』奄美考古第11号 奄美考古学会
- 中園聡、太郎良真妃、平川ひとみ、若松花帆、下小牧潤2020「弥生時代におけるいわゆる樹皮布叩石の再検討」『縄文の森から』第12号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 能登原孝道・中野伸彦・小山内康人2007「いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』第82号 九州考古学会
- 橋口達也1999『弥生文化論 一稲作の開始と首長権の展開』亜細亜印刷
- 森貴教・柚木雅樹・渡部芳久・梅崎恵司・川野良信2023「吉野ヶ里遺跡出土層灰岩製石器の石材原産地推定と考古学的意義」『九州考古学』第98号 九州考古学会
- 宮崎貴夫2005「捨てられた甕棺」『西海考古』第6号 西海考古同人
- 山崎頼人2021「無文土器・弥生土器の変容過程について」『考古学研究』第64巻第4号(通巻268号) 考古学研究会

# 圖 版



出土弥生土器集合



他地域の土器



無文土器 (無文で下縁調整が雑な一群)



甕棺・大甕破片，丹塗り土器



石錐・磨製石鏃



横刃形石器・大型楔形石器等



石核



層灰岩製片刃石斧など



石包丁（堇青石）、石鎌



磨製石器



ゴホウラ加工品と廃材（木下論文掲載分）



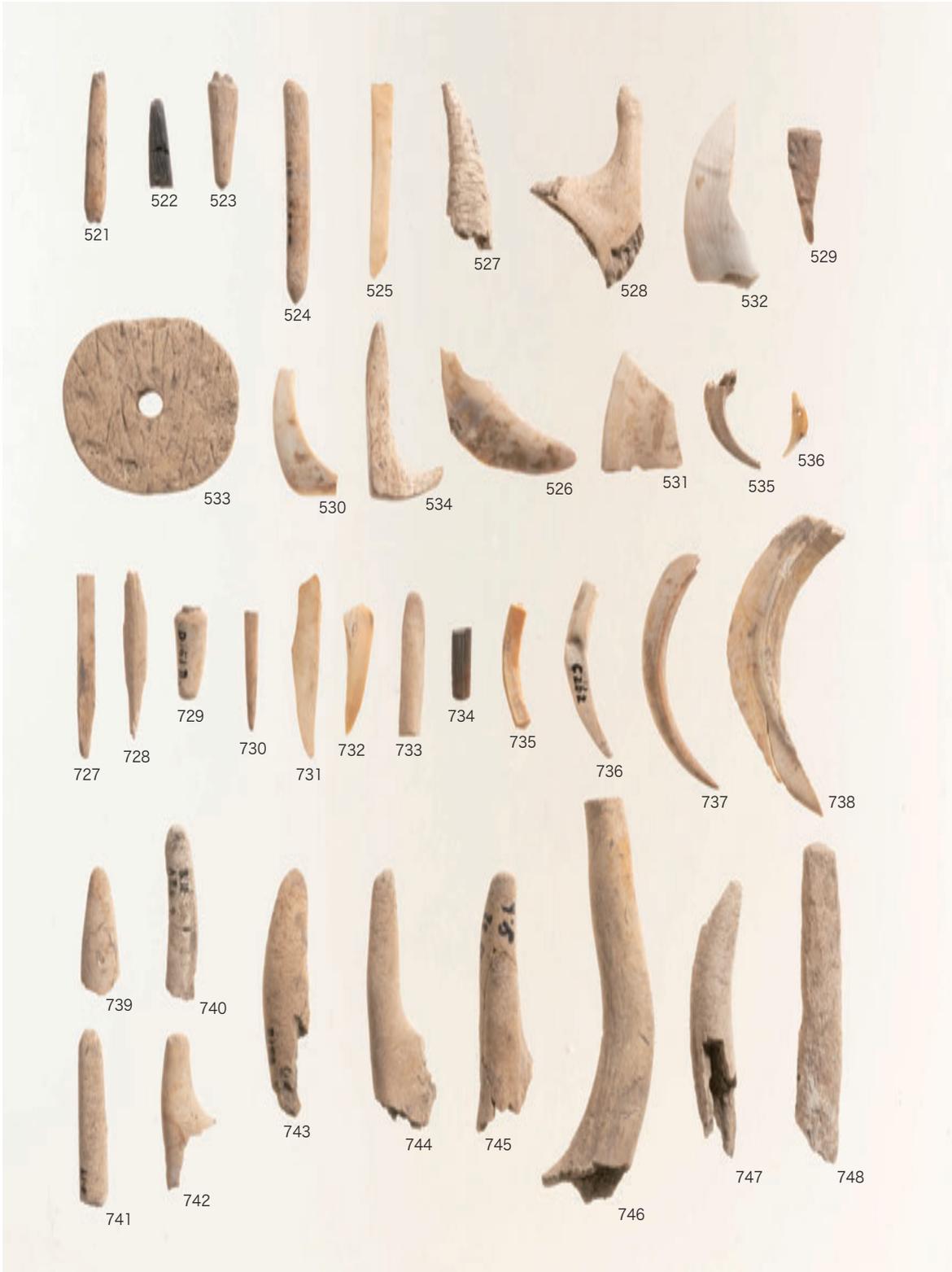
その他のゴホウラ貝輪加工廃材



オオツタノハ貝輪（木下論文掲載分）



土製円盤、紡錘車



出土骨角器 (1)



出土骨角器 (2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (229)

## 高橋貝塚 2

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(9)

発行年月 令和7年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 日進印刷株式会社  
〒891-0122 鹿児島市加治屋町16番20号  
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県